

Primavera® P6™

アドミニストレータガイド

バージョン 6.2

Copyright © 1999, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

The Programs (which include both the software and documentation) contain proprietary information; they are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are also protected by copyright, patent, and other intellectual and industrial property laws. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of the Programs, except to the extent required to obtain interoperability with other independently created software or as specified by law, is prohibited.

The information contained in this document is subject to change without notice. If you find any problems in the documentation, please report them to us in writing. This document is not warranted to be error-free. Except as may be expressly permitted in your license agreement for these Programs, no part of these Programs may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic or mechanical, for any purpose.

If the Programs are delivered to the United States Government or anyone licensing or using the Programs on behalf of the United States Government, the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

The Programs are not intended for use in any nuclear, aviation, mass transit, medical, or other inherently dangerous applications. It shall be the licensee's responsibility to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy and other measures to ensure the safe use of such applications if the Programs are used for such purposes, and we disclaim liability for any damages caused by such use of the Programs.

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, and Siebel are registered trademarks of Oracle Corporation and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

The Programs may provide links to Web sites and access to content, products, and services from third parties. Oracle is not responsible for the availability of, or any content provided on, third-party Web sites. You bear all risks associated with the use of such content. If you choose to purchase any products or services from a third party, the relationship is directly between you and the third party. Oracle is not responsible for: (a) the quality of third-party products or services; or (b) fulfilling any of the terms of the agreement with the third party, including delivery of products or services and warranty obligations related to purchased products or services. Oracle is not responsible for any loss or damage of any sort that you may incur from dealing with any third party.

To view the P6 Commercial Notices and Disclosures for Documentation, go to the \Documentation\<language>\Notices and Disclosures folder of the P6 physical media or download.

目次

序文.....	vii
管理者用ガイドの使用方法.....	viii
Primavera のドキュメント.....	x
サポート窓口.....	xiii
パート 1: はじめに	
インストールの概要.....	3
P6 ソリューションとは.....	4
インストール要員について.....	9
インストール作業のフェーズ.....	11
実装計画.....	13
必要となるコンポーネントの選定.....	14
クライアントおよびサーバの要件.....	18
Project Management データベースサーバの要求サイズガイド.....	23
Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド.....	24
実際の製品限界.....	25
パート 2: データベースのインストールおよび設定	
データベースの自動インストール.....	29
概要.....	30
データベースウィザードの実行.....	31
Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータの ロードの自動実行.....	32
SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータの ロードの自動実行.....	37
手動データベース構成.....	41
概要.....	42
Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータの ロード.....	43

MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用の データベース構造の作成.....	52
基本通貨の変更 (Oracle および Microsoft SQL Server)	62
データベース管理	65
P6 でのバックグラウンド処理とクリーンアップ	66
RDBMS スケジューラの設定.....	67
Setting テーブル	69
Setting 値の読み書き	70
バックグラウンドジョブ実行のトラッキング	72
SYMON (System Monitor).....	74
DAMON (Data Monitor)	76
Oracle データベース性能の向上	88
ネイティブデータベース監査.....	89

パート 3: サーバのインストールおよび設定

Timesheets 用の Group Server の調整.....	99
旧バージョンの Group Server のアンインストール	100
Group Server および Timesheets Web サイトのインストール.....	101
LDAP 認証を行う Group Server/Timesheets の設定方法.....	112
Single Sign On Authentication 用に Group Server/Timesheets を設定.....	114
Group Server の設定方法.....	116
Timesheets のための Java Web Start の設定.....	120
Group Server の複数インスタンスの作成.....	124
Group Server の設定	127
P6 Web Access のインストール.....	133
P6 Web Access へのアップグレード.....	134
旧バージョンのアンインストール.....	135
P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール.....	137
P6 Web Access のインストールプロセス.....	139
コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール.....	143
P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開.....	144
P6 Web Access 用サーバの起動.....	155
P6 Web Access のプレコンパイル.....	156
P6 Web Access 用サーバの停止.....	157
クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス	158
クライアントブラウザの構成設定.....	159
データベース構成設定の変更.....	165
管理アプリケーションの使用方法.....	166
P6 Web Access の設定の確認と変更.....	168
P6 Web Access の設定.....	176
アプリケーションサーバプラグインの実装.....	200
分散ジョブサービスの設定	201
分散ジョブサービスの概要.....	202

分散ジョブサービスのインストール.....	203
Windows ファイアウォールの無効化.....	204
分散ジョブサービスのアクセス権の設定.....	205
分散ジョブサービスの DCOM の設定.....	206
コントローラと DJS サーバの設定.....	217
ジョブサービスレジストリの設定.....	220

パート 4: Primavera クライアントのインストールおよび設定

クライアントモジュールとその他のコンポーネントの インストール.....	229
データベースクライアントソフトウェアのインストール.....	230
旧バージョンのアンインストール.....	231
設定ウィザードの実行.....	232
クライアントモジュールのインストール.....	235
ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール.....	237
ソフトウェア開発キットのインストール.....	244
ProjectLink のインストール.....	247
スタンドアロン版のインストールおよび/またはアップグレード ..	249
自動データベースアップグレード.....	253
アップグレードプロセスの概要.....	254
Oracle データベースの P6 へのアップグレード.....	256
Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード.....	259
無人セットアップの作成と実行.....	263
無人セットアップファイルの作成.....	264
無人セットアップの実行.....	268
データベース構成設定の変更.....	271
データベース接続設定の変更.....	272
管理タスクの実行.....	274
認証モードの設定.....	279
Primavera における認証.....	280
プロセスの概要.....	282
認証方法の選択.....	283
Project Management モジュールの設定.....	294
ログイン手順および認証.....	295

パート 5: Primavera アプリケーション管理

ユーザ管理とセキュリティ管理.....	299
Primavera におけるセキュリティの理解.....	300
プロセスの概要.....	310
グローバル設定の定義.....	312
プロジェクト設定の定義.....	321
Project Management モジュールでユーザを追加.....	329

OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て	345
EPS への OBS ノードの割り当て	348
リソースへのユーザアクセスの定義	351
P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義	355
Methodology Management モジュールのセキュリティ設定	358
Project Management での管理設定と分類の定義.....	367
既定設定の定義	368
標準的な分類と値の定義	382
通貨の定義	389
Methodology Management での管理設定と分類の定義.....	393
既定設定の定義	394
標準的な分類と値の定義	398
通貨の定義	403
Timesheets の実装	407
実装の概要	408
Timesheet 設定の実行	410
Timesheets 使用のためのリソースの設定	415
Timesheets ユーザのために Timesheets を作成	419
プロジェクト固有の Timesheets 設定	421
間接コードの使用	422
Timesheets の Web ブラウザ版と Java Web Start 版の実行	423
Timesheet Approval へのアクセス設定	426
報告期間の定義	429
Project Management モジュールで報告期間を定義	430

付録

付録 A:Primavera のデータベースを単一の Oracle インスタンスで実行	435
プロセスの概要	436
MMDB および PMDB を単一の Oracle インスタンスで実行	437
単一インスタンスデータベースの Primavera 5.0、6.0、または 6.1 から P6 バージョン 6.2 へのアップグレード	447
付録 B : Project Management データベースの変更 を元に戻す	453
[やり直し] の理解	454
安全な削除の設定	455
インデックス	457

序文

序文の内容：

管理者用ガイドの使用方法
Primavera のドキュメント
サポート窓口

Primavera は、Microsoft SQL サーバと Oracle データベース上に構築された包括的なマルチプロジェクト計画・管理ソフトウェアです。組織全体にわたるプロジェクトマネジメントを実行できるスケラビリティを備えています。より小規模のマルチユーザ、またはスタンドアローン事業所では Microsoft SQL Server 2005 Express を使用することができます。Primavera のソリューションには、プロジェクトおよびリソース管理に単体または他の関連製品とともに使用できる、Project Management モジュールが含まれます。Timesheets は、Web ベースによるチーム内の意思伝達および時間管理を可能にします。Methodology Management モジュールは新規プロジェクト用のメソドロジをテンプレートとして保存します。P6 Web Access は、組織全体にわたるプロジェクトの分析情報を提供します。ユーザはインターネット経由で Project Management データにアクセスすることができます。

管理者用ガイドの使用方法

本書では、Primavera ソフトウェアコンポーネントのインストールと設定についてステップごとに解説します。まず、**パート 1** を読み、Primavera ソフトウェアコンポーネントについての全体概要について理解してください。その後、インストール、設定を予定している、それぞれのコンポーネントの説明がある章に進んでください。本書は、以下のように構成されています。

パート 1: はじめに Primavera ソフトウェアコンポーネントの概要を説明します。ユーザ組織に適した実装計画の立て方を説明し、Primavera ソフトウェアコンポーネントのインストールおよび設定に関する概要を述べます。

パート 2: データベースのインストールおよび設定 Oracle または Microsoft SQL Server/SQL Server Express 上に Project Management および Methodology Management データベースの作成プロセスを自動化するウィザードの使い方を説明し、データベースにアプリケーションデータをロードする方法を解説します。この部分では、データベースを手動で作成する方法も詳細に説明します。

パート 3: サーバのインストールおよび設定 以下を始めとする Primavera ソリューションのサーバベースコンポーネントの手動インストール・設定方法をステップを踏んで説明します。

- Group Server および Web サーバ上の Timesheets ファイル
- P6 Web Access (旧称「Primavera の Web アプリケーション」または「myPrimavera」)
- 分散ジョブサービス

パート 4: Primavera クライアントのインストールおよび設定

Primavera クライアントモジュールのインストールと設定方法を説明します。パート 4 では以下を解説します。

- Project Management および Methodology Management モジュール、Timesheets モジュールのインストール方法
- その他のコンポーネント、例えば、(分散) ジョブサービス、SDK (ソフトウェア開発キット) および ProjectLink のインストール方法
- 旧バージョンの Primavera から自動的にアップグレードを行うためのウィザードの使用法
- 無人セットアップの作成と実行方法
- データベース設定ウィザードを使用する、Project Management データベースのモジュール接続、ユーザパスワード、データベースへのログイン、モジュールライセンスの各設定方法
- 認証の設定方法

パート 5: Primavera アプリケーション管理 インストール後に Primavera のモジュールをカスタマイズする方法について説明します。特に、パート 5 では以下について概説しています。

- ユーザ設定とセキュリティ設定方法
- Project Management および Methodology Management モジュールで設定と分類を変更する方法
- Timesheets ユーザが Project Management データベースに各自の作業時間を記録するための Project Management モジュール構成方法
- Timesheet Approval アプリケーションへのアクセスを設定する方法
- 報告期間ディクショナリで報告期間を作成する方法

付録 Project Management および Methodology Management データベースを単一の Oracle インスタンスで実行するためのステップ、Project Management データベースで実施した変更を元に戻す方法について説明します。

Primavera のドキュメント

リファレンスマニュアルとアドミニストレータガイドには、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている **Documentation** フォルダ内の Primavera ドキュメンテーションセンターからアクセスできます。PDF を表示する際は、Adobe Acrobat Reader を使って情報を表示します（ドキュメンテーションフォルダも利用できます）。以下の表では発行ドキュメントについて説明し、ロール別の対象読者を示しています。Primavera のロールについては、本マニュアルの 3 ページの「[インストールの概要](#)」に説明します。

タイトル	説明
<i>Primavera</i> アドミニストレータガイド	本ガイドは、Primavera サーバ、データベースおよびコンポーネントの設定方法を説明します。また、Primavera ソリューションのすべてのコンポーネントに関する概要を提供します。本ガイドは、セキュリティ設定およびグローバル項目設定を始めとする、Project Management モジュールを管理するのに必要な、作業の流れを説明します。Project Management モジュールネットワーク管理者/データベース管理者、およびプロジェクト管理コーディネータが本ガイドの対象読者です。
<i>Project Management</i> リファレンスマニュアル	本ガイドでは、マルチユーザ環境においてプロジェクトを計画、設定、管理する方法を説明します。Project Management モジュールをはじめてご利用になる場合や、慣れていない場合は、ソフトウェアを効果的に使用してプロジェクトを計画、管理する方法を学習するために、本ガイドから読み始めることをお勧めします。より詳細が必要な場合は、Project Management ヘルプを参照してください。プロジェクト管理コーディネータ、プログラムマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ガイドの対象読者です。
<i>Methodology Management</i> リファレンスマニュアル	本ガイドでは、メソドロジまたはプロジェクトのテンプレートを Methodology Management モジュールを使用して確立する方法を説明します。メソドロジを使うことにより、Project Management モジュールで個別のプロジェクト計画を策定するのに、ユーザ組織の「ベストプラクティス」を収集し、再利用することができます。Methodology Management モジュールに初めて接する場合は、本ガイドから開始し、ソフトウェアを使用してベース、プラグイン、アクティビティライブラリメソドロジを作成する方法を学ぶことができます。より詳細が必要な場合は、Methodology Management ヘルプを参照してください。プロジェクト管理コーディネータ、プログラムマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ガイドの対象読者です。

P6 Web Access ヘルプ	P6 Web Access ヘルプは、プロジェクトの作成と管理方法、プロジェクトをポートフォリオとしてグループ化する方法、リソース割当てと要求のレビュー、予算管理、プロジェクトポートフォリオのパフォーマンスとROIの評価について説明します。経営幹部、プロジェクト管理コーディネータ、プログラムマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ヘルプの対象読者です。
Timesheets Web ベースヘルプ	Timesheets Web ベースヘルプでは、作業に費やした時間を Timesheets に入力、更新する方法を説明します。チームメンバがこのヘルプの対象読者です。
ProjectLink ヘルプ	Microsoft Project (MSP) ユーザが、Primavera のエンタープライズ機能に接続したまま MSP 環境で作業することを可能とする ProjectLink の使用方法を説明します。MSP ユーザは、MSP アプリケーションから Project Management モジュールのデータベースのプロジェクトを開いたり保存する方法や Primavera のリソース管理を MSP 環境から起動する方法を学びます。全社的なプロジェクト計画・管理に Primavera を使用する組織において、日常的に MSP を使ってプロジェクト保全を行うチームメンバがこのヘルプの対象読者です。
Integration API アドミニストレータガイド	本ガイドでは、Integration API (Application Programming Interface) のインストールおよび設定方法について説明します。Integration API を利用すると、Project Management モジュールに Java から直接アクセスできるようになります。Java でクライアントコードを作成したり、プロジェクト管理データベースに直接アクセスする必要のある人がこのガイドの対象読者です。このガイドは、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Integration¥API フォルダ内にあります。

P6 Web Services アドミニストレータガイド、*P6 Web Services* プログラマガイド、*P6 Web Services* リファレンスマニュアル

『*P6 Web Services* アドミニストレータガイド』では、*P6 Web Services* のインストールおよび設定方法について説明しています。これにより、Web サービス標準を使って Primavera の機能を他の Web ベースのアプリケーションにスムーズに統合することができます。『*P6 Web Services* プログラマガイド』は HTML ヘルプシステムとして利用でき、サポートされている環境内で利用できるサービスやメソッドを管理、使用、トラブルシューティングする方法について説明しています。『*P6 Web Services* リファレンスマニュアル』は HTML ヘルプシステムとしても利用でき、*P6 Web Services* で使用できるすべてのサービスと操作について包括的に説明しています。Java でクライアントコードを作成したり、プロジェクト管理データベースに直接アクセスする必要のある人が本書の対象読者です。*P6 Web Services* のインストール後、本書は *P6 Web Services* インストールフォルダ内の ¥docs フォルダで入手できます。また、*P6* の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Integration ¥Web_Services フォルダにも含まれています。

SDK (ソフトウェア開発キット) Web ベースのドキュメント

本ドキュメントでは、Project Management データベースに接続するために SDK を使用する方法を説明します。SDK によってアクセスすることができるテーブル、フィールド、ストアードプロシジャについて説明します。例えば新プロジェクトの作成方法、リソースをプロジェクトアクティビティに割り当てる方法など、SDK を使って行う基本的なタスクの例も示します。プロジェクトマネージメントネットワーク管理者/データベース管理者、プロジェクト管理コーディネータが本ドキュメントの対象読者です。本ドキュメントは、¥Program Files ¥Common Files ¥Primavera Common ¥PMSDK ¥Doc フォルダに入っています。INDEX.HTML ファイルをダブルクリックして、目次を開いてください。

チームへの情報配布

オンラインドキュメントは、ネットワークドライブにコピーし、プロジェクトメンバがアクセスすることができます。各チームメンバはそれぞれ組織の中で、自分の職務に関係する部分だけをプリントすることができます。



本ドキュメントでは、全機能へのフルアクセス権をもつ標準的な製品設定を想定しています。

サポート窓口

Primavera 製品の使用について、書類や「ヘルプ」の情報で解決できない問題がある場合は、以下の Primavera カスタマーサポートまでご連絡ください。

ご連絡の際は、ご使用の Primavera 製品のシリアル番号をご用意ください。Primavera は問題をすみやかに解決できるようお客様からの電話をすべて記録しています。

事業所	時間帯	営業時間	電話	ファクス	E メールアドレス *
米国ペンシルバニア州 バラシン ウイド	ET	8:00 – 8:00 (月曜～金曜) 9:00 – 2:00 (土曜)	+1-610-668-3030	+1-610-667-0652	support@primavera.com
英国ロンドン	GMT	8:30 – 6:30 (月曜～木曜) 8:30 – 5:30 (金曜)	+44-20-8563-5555	+44-20-8563-5543	support@primavera.com
香港	GMT +8	8:00 – 5:00 (月曜～金曜)	+852-2111-8299	+852-2111-9477	support@primavera.com

*Primavera の Web サイト、<http://www.primavera.com/customer/index.asp> では、サポート、製品情報（ナレッジベース、ファイルダウンロード、ユーザグループおよびニュースグループ情報など）、および製品機能強化リクエストフォームが掲載されています。



米国では、お客様が最高のサポートを得られるよう Primavera は定期的かつランダムにテクニカルサポートにかかってきた電話をモニタリングしています。

あらゆる Primavera 製品は、包括的なサポートとトレーニングに支えられています。

はじめに

内容：

インストールの概要
実装計画

本

本パートでは、Primavera のコンポーネントをインストールする準備の進め方を説明します。はじめに、「[インストールの概要](#)」をお読みください。Primavera のコンポーネント製品をインストールするために必要なスキル、インストールの各フェーズについて説明されています。

「[実装計画](#)」では、組織によって必要となるコンポーネントを識別する方法を示し、実装に必要なハードウェアおよびソフトウェアが揃っていることを確認します。

インストールの概要

本章の内容：

- P6 ソリューションとは
- インストール要員について
- インストール作業のフェーズ

本章では、Primavera ソリューションを構成するコンポーネントとそのインストール、設定プロセスの概要を説明します。

P6 ソリューションとは

Primavera は、企業の様々な部門におけるプロジェクト管理の要求を満たす一連の統合コンポーネントを提供します。標準 Windows インタフェース、Web 活用テクノロジー、小規模マルチユーザあるいはスタンドアローン (SQL Server Express) データベース、またはネットワークベースのデータベース (Oracle and Microsoft SQL Server) を使用します。

この導入ガイドでは、クライアント・サーバネットワーク上に Primavera ソフトウェアコンポーネントをインストールするものと想定しています。したがって、クライアントソフトウェアとサーバベースコンポーネントの両方がインストールされ設定されているものとします。また、スタンドアローンインストールについての情報も提供します。



Primavera では、そのコンポーネントと Project Management および Methodology Management データベース間の標準インタフェースに DBExpress を使用します。DBExpress は、Project Management モジュールをインストールすると自動的にインストールされます。Group Server やジョブサービスのようなコンポーネントをインストールしても、データベースとの接続のため、DBExpress のインストールが行われず。

クライアントコンポーネント Primavera ソリューションには、以下のクライアントモジュールがあります。

- **Project Management** Project Management は、ユーザが多数のプロジェクトの計画・管理に使うことができるモジュールです。プロジェクトデータは、中央管理の Project Management データベースに保存されます。大規模ネットワーク構成では、リレーショナルデータベース管理システムとして、Oracle または Microsoft SQL Server を使用することができます。小規模なマルチユーザシステムあるいはスタンドアローンの実装では Microsoft SQL Server 2005 Express をデータベースとして使用することができます。また、Project Management では中央リソース管理も行います。Web ベースのタイムシート管理アプリケーションである Timesheets モジュールを通じてプロジェクトリソースと通信し、リソースのタイムシート承認を行います。

- **Methodology Management** Methodology Management は、メソドロジーやプロジェクト計画テンプレートの承認と保存を行うモジュールです。Methodology Management によって、ユーザは組織における「ベストプラクティス」を収集し、中央の Methodology Management データベースへ保存することができます。
- **Timesheets** Timesheets は、Web ベースのプロジェクト間通信および時間管理システムです。チームメンバは、複数プロジェクトにわたり割り当てられた作業の分単位の情報、および作業に費やした時間を Timesheets に記録します。

サーバコンポーネント Primavera では、以下のサーバベースコンポーネントのインストールおよび設定が必要になります。

- **リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS)** 各プロジェクトデータとプロジェクトメソドロジーが別々の中央データベースに保存されます。これら 2 つのデータベースは、Oracle、Microsoft SQL Server または SQL Server Express のいずれかのデータベースサーバに保管されます。(RDBMS では、データベースサーバにネットワークを通じてアクセスする必要のある各コンピュータに、クライアントソフトウェアをインストールする必要があります。Microsoft SQL Server または SQL Server Express を使用する場合は、Primavera の Project Management モジュールをインストールすると必要なソフトウェアは自動的にインストールされます。)
- **Group Server** ユーザの Primavera 実装に Timesheets クライアントモジュールが含まれる場合は、Group Server をインストールしなければなりません。このコンポーネントは、Web サーバ上で実行される、Windows 2003/2008 サービスです。クライアントが、Web ブラウザを使用してサーバから Timesheets をダウンロードすることができるようになります。さらに、Timesheets クライアントと Project Management データベース間でのデータのやり取りに活用されます。

その他のコンポーネント ユーザの Primavera 実装によっては、さらにオプションのコンポーネントのインストールが必要になります。これらの追加モジュールによって、Primavera ソリューションの機能が拡張されます。

- **P6 Web Access** P6 Web Access（旧称「Primavera の Web アプリケーション」または「myPrimavera」）では、企業全体にわたるプロジェクト、ポートフォリオ、リソースデータにブラウザでアクセスすることができるようになります。P6 Web Access のユーザは、プロジェクトやリソース管理における各自の役割に合わせた特定のプロジェクトやプロジェクトデータの分類に焦点をあてた、ダッシュボードを独自にカスタマイズすることができます。プロジェクトワークスペースやワークグループでは、特定のプロジェクトチームメンバーはひとつのプロジェクトまたはプロジェクト内のアクティビティのサブセットに関わるデータの一貫したチーム用ビューを作成できるため、カスタマイズされた集中的なデータ表示モデルを拡張できます。P6 Web Access では、幅広いデータ表示様式を提供します。ユーザはプロジェクトの初期概念から完了の承認まで全体を通して管理することができます。

P6 Web Access は、プロジェクトを成功裏に遂行するために必要な共有作業の提携機能をあらゆるレベルの全チームメンバーに提供します。この機能の中には、問題管理と E メール統合が含まれます。設定済みのコンテンツおよびワークフローリポジトリを使うと、拡張されたドキュメント管理機能とプロジェクト要求プロセスを含むよう P6 Web Access の機能を拡張することができます。

- **(分散) ジョブサービス** ジョブサービスは、予め設定された時間間隔でプロジェクトデータ上で定義されたジョブを実行する Windows 2003 /2008 サービスです。ユーザは、Project Management モジュールでジョブを作成します。ジョブ詳細は、中央の Project Management データベースに保存されます。ジョブサービスは、定期的にデータベースを読み取り、定義されたジョブを実行します。このサービスは、データベースサーバに常時接続されているサーバ上で実行されなければなりません。

分散ジョブサービスは、制御マシンがジョブサービスを実行する複数のサーバを管理する、ジョブサービスの拡張機能です。

- **ProjectLink** ProjectLink は、Microsoft Project (MSP) ユーザが、Primavera のエンタープライズ機能に接続したまま MSP 環境で作業することを可能とするプラグインです。MSP ユーザは、MSP アプリケーション内から Project Management データベースを開いたり、プロジェクトを当該データベースに保存したりすることができます。さらに、MSP 環境内で Primavera のリソースを管理できます。ProjectLink は、MSP を日常的なプロジェクト管理に使用している組織において、Primavera アプリケーションが提供するエンタープライズ機能を利用する必要のあるユーザがいる場合に有用です。
- **SDK (ソフトウェア開発キット)** SDK により、Project Management データベースのデータと外部のデータベースおよびアプリケーションを統合することが可能になります。それは、スキーマとビジネスロジックへのアクセスを提供します。SDK では、Project Management データベースとの接続に、Open Database Connectivity (ODBC) 標準と OLE DB のような ODBC 準拠インタフェースをサポートしています。SDK は、Primavera データベースと統合する必要のあるすべてのコンピュータにインストールすることができます。(SDK では 2byte 環境はサポートされておりません。)

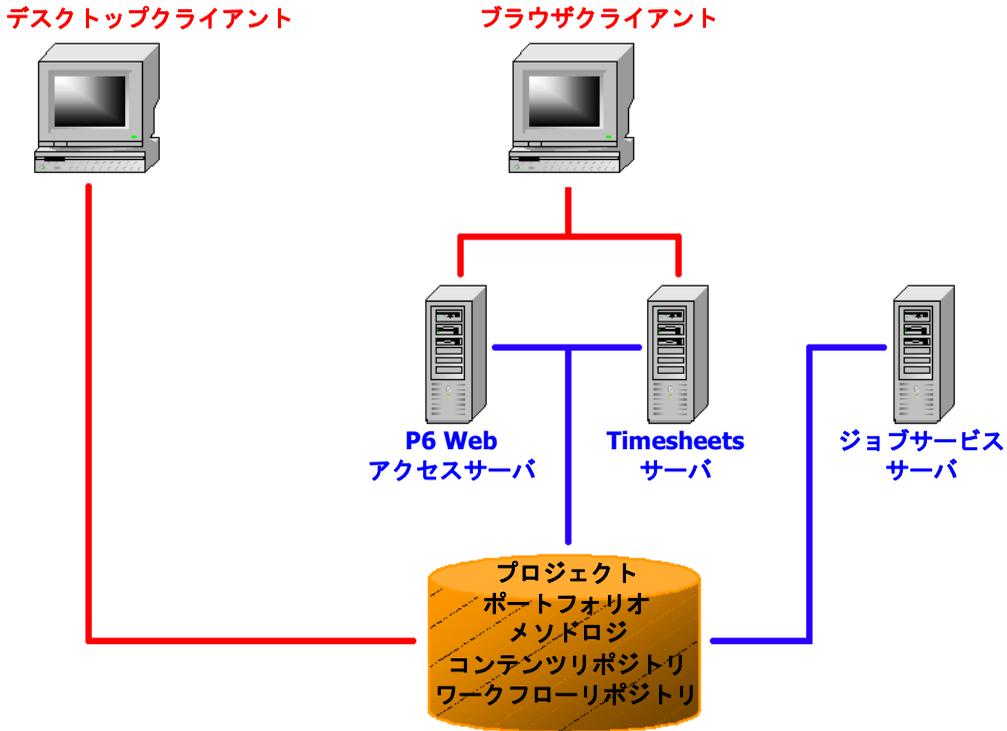


Integration API (Application Programming Interface) は、Project Management データベースに直接接続するために使うこともできます。このツールでは、Java でクライアントコードを書き込む必要があります。さらなる詳細については、Integration API アドミニストレータガイドを参照してください。



P6 Web Services では、XML や SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、Primavera の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

以下の図は、Primavera のコンポーネント間の関係を示します。



各コンポーネントの設定要求についての詳細は、13 ページの「**実装計画**」を参照してください。

ユーザは、サーバベースコンポーネントをここで示すようにインストールする必要はありません。例えば、P6 Web Access や Timesheets アプリケーションは同一のサーバで実行できます。また、ジョブサービスはプロジェクトデータベースと常時接続されているどのコンピュータでも実行できます。性能を最適化するため、Primavera では上記のようにコンポーネントをインストールするようお勧めします。

インストール要員について

Primavera コンポーネントをユーザ組織においてインストールするに当たり、違う資質の従業員が必要になる可能性があります。以下の項では、インストール時に必要となる役割とその職務に通常与えられる責任を説明します。ユーザ組織構造によって、役割は異なったり重複している可能性があります。

ネットワーク管理者 ネットワーク管理者は、組織のネットワーク環境（ローカルネットワークおよびワイドエリアネットワーク）を **Primavera** コンポーネントが最適な性能を発揮することができるよう設定します。**Primavera** ソリューションのサーバとクライアントコンポーネントをインストールし、保守します。プロジェクトデータへアクセスできるユーザを管理し、プロジェクトと手法データを不承認アクセス、盗難、損失から保護する総合的なセキュリティポリシーの開発と保守に当たります。

ネットワーク管理者は、**Primavera** をサポートするハードウェアとソフトウェアが安定的に機能するよう以下を行います。

- 信頼のおける接続となるべく早いデータ転送を確保するためにネットワークを設定、維持する
- ネットワークリソースとユーザの正確なリストを作成、維持して、各リストに独自のネットワークアイデンティティを持たせる

データベース管理者 データベース管理者 (DBA) は、**Primavera** データベースの設定、管理、アクセス権付与に責任をもちます。企業データベースの使用に関する規則の策定と監督を行い、データの整合性を維持し、互換性標準を設定します。

データベース管理者は、**Primavera** データベースの信頼的なアクセスを確保するため、以下を行います。

- 必要に応じてデータベースサーバのソフトウェアや関連製品をインストール、設定、更新
- データベースの作成と実装
- ユーザ、ユーザロール、データベースに対する権限の作成と保守を始めとするデータベースセキュリティの実装と保全
- データベースのパフォーマンスをモニタリングし、必要に応じて調整
- 成長と変化に備えて計画を行い、バックアップおよびリカバリのポリシーと手順を設定、維持

プロジェクト管理コーディネータ プロジェクト管理コーディネータは、プロジェクト管理モジュールの適切な実装と潤滑な運用を確保します。また、実装中は以下により主要な役割を担います。

- 上級幹部と協同で企業プロジェクトの構造、リソース階層、組織分割構成 (OBS) を確立し、基本的な工程表を設定し、プロジェクト管理モジュールの組織全体にわたるコードを定義
- ネットワーク管理者と協同で、プロジェクト管理モジュールのユーザアカウントとユーザグループを作成
- プロジェクト管理モジュールの Primavera ユーザに対しセキュリティ権を付与
- 人事部 (HR) と協同でプロジェクト管理モジュールのリソース階層を最新かつ完全に維持。企業リソース計画 (ERP) システムの HR モジュールとの統合も可能。

プログラママネージャおよびプロジェクトマネージャ 場合によっては、プログラママネージャやプロジェクトマネージャも Primavera ソリューションの初期設定に関わることがあります。ただし、通常はインストールには携わりません。1つあるいは複数のプロジェクト管理の責任を負い、以下の目的のため Project Management モジュールを使用します。

- プロジェクトを Project Management データベースに追加
- プロジェクト間でリソースの優先度を決定
- プロジェクトの計画と管理

インストール作業のフェーズ

ネットワーク管理者、データベース管理者、プロジェクト管理コーディネータは、Primavera ソリューションがユーザ組織に適切にインストールされるよう協力しなければなりません。これらの職務は、多くの人々がチームとなって、あるいは少人数で責任分担をして遂行されます。

Primavera は、Primavera ソリューションのインストールと設定をフェーズに分けて行うことを推奨します。インストール作業の各フェーズを以下に説明します。

計画フェーズについては、本ガイドのこのパートで説明しています。

フェーズ 1: Primavera 構成の計画 インストール作業前に、Primavera ソリューションのユーザ組織への実装方法を決定します。実装をサポートするのに必要となるサーバやハードウェアを明確化します。必要に応じて、サードパーティのデータベースサーバ (Oracle または Microsoft SQL Server) をインストールして設定します。旧版から新版にプロジェクトをアップグレードするのに必要な手順を実行します。スタンドアロンバージョンをインストールするだけであれば、249 ページの「[スタンドアロン版のインストールおよび／またはアップグレード](#)」を参照してください。

データベースの自動および手動設定については、本ガイドの [パート 2](#) にて説明します。[パート 3](#) ではサーバの設定について説明しています。

フェーズ 2: Primavera サーバの設定 ネットワークが設定され、サーバの準備ができたならサーバの設定を開始することができます。Project Management および Methodology Management データベースをデータベースサーバに設定することから開始します。この作業には、自動または手動のどちらかの方法を選ぶことができます。SQL Server Express を使用する場合は、自動作業を選択すべきです。

クライアントモジュールの設定フェーズについては、本ガイドの [パート 4](#) で説明します。

フェーズ 3: Primavera クライアントモジュールの設定 サーバが設定され、データベースのインストールが完了すると、ユーザはその実装計画に従い、Primavera クライアントモジュールのクライアントワークステーションへのインストールを開始することができます。その後、ユーザの実装に必要な場合は、さらなるコンポーネントの追加インストールおよび設定を行います。

実装計画

本章の内容：

- 必要となるコンポーネントの選定
- クライアントおよびサーバの要件
- Project Management データベース
サーバの要求サイズガイド
- Methodology Management データ
ベースサーバの要求サイズガイド
- 実際の製品限界

Primavera 実装の計画に当たっては、本章を読んでください。さらなる詳細情報については、Primavera のお客様サポート（インストールについて質問がある場合）またはプロフェッショナルサービス（Primavera に実装の作業を依頼する場合）にご相談ください。

必要となるコンポーネントの選定

Primavera の実装計画に当たって、先ず行わなければならないことは、インストールと設定を行う必要のあるクライアントモジュールとサーバコンポーネントを明確化し、それらモジュールとコンポーネントのインストール先を決めることです。以下は、開始前に決めなければならない項目です。

データベースサーバには、どのリレーショナルデータベース管理システム (RDBMS) を使用するか？ エンタープライズインストールでは、Oracle または Microsoft SQL Server を使用することができます。小規模な実装では、Microsoft SQL Server 2005 Express with Advanced Services をご利用いただけます。

どのワークステーションに Project Management モジュールが必要か？ どのワークステーションに Methodology Management が必要か？ すべての Project Management および Methodology Management ユーザは、データベースサーバにアクセスすることが必要になります。Oracle を RDBMS に使う場合は、これらのクライアントモジュールを実行するすべてのコンピュータに Oracle クライアントソフトウェアをインストールしなければなりません。SQL Server を RDBMS に使用する場合は、Primavera が Project Management モジュールの実装時に自動的に必要となる SQL Server ファイルをインストールします。

Project Management および Methodology Management モジュールのインストール時には、予め決められた標準設定を使用するか？ すべてのクライアントモジュールに同一の設定を行う場合、管理者は各モジュールの設定を標準設定に基づいて無人セットアップを利用して行うことができます。1つあるいは複数の無人セットアップファイルを作成して、ネットワークサーバで共有することができます。

Project Management モジュールのユーザは、プロジェクトデータについてジョブの自動実行（例えばスケジュールまたはサマリ）を行う必要があるか？ Project Management ユーザがジョブを実行する必要がある場合は、ジョブサービスをインストールする必要があります。非分散ジョブの場合は、常時データベースサーバに接続されているサーバにジョブサービスをインストールします。分散ジョブの場合は、コントローラサーバに制御される複数のサーバに分散ジョブサービスをインストールします。さらに、Primavera Web スケジューラがあります。ただしデフォルトでは無効となっています。Web スケジューラは P6 Web Access の管理者アプリケーションで有効にすることができます。

プロジェクトデータを他のグローバルシステムと統合する必要があるか？ プロジェクトデータを、経理あるいは人事システムなど、他のシステムと統合する必要がある場合は、データにアクセスする必要のあるコンピュータに Integration API (Application Programming Interface)、P6 Web Services、または SDK (ソフトウェア開発キット) のいずれかをインストールしなければなりません。Integration API を使うと、JDBC によりデータにアクセスできるようになります。ただし、Java でプログラミングを行うための知識が必要です。P6 Web Services は、XML や SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、Primavera の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合します。SDK は、プロジェクトデータを外部のアプリケーションから OLE DB などの Open Database Connectivity (ODBC) インタフェースによってアクセスすることを可能にします。

ユーザによって Microsoft Project によるプロジェクト管理と Primavera によるグローバルデータの管理を必要としていますか？ ユーザの組織は、現在プロジェクト管理に Microsoft Project を使用している可能性があります。ユーザに引き続き MSP によるプロジェクト管理を許容しつつ、Primavera による組織レベル機能との統合を可能にするには、Primavera ProjectLink をインストールする必要があります。

チームメンバは Primavera のタイムシート機能を使用してプロジェクトマネージャあるいはリソースマネージャにタイムシートを提出するか？その場合、リソースマネージャやプロジェクトマネージャはリソースタイムシートをレビューして承認する必要があるのか？ チームメンバが Timesheets を使う場合は、Web サーバに Group Server と Timesheets ファイルをインストールする必要があります。

リソースマネージャやプロジェクトマネージャがリソースタイムシートをレビュー、承認する必要がある場合は、P6 Web Access をインストールしなくてはなりません。P6 Web Access をインストールする際に P6 Web Access アプリケーション上にインストールされた Timesheet Approval を利用すると、タイムシート承認マネージャはタイムシートをレビュー、承認または却下したり、Timesheets リソースと連絡を取ったり、タイムシートレポートを実行したりできます。インストール後は P6 Web Access と Project Management から Timesheet Approval へのアクセスを設定するか、スタンドアロン型アプリケーションとして承認マネージャが利用できるようにすることができます。

Timesheets を使用する場合、Timesheets のどのバージョンを使用すべきか？

Timesheets は、3層からなるクライアントサーバモジュールです。Timesheets クライアントをフロントエンド、プロジェクトを含むデータベースサーバをバックエンドとし、真ん中に Group Server を置く構成で Timesheets クライアントとデータベース間のリンクを提供します。

Primavera は、組織にわたり、2種類のタイムシートインタフェースを提供することにより、チームメンバー間のプロジェクトコミュニケーションを促進します。それは、Web ブラウザ版と Java Web Start 版です。Java Web Start 版はオプションです。この2種類のインタフェースの差は、以下の通りです。

Web ブラウザ版 Timesheets Web ブラウザ版では、ユーザが Java アプレットとしてタイムシートデータにインターネットを經由してアクセスすることを可能にします。

Web ブラウザ版を実行するには、ユーザは単に指定された URL にアクセスするだけで済みます。Java アプレットが自動的にユーザのコンピュータにダウンロードされ、Web ブラウザで実行されます。多くのユーザが Timesheets を使用する必要がある場合は、Java アプレットによる実行により大幅な管理の時間削減となります。クライアント側のインストールが必要なくなり、ソフトウェアのアップデートは自動的に頒布されます。主な欠点は当初のアプレットのダウンロード時間です。遅いモデム接続の場合は、20分程度かかります。

Java Web Start 版 Timesheets の Java Web Start 版は、Web ブラウザ版と同じ機能ですが、この版は Java アプリケーションとして実行されます。

Java Web Start は、Java Network Launching Protocol (JNLP) テクノロジーにより、セキュアでプラットフォームに依存しない Timesheets の導入を可能にします。また、Java Web Start によると、1つ以上の JRE のバージョンが存在しているときでも、ユーザが常に正しい JRE のバージョンによる最新版のタイムシートを起動することを確実にします。Java Web Start はユーザのコンピュータに自動的に最新版の Timesheets をダウンロードするので、ユーザは手動で更新する必要がなくなります。

プロジェクト管理タスクの性能向上のため、プロジェクトデータを Web アクセスで共有したいか？ P6 Web Access により、Web ブラウザでプロジェクトデータにアクセスすることができるようになります。これにより、組織内でのプロジェクトの作成と管理のサポート、使用可能なリソースと割り当ての詳細の提供、プロジェクトポートフォリオのレポート機能を提供し、戦略的な意思決定をサポートします。

以下の表に、各クライアントコンポーネントおよび対応のそれが必要とするサーバベースコンポーネントを示します。

	RDBMS	Group Server	P6 Web Access	Primavera ジョブサービス	コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリ
Project Management	✓ ¹			✓ ²	
Methodology Management	✓ ¹				
Timesheets	✓	✓	✓ ⁴		
P6 Web Access ユーザ	✓	✓ ³	✓	✓	✓ ⁵

- 1 Oracle を RDBMS として使用する場合は、このモジュールは Oracle クライアントソフトウェアがクライアントコンピュータにインストールされていることを必要とします。
- 2 ジョブサービスは、Project Management モジュールのオプションコンポーネントです。
- 3 Group Server は、P6 Web Access 用のオプションコンポーネントです。P6 Web Access として Timesheets 機能を使用するときに必要となります。
- 4 P6 Web Access は Timesheets のコンポーネントとしてはオプションであり、リソースタイムシートをレビュー、承認しなくてはならない場合にのみ必要です。
- 5 コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリは、P6 Web Access の任意のコンポーネントです。ドキュメント管理やプロジェクト要求プロセスに関する補助機能を備えています。

クライアントおよびサーバの要件

Primavera の実装計画を決めた後は、ハードウェアとソフトウェアがそれをサポートできるか確認してください。



以下の表は、Primavera で試験された構成を示します。システム要件、バージョン、検証済みの環境のリストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている *Documentation* ¥<language> ¥Tested Configurations フォルダを参照してください。

Primavera のサポートするプラットフォーム

クライアントモジュール (Project Management、Methodology Management、P6 Web Access)

- Microsoft Windows XP Professional (sp2 および sp3)
- Microsoft Windows Vista Business Edition (sp1)
- Citrix Presentation Server 4.5

Integration API (Application Programming Interface) と SDK (ソフトウェア開発キット) は、Windows 2003 (sp2)、XP (R2 sp2)、XP (sp2)、または Vista Business Edition (sp1) を搭載したコンピュータにインストールできます。システム条件は、Primavera データベースと統合する API または SDK を使用するモジュールの必要条件によって異なります。

最小クライアント構成

Project Management および Methodology Management モジュールを実行するクライアント用

- Oracle 10.2 フルバージョン
- Oracle 11.1 フルバージョン
- SQL Server 2005 sp2 フルバージョン
- SQL Server 2005 Express with Advanced Series sp2
- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 1 GB の RAM
- スタンドアロンモジュールをインストールする場合は、Project Management モジュール、Methodology Management モジュールのほか、NET や SQL Server 2005 Express を含むサポートソフトウェアのため、800 MB の空きハードディスクスペース。前リリースからのアップグレードの場合は、モジュールごとにさらに 40MB の空きハードディスクスペース。
- Project Management モジュールのみをインストールする場合は最低 185 MB のハードディスク空きスペース

- Methodology Management モジュールのみをインストールする場合は、最低 45 MB の空きハードディスクスペース
- Microsoft IE (Internet Explorer) 6 (sp2) または IE 7
- TCP/IP ネットワークプロトコル

Timesheets Web ブラウザ版を実行するクライアント用

- Microsoft Windows XP Professional (sp2 または sp3)
- Microsoft Windows Vista Business Edition (sp1)
- Ubuntu Linux 8.04
- 256 MB の RAM
- Microsoft IE 6 (sp2)、IE 7、または Firefox 3.0
- Sun JRE (Timesheets と共に適切なバージョンが自動的にインストールされます)
- TCP/IP ネットワークプロトコル
- オプションのソフトウェア
 - Java Access Bridge 2.01 (508 アクセシビリティ用)
- Timesheets アプリケーションは、以下の支援テクノロジーで試験されています。
 - JAWS® for Windows 画面読み取りソフトウェア 7.0 版
 - ZoomText Magnifier 9.0

Timesheets を実行するクライアント Java Web Start 版

- 256 MB の RAM
- Microsoft IE 6 (sp2)、IE 7、または Firefox 3.0
- Sun JRE (Timesheets と共に適切なバージョンが自動的にインストールされます)
- TCP/IP ネットワークプロトコル
- オプションのソフトウェア
 - Java Access Bridge 2.01 (508 アクセシビリティ用)
- Timesheets アプリケーションは、以下の支援テクノロジーで試験されています。
 - JAWS® for Windows 画面読み取りソフトウェア 7.0 版
 - ZoomText Magnifier 9.0

P6 Web Access にアクセスするクライアント用

- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 1 GB の RAM (推奨)
- 25 MB のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル
- Microsoft IE 6 (sp2)、IE 7、または Firefox 3.0
- Sun JRE (必要なバージョンが P6 Web Access と共に自動的にインストール)

サーバ用のサポート構成

データベースサーバ用

- Windows 2003 Server (R2 sp2) および Red Hat Enterprise Linux 5.0 上の Oracle 10.2.0.3
- Windows 2003 Server (R2 sp2)、Windows 2008 Server および Red Hat Enterprise Linux 5.0 上の Oracle 11.1.0.6
- Windows 2003 Server (R2 sp2) および Windows 2008 Server 上の Microsoft SQL Server 2005 (sp2)
- Windows XP (sp2 および sp3) および Vista Business Edition (sp1) 上の Microsoft SQL Server 2005 Express with Advanced Services (sp2)
- 2 x 3.2 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 2 GB 以上の RAM (実装のサイズによって異なります)
- 最低 6 の物理ドライブにわたる 15K RPM SCIS I/O サブシステム
- メモリ条件は、23 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」および 24 ページの「[Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

Group Server の実行および Timesheets ファイルを提供するサーバ用

- ユーザの Oracle のバージョンと互換性がある Oracle OLE DB ドライバ
- ユーザの SQL のバージョンと互換性のある、SQL Server のクライアントドライバ
- インストール済みで実行中の Web サーバソフトウェア
- 512 MB 以上の RAM
- 200 MB のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル

ジョブサービスまたは分散ジョブサービス用

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server
- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4（またはその同等）プロセッサ
- 2 GB の RAM（最低）
4 GB の RAM（推奨）
- 最低 250 MB のハードディスク空きスペース

P6 Web Access をホストするアプリケーションサーバ要件

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server
- Red Hat Enterprise Linux AS 5.0
- Solaris 10 (Sparc)
- HP-UX11i v2
- IBM AIX 5.3
- 2 x 3.2 GHz 以上の Intel Pentium 4（またはその同等）プロセッサ
- 4 GB 以上の RAM（推奨）
- 1 GB（最低）のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Web Access をホストする Java アプリケーションサーバ要件

- JBoss 4.0.5
- BEA WebLogic Express または Enterprise Server 10 (sp1)
- IBM WebSphere Application Server 6.1

プロジェクト Web サイトファイルをホストする Web サーバ用

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 6.0
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 7.0
- Microsoft TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Web Access Web サーバ用

- Microsoft Internet Information Server (IIS) 6.0
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 7.0
- Apache Web Server 2.2.6

サポートされる E-メールシステムとネットワークプロトコル

- インターネット E メール (SMTP) または MAPI はサポートされています。



P6 Web Access は、SMTP のみをサポートします。

- ネットワークプロトコルは、データベースベンダのみに依存します。
- Web サイトには TCP/IP が必要です。

Project Management データベースサーバの要求サイズガイド

次のサイズは、Project Management データベースの単一インスタンスを参照するものです。メモリサイズには、オペレーティングシステムが必要とするオーバーヘッドは含まれません。また、サーバのバージョンによって異なります。

Oracle

ファイル	小規模	中規模	大規模
Temp TBS	300 MB	500 MB	1,000 MB
Undo TBS	300 MB	500 MB	1,000 MB
Index TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
Data TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
Lob TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
合計	1,350 MB	2,500 MB	5,000 MB
RAM:	384 MB	512 MB	1024+MB

Microsoft SQL Server

ファイル	小規模	中規模	大規模
データ	300 MB	500 MB	1,000 MB
データログ	150 MB	250 MB	500 MB
一時的	300 MB	500 MB	1,000 MB
一時的なログ	50 MB	100 MB	125 MB
合計	800 MB	1,350 MB	2,625 MB
RAM:	384 MB	512 MB	1024+MB

Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド

次のサイズは、Methodology Management データベースの単一インスタンスを参照するものです。メモリサイズには、オペレーティングシステムが必要とするオーバーヘッドは含まれません。また、サーバのバージョンによって異なります。

Oracle

ファイル	推奨の規模
Temp TBS	100 MB
Undo TBS	100 MB
Index TBS	250 MB
Data TBS	250 MB
Lob TBS	250 MB
合計	950 MB

Microsoft SQL Server

ファイル	推奨の規模
データ	300 MB
データログ	150 MB
一時的	100 MB
一時的なログ	50 MB
合計	600 MB

実際的な製品限界

以下の表で、さまざまな実際上の限界を示します。この限界を超えると性能問題が生じます。

アプリケーション 要素		実際的な 限界
Timesheets	ユーザの指定アクティビティ期間内に ユーザに割り当てられたアクティビ ティ数	100
Timesheets	タイムシートごとのアクティビティ数	100
Project Management モジュール	プロジェクトごとのアクティビティ数	100,000
Project Management モジュール	プロジェクトごとの接続数	100,000

データベースのインストールおよび設定

内容

データベースの自動インストール

手動データベース構成

データベース管理

ネ

ネットワークサーバで実行するため、Primavera アプリケーションのインストールおよび設定を行うのは経験あるデータベース管理者が行うのが最適ですが、ユーザ会社でそのような人が存在していない場合もあります。Primavera では、素早く簡単にデータベースサーバに必要なデータベースコンポーネントをインストールすることができる設定プログラムを提供しています。「[データベースの自動インストール](#)」を参照して、データベースウィザードの指示するステップに従い、新しい Project Management および／または Methodology Management データベースを作成し、必要なデータをロードしてください。

自動手順に従わない場合は、手動でデータベースを設定してデータをロードすることもできます。手順の詳細は、「[手動データベース構成](#)」を参照してください。

データベースのインストールに自動あるいは手動のどちらを選択した場合でも、インストール／設定プロセスに含まれないデータベース設定の変更方法に関する重要な手順については「[データベース管理](#)」を参照してください。

データベースの自動インストール

本章の内容：

概要

データベースウィザードの実行

Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

自動インストールプロセスを使って、Project Management および Methodology Management モジュールのデータベースをサーバに設定、ロードするには、以下のステップに従います。

概要

Primavera の実行には、2つのデータベースが使われます。

- Project Management データベース (PMDB) は、Primavera で使われる Project Management データを保存します。これは必須データベースです。
- Methodology Management データベース (MMDB) は、新プロジェクトを作成するときにテンプレートとして使用できるメソドロジーを保存します。このデータベースは Methodology Management モジュールを使用する場合に、インストールする必要があります。

サーバとクライアント用の Oracle、またはサーバ用の SQL Server のインストールに関する詳細な作業ステップの情報が必要な場合は、Primavera のカスタマーサポートまでお問い合わせください。

データベース性能やさらなる設定に関するヒントや特記事項については、65 ページの「データベース管理」を参照してください。

Primavera は、Oracle、Microsoft SQL Server および Microsoft SQL Server Express データベースをサポートしています。データベースを作成するにはその前に、MS SQL Server または Oracle サーバソフトウェアがインストールされていなければなりません。

データベースウィザードを実行して、自動的にデータベース構造を作成し、アプリケーションデータをそこにロードすることができます。あるいは、データベース構造を手動で構築し、バッチファイルを実行してアプリケーションデータをロードすることもできます。本章では自動方法について、また、次の章「[手動データベース構成](#)」では手動方法について説明します。

Oracle に関する特記事項 Primavera データベースのインストール前には、以下を考慮してください。

- Primavera を Oracle データベースサーバで実行する場合は、Oracle クライアントがデータベースサーバをアクセスするすべてのマシンにインストールされていなければなりません。
- Oracle クライアントをインストールする場合は、TNSPING.EXE ユーティリティプログラムが自動的に、`¥oracle¥<ora_home>¥bin` フォルダにインストールされます。このユーティリティは、Primavera のアプリケーションの実行に必要です。消去しないでください。
- Oracle は、(MTS モードでなく) 専用モード (Dedicated Mode) で実行する必要があります。
- 西欧言語においてユーロ記号の使用が必要な場合は、コードページ WE8MSWIN1252 または、UTF8 を使わなければなりません。

SQL Server に関する特記事項 Primavera を SQL Server、または SQL Server Express データベースサーバで実行する場合は、必要な SQL Server クライアントファイルは、プロジェクト管理モジュールのインストールの際に、クライアントマシンに自動的にインストールされます。

データベースウィザードの実行

データベースウィザードは、新しいデータベース構造を構築したり、アプリケーションデータをそこにロードするガイドとなります。このステップを実行するのに、ユーザは DBA の経験が豊富である必要はありません。ただし、Oracle、Microsoft SQL Server または SQL Server Express がすでにデータベースサーバ上にインストールされている必要があります。

データベースウィザードを実行して新しいデータベースを作成するのは、クライアントコンピュータからでもサーバ自身でも可能です。データベースウィザードは、必要なファイル構造やユーザを作成します。

Methodology Management モジュールを使用する場合は、データベースウィザードを 2 回実行します。最初は、データベース構造を作成し Project Management データベースをロードします。その後、Methodology Management データベースのために再度実行します。

Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

以下のステップを踏み、Oracle データベースの作成とアプリケーションデータのロードを行います。



Primavera Systems は、500 MB のテンポラリーテーブルスペースと 500 MB undo テーブルスペースを作成するよう推奨します。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。



ライセンスキーファイルは、ソフトウェアを使用するのに必要となるもので、E メールまたは CD で提供されているはずですが、この中には、ユーザの会社名、シリアル番号、購入した製品コンポーネントと版数、許容ユーザ数が含まれます。この手順でライセンスファイルを読み込む場合は、事前にライセンスファイルをローカルドライブにコピーしておきます。

- 1 媒体からインストールする場合は、最初の画面が現れてインストールのオプションが表示されます。

この画面が現れない場合、またはネットワークからインストールする場合は、P6 の媒体あるいはダウンロードに含まれている `Client_Applications\install\database` フォルダから `dbsetup.bat` を実行します。パート 4 に進んでください。

- 2 メインの **Primavera** 画面で、**Other Applications** を選択します。
- 3 **Other Applications** 画面で、**P6 Databases Utility** を選択して、データベースウィザードを起動します。



ウィザードの各ダイアログボックスで、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 4 **Primavera P6** ダイアログボックスで、
 - **Install a new database** を選択します。
 - サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
 - **Product key** フィールドで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品コードを入力します。
- 5 **Database Selection** ダイアログボックスで、

- 必要なサイズと性能に応じて、**Project Management and Content Repository in one database** または **Project Management and Content Repository in two different databases** を選択します。

コンテンツリポジトリデータは、ドキュメントの共有などの協力目的で使用されます。**Content Repository only** のオプションは、データベースウィザードを実行しようと試みたものの完了できなかった場合に利用できます。

6 Connection Information ダイアログボックスの

- **DBA ユーザ名** フィールドで、Oracle システムのユーザ名を入力し、データベースにログオンします。例えば、**system** (既定) と入力します。
- **DBA パスワード** フィールドにパスワードを入力し、データベースにログオンします。DBA ユーザ名に **system** を選んだ場合は、**manager** をパスワードとして使ってください。そうでない場合は、入力したユーザ名に対応するパスワードを入力します。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Oracle がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、Oracle が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
- **Database Name (SID)** フィールドに Oracle SID を入力します。これは、ユーザまたはその DBA が Oracle クライアントを設定した際に作成された TNSNAMES.ORA ファイルにあります。

7 Oracle テーブルスペースの設定ダイアログボックスで、次へをクリックし、データ、インデックス、LOB テーブルスペースおよび推定テーブルスペースサイズを承諾します。

推定テーブルスペースサイズは、変更することができます。サイズに関するガイドラインについては、23 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

Use existing tablespaces をマークするのは、接続しようとしているデータベースサーバにすでにテーブルスペースがある場合のみです。新規のデータベースサーバの場合、このオプションはマークしないでください。

8 Specify Oracle Tablespace Locations ダイアログボックスで、Oracle テーブルスペース（データ、インデックス、LOB）のデフォルトロケーションを承諾するか、別の場所を指定します。



このステップで **Create** をクリックすると、プロジェクト管理データベースの初期設定が始まります。この後は、**Previous** をクリックして以前の選択を変更することはできなくなります。ただし、次のステップで **Next** または **Cancel** のいずれかをクリックすることができます。

9 テーブルスペースの作成を完了すると、**Creating Oracle Tablespaces** ダイアログボックスで **Next** をクリックします。

10 Create Oracle Users ダイアログボックスで、Oracle 管理者ユーザ、特権ユーザ、公衆ユーザのデフォルト名を承諾するか、あるいは適宜、名前を指定します。



管理者ユーザ名に **privuser** を入力してはいけません。これは競合の原因になります。



Oracle 11g を使用する場合は、ユーザ名に使われたものと同じ大文字または小文字をパスワードでも使います。たとえば、ユーザ名として「ADMUSER」と入力した場合はパスワードも大文字で「ADMUSER」になります。

デフォルトのテーブルスペースフィールドのドロップダウンリストから、異なったデフォルトテーブルスペースを選ぶことができます。一時テーブルスペースフィールドでは、本手順の開始以前に作成した一時テーブルスペースを使用します。



一時テーブルスペースは、一時型とします。そうしないとデータベースでエラーが発生します。

11 Configuration Options ダイアログボックスで、

- データベースにサンプルのプロジェクトデータを含めたい場合は、**Load Sample Data** のチェックボックスにマークします。



米ドル (\$) をデータベースの基本通貨として使用したくない場合は、以下のステップに従って基本通貨を選択してください。プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、367ページの「Project Management」での管理設定と分類の定義」を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。Primavera の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、Primavera のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります（例えば丸め誤差）。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

- データベースの基本通貨として米ドル以外の通貨を使用したい場合は、**Currency** フィールドで別の基本通貨を選択します。
 - **Load license key file** をマークします。
 - LICENSE.TXT ファイルのロケーションをブラウズします。その時点で LICENSE.TXT ファイルが使用可能でない場合は、Load License チェックボックスからチェックを外し、のちにデータベース設定ウィザードでファイルをロードします。さらなる詳細については 271 ページの「データベース構成設定の変更」を参照してください。
- 12 アプリケーションデータを使ってデータベーステーブルをロードするプロセスを開始するには、Configurations Options ダイアログボックスで **Install** をクリックします。
 - 13 プロセスを完了したら、**Creating Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースを作成できなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください（「C:\¥Documents and Settings¥Administrator」など）。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

- 14 Methodology Management** モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。

両方のアプリケーションデータ（**Project Management** および **Methodology Management**）のインストールが完了したら、クライアントモジュールとその他のコンポーネントをインストールすることができます。サーバの設定とクライアントモジュールおよびその他のコンポーネントのインストールについてのさらなる詳細については、[パート 3](#) および [パート 4](#) を参照してください。

SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

以下のステップに従い、SQL Server または SQL Server Express データベースの作成とアプリケーションデータのロードを自動的に実行します。



ライセンスキーファイルは、ソフトウェアを使用するために必要で、EメールまたはCDで提供されているはずですが、この中には、ユーザの会社名、シリアル番号、購入した製品コンポーネントと版数、許容ユーザ数が含まれます。この手順でライセンスキーファイルを読み込む場合は、事前にライセンスファイルをローカルドライブにコピーしておきます。

- 1 媒体からインストールする場合は、最初の画面が現れてインストールのオプションが表示されます。

この画面が現れない場合、またはネットワークからインストールする場合は、P6の媒体あるいはダウンロードに含まれている `¥Client_Applications¥install¥database` フォルダから `dbsetup.bat` を実行します。パート4に進んでください。

- 2 メインの **Primavera** 画面で、**Other Applications** を選択します。
- 3 **Other Applications** 画面で、**P6 Databases Utility** を選択して、データベースウィザードを起動します。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ]をクリックして次ステップへ進みます。

- 4 **Primavera P6** ダイアログボックスで、
 - **Install a new database** を選択します。
 - サーバタイプとして、**Microsoft SQL Server/SQL Express** を選択します。
 - **Product key** フィールドで、EメールまたはライセンスCDラベルに記載されている製品コードを入力します。
- 5 **Database Selection** ダイアログボックスで、
 - 必要なサイズと性能に応じて、**Project Management and Content Repository in one database** または **Project Management and Content Repository in two different databases** を選択します。

コンテンツリポジトリデータは、ドキュメントの共有などの協力目的で使用されます。**Content Repository only** のオプションは、データベースウィザードを実行しようと試みたものの完了できなかった場合に利用できます。

6 Connection Information ダイアログボックスの

- **Sys admin user name** フィールドに、Microsoft SQL Server システム管理者名を入力し、サーバに登録します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選んだ場合は、システム管理者名を SA のままにしておきます。
- **Sys admin password** フィールドに、このシステム管理者のパスワードを入力します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選択した場合は、パスワードフィールドを空白のままにしておきます。
- **Database host address** フィールドに、サーバのマシン名または Microsoft SQL Server がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database host port** フィールドに、Microsoft SQL Server が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1433 です。

7 Configuring Microsoft SQL Server/SQL Express Database

ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、既定値を使用するか、インストールに適切な値に変更します。

データベース名を変更する場合、データベース名の重複は許容されません。指定された名前のデータベースがすでに存在している場合は、固有の名前を入力するよう指示されます。



データベース名には、ダッシュ (-) を使用しないでください。エラーとなります。

データファイルには、データベーステーブルとプロシジャが含まれます。ログファイルには、変更レコードが含まれます。既定で、データベースウィザードは、これらのファイルを Microsoft SQL Server がインストールされているサーバのフォルダに保存します。指定したデータベース名が、ファイル名に使用されます。場所を変更する場合は、サーバ上に保存先のフォルダがなければなりません。

データベースコードページは、Microsoft SQL Server 向けにすでに選択されているページに既定設定されます。必要に応じて、異なったコードページを選択します。



このステップの後、Next をクリックすると、プロジェクト管理データベースの初期作成が始まります。この後は、Previous をクリックして以前の選択を変更することはできなくなります。ただし、次のステップで Install または Cancel のいずれかをクリックすることができます。

8 Configuration Options ダイアログボックスで、

- データベースにサンプルのプロジェクトデータを含めたい場合は、**Load sample data** のチェックボックスにマークします。



米ドル (\$) をデータベースの基本通貨として使用したくない場合は、以下のステップに従って基本通貨を選択してください。プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、367 ページの「[Project Management](#) での管理設定と分類の定義」を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。Primavera の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、Primavera のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります (例えば丸め誤差)。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

- データベースの基本通貨として米ドル以外の通貨を使用したい場合は、**Currency** フィールドで別の基本通貨を選択します。
 - **Load license key file** をマークします。
 - LICENSE.TXT ファイルのロケーションをブラウズします。その時点で LICENSE.TXT ファイルが使用可能でない場合は、Load License チェックボックスからチェックを外し、のちにデータベース設定ウィザードでファイルをロードします。さらなる詳細については 271 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照してください。
- 9 アプリケーションデータを使ってデータベーステーブルをロードするプロセスを開始するには、Configuration Options ダイアログボックスで **Install** をクリックします。
- 10 プロセスを完了したら、**Creating Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースを作成できなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください（「C:\¥Documents and Settings¥Administrator」など）。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

- 11 Methodology Management モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、Finish をクリックしてウィザードを終了します。

両方のアプリケーションデータ（Project Management および Methodology Management）のインストールが完了したら、クライアントモジュールとその他のコンポーネントをインストールすることができます。サーバの設定とクライアントモジュールおよびその他のコンポーネントのインストールについてのさらなる詳細については、[パート3](#) および [パート4](#) を参照してください。性能最適化のためのデータベース設定方法については、65 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

手動データベース構成

本章の内容：

概要

Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータのロード

MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用のデータベース構造の作成

基本通貨の変更 (Oracle および Microsoft SQL Server)

Oracle または Microsoft SQL Server が実行されるサーバ上に、Project Management データベースおよび Methodology Management データベースを手動設定する場合は、本章をお読みください。本章のステップは、データベース管理者 (DBA) が行う必要があります。

設定は、大きく 3 ステップに分かれます。各データベース構造を作成すること、各データベースにアプリケーションデータをロードすること、そしてコンテンツリポジトリを設定することです。

データベース構造の自動作成とデータの自動ロードにウィザードを使用する場合は、29 ページの「[データベースの自動インストール](#)」を参照してください。

Microsoft SQL Server Express を使う場合は、データベースウィザードを実行することを推奨します。

概要

Primavera の実行には、2つのデータベースが使われます。

- Project Management データベース (PMDB) は、Primavera で使われる Project Management データを保存します。これは必須データベースです。
- Methodology Management データベース (MMDB) は、新プロジェクトを作成するときにテンプレートとして使用できるメソドログを保存します。このデータベースは Methodology Management モジュールを使用する場合に、インストールする必要があります。

サーバとクライアント用の Oracle、またはサーバ用の SQL Server のインストールに関する詳細な作業ステップの情報が必要な場合は、Primavera のカスタマーサポートまでお問い合わせください。

Primavera は、Oracle、Microsoft SQL Server および Microsoft SQL Server Express データベースをサポートしています。データベースを作成するにはその前に、MS SQL Server または Oracle サーバソフトウェアがインストールされていなければなりません。



Oracle クライアントをインストールする場合は、`TNSPING.EXE` ユーティリティプログラムが自動的に、`¥ oracle ¥ <ora_home> ¥ bin` フォルダにインストールされます。このユーティリティは、Primavera のアプリケーションの実行に必要です。消去しないでください。

Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータのロード

Oracle データベース管理者 (DBA) は、Project Management および Methodology Management データベースを作成し、Primavera が提供する SQL スクリプトを実行して各データベース構造（テーブル、インデックス、関係など）を作成します。



Group Server は国際言語を扱う場合は、Unicode の Project Management データベースが必要となります。



Oracle は、(MTS モードでなく) 専用モード (Dedicated Mode) で実行する必要があります。



西欧言語においてユーロ記号の使用が必要な場合は、コードページ WE8MSWIN1252 または、UTF8 を使わなければなりません。

また、データベースの作成とデータのロードを、ユーザになり代わって自動的に行うウィザードを使用することもできます。さらなる詳細については 29 ページの「データベースの自動インストール」を参照してください。

本項の記述は、読者が Oracle DBA か Oracle データベースの管理に詳しいことを想定しています。すべてのステップを指定された順序で完了する必要があります。手動設定プロセスについて質問がある場合は、先に進む前にカスタマーサポートに連絡してください。

Primavera では、以下の手順で説明されているスクリプトを実行する際は SQL Plus を使用するようお勧めしています。

PMDB Oracle データベース構成の作成

- 1 ローカルドライブに「install」と「source」という名前の2つのフォルダを作成します。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥install にブラウズします。ローカルドライブのインストールフォルダに以下のフォルダをコピーします。

PM_06_02_00
JR_01_01_00

- 3 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥source にブラウズします。ローカルドライブのソースフォルダに以下のフォルダをコピーします。

PM_06_02_00
JR_01_01_00

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして Oracle にログインします。
- 2 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、**orpm_init_db.sql** スクリプトを実行します。



orpm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Primavera は、500 MB のテンポラリーテーブルスペースと 500 MB undo テーブルスペースでデータベースを作成するよう推奨します。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして PMDB データベースにログオンします。
- 2 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、**orpm_create_users.sql** スクリプトを実行します。



orpm_create_users.sql スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、およびPUBUSER というユーザ名が作成されます。その他の管理、プライベート、およびパブリックユーザ名を作成しており、Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず *admuser*、*privuser*、または *pubuser* をカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 PMDB データベースに *admuser* としてログオンします。
- 4 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、**orpm_tables.sql** スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている P6 Client_Applications フォルダから ¥install¥database にブラウザして、*rundataloader.bat* ファイルをローカルドライブにコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、*rundataloader.bat* ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 3 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:pmdb_ec.zip  
admuser/admuser@oracle:<host>:<port>:<instance>
```

ここで <host> は Oracle がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、<port> は Oracle が使用しているポート番号（デフォルトは 1521）、<instance> はデータベース名または SID です（PMDB など）



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に `_empty` を追加します。空のデータには、Project Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 PMDB データベースに `admuser` としてログオンします。
- 2 `¥install¥PM_06_02_00` に進み、`orpm_database_version.sql`、`orpm_ins_aux.sql`、および `orpm_querylib.sql` スクリプトを実行します。
- 3 `¥source¥PM_06_02_00` に進み、`orpm_src.sql` スクリプトを実行します。

コンテンツリポジトリデータの作成

以下のステップで使われるスクリプトは、新しい Oracle インスタンス、またはすでに PMDB データが含まれている既存の Oracle インスタンスで実行できます。新しい Oracle インスタンスでコンテンツリポジトリデータを作成したい場合は、51 ページのを参照してください。

- 1 PMDB データベースで `admuser` としてログオンしている間に、`¥install¥JR_01_01_00` に進んで `orjr_ins.sql` スクリプトを実行します。
- 2 `¥source¥JR_01_01_00` に進み、`orjr_src.sql` スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、62 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、65 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

ライセンスファイルのアップロードの詳細については、274 ページの「[管理タスクの実行](#)」を参照してください。

PMDB Oracle データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Project Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がよいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥install¥PM_06_02_00\drop フォルダで、「or」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

ORDP_SPS.SQL	ストアードプロシジヤをドロップ
ORDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
ORDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
ORDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
ORDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
ORDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
ORDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、admuser としてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記にリストされている順番にオブジェクトをドロップしなければなりません。

MMDB Oracle データベース構造の作成

Methodology Management を使う予定の場合は、以下のステップすべてを指定された順序で完了する必要があります。

- 1 ローカルドライブに「install」と「source」という名前の2つのフォルダを作成します。これらのフォルダが PMDB 向けにすでに作成されている場合は、既存のフォルダを使用できます。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥install にブラウズします。ローカルドライブのインストールフォルダに MM_06_02_00 フォルダをコピーします。
- 3 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている P6 Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥source にブラウズします。ローカルドライブのソースフォルダに MM_06_02_00 フォルダをコピーします。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして Oracle にログインします。
- 2 ¥install¥MM_06_02_00 に進み、**orrm_init_db.sql** スクリプトを実行します。



orrm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Primavera は、100 MB のテンポラリーテーブルスペースと 100 MB undo テーブルスペースでデータベースを作成するよう推奨します。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして MMDB データベースにログオンします。
- 2 admuser、privuser、pubuser がすでに作成されていない場合は (PMDB のユーザとテーブルの作成の **パート 2**)、¥install¥MM_06_02_00 に進んで **orrm_create_users.sql** スクリプトを実行してください。



`ormm_create_users.sql` スクリプトを実行すると、`ADMUSER`、`PRIVUSER`、および `PUBUSER` というユーザ名が作成されます。その他の管理、プライベート、およびパブリックユーザ名を作成しており、Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず `admuser`、`privuser`、または `pubuser` をカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 MMDB データベースに `admuser` としてログオンします。
- 4 `¥install¥MM_06_02_00` に進み、`ormm_tables.sql` スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている `Client_Applications` フォルダから `¥install¥database` にブラウザして、`rundataloader.bat` ファイルをローカルドライブにコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、`rundataloader.bat` ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 3 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:mmdb_ec.zip  
admuser/admuser@oracle:<host>:<port>:<instance>
```

ここで `<host>` は Oracle がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、`<port>` は Oracle が使用しているポート番号（デフォルトは 1521）、`<instance>` はデータベース名または SID です（MMDB など）



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に `_empty` を追加します。空のデータには、Methodology Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 MMDB データベースに `admuser` としてログオンします。
- 2 `¥install¥MM_06_02_00` に進み、`ormm_database_version.sql` および `ormm_ins_aux.sql` スクリプトを実行します。
- 3 `¥source¥MM_06_02_00` に進み、`ormm_src.sql` スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、62 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、65 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

ライセンスファイルのアップロードの詳細については、274 ページの「[管理タスクの実行](#)」を参照してください。

MMDB Oracle データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Methodology Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がよいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥install¥MM_06_02_00¥drop フォルダで、「or」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

ORDP_SPS.SQL	ストアードプロシジヤをドロップ
ORDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
ORDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
ORDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
ORDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
ORDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
ORDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、admuser としてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記にリストされている順番にオブジェクトをドロップしなければなりません。

PMDB がある同じ Oracle インスタンスにコンテンツデータを追加したい場合は、45 ページの「コンテンツリポジトリデータの作成」を参照してください。

新しい Oracle インスタンスでコンテンツリポジトリデータベース構造を作成します。

必要なサイズやパフォーマンスに応じて、PMDB データを含む既存の Oracle インスタンスに追加するのではなく、新規 Oracle インスタンスにコンテンツリポジトリを設定した方がよいこともあります。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして新規 Oracle インスタンスにログインします。
- 2 ¥install¥JR_01_01_00 に進み、**orjr_init_db.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、データベースの基本的な構造が作成されます。



orjr_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Primavera では、サイズを自動拡張 (autoextend) に設定するようお勧めします。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして Oracle データベースにログオンします。
- 2 ¥install¥JR_01_01_00 に進み、**orjr_create_users.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、CRUSER という名前のユーザが作成されます。

コンテンツリポジトリデータの作成

- 1 CRUSER として新規 Oracle データベースにログオンします。
- 2 ¥install¥JR_01_01_00 に進み、**orjr_ins.sql** スクリプトを実行します。
- 3 ¥source¥JR_01_01_00 に進み、**orjr_src.sql** スクリプトを実行します。

MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用のデータベース構造の作成

Microsoft SQL Server DBA は、Project Management および Methodology Management データベースを作成し、Primavera が提供する SQL スクリプトを実行して各データベース構造（テーブル、インデックス、接続など）を作成します。

さらなる詳細情報については、18 ページの「クライアントおよびサーバの要件」を参照してください。

Primavera は Microsoft SQL Server 2005 をサポートしています。本項の記述は、作業者が DBA もしくは Microsoft SQL Server データベースの管理に詳しいことを想定しています。すべてのステップを指定された順序で完了する必要があります。手動設定プロセスについて質問がある場合は、先に進む前にカスタマーサポートに連絡してください。

Microsoft SQL Server データベース構造を作成する前に、システム管理者 (SA) としてサーバに登録し、Microsoft SQL Server Management Studio で以下のサーバレベルの設定変更を確認する必要があります。

- **ワークスレッド最大数** サーバに接続されるユーザをサポートする最大スレッド数を指定します。既定設定 (255) は、構成によっては同時接続ユーザ数に対して多過ぎる可能性があります。各作業者には、使用されなくてもスレッドが割り当てられます。ということは、割り当てられた作業者スレッドに対して同時接続数が少なければメモリリソースを無駄にしている可能性があります。
- **メモリ** 設定は、動的に保持します。Microsoft SQL Server は、サーバで利用可能なメモリ最大量まで、必要に応じて動的にメモリを獲得したり解放したりします。
- **オープンオブジェクト** 設定は、動的に保持します。この設定は、Microsoft SQL Server で同時に開くことができる最大オブジェクト数を特定します。この値は、現在のシステムニーズにより、自動的に設定されます。この値を変更する必要はありません。
- **ユーザ接続数** 設定は、0 にします。これによって、Microsoft SQL Server に、同時ユーザ接続数を必要数に応じて最大値まで調整することができるようにします。
- **ネットワークパケットサイズ** 16384 に設定します。

サーバの設定が完了したら、Microsoft SQL Server を停止して開始します。これによって確実に変更を有効にします。

国際言語のサポート (SQL Server 2005) の設定

非ラテン系言語（繁体中国語、簡体中国語、ロシア語または日本語）サポートでは、Group Server ではデータベースを設定する際、特殊設定が必要になります。データベースの設定時には、指示が表示された際に、ユーザのインストールと一致する codepage と collation オプションを選択します。

PMDB Microsoft SQL Server データベース構造の作成

- 1 ローカルドライブに「install」と「source」という名前の2つのフォルダを作成します。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts ¥install にブラウズします。ローカルドライブのインストールフォルダに以下のフォルダをコピーします。

PM_06_02_00

JR_01_01_00

- 3 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts ¥source にブラウズします。ローカルドライブのソースフォルダに以下のフォルダをコピーします。

PM_06_02_00

JR_01_01_00

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SA ユーザとしてサーバに登録
- 2 Microsoft SQL Server Management Studio を開きます。¥install ¥PM_06_02_00 に進み、sspm_init_db.sql スクリプトを実行します。



sspm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、PMDB という名前のデータベース（データファイルは 500 MB 以上、ログファイルは 200 MB 以上）を手動で作成できます。ファイルグループの pmdb_dat1, pmdb_lob1 と pmdb_ndx、および各グループのデータベースファイルを作成します。pmdb_dat1 を既定のファイルグループにします。ユーザの構成によって、これらのファイルグループを物理的に別々のドライブに設定することも考慮してください。



手動で PMDB を作成する場合は、必ず互換性レベルを SQL Server 2000 (80) に設定してください。

初期のテーブルスペースサイズは、データベースにどの程度のデータ量を保存するかによって変更したり、量を増減したりできます。また、自動拡大ファイルのチェックボックスをマークすることによって、これらの値は必要に応じて自動的に増加します。サイズに関するガイドラインについては、23 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。



Primavera Systems は、Microsoft SQL Server Management Studio を使ってこれらのステップを行うことを推奨します。

ユーザとテーブルの作成

- 1 PMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
 - 2 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、**sspm_create_users.sql** スクリプトを実行します。
-



sspm_create_users.sql スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、およびPUBUSER というユーザ名が作成されます。その他の管理、プライベート、およびパブリックユーザ名を作成しており、Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず **admuser**、**privuser**、または **pubuser** をカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、**sspm_tables.sql** スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database にブラウザして、**rundataloader.bat** ファイルをローカルドライブにコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、**rundataloader.bat** ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 3 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:pmdb_ec.zip  
sa/sa@sqlserver:<host>:<port>:<instance>
```

ここで <host> は SQL Server がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、<port> は SQL Server が使用しているポート番号（デフォルトは 1433）、<instance> はデータベース名です（PMDB など）



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に `_empty` を追加します。空のデータには、Project Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 PMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥install¥PM_06_02_00 に進み、`sspm_database_version.sql`、`sspm_ins_aux.sql`、および `sspm_querylib.sql` スクリプトを実行します。
- 3 ¥source¥PM_06_02_00 に進み、`sspm_src.sql` スクリプトを実行します。

コンテンツリポジトリデータの作成

以下のステップで使われるスクリプトは、新規データベース、またはすでに PMDB データが含まれている既存のデータベースで実行できます。新規データベースでコンテンツリポジトリデータを作成したい場合は、61 ページのを参照してください。

PMDB データベースで SA ユーザとしてログオンしている間に、¥install¥JR_01_01_00 に進んで `ssjr_ins.sql` スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、62 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、65 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

ライセンスファイルのアップロードの詳細については、274 ページの「[管理タスクの実行](#)」を参照してください。

PMDB Microsoft SQL Server データベース オブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Project Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がよいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥install¥PM_06_02_00¥drop フォルダで、「ss」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

SSDP_SPS.SQL	ストアードプロシジヤをドロップ
SSDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
SSDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
SSDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
SSDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
SSDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
SSDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、SA ユーザとしてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記の順にスクリプトを実行しなければなりません。

MMDB Microsoft SQL Server データベース構造の作成

Methodology Management を使う予定の場合は、以下のステップすべてを指定された順序で完了する必要があります。

- 1 ローカルドライブに「install」と「source」という名前の2つのフォルダを作成します。これらのフォルダが PMDB 向けにすでに作成されている場合は、既存のフォルダを使用できます。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥install にブラウズします。ローカルドライブのインストールフォルダに MM_06_02_00 フォルダをコピーします。
- 3 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥source にブラウズします。ローカルドライブのソースフォルダに MM_06_02_00 フォルダをコピーします。



Primavera は、Microsoft SQL Server Management Studio を使ってこれらのステップを行うことを推奨します。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SA ユーザとして SQL にログインします。
- 2 ¥install¥MM_06_02_00 に進み、ssmm_init_db.sql スクリプトを実行します。



ssmm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、MMDB という名前のデータベース（データファイルは 300 MB 以上、ログファイルは 150 MB 以上）を手動で作成できます。ファイルグループの mmdb_dat1、mmdb_lob1、mmdb_ndx、および各グループのデータベースファイルを作成します。mmdb_dat1 を既定のファイルグループにします。ユーザの構成によって、これらのファイルグループを物理的に別々のドライブに設定することも考慮してください。



手動で MMDB を作成する場合は、必ず互換性レベルを SQL Server 2000 (80) に設定してください。

初期のテーブルスペースサイズは、データベースにどの程度のデータ量を保存するかによって変更したり、量を増減したりできます。また、自動拡大ファイルのチェックボックスをマークすることによって、これらの値は必要に応じて自動的に増加します。サイズに関するガイドラインについては、24ページの「[Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 MMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 admuser、privuser、pubuser がすでに作成されていない場合は (PMDB のユーザとテーブルの作成の [パート 2](#))、`¥ install ¥MM_06_02_00` に進んで `ssmm_create_users.sql` スクリプトを実行してください。



`ssmm_create_users.sql` スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、および PUBUSER というユーザ名が作成されます。その他の管理、プライベート、およびパブリックユーザ名を作成しており、Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず `admuser`、`privuser`、または `pubuser` をカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 `¥ install ¥MM_06_02_00` に進み、`ssmm_tables.sql` スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから `¥ install ¥database` にブラウザして、`rundataloader.bat` ファイルをローカルドライブにコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、`rundataloader.bat` ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 3 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:mmdb_ec_sample.zip  
sa/sa@sqlserver:<host>:<port>:<instance>
```

ここで `<host>` は SQL がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、`<port>` は SQL が使用しているポート番号 (デフォルトは 1433)、`<instance>` はデータベース名です (MMDB など)



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に `_empty` を追加します。空のデータには、Methodology Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 MMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 `¥install¥MM_06_02_00` に進み、`ssmm_database_version.sql` および `ssmm_ins_aux.sql` スクリプトを実行します。
- 3 `¥source¥MM_06_02_00` に進み、`ssmm_src.sql` スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、62 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、65 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

ライセンスファイルのアップロードの詳細については、274 ページの「[管理タスクの実行](#)」を参照してください。

MMDB Microsoft SQL Server データベース オブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Methodology Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がいいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥install¥MM_06_02_00¥drop フォルダで「ss」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

SSDP_SPS.SQL	ストアードプロシジヤをドロップ
SSDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
SSDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
SSDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
SSDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
SSDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
SSDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、SA ユーザとしてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記の順にスクリプトを実行しなければなりません。

PMDB がある同じ SQL Server データベースにコンテンツデータを追加したい場合は、55 ページの「コンテンツリポジトリデータの作成」を参照してください。

新しい SQL Server データベースでコンテンツリポジトリデータベース構造を作成します。

必要なサイズやパフォーマンスに応じて、既存の PMDB データベースに追加するのではなく、新規 SQL Server データベースにコンテンツリポジトリを設定した方がよいこともあります。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SQL Server データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥install¥JR_01_01_00 に進み、**ssjr_init_db.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、データベースの基本的な構造が作成されます。



ssjr_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でデータとログファイルを使ってデータベースを作成することができます。Primavera では、必要に応じて自動的に拡張するようサイズを設定することをお勧めします。

コンテンツリポジトリデータの作成

- 1 SQL Server データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥install¥JR_01_01_00 に進み、**ssjr_ins.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨の変更（Oracle および Microsoft SQL Server）

Project Management および Methodology Management データベースを手動で作成、設定した後、データベースで基本通貨として米ドル (\$) を使用したくない場合は、基本通貨を変更する必要があります。



プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、367 ページの「Project Management での管理設定と分類の定義」を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。Primavera の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、Primavera のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります（例えば丸め誤差）。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

通貨選択のレビュー

基本通貨の変更プロセスには、Primavera が提供したスクリプトの編集と実行が含まれています。既定では米ドルが基本通貨であり、スクリプトで使用される短縮形は USD です。スクリプトで使用する必要な通貨の短縮形を知りたい場合は、まず利用可能な短縮形のリストを確認してください。このためには、Project Management または Methodology Management データベースで以下のクエリを実行します。

```
select curr_type, curr_short_name from currtype;
```

基本通貨の変更

- 1 「common」という名前のローカルドライブで新規フォルダを作成します。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダから ¥install¥database¥scripts¥common にブラウズします。ローカルドライブの共通フォルダに以下のスクリプトのいずれかをコピーします。

Oracle 用 **or_set_currency.sql**

SQL Server 用 **ss_set_currency.sql**

- 3 媒体からスクリプトがコピーされている場合は、スクリプトファイルの読み取り専用の属性を外します。

媒体上のファイルは読み取り専用なので、CD または DVD からファイルをコピーするとこの属性がかかります。

Windows Explorer でファイルを右クリックし、プロパティを選び読み取り専用のチェックボックスを外します。

- 4 編集用にスクリプトを開き、以下を含むラインを見つけます。
v_new_base_currency:= 'USD'
- 5 USD から、選択した通貨の短縮形に置き換えます。
- 6 変更を保存して、修正されたスクリプトを実行します。

データベース管理

本章の内容：

P6 でのバックグラウンド処理とク
リーンアップ

RDBMS スケジューラの設定

Setting テーブル

Setting 値の読み書き

バックグラウンドジョブ実行のト
ラッキング

SYMON (System Monitor)

DAMON (Data Monitor)

Oracle データベース性能の向上

ネイティブデータベース監査

本章を読むと、RDBMS によって供給されるスケジューラの設定方法、Oracle と SQL Primavera データベースの性能を最適化する方法、データベースの編集、削除、追加の監視を行うネイティブデータベース監査機能の設定方法を学ぶことができます。

P6 でのバックグラウンド処理とクリーンアップ

概要

旧バージョン P6 以前は、データベースのクリーンアップ作業は PM (Project Management) クライアントアプリケーションによって起動されていました。クリーンアップ作業によって、これらのタスクは個別セッションからのユーザログインまたはログアウトの際、あるいはツールメニューのオプションから手動で起動されたときに PM クライアントから自動的に起動されていました。

現行バージョン クリーンアップタスクはリソース集約的で時間がかかるため、P6 ではこれらのタスクはデータベースサーバ上で実行する 2 つのバックグラウンドジョブで起動されるようになりました。

- SYMON (System Monitor) は、数秒以内で完了するタスクの実行手順を担います。
- DAMON (Data Monitor) は、完了までに数秒以上かかるプロセスの実行を担います。

これらのジョブの両方とも既定により予め設定されています。既定設定は多くの環境で最適な値ですので、通常これを調整する必要はありません。しかし、特定の環境でより最適化が必要な場合は、この設定を変更しバックグラウンドジョブの動きを調整することができます。

RDBMS スケジューラ バックグラウンドジョブは RDBMS によって供給されるジョブスケジューラで起動されるので、該当 RDBMS のスケジューラが正しく設定されているかどうか確認する必要があります。RDBMS の設定パラメータについては、67 ページの「[RDBMS スケジューラの設定](#)」を参照してください。

RDBMS スケジューラの設定

Oracle

Primavera P6 は DBMS_JOB を使って Oracle のジョブスケジューラを行います。Oracle 10g または 11g を使用する場合は、Oracle パラメータの JOB_QUEUE_PROCESSES が最低 2 に設定されていることを確認してください。システムにその他の DBMS_JOB プロセスが存在している場合は、JOB_QUEUE_PROCESSES を 2 より大きな値に設定します。

SQL Server

SQL Server 2005 ジョブは、ジョブをスケジュールする際に SQL Agent を使用します。SQL Server 2005 を使用する場合は、サーバ上で SQL Server Agent サービスが起動されており、起動タイプが自動となっていることを確認してください。

SQL Server 2005 Express

Microsoft は SQL Server 2005 Express でジョブスケジューラを提供していないので、Primavera は SQL Server 2005 Express 上で P6 バックグラウンドジョブを実行するエージェントを作成しました。この Windows サービス、Primavera Background Agent (サービス名: PrmBackAgent) は、SQL Server 2005 Express とともに P6 のスタンドアロンインストールを使用すると自動的にインストールされます。



PrmBackAgent サービスは、必要なときに P6 インストールの際に自動的にインストールされます。P6 のスタンドアロン版インストール後に SQL Server 2005 Express をインストールした場合以外は、通常手動でのインストールや起動は必要ありません。

手動で PrmBackAgent for SQL Server 2005 Express をインストールするサービスは Primavera インストールによって自動的にインストールされますが、必要に応じて手動でインストールすることもできます。手動でサービスをインストールする場合は、該当のデータベースへの admin アクセス権をもった Windows ユーザでなければなりません。サービスの手動インストールには、以下の手順に従います。

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダで Data1.cab ファイルから実行できる prmbackgroundagent.exe を取り出します。

- 2 ローカルマシンのディレクトリ（例えば、C:\¥Primavera¥PrmBackAgent）に prmbbackgroundagent.exe ファイルを入れます。
- 3 スタートメニューから [実行] をクリックします。
- 4 ステップ 2 で使用した prmbbackgroundagent.exe ファイルへのパスに換え、サービスをインストールするため、以下のコマンドを実行します。

c: ¥primavera ¥PrmBackAgent ¥prmbbackgroundagent.exe /install

PrmBackAgent の手動登録および起動 サービスを起動する前に、P6 データベースを含むデータベースインスタンス名をレジストリに追加する必要があります。データベースインスタンス名をレジストリに手動で追加するには、以下の手順に従います。

- 1 「BackgroundAgent」という名の新レジストリキーを HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Primavera に追加します。
- 2 「Server」という名の新しいキーに、ローカル SQL Server Express のインスタンス名に一致する新たなストリング値（例えば、<ローカルコンピュータ名>\sqlexpress）を追加します。
- 3 これが完了したら、コントロールパネルのサービスを使って、エージェントを起動します。エージェントは、各データベースの Primavera スキーマインスタンスをチェックして、適切なジョブを実行します。

Setting テーブル

Settings テーブルの概要

Settings テーブルには、バックグラウンド処理の動きを設定する値ペアが含まれます。

Setting 名 Setting 名は、2つのコンポーネントによって構成されます。ネームスペースと **setting** 名です。ネームスペースコンポーネントは、ドット記法の文字列で、パラメータへの正式なパスを示します。2つ目のコンポーネントは、文字列名を表します。これら2つのコンポーネントが合わさって完全な **setting** 名となります。

値 SETTINGS テーブルの値は、大文字小文字の区別があります。ペアの値部分は、以下の型のいずれかになります。

- 文字列。文字列型は自由なテキスト値です。最も普通な文字列サブタイプは、以下の表に表すような数字部と単位部の組み合わせの時間間隔です。

表 1: 時間間隔サブタイプ

数字部分	単位部分	例	意味
	d	'30d'	30 日間隔
	h	'2h'	2 時間間隔
	m	'10m'	10 分間隔
	s	'30s'	30 秒間隔

- 数字。数字データ型はすべての数字を表します。
- ブール。ブールデータ型は2つの値のどちらかの値をとることができます。真または偽で、ゼロは偽をその他の値は真を示します。
- 日付。

Setting 例 以下に setting 例を示します。

- ネームスペース :database.cleanup.Usession
- Setting 名 :ExpiredSessionTimeout
- 値 :2h (2 時間間隔)

Setting 値の読み書き

Settings は Settings API 手順によって設定することができます。この手順は、レジストリまたは INI file プロシジャコールに似ています。

Settings 値の読み出し 以下の SETTINGS_READ_* 手順を使い、具体的な設定の現在値を特定します。

```
SETTINGS_READ_STRING(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_DATE(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_NUMBER(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_BOOL(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

例として、以下の Oracle および SQL サーバのコードスニペットは、setting 値の読み出しに使われるこれら手順の使い方を示します。

Oracle の例： Oracle で KeepInterval setting 値を取り出すには、以下のコードを使います。

```
SQL> variable vset varchar2(255)
```

```
SQL> exec settings_read_string(:vset,'database.cleanup.Usession',  
'ExpiredSessionTimeout');
```

システムは以下の応答をします。
PL/SQL procedure successfully completed.

```
SQL> print vset
```

SQL Server の例： SQL で KeepInterval setting 値を取り出すには、以下のコードを使います。

```
declare @vset varchar(255)
```

```
exec settings_read_string @vset  
OUTPUT,'database.cleanup.Usession','ExpiredSessionTimeout'
```

```
print @vset
```

Setting 値の書き込み Use the `SETTINGS_WRITE_STRING` procedure to set the value of a specific setting:

```
SETTINGS_WRITE_STRING(new value,namespace,settings_name);
```

Oracle と SQL サーバデータベースの以下のコードスニペットは、この手順を使って `ExpiredSessionTimeout` setting 値を 12 時間に設定する方法を示します。

Oracle の例： Oracle データベースで `ExpiredSessionTimeout` setting を 12 時間に設定するには、以下の手順に従います。

- 1 ユーザ名として `privuser` を使い、`SQL *Plus` にログインします。
- 2 以下のステートメントを実行します。

```
SQL > exec SETTINGS_WRITE_STRING  
( '12h', database.cleanup.Usession, 'ExpiredSessionTimeout');
```

SQL Server の例： SQL サーバデータベースで `ExpiredSessionTimeout` setting 値を 12 時間に設定するには、以下の手順を使います。

- 1 クエリアナライザ/SSMS を開き、`privuser` として接続します。
- 2 PMDB データベースを選択し、以下のステートメントを実行します（例として 12 時間を使います）。

```
exec SETTINGS_WRITE_STRING  
'12h','database.cleanup.Usession','ExpiredSessionTimeout'  
'ExpiredSessionTimeout'
```

バックグラウンドジョブ実行のトラッキング

バックグラウンドジョブの実行は、ハイレベルステータス設定の監視または BGPLOG テーブルを点検することでトラッキングすることができます。

ハイレベルステータス設定の監視 ジョブの実行ごとに、`setting_name = 'HeartBeatTime.'` の `SETTINGS` テーブルが更新されます。ジョブは実行中に複数回この値を更新することがあります。この時間と現在の日付の最大差を監視することで、ジョブが素早く実行されていることを確認できます。`HeartBeatTime` の設定については、以下のハイレベルステータス設定テーブルを参照してください。

表2: ハイレベルステータス設定

バックグラウンドジョブの SYMON が最後に実行された日付と時刻。	
ネームスペース	database.background.Symon
Setting 名	HeartBeatTime
既定の設定	該当なし
バックグラウンドジョブの DAMON が最後に実行された日付と時刻	
ネームスペース	database.background.Damon
Setting 名	HeartBeatTime
既定の設定	該当なし

BGPLOG テーブルの点検 バックグラウンドジョブの実行は、BGPLOG テーブルを点検することでもトラッキングすることができます。BGPLOG テーブルにはバックグラウンド処理からの詳細エントリが保持されています。例えば、情報エントリ、経過時間、エラー情報などです。このテーブルの内容についての詳細は、BGPLOG テーブルの説明を参照してください。

表3: BGPLOG テーブルの説明

カラム	説明	値
Log_time	バックグラウンド処理でログエントリが行われた時刻	Datetime
Source	ログエントリを生成するプログラム	「system_monitor」, 「data_monitor」
タイプ	メッセージタイプ	情報、経過時間、エラー
説明	バックグラウンド処理からのメッセージ	可変のメッセージに括弧内の数字が処理済みの行数を示します。例えば、「Complete BGPLOG (40)」というメッセージは 40 行が処理されたことを示します。

SYMON (System Monitor)

SYMON は、シンプルな Primavera タスクを比較的速いスケジュールで実行させるものです。既定では、ジョブは毎分実行されるように設定されています。このジョブに割り当てるタスクは毎回の実行に数秒以上かからないものとします。このプロシジャでは、既定の 1 分間隔は変更してはいけません。

SYMON で実行されるプロシジャ

現在のところ、USESSION_CLEANUP_EXPIRED プロシジャが SYMON で実行される唯一のプロシジャです。このプロシジャは、失効セッション設定に基づき `last_active_time` を更新しなかった USESSION レコードを論理的に削除します。失効の USESSION レコードを論理的に削除することで、利用可能なライセンス数を最大化できます。内在のデータをクリーンアップしない（物理的に行を削除）ので、タスクは早く完了します。

失効セッションのクリーンアップは、SETTINGS テーブル内の値によって制御されます。既定では、失効セッションのクリーンアップは 2 時間ごとに行われますが、SETTING テーブルにはこの設定値がありません。SETTINGS_WRITE_STRING (<value>, <namespace>, <setting>) ストアドプロシジャを使って、既定のクリーンアップ値を変更します。

例えば、"2d" との値を設定すると、2 日より前の失効セッションだけを削除します。



Primavera は、失効セッションのクリーンアップは、少なくとも最長ジョブの実行期間より少なくとも 1 時間長く設定することを推奨します。例えば、最長のジョブがサマライザジョブだとして、通常 12 時間かかるとします。SETTINGS テーブルの値は少なくとも 13 にすべきです。

USESSION_CLEANUP_EXPIRED Settings については、以下のテーブルを参照してください。

表 4: USESSION_CLEANUP_EXPIRED Settings

Setting の説明 : 通常のセッションのタイムアウト期間	
ネームスペース	database.cleanup.Usession
Setting 名	ExpiredSessionTimeout
既定の設定	2h
タイプ	間隔
Setting の説明 : アプリケーションで実行する機能に基づく長時間実行中セッションのタイムアウト期間 (すなわち、スケジューリング、レベリング、要約など)。	
ネームスペース	database.cleanup.Usession
Setting 名	ExpiredLongSessionTimeout
既定の設定	12h
タイプ	間隔

DAMON (Data Monitor)

2 番目のデータベースジョブは、DAMON データモニタージョブです。DAMON ジョブは、バックグラウンド処理のほとんどの実行を占め、比較的長時間の実行となる可能性の高いアプリケーションに必要なバックグラウンドクリーンアップ処理を実行する役目を担っています。

DAMON により実行されるプロシジャ

DAMON によって実行されるプロシジャは以下のタスクを実行します。

- バックグラウンドログを含む BGPLOG テーブルのクリーンアップ。
- REFRDEL テーブルのクリーンアップ。
- プロジェクトセキュリティのための PRMQUEUE エントリ処理。
- PRMQUEUE テーブルのクリーンアップ。
- 残りの USESSION レコードの物理的クリーンアップ。
- 論理的に削除されたレコードのクリーンアップ。
- PRMAUDIT テーブルのクリーンアップ。
- USESSION 監査テーブル (USESSAUD) のクリーンアップ。
- リリース固有データのクリーンアップ実行。

さらに、DAMON プロセスの機能は、ユーザ定義プロシジャの `USER_DEFINED_BACKGROUND` を使用して動的に拡張することができます。

DAMON プロシジャの設定

BGPLOG_CLEANUP このプロシジャは、BGPLOG テーブルを
妥当なサイズに保持します。既定のクリーンアップ間隔は5日
間で、テーブルサイズは約 54,000 レコードとなります。

BGPLOG_CLEANUP プロシジャ関連の設定については、以下の
テーブルを参照してください。

表 5: BGPLOG_CLEANUP Settings

Setting の説明 : BGPLOG テーブルに保存する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.BackGroundProcessLog
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔

REFRDEL_CLEANUP このプロシジャは `KeepInterval` setting の値に基づき、REFRDEL テーブルから物理的にレコードを削除します。既定の設定では、最新の 5 日間 REFRDEL レコードを保管します。作業負荷を減らすため、処理レコード数は `MaxRowsToDelete` Setting を限度とします。これは既定では、10,000 行に設定されています。プロシジャは、各パスで `DeletePercentage` の設定で定義された行のパーセンテージを削除しようと試みます。`DeletePercentage` の既定値は 10 パーセントです。`DeleteAllThreshold` は、実際は行の最小削除数で、既定では 1,000 に設定されています。希望によって、クリーンアップは `DeleteAll` 設定を真 (1) に設定することで、削除可能なすべての行を削除できます。

REFRDEL_CLEANUP プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 6: REFRDEL_CLEANUP Settings

Setting の説明 : REFRDEL テーブルに保管する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : 各パスで、削除可能な REFRDEL レコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブール

表 6: *REFRDEL_CLEANUP Settings*

Setting の説明 : すべてのレコードをクリーンアップするか決めます。全レコード数がこの数より少なければ、すべてのレコードはクリーンアップされます。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	DeleteAllThreshold
既定の設定	1,000
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除するレコードのパーセンテージ。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	DeletePercentage
既定の設定	10 (%)
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

OBSPROJ_PROCESS_QUEUE このプロシジヤは、更新を PRMQUEUE テーブルにつなげることで、OBSPROJ 更新の処理を延期するために使用されます。

OBSPROJ_PROCESS_QUEUE プロシジヤ関連の設定については、以下のテーブルを参照してください。

表 7: OBSPROJ_PROCESS_QUEUE Settings

Setting の説明 : 各実行において処理する最大のプロジェクトレベルキューレコード。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxProjectUpdates
既定の設定	1000
タイプ	数字
Setting の説明 : 各実行において処理する最大の EPS レベルキューレコード。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxEpsUpdate
既定の設定	25
タイプ	数字
Setting の説明 : エラーとマークするまでの失敗エン트리再処理回数。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxRetries
既定の設定	50
タイプ	数字

CLEANUP_PRMQQUEUE このプロシジヤは KeepInterval setting 値に基づき、物理的にレコードを PRMQQUEUE テーブルから削除します。その他の設定は、REFRDEL_CLEANUP と同様です。

REFRDEL_CLEANUP プロシジヤ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 8: CLEANUP_PRMQQUEUE Settings

Setting の説明 : PRMQQUEUE テーブルに保管する最古のレコード。既定は 5 日間です。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : プロシジヤが各パスで、削除可能な PRMQQUEUE レコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブール
Setting の説明 : すべてのレコードをクリーンアップするか決めます。全レコード数がこの数より少なければ、すべてのレコードはクリーンアップされます。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeleteAllThreshold
既定の設定	1,000
タイプ	数字

表 8: *CLEANUP_PRMQUEUE Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除するレコードのパーセンテージ。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeletePercentage
既定の設定	10(%)
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

USESSION_CLEAR_LOGICAL_DELETES このプロシジャは、すべての論理的に削除された USESSION レコードを物理的に消去します。このプロシジャ関連の設定はありません。すべての論理的に削除された USESSION が削除されます。

CLEANUP_LOGICAL_DELETES このプロシジャは KeepInterval 設定値に基づき、論理的に削除された行を消去します。データベース中のレコードは、DELETE_SESSION_ID カラムに Null でない値を設定することで、削除済みとマーク（論理的削除）することができます。既定で、5 日間以前に削除されたレコードはこのプロシジャで物理的に消去されます。



CLEANUP_LOGICAL_DELETES プロシジャは、DELETE_SESSION_ID カラムが負の値に設定されたレコードは物理的に消去しません。

CLEANUP_LOGICAL_DELETES プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 9: CLEANUP_LOGICAL_DELETES Settings

Setting の説明 : テーブルに保存する最古の論理的に削除されたレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : プロシジャが各パスで、削除可能な論理的に削除されたレコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブール

表9: *CLEANUP_LOGICAL_DELETES Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

PRMAUDIT_CLEANUP 監査機能が有効に設定されていれば、このプロシジャは KeepInterval 設定値に基づきテーブルから物理的にレコードを削除します。

PRMAUDIT_CLEANU プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 10: PRMAUDIT_CLEANUP Settings

Setting の説明 : プロシジャが PRMAUDIT レコードのクリーンアップを試行すべき。	
ネームスペース	database.cleanup.auditing
Setting 名	Enabled
既定の設定	1 (真)
タイプ	ブール
Setting の説明 : PRMAUDIT に保存する最古の監査レコード。	
ネームスペース	database.cleanup.auditing
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	30d
タイプ	間隔

CLEANUP_USESSAUD このプロシジヤは、KeepInterval に基づき、USESSAUD テーブルから物理的にレコードを削除します。その他の設定は、REFRDEL_CLEANUP プロシジヤと同様です。

CLEANUP_USESSAUD プロシジヤ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 11: CLEANUP_USESSAUD Settings

Setting の説明 : USESSAUD テーブルに保管する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.Uessaud
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : 各パスで、削除可能な REFRDEL レコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.Uessaud
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブール
Setting の説明 : すべてのレコードをクリーンアップするか決めます。全レコード数がこの数より少なければ、すべてのレコードはクリーンアップされます。	
ネームスペース	database.cleanup.Uessaud
Setting 名	DeleteAllThreshold
既定の設定	1,000
タイプ	数字

表 11: *CLEANUP_USESSAUD Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除するレコードのパーセンテージ。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	DeletePercentage
既定の設定	10 (%)
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

USER_DEFINED_BACKGROUND このプロシジャは、DAMON によって実行されるオプションのカスタマープロシジャです。このプロシジャ関連の設定はありません。

CLEANUP_OLD_DATA このプロシジャは P6 では空です。将来、リリース関連のデータクリーンアップ実行に使用される予定です。

Oracle データベース性能の向上

Oracle データベース設定には、Primavera データベースの性能を向上するいくつかの変更事項があります。

データベース設定を、29 ページの「データベースの自動インストール」で説明したように、データベース設定ウィザードを使って自動インストールした場合、インストールの最後に `RUN_AS_SYS.SQL` と `GATHER_STATS.SQL` スクリプトを実行するよう自動的に指示が表示されま
す。41 ページの「手動データベース構成」で説明したように、データベースを手動で作成した場合は、下記に説明するようにデータベースの作成が済んだらスクリプトを実行するべきです。

V_\$TRANSACTION テーブルへのアクセス権の付与：

V_\$TRANSACTION テーブルは、データが変更された最初のログイン時刻を保存します。これはデータのリフレッシュ時の性能を高めま
す。なぜならばこのログイン時刻以前のデータにはアクセスしないから
です。ユーザは、V_\$TRANSACTION テーブルを表示するためにアクセスが
必要です。これがなければ、最初のログイン時刻を表示できずアクセ
スが冗長になり、パフォーマンスが鈍化します。

このテーブルに対するアクセス権を付与するには、SYS として Oracle に接続
します。CD 1 の `¥install¥database¥scripts¥common` フォルダにある
`RUN_AS_SYS.SQL` スクリプトを実行します。または、以下の付与ステートメント
を実行します。

```
grant select on v_$transaction to admuser;
```

コストベースの最適化のために統計データを収集します。

Oracle 10g およびその後の版数では、コストベースの最適化のみがサポ
ートされていますが、これはクエリに最適なアクセスパスを決定するの
に正確な統計に依存します。データベース性能を向上するオプティマイ
ザのために適切な統計を収集するには、P6 の媒体またはダウンロード
に含まれている `¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥common` フォル
ダ内の `GATHER_STATS.SQL` スクリプトを実行します。

ネイティブデータベース監査

ネイティブデータベース監査では、Primavera アプリケーションのユーザが行った編集、追加、削除を記録することができます。ネイティブデータベース監査は、ユーザによるすべての変更がデータベーススキーマのテーブルを対象に実行されるデータ操作言語 (DML) の INSERT、UPDATE、または DELETE ステートメントとなることを利用しています。スキーマのすべてのアプリケーションテーブルにそれぞれ監査トリガがあるので、誰の変更でもいつの変更でも各テーブルに対し実行された変更を記録することができます。データベーススキーマのオーナーが監査トリガを所有します。トリガの実行はバイパスすることはできません。

監査レベルの設定

各テーブルの監査レベルを調整することで、記録される情報量を調節することができます。監査レベルを各テーブルで挿入、更新、削除個別に設定することで、監査のさらにきめ細かい設定を行うことができます。

表 12: 監査レベル

平準化	説明
レベル 0	監査なし
レベル 1	行レベルの監査。カラム詳細なしで操作のみを監査
レベル 2	プロブ以外のカラムレベルの監査カラムレベルのデータ変更の監査、ただしプロブ変更は非対象
レベル 3	全監査カラムレベルのデータ変更の監査 Oracle では、プロブに対するカラムレベルの変更は監査されます。SQL サーバでは、プロブに対するカラムレベルの変更は含まれません。

シンプル構成

シンプルな制御を提供する監査機能には 2 種類の設定プロシジャがあります。

- `auditing_enable(<table_name>, <level>)`
- `auditing_disable(<table_name>)`

これらのプロシジャによって、監査レベルを個別テーブルに設定したり、同じ監査レベルをすべてのテーブルに設定することができます。ただし、シンプル構成プロシジャでは、同じテーブルに対して挿入、更新、削除のそれぞれに別の監視レベルを設定することはできません。

Oracle の例： 監査機能を管理するためにシンプル監査設定プロシジャを使用する方法については、以下の例をガイドとして参照してください。

次のコードスニペットは全テーブルの全監査を行います。

```
exec auditing_enable(null,3);
```

次のコードスニペットはタスクテーブルのレベル 1 監査を行います。

```
exec auditing_enable('TASK',1);
```

次のコードスニペットは PROJWBS の監査を無効にします。

```
exec auditing_disable('PROJWBS');
```

次のコードスニペットは全データベースの監査を完全に無効にします。

```
exec auditing_disable(null);
```

詳細な設定

監査トリガの動きは、以下の監査機能を有効または無効にするよう Settings テーブルの値を変更することで設定することができます。

- 監査機能自身
- 特定のテーブルの監査
- 各テーブルにおける、挿入、更新、または削除操作の監査

監査の有効および無効化 監査機能自身は、`database.audit.Enable setting` を使って有効化または無効化することができます。`settings_write_bool` プロシジャを使って、監査機能全体を有効 / 無効にします。

Oracle の例 : Oracle で監査機能全体を有効にするには、次のコードを使います。

```
exec settings_write_bool(1,'database_audit','Enable');
```

SQL Server の例 : SQL Server で監査機能全体を有効にするには、次のコードを使います。

```
exec settings_write_bool 1,'database_audit','Enable'
```

各個別テーブルの監査設定は、各テーブルの監査ネームスペースのオプション設定で制御します（例えば、`database.audit.TASK`）。オプション設定は、3文字からなる数値の文字列で、各文字位置がそれぞれ挿入、更新、削除の監査レベルを示します。

表 13: テーブル操作ごとの監査レベルオプション設定

	操作			説明
	挿入	更新	削除	
平準化	0	0	0	監査なし
	1	1	1	行レベルの監査。カラム詳細なしで操作のみを監査
	2	2	2	プロブ以外のカラムレベルの監査カラムレベルのデータ変更の監査、ただしプロブ変更は非対象
	3	3	3	全監査カラムレベルのデータ変更の監査 Oracle では、プロブに対するカラムレベルの変更は監査されます。SQL サーバでは、プロブに対するカラムレベルの変更は含まれません。

以下のテーブルにオプション設定の例を示します。

表 14: テーブル操作ごとの監査レベルオプション設定例

ネームスペース	設定	値	説明
<code>database.audit.TASK</code>	Options	330	すべての挿入および更新操作の全監査削除操作は監査なし。
<code>database.audit.PROJWBS</code>		001	削除のみの行レベル監査。
<code>database.audit.TASKRSRC</code>		333	全監査

個別テーブル監査設定は、`settings_write_string` プロシジャを使って変更することができます。

Oracle の例： Oracle で削除操作は無視して、挿入と更新操作の全監査を行うようにテーブルを設定する場合は、次のコードを使います。

```
exec setting_write_string('330','database.audit.TASK','Options');
```

SQL Server の例： SQL Server で削除操作は無視して、挿入と更新操作の全監査を行うようにテーブルを設定する場合は、次のコードを使います。

```
exec setting_write_string '330','database.audit.TASK','Options'
```



監査設定の変更は、必ずしも即時にアプリケーションに反映しません。通常、新しい設定を使い始めるにはプログラムはデータベース接続を閉じて再接続を行う必要があります。

データ監査の理解

監査テーブル 監査レコードは PRMAUDIT テーブルに挿入されます。データベースの各行の変更に対して 1 行のレコードが監査テーブルに挿入されます。

表 15: PRMAUDIT テーブル

カラム	タイプ	説明
audit_date	日付	変更の日付と時刻
table_name	文字列 (30)	テーブル名
pk1, pk2, pk3, pk4	文字列 (255)	監査レコードの主要キー値
oper	文字列 (1)	I= 挿入、U= 更新、D= 削除
prn_user_name	文字列 (32)	Primavera アプリケーションで変更が行われた場合、Primavera のユーザ名
audit_info	文字列 (4000)	4000 文字までのカラム変更 (レベル 2 および 3 のみ)
audit_info_extended	BLOB	プロプ変更および audit_info からのオーバーフロー (レベル 2 および 3 のみ)
logical_delete_flag	文字列 (1)	物理的削除でなく論理的削除フラグ (マーク)
rdbms_user_name*	文字列 (255)	データベースユーザ名 (通常 privuser)
os_user_name*	文字列 (255)	接続セッションのオペレーティングシステムユーザ名
program*	文字列 (255)	データベースに接続のプログラム名
host_name*	文字列 (255)	接続セッションのコンピュータ名
app_name*	文字列 (25)	データベースに接続のアプリケーション名
netaddress*	文字列 (24)	接続セッションの IP または MAC アドレス
* SQL Server と Oracle では値が異なります		



さまざまな監査テーブル値を正しく設定するためには、`V_$SESSION` で管理者ユーザ (`admuser`) には選ばれた特権が付与される必要があります。

セッションの監査

USESSION テーブルのアクティビティは独自のトリガとテーブルで監査されます。アプリケーションユーザがシステムからログアウトした場合は、それらによってセッションレコードは論理的に USESSION テーブルから削除またはマークされます。ログアウトごとに 1 レコードが USESSAUD テーブルに書き込まれます。USESSAUD テーブルのフォーマットは、USESSION テーブルのそれと同等です。この監査は、`usessaud_enable` プロシジャによって有効化され、`usessaud_disable` プロシジャによって無効化されます。

カラムレベルの監査データ

各監査の変更データは `audit_info` and `audit_info_extended` カラムに保存されます。`audit_info column` には、4000 文字を超えない限り全行変更が含まれます。4000 文字を超える変更あるいはプロンプトに対するどんな編集も `audit_info_extended` BLOB カラムに書き込まれます。

2 つの `audit_info` カラムのデータは特定のフォーマットをもちます。データ中の各カラム監査は、先頭に「O」（古いデータ）または「N」（新しいデータ）のいずれかがついており、前の（古い）値か変更後の（新しい）値の監査かを区別します（BLOB カラムの場合は、データの先頭は `BLOBO` または `BLOBN` となります）。この後は小文字によるカラム名が続きます。カラム名の後は、固定 4 文字フィールドで監査値の長さを表します。最後に、実際のデータが監査レコードに入ります。更新については、各変更の古い値と新しい値の両方が入ります。挿入には新しい値のみが、削除には古い値のみが入ります。

以下は、`task_code` を 'A1010' から 'B102' に変更した TASK の変更に対する監査レコードの例です。

```
audit_info =>:Otask_code:5:A1010:Ntask_code:4:B102
```


サーバのインストールおよび設定

内容 :

Timesheets 用の Group Server の調整

P6 Web Access のインストール

分散ジョブサービスの設定

本パートを読んで、ネットワークサーバで Primavera を実行するのに必要なコンポーネントのインストールと設定を行います。

「Timesheets 用の Group Server の調整」では、タイムシートの実装のためにサーバを準備する方法を説明します。これには Web サーバが必要です。

「P6 Web Access のインストール」の章では、P6 Web Access の設定についての手順を述べます。「分散ジョブサービスの設定」の章では、ジョブを複数のサーバに同時に分散するジョブサービスの設定方法の詳細を提供します。

Timesheets 用の Group Server の調整

本章の内容：

[旧バージョンの Group Server のインストール](#)

[Group Server および Timesheets Web サイトのインストール](#)

[LDAP 認証を行う Group Server/ Timesheets の設定方法](#)

[Single Sign On Authentication 用に Group Server/Timesheets を設定](#)

[Group Server の設定方法](#)

[Timesheets のための Java Web Start の設定](#)

[Group Server の複数インスタンスの作成](#)

[Group Server の設定](#)

Timesheets を Primavera 機能の 1 部として実装するためには、Group Server をネットワーク上にインストールする必要があります。Group Server は、Timesheets クライアントモジュールとデータベースサーバの仲介機能を果たします。本章では、Group Server のインストールと設定方法を説明します。

旧バージョンの Group Server のアンインストール

旧バージョンからのアップグレードを行う場合は、既存の Group Server をアンインストールすることを推奨します。設定時に新しい Web サイトが作成されます。

- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[サービス] を選択します。
- 2 [Primavera Group Server] を選択して、[停止] をクリックします。
- 3 「サービス」画面を閉じます。
- 4 [コントロールパネル] 画面で、[プログラムの追加と削除] をダブルクリックします。
- 5 [Primavera Group Server] を選択して、[追加/削除] ボタンをクリックします。アンインストールウィザードの指示に従います。ウィザードによるアンインストールが完了したら、[終了] をクリックします。

Group Server および Timesheets Web サイトのインストール

Group Server と Timesheets ウェブサイトのインストール後、Timesheets の設定に関する詳細については、407 ページの「Timesheets の実装」を参照してください。

Timesheets は、Web ベースのモジュールです。プロジェクトチームのメンバがプロジェクトデータを更新するのに使用します。Timesheets は、Windows 2003 /2008 のサービスである Group Server を経由して Project Management データベースに接続します。

Timesheets のインストールは、2 つの部分で構成されます。Group Server のインストールと設定、および Timesheets Web サイトのインストールです。Group Server は、プロジェクト管理データベースに常時接続されるどの Windows 2003/2008 サーバにもインストールすることができます。Timesheets Web サイトは、Web サーバにインストールしなければなりません。Timesheets Web サイトにインストールされるファイルには、HTML および Java ファイルを始め、アプレットダウンロードファイル、Java JRE インストーラ、Timesheets ヘルプサイトなどがあります。このインストールによって、ユーザは Java Web Start 経由でも Timesheets を起動できるようになります。



タイムシートをレビュー、承認する必要がある場合は、ユーザが Timesheet Approval アプリケーションにアクセスできるよう、133 ページの「P6 Web Access のインストール」の説明に従って P6 Web Access をインストールしなくてはなりません。P6 Web Access をインストールして Timesheets を設定すると、426 ページの「Timesheet Approval へのアクセス設定」に説明されているように Timesheet Approval アプリケーションへのアクセスを設定することができます。

Java Web Start についてのさらなる情報については、<http://java.sun.com> Web サイトを参照してください。

Java Web Start Java Web Start は、Java Network Launching Protocol (JNLP) テクノロジーにより、セキュアでプラットフォームに依存しない Timesheets の使用が可能になります。Java Web Start は複数のバージョンの JRE が存在している場合でも、常にクライアント側の最新バージョンの Timesheets を起動します。



Java Web Start をサポートするオペレーティングシステム :

Windows XP
Windows Vista
Ubuntu Linux

Java Web Start をサポートする Web サーバ :

Microsoft IIS
Apache

Java Web Start をサポートするクライアント要件 :

JRE
Internet Explorer または Firefox



Oracle 接続では、 Group Server マシンに Oracle Provider for OLE DB がインストールされている必要があります。Oracle クライアントのフルインストール (管理者設定) では、必要な Oracle Provider for OLE DB ファイルがインストールされます。Unicode の Oracle データベースに接続する場合、Group Server を実行するマシンに、互換性のある Oracle OLE DB ドライバをインストールしなければなりません。Oracle 10g の場合、サポートされる OLE DB driver の最低バージョンは、10.2.0.2 です。Oracle 11g の場合、サポートされる OLE DB ドライバの最低バージョンは、11.1.0.6.20 です。

SQL Server 接続の場合、 Group Server マシンには、SQL Server クライアントがインストールされている必要があります。SQL Server は、Primavera のプロジェクト管理モジュールをインストールすると自動的にインストールされます。



言語サポートについて Group Server が Unicode Oracle データベースに接続され、国際言語サポートが必要な場合、HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOME 下の以下のレジストリを確認してください。NLS_LANG キーの添え字が現在の言語と一致していなければなりません (例えば、ロシア語サポートの場合は、CL8MSWIN1251)。さらなる情報については、該当の Oracle NLS ドキュメントを参照してください。

Group Server が SQL Server データベースに接続されている場合は、Group Server マシンのオペレーティングシステムの既定場所が接続先のデータベースインスタンスのコードページと一致している必要があります。

これらのステップを実行する前には、すでに中央 Project Management データベースが設定されていることが必要です。

Group Server および Timesheets ファイルの設定

- 1 媒体からインストールする場合は、最初の画面が現れてインストールのオプションが表示されます。

この画面が現れない場合、またはネットワークからインストールする場合は、P6 の媒体あるいはダウンロードに含まれている `¥Client_Applications¥install` フォルダから **GS_Inst.EXE** を実行します。[ステップ 3](#) に進んでください。

- 2 メインの **Primavera** 画面で、**P6 Timesheets** をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 **Enter Product Key** 画面で、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品キーを入力します。
- 4 **Welcome!** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。
- 5 **Choose Components** ダイアログボックスで、インストールしたいコンポーネントを選択します。同じサーバに、**Group Server** と **Timesheets Web** サイトをインストールするには、両方のチェックボックスをマークします。**Group Server** だけをインストールする場合は、**ステップ 10** は省略します。
- 6 **Choose Language** ダイアログボックスで、**Timesheets** のインストールに表示の言語のどれかを選択します。
- 7 **Choose Web Destination Location** ダイアログボックスで、Web ファイルのインストール先フォルダを指定するため **[Browse]** をクリックします。

ファイルは、`\GroupServer\en` という名前のフォルダにインストールされます。**Group Server** のインストールをしない場合は、**ステップ 12** は省略します。



Sun ONE Web Server にインストールする場合は、**Primavera Timesheets JRE 自動インストール機能をサポートするため config¥mime.types ファイルを編集する必要があります。** 110 ページの「[Sun ONE Web Server への JRE 自動インストールのサポート](#)」を参照してください。

8 Help URLs ダイアログボックスで、Timesheets ヘルプ Web サイトの場所を指定します。



Web サイトの値は、のちに手動で、適切なファイルを編集することにより変更することができます。Java Web Start 版の Timesheets では、¥GroupServer¥App フォルダの timesheet.jnlp ファイルを編集します。アプレット版では、¥GroupServer¥en フォルダの erps8x6.html を編集します。

9 Choose Database Type ダイアログボックスで、データベースタイプを選択します。データベースは、すでにインストールされ、設定が済んでいなければなりません。

10 Enter Database Parameters ダイアログボックスで、データベース接続パラメータを指定します。

- データベースユーザ名は、特権ユーザ（例えば、privuser）でなければなりません。
- Oracle と接続する場合は、Oracle DSN が予め定義されている必要があります。**Oracle サービス名**（例えば、PMDB）を入力します。これは、Oracle の Net Configuration Assistant を使って前もって定義されているかもしれませんが、そうでない場合は、¥Oracle_Home¥Network¥Admin にある TNSNAMES.ORA ファイルを参照します。
- Microsoft SQL Server と接続する場合は、**SQL Server Database マシン名**を入力します。これは、Microsoft SQL Server データベースが実行されるコンピュータ名です。**Database Schema Name** フィールドで、Microsoft SQL Server データベースが作成されたときに指定された名前、例えば PMDB、を入力します。

11 Choose User Authentication Method ダイアログボックスで、Group Server 認証方法を選択します。



LDAP 認証を選択すると、この手順の終了後にさらなる設定が必要です。詳細については、112 ページの「[LDAP 認証を行う Group Server/Timesheets の設定方法](#)」を参照してください。

- 12 ステップ 12 で、**Native** または **LDAP** を選択した場合は、**通信プロトコルの選択** ダイアログボックスが表示されます。Group Server に接続するプロトコルを選択します。

クライアントと Group Server の直接通信のため、**Socket** を選択します。このオプションを選択する場合は、ステップ 14 に進みます。

HTTP(s) プロトコルを使ってセキュアな通信によるタイムシートデータの伝送をするには、**HTTP(s)** を選択します。このオプションを選択する場合は、この項は終了して、107 ページの「**Group Server をインストールして HTTP(s) を使用**」に進みます。

ステップ 12 で、**シングルサインオン (SSO) 認証** を選択した場合は、**Choose Communication Protocol** ダイアログボックスは**表示されません**。その代わりに、インストールウィザードは、HTTP プロトコルと想定し、[User Authentication Mode] ダイアログボックス (ステップ 12) を変更し、ユーザが Group Server サブレットのインストール先フォルダを選択できるようにします。

サブレットの保存先 (既定値または新規保存先) を指定後、107 ページの「**Group Server をインストールして HTTP(s) を使用**」の **ステップ 3 (108 ページ)** に説明されているインストール手順に進みます。

- 13 ステップ 13 で、**Socket** を選んだ場合は、**Server Information** ダイアログボックスが表示されます。

- **Server Name** フィールドに、Group Server が実行されるコンピュータ名を入力します。
- **Port Number** フィールドで、9002 をポート番号 (既定) として設定するか、1024 より大きなポート番号を指定します。

この番号は、IP アドレスと共に使用され、Timesheets クライアントと Group Server 間の Windows ソケット (Winsock) 接続を作成します。ネットワークでファイアウォールを使用している場合は、このポート番号をインターネットでの使用に解放しておきます。



9002 以外のポート番号を使う場合は、本章で後述するように `web.xml` file を編集する必要があります (111 ページ)。

Java Web Start URL の値は、のちに手動で、適切なファイルを編集することにより変更することができます。122 ページの「Java Web Start URL の変更」を参照してください。

14 Timesheet アプリケーションの起動のため URL を入力ダイアログボックスで、Java Web Start の URL を入力します。

ユーザが Java Web Start 経由で Timesheets を起動することができるよう、Java Web Start Web サーバの URL を入力する必要があります。サーバの IP アドレスを入力し、必要に応じてフォルダを変更します。



Apache URL には、大文字小文字の区別があります。一致しない場合は、サーバでの処理の代わりに、JNLP ファイルの XML の内容がブラウザに表示されます。

15 Start Installation ダイアログボックスで、Next をクリックし、インストールを開始します。

16 Test Database Connection String ダイアログボックスで、Test をクリックし、接続をテストします。

エラーの場合は、データベース接続文字列を変更して、[Test] をクリックし、接続を再試験します。データベース接続文字列フィールドでは、以下の形式を使います。

「プロバイダが見つかりません」のエラーを受信した場合は、Oracle の Web サイトから Oracle Provider for OLE DB をダウンロードしてインストールします。

Oracle に接続する場合は、
 Provider=OraOLEDB.Oracle;Data Source=Oracle Service Name,

ここで、Oracle Service Name は、TNSNAMES.ORA ファイルで見つけることができます。

Microsoft SQL Server に接続する場合は、
 Provider=SQLOLEDB; Data Source=MachineName; Initial Catalog=DatabaseSchemaName

17 Next をクリックして、先に進みます。

18 Start Window service ダイアログボックスで、チェックボックスをマークして Primavera Group Server のサービスをすぐに開始します。すぐに開始しない場合は、Microsoft の管理ツールのサービスでいつでも開始することができます (Group Server は Windows サービスの 1 つとして実行されます)。

19 Next をクリックして、先に進みます。

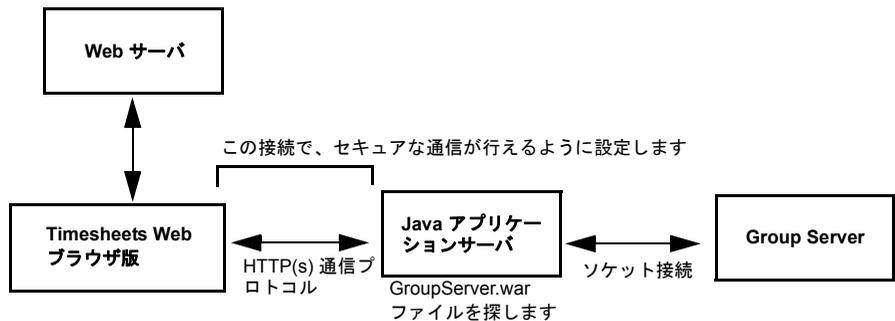
20 Finish をクリックし、設定ウィザードを終了します。

設定は、これで完了です。「Group Server Administrator」を実行し、116 ページの「[Group Server の設定方法](#)」の説明に従って、詳細設定の確認または変更を行うことができます。

Group Server をインストールして HTTP(s) を使用

Group Server をインストールすると、タイムシートデータのセキュアな通信のために、HTTPS プロトコルを使用することができます。GroupServer.war ファイルには、J2EE 準拠サーブレットが含まれており、HTTP プロトコルでクライアント通信を行うことができます。JBoss のような Java アプリケーションサーバに WAR ファイルがインストールされている必要があります。

以下の図は、コンポーネント間の関係を示します。この図で、Group Server と Java アプリケーションサーバは、同一あるいは別々のマシンにインストールすることができます。



Group Server と Java アプリケーションサーバが同一のマシンにインストールされない場合は、web.xml ファイルを編集する必要があります。web.xml ファイルは、GroupServer.war ファイルの中に含まれています。さらなる詳細については、[111 ページ](#)を参照してください。

HTTP プロトコルを使用するには、以下のステップに従います。

- 1 Group Server をインストールするには、本章 (103 ページ から始まる Group Server と Timesheets ファイルの設定) で前述したように、ステップ 1 から 12 を実施します。
- 2 **Choose Communication Protocol** ダイアログボックスで、HTTP(s) を選択します。 **Browse** をクリックし、使用する GroupServer.war ファイルのインストール先フォルダを指定します。

既定では、このファイルは inetpub¥wwwroot フォルダにインストールされます。但し、Java アプリケーションサーバが Web アプリケーションを保存している場所を指定してください。



GroupServer.war ファイルを手動で操作する必要がある可能性があります。JBoss では、groupserver.war ファイルを ¥jboss-4.0.5.GA ¥server ¥primaveraweb ¥deploy フォルダにコピーして、アプリケーションサーバを起動します。WebLogic で、groupserver.war ファイルを ¥bea ¥user_projects ¥domains ¥primaveraweb_domain ¥autodeploy フォルダにコピーして、アプリケーションサーバを起動します。WebSphere では、「管理者コンソール」を使用してコンテキストルート「GroupServer」を groupserver.war ファイルに割り当てます。さらなる情報については、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

- 3 **Server Information** ダイアログボックスで、Group Server サブレットの URL を指定します。これは、使用するアプリケーションサーバとその設定により異なります。

HTTP プロトコルを使用する通常の伝送では、http 要求を処理するのに、http と Java アプリケーションサーバに設定したポート番号を入力します。以下のフォーマットを使用します。

http://<Java アプリケーションサーバ>: ポート番号 /GroupServer/GroupServer

例えば、既定の JBoss インストールでは、

http://<jboss_server_name>:8080/GroupServer/GroupServer という URL を使います。

URL は、設定後に手動で、`\GroupServer\Language` フォルダの `erps8x6.html` ファイルを編集して変更することができます。さらなる詳細については、110 ページの「`erps8x6.html` または `timesheets.jnlp` ファイルの編集」を参照してください。

HTTPS プロトコルを使用するセキュアな通信では、https 要求を処理するのに、https と Java アプリケーションサーバに設定したポート番号を入力します。

JBoss の既定のセキュアポートは、8443 です。その場合、例えばセキュア URL は以下のようになります。

```
https://<jboss_server_name>:8443/groupserver/groupserver
```



Java アプリケーションサーバによっては、(例えば、IBM WebSphere) 大文字小文字の区別があります。

- 4 **Enter URL to launch Timesheet application** ダイアログボックスで、Timesheets Java Web Start 版を使用することを予定している場合は、Timesheets を起動する URL を入力します。
- 5 **Next** をクリックしてインストールを開始します。
- 6 **Test Database Connection String** ダイアログボックスで、**Test** をクリックし、接続をテストします。

エラーの場合は、データベース接続文字列を変更して、[Test] をクリックし、接続を再試験します。データベース接続文字列フィールドでは、以下の形式を使います。

Oracle に ODBC を通して接続する場合は、
Provider=OraOLEDB.Oracle;Data Source=Oracle Service Name,

ここで、Oracle Service Name は、TNSNAMES.ORA ファイルで見つけることができます。

Microsoft SQL Server に接続する場合は、
Provider=SQLOLEDB; Data Source=MachineName; Initial Catalog=DatabaseSchemaName
- 7 **Next** をクリックして、先に進みます。
- 8 **Start Window service** ダイアログボックスで、チェックボックスをマークして Primavera Group Server のサービスをすぐに開始します。すぐに開始しない場合は、Microsoft の管理ツールのサービスでいつでも開始することができます (Group Server は Windows サービスの 1 つとして実行されます)。
- 9 [Next] をクリックして、先に進みます。
- 10 **Finish** をクリックし、設定ウィザードを終了します。

erps8x6.html または timesheets.jnlp ファイルの編集 インストール時に、Group Server のサーブレットに指定された URL を変更するには、erps8x6.html ファイルまたは timesheets.jnlp を以下のように変更します。erps8X6.html ファイルは、Group Server がインストールされた場所の言語フォルダにあります。例えば、英語の場所は、GroupServer/en/erps8X6.html です。

```
// *** 設定可能な変数
// *** システム管理者によって変更可能。
var ServerName="";
var ServerPortNum=9002;
var DebugLevel=0;
var Protocol='http';// これは、HTTP または HTTPS では 'http' とし、あるいは // 従来のソケットのインストールでは、'socket' とします。

var url='http://my_server_name:8080/groupserver/groupserver';
// あるいは、HTTPS を使う場合は、
"var url='https://my_server_name:8443/groupserver/groupserver';" .
```

erps8X6.html ファイルでは、
var url 全エントリは1行に
しなければなりません。

Sun ONE Web Server への JRE 自動インストールのサポート
JRE 自動インストール機能を正しくサポートするには、以下に示すように config¥mime. タイプのファイルを変更して exe リファレンスを削除します。

編集前:

```
type=magnus-internal/cgi    exts=cgi,exe,bat
```

編集後:

```
type=magnus-internal/cgi    exts=cgi,bat
```

web.xml ファイルの編集 以下のいずれかの条件が適用される場合は、GroupServer.war が展開されたあとに web.xml ファイルを編集する必要があります。

- Primavera Group Server と Java アプリケーションサーバが同一マシンにインストールされていない
- Primavera Group Server が、ポート番号 9002 を使用していない

web.xml ファイルは ¥groupserver¥WEB-INF フォルダにあります。

サーバとポート番号を Group Server を指すように設定します。これは、初期設定の際に設定された TPGS サービスの場所です。

web.xml ファイルで、

```
<init-param>
  <param-name>server</param-name>
  <param-value>TPGS_server_name</param-value>
</init-param>
<init-param>
  <param-name>port</param-name>
  <param-value>9002</param-value>
</init-param>
```

LDAP 認証を行う Group Server/Timesheets の設定方法

LDAP 認証を使用して、Group Server/Timesheets を実行するには、

- Group Server のインストール時に、LDAP モードを選択
- Timesheets Web サイトファイル、erps8X6.html を変更



1 つはソケット用、もう 1 つは HTTP(s) 用と、2 つの Timesheets Web サイトを作成し、HTTP(s) とソケット通信プロトコルの双方を設定することもできます。これは社内に、社内網を使う Timesheets ユーザとファイアウォール外からのユーザがいる場合に有効です。両方の Web サイトとも同じ Group Server を使用するように設定することができます。



P6 は LDAP 参照の使用をサポートします。

erps8X6.html ファイルの変更

erps8X6.html ファイルは、Group Server がインストールされた場所の言語フォルダにあります。例えば、英語の場所は、GroupServer/en/erps8X6.html です。

Group Server がソケット接続を使って Timesheets と通信するようにインストールされている場合は、erps8X6.html ファイルを変更して、次のように設定します。



ServerName と Server Port Number は、ユーザ固有のインストールに合わせます。

```
var ServerName='yourGroupServer ServerName' (Timesheets がソケット経由で Group Server と通信するときのみ使用)
var ServerPortNum=9002 (Timesheets がソケット経由で Group Server と通信するときのみ使用)
var DebugLevel=0;
var Protocol='socket';
var url= ""; (オプション - Timesheets がサブレット経由で Group Server と通信するときのみ使用)
var appType='atP3e'
var authMode='LDAP';
```

Group Server が HTTP(s) プロトコルを使って Timesheets と通信するようにインストールされている場合は、erps8X6.html ファイルを変更して、次のように設定します。



URL は、ユーザのインストール固有の値です。

var ServerName='' (未使用 - これは、Group Server サーブレットの web.xml に指定されます)

var ServerPortNum=9002 (未使用 - これは、Group Server サーブレットの web.xml に指定されます)

var DebugLevel=0;

var Protocol='http';

erps8X6.html ファイルでは、
var url 全エントリは 1 行に
しなければなりません。

var url='http://yourServerName:780/groupserver/groupserver';

var appType='atP3e'

var authMode='LDAP';

Single Sign On Authentication 用に Group Server/ Timesheets を設定

Single Sign On authentication を使用して、Group Server/Timesheets を実行するには、

- Group Server のインストール時に、Single Sign On モードを選択します
- ユーザが使用する Web サーバプラグインをプロキシリクエストに設定
- Timesheets Web サイトファイル、erps8X6.html を変更



Timesheets Single Sign On 認証では、Group Server が HTTP プロトコルを使ってインストールされていることが必要です。

Single Sign On 用に Web サーバプラグインを設定

Web サーバプラグインをプロキシ Group Server リクエストに設定する手順は、ユーザのアプリケーションサーバと Web サーバの組み合わせによります。具体的な手順については、アプリケーションサーバ・Web サーバのドキュメントを参照してください。

erps8X6.html ファイルの変更

インストールのあと、Group Server erps8x6.html ファイルを変更し、Group Server のサーブレット用の URL が完全修飾された Web サーバ名と SiteMinder 保護ポートを含むようにします。erps8X6.html ファイルは、Group Server がインストールされた場所の各言語フォルダにあります。例えば、英語の場所は、GroupServer/en/erps8X6.html です。

erps8X6.html ファイルを以下に示す設定に変更します。



Group Server サーブレット URL のフォーマットは、Group Server サーブレットをホストするために使用するユーザのサーバに依存します。以下に示す設定は、例に過ぎません。

var ServerName='' (未使用 – これは、GroupServer サブレットの web.xml に指定されます)

var ServerPortNum=9002 (未使用 – これは、GroupServer サブレットの web.xml に指定されます)

var Protocol='http';

erps8X6.html ファイルでは、
var url 全エントリは 1 行に
しなければなりません。

var url='http://<yourfullyqualifieddomainname>:<yourSiteMinder
protectedportnumber>/groupserver/groupserver';

var appType='atP3e'

var authMode='WebSSO';

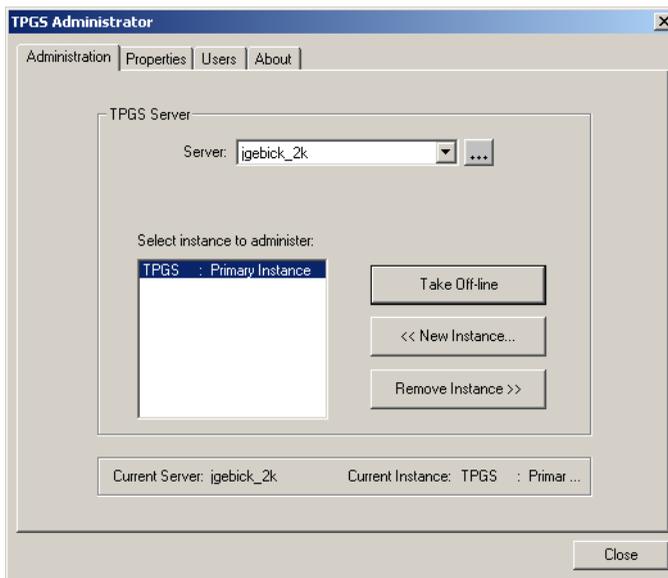
erps8X6.html ファイルの URL ラインは、SiteMinder によって保護される Web サーバ/ポート番号を識別します。タイムシートのアプレットは、この URL によって GroupServer サブレットと通信します。Single Sign On では、この URL の全リクエストは Web サーバ上で実行されている SiteMinder エージェントを通します。Web サーバでは、バーチャルディレクトリで受信したリクエストを Group Server サブレットに転送するようバーチャルディレクトリを設定する必要があります。

Group Server の設定方法

システム管理者として、「Group Server Administrator」を使用してさらに管理情報の表示と変更を行うことができます。

「Group Server Administrator」を起動します。 サーバコンピュータの Windows コントロールパネルから、[TPGS Administrator] を選択します。

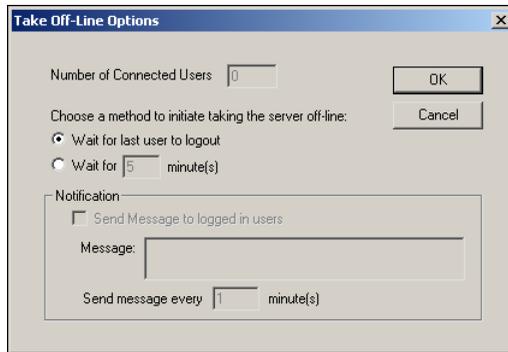
サーバの管理 [Administration] タブは、管理対象の現在の Group Server を表示します。複数の Group Server をインストールした場合は、管理するサーバを選択することができます。「Server」フィールドの [Browse] ボタンをクリックして、追加したいサーバにナビゲートします。セキュリティの理由により、Primavera System はすべての Group Server を同一ドメインに置か、少なくとも相互に信用関係を確立することを推奨します。



システム保守のため、サーバをオフラインにする必要がある場合は、[Take Off-Line] をクリックします。



サーバがオフライン中は、ログイン要求は受け付けられません。

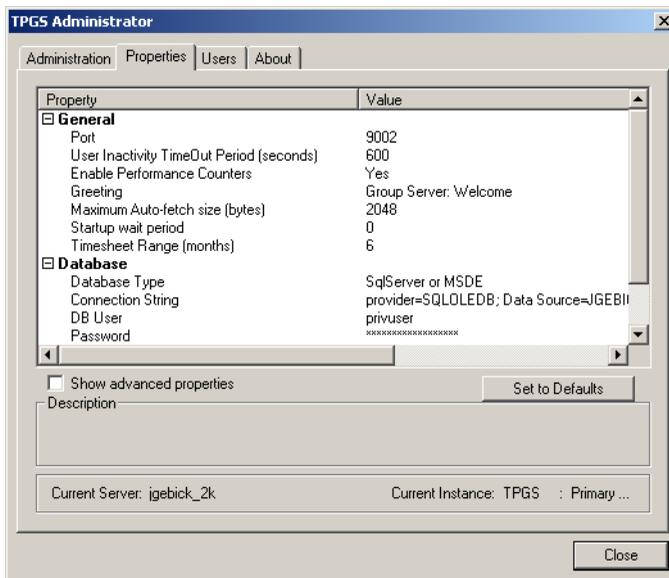


「Take Off-Line Options」のダイアログボックスには、サーバに接続しているユーザ数を表示します。Timesheets から最後のユーザがいなくなるまで待ってサーバを自動的にオフラインにするか、サーバをオフラインにするまでの時間（分）を指定するかを選択します。いずれのオプションを選んだとしても、ユーザは新規に Timesheets を起動することはできません。

メッセージ本文に @TIME とタイプすれば、サーバがオフラインになるまでの残り時間を通知します。

[Send Message to Logged in Users] チェックボックスをチェックして、メッセージをタイプします。何回メッセージを送信するかを指定することができます。Group Server がオフラインになると、すべてのクライアント接続は終了され、将来の接続依頼は受け付けません。

Group Server の設定確認 [Properties] タブは、Group Server の設定情報を提供します。通常は、ユーザがこの設定を変更する必要はありません。各設定プロパティをクリックすると、ダイアログボックスの下部に簡単な説明を表示することができます。設定を変更するには、プロパティ設定をクリックして、値の列に新しい値をタイプします。



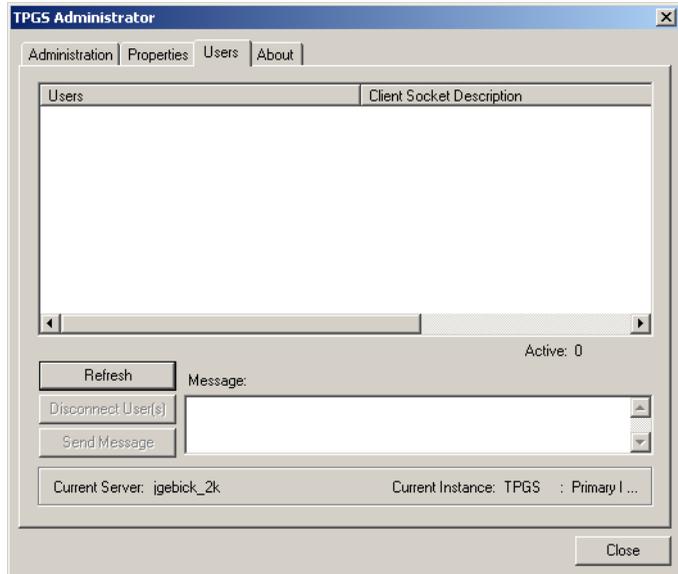
各プロパティとそのシステムレジストリの場所に関する説明は、127 ページの「**Group Server の設定**」を参照してください。

[Show Advanced Properties] チェックボックスをマークすると、さらにユーザが変更できる設定を表示できます。これらのプロパティは安易に変更してはいけません。設定を誤ると、サーバやオペレーティングシステムの正常な動作を妨げます。



ユーザはまず、TPGS Administrator を閉じ、次に Group Server (TPGS) のサービスを停止・再開し、変更を有効にします。

[Users] タブにはアクティブなユーザ名が表示されます。接続中のユーザー一覧を表示し直すには、[Refresh] をクリックします。現在選択中のユーザを直ちに切断するには、[Disconnect User(s)] をクリックします。1人あるいは複数のユーザにメッセージを送ることもできます。例えば、切断前に通知を送ります。Users 領域で各ユーザ名を選択し、画面下部のメッセージフィールドにメッセージをタイプします。[Send Message] をクリックします。



Timesheets のための Java Web Start の設定

Java Web Start は、Java Network Launching Protocol (JNLP) テクノロジーにより、セキュアでプラットフォームに依存しない Timesheets の導入を可能にします。Java Web Start は複数のバージョンの JRE が存在している場合でも、常にクライアント側の最新バージョンの Timesheets を起動します。

Java Web Start を設定したあと、Timesheets を実行する方法を学ぶには、423 ページの「Timesheets の Web ブラウザ版と Java Web Start 版の実行」を参照してください。

Java Web Start の動作概要 Java Web Start は、リンクを HTML ページでユーザに提示することで、サーバに保存されている Java アプリケーションを起動することができます。ユーザが、HTML ページ内のリンクをクリックすると、Java Web Start はユーザが正しい JRE バージョンをインストールしているか、最新版の Timesheets がキャッシュされているかを検出します。そうでなければ、Java Web Start は自動的に必要なファイルをダウンロードし、ユーザのマシンで Timesheets を起動します。これにより、ユーザは手動でアップグレードしなくても JRE の必要なバージョンを使用して、最新版の Timesheets を実行することができます。JRE の他のバージョンは一時的に見えなくしますが、上書きされませんので Java Web Start はそれらの JRE バージョンが必要なほかのアプリケーションの実行を確保します。

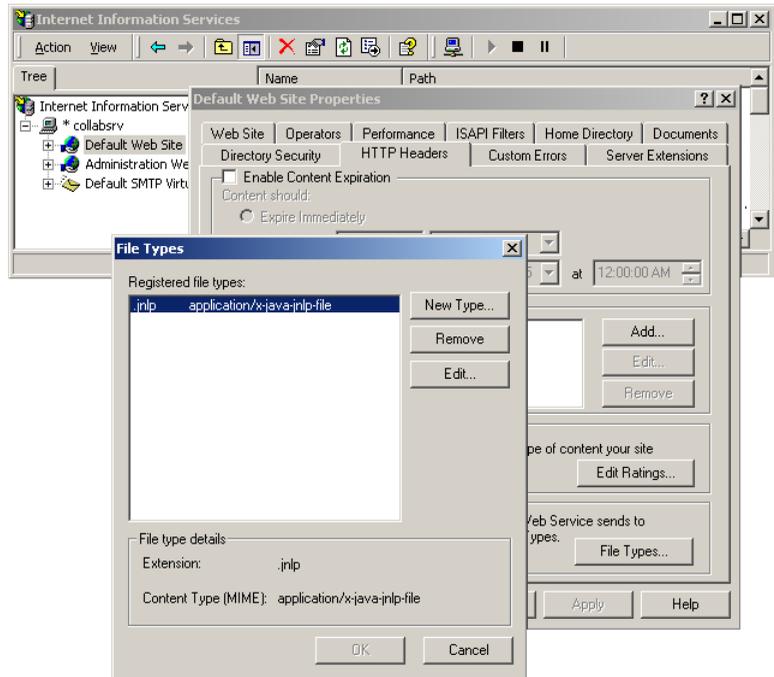


Java Web Start により、複数の Timesheets を同時に起動することができます。以前は、Timesheets は同時に複数のインスタンスの実行を許容していませんでした。

Microsoft IIS 6.0 Web サーバを JNLP ファイルのサポートを行うように設定

JNLP ファイルには、正しい MIME 型が設定されていることを確認します。IIS サービスから、既定の Web サイトを選択します。右クリックして、[プロパティ]を選択し、[HTTP ヘッダ]タブをクリックします。画面下の [ファイルの種類]をクリックし、必要に応じ次の新タイプを追加します。

```
.jnlp application/x-java-jnlp-file
```



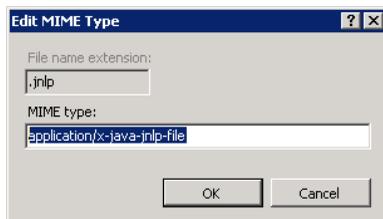
Microsoft IIS 7.0 Web サーバを JNLP ファイルのサポートを行うように設定

JNLP ファイルには、正しい MIME 型が設定されていることを確認します。これを実行するには、Internet Information Service Manager を開きます。以下のフォルダを展開します。

<local server> ¥ Sites ¥ Default Web ¥ GroupServer



MIME タイプアイコンをダブルクリックして Action エリアで [Add] をクリックします。ファイル名の拡張子として **.jnlp**、MIME タイプとして **application/x-java-jnlp-file** を入力します。



[OK] をクリックします。Web サーバを再起動します。

Apache Web サーバを JNLP ファイルのサポートを行うように設定 Web サーバが JNLP ファイルを確実に認識するよう、必要に応じて httpd.conf ファイルに以下の 2 行を追加します。

```
AddType application/x-java-jnlp-file .jnlp
```

```
AddType application/x-java-archive-diff .jardiff
```



Apache URL には、大文字小文字の区別があることを忘れないでください。一致しない場合は、サーバでの処理の代わりに、JNLP ファイルの XML の内容がブラウザに表示されません。

Java Web Start URL の変更 元の Java Web Start URL を変更した場合（例えば、Java Web Start Web サイトの移動のため）、以下の 3 つのファイルの URL を手動で編集する必要があります。

- Timesheet.jnlp
- Tsres.jnlp
- Download.html

必要な JRE バージョンの変更 Timesheet.jnlp ファイルは、Timesheets の起動時に、必要な JRE for Java Web Start を定義します。Timesheets の Java Web Start 版を起動したときに、必要な JRE バージョンが見つからない場合は、ダウンロードしてインストールされます。

トラブルシューティング

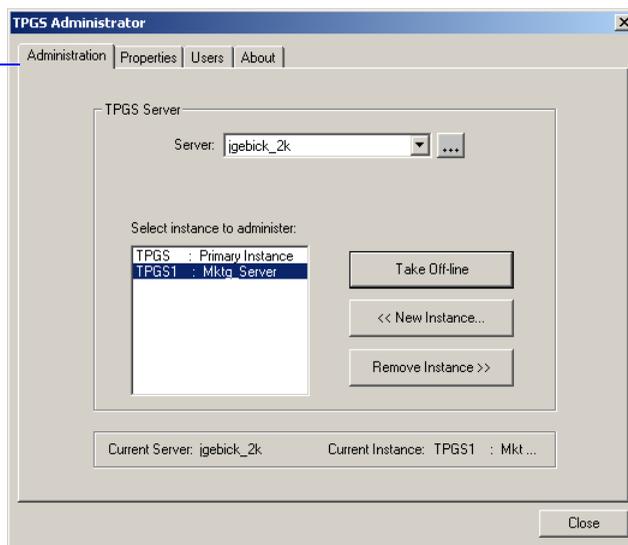
- Windows クライアントにとっては区別ありませんが、Apache URL には、大文字小文字の区別があることを忘れないでください。
- 非 Windows クライアントでは、サーバの IP アドレスはホストファイルのサーバ名に対応しなければなりません。

- Windows クライアントでは、サーバ名の URL が認識（JNLP ファイルの内容が見える）できない場合は、URL のサーバ IP アドレスを使うか、ホストファイルにこのサーバ項目を追加します。

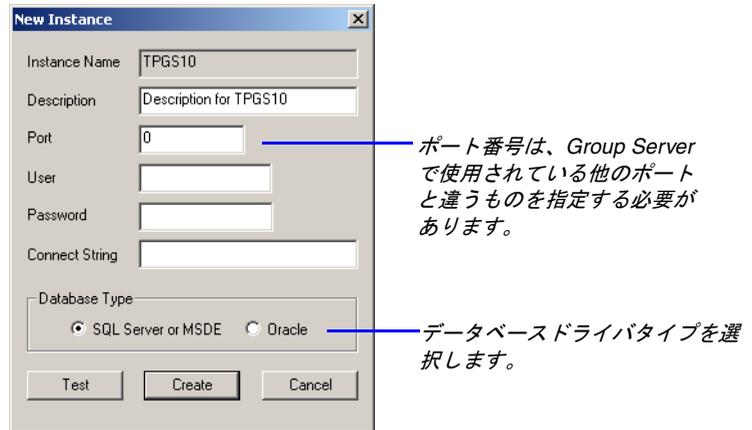
Group Server の複数インスタンスの作成

ユーザは、TPGS Administrator に複数の Group Server インスタンスを作成することができます。これにより、同じサーバマシンで別々のデータベースにアクセスすることができます。各新規インスタンスに一意のデータベースがなければなりません。TPGS Administrator を起動すると、プライマリインスタンスが起動します。新規インスタンスの起動には、リストから選択します。

インスタンスを選択し、これらのタブを使ってそのインスタンスのプロパティ/ユーザを表示します。



インスタンスの新規作成 [New Instance] ボタンをクリックし、そのプロパティを指定します。インスタンス名、説明、一意のポート番号、特権のある管理者用データベースユーザ名とパスワードをタイプします。



接続文字列の指定には、以下の形式を使います。

Oracle 用

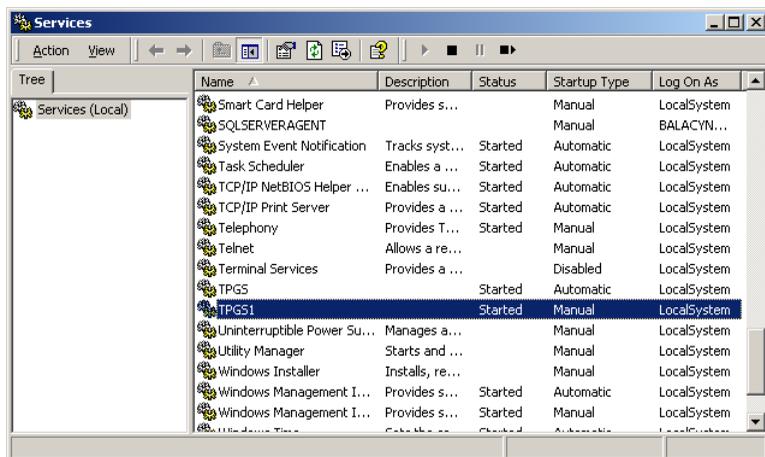
Provider=OraOLEDB.Oracle;Data Source=Oracle Service Name

Microsoft SQL Server 用

Provider=SQLOLEDB; Data Source=MachineName; Initial
Catalog=DatabaseSchemaName

Oracle サーバ名は、Oracle の Net Configuration Assistant を使って定義するか、`¥Oracle_Home¥Network¥Admin` にある `TNSNAMES.ORA` ファイルを参照することができます。

新規インスタンスが作成されると、それは [サービス] ダイアログボックスに表示されます。[サービス] ダイアログボックスからインスタンスの開始・停止ができます。新規インスタンスのスタートアッププロパティは、手動開始（リポート後に自動的に開始されない）となっています。



新規インスタンスに Web サイトを設定 各新インスタンスに新しい Timesheets Web サイトを作成しなければなりません。新 Group Server インスタンスが TPGS Administrator で設定されたら、Timesheets Web サイトをコピークライアントが新インスタンスに接続できるようにしなければなりません。例えば、GroupServer Web サイトフォルダを新しい名前の GroupServer2 にコピーします。

GroupServer2 フォルダで、erps8x6.html ファイルを編集し、ポート番号を更新します。例えば、既定で元の Group Server インスタンスはポート番号 9002 を保持しています。erps8x6.html ファイルで ServerPortNum 変数を新規作成したインスタンスのポート番号 (9003) と一致するように、以下に示すように変更します。

```
// *** 設定可能な変数
// *** システム管理者によって変更可能。
var ServerName='servername'
var ServerPortNum=9003
```

クライアントは、GroupServer フォルダの index.html ファイルにアクセスすることで、元のインスタンスにアクセスすることができます。クライアントは、GroupServer2 フォルダの index.html ファイルにアクセスすることで、新たに作成されたインスタンスにアクセスすることができます。

Group Server の設定

構成設定は、TPGS Administrator の Properties タブを使って表示したり変更することができます。[Show Advanced Properties] チェックボックスをマークし、すべてのプロパティを表示します。これらの設定は、Group Server が実行されるコンピュータの、HKEY \backslash System \backslash CurrentControlSet \backslash Services \backslash TPGS \backslash Configuration key レジストリに保存されます。



構成設定の変更にレジストリを使うのは、経験豊富な管理者に限る必要があります。



下表で、重負荷時（1000 ユーザ以上）の推奨設定を値の列に示します。

[General key の値]

名称	値	説明
Allow Negative Actuals	Yes/No	計算時に負の値を許容。No \bar{n} 不許容。Yes - 許容。
Cycle Seed	Yes/No	パスワード暗号化に使用するシードをサイクルするかどうかを制御。シードはランダムな一意の数値で、一意に暗号化されたパスワードのために使用されます。ロードテストの際は、ログイン要求に一定の暗号化パスワード値が必要なので、No と設定します。
Edit Subordinate Resources Timesheets	Yes/No	上司による部下リソースの Timesheets の編集を許容。
Edit Work Product and Document Details	Yes/No	タイムシートクライアントにおける作業結果とドキュメント詳細ダイアログボックスの公開ドキュメントパスの編集を許容
Enable Performance Counters		TPGS サーバアクティビティに基づき、性能監視カウンタを設定 Windows の性能監視ユーティリティを使って TPGS 性能カウンタを表示します。
Enable Primary Resource to Edit Step's UDF Values Counters	Yes/No	Y の場合は、ステップの UDF 値を編集する OBS アクセス権を無効にします。編集権はプライマリリソースに渡されます。 N の場合は、ユーザにプロジェクトの OBS アクセス権があればステップを編集できます。既定値は N です。
Greeting		TPGS サーバに接続するユーザに最初に表示されるメッセージを設定します。

[General key の値]

名称	値	説明
LDAP Connect Timeout	15	LDAP データストレージへの接続に、Group Server が許容する最大時間これは、Group Server が LDAP 認証と設定されている場合のみ使用されます。
Log Transactions		イベントログの追跡のため、トランザクションを記録します。
Maximum Auto-Fetch Size (bytes)	2048	狭帯域モードで自動送信されるプロブ (ノートやメモ) の最大サイズ (バイト)
Maximum Request Size		TPGS サーバによって受け付けられる最大クライアント TCPIP 要求
Port	9002	Group Server が Java クライアントと通信するためにしようする TCP/IP ポート番号を設定します。このポートは、インターネットに開かれていなければなりません。開かれていない場合は、インターネットに開かれている別のポートを指定するようこの設定を変更することができます。既定値は 9002 です。
Startup Wait Period (秒)	0	TPGS サービスが開始するまでの待機時間関連サービス (例えば、データベースサーバサービスなど) が先に開始する時間が必要な場合は、この設定を使います。
User Inactivity TimeOut Period	600	接続がログオフされるまでに、アイドル状態を許容される時間 (秒) 既定値は 600 です。

[データベースキーの値]

名称	値	説明
ADO Connection TimeOut (秒)	15	接続が確立されるまで待機する時間。このタイムアウトで接続の試みは放棄されエラーメッセージが発生します。
ADO Command TimeOut (秒)	30	コマンドが実行されるまで待機する時間。このタイムアウトでコマンドの試みは放棄されエラーメッセージが発生します。
ADO RecordSet Cache Size	5	ある時点でメモリに保存されるレコード数
ADO Stalled Check Period (秒)	30	停滞状態の接続をチェックする頻度
Apply Session Setting	Yes/No	セッション設定プロパティで指定された SQL コマンドを実行するかどうかを判断します。既定値は No です。

[データベースキーの値]

名称	値	説明
Auto Translate	Yes/No	SQL Server Unicode データベース用の SQL Server ODBC ドライバの自動トランスレートプロパティ
Base Connections	25 (既定 =10)	TPGS サーバがスタートアップ時に作成する既定データベース接続数
Cache Refresh Interval (秒)	60	TPGS サーバがデータベースからのキャッシュデータを更新する頻度
Connect Retry Period (ミリ秒)	30000	接続リトライまでの待機時間
Connection String		データベース接続に使用される、ADO 接続文字列 例えば、Oracle では、「provider=OraOLEDB.Oracle; Data Source = pmdb.world」の接続文字列を使用します。 例えば、SQL Server または SQL Server Express では、「provider=SQLOLEDB; Data Source=PMDBSRV\ENGLISH;Initial Catalog=TPPM60」の接続文字列を使用します。ここで「PMDBSRV」は、データベースマシン名です。
データベースタイプ		TPGS サーバがデータに使用するデータベースタイプ ('Oracle' または 'Microsoft SQL Server/SQL Express')。
DB Connectivity Check	Yes/No	データベースの接続を定期的にテストするかどうか、データベースの切断・再開とともに再接続を行うか、を決めます。
DB User	privuser	データベースの接続に使われる特権のあるユーザ名既定値は privuser です。
License Inactivity TimeOut (秒)	900	休止中のライセンスクライアント接続が異常と判断されるまでの時間。
Log Invalid Login Attempts	Yes/No	無効ログイン試行をイベントログに記録します。既定値は No です。
Log SQL	0	イベントログで追跡できるように、SQL トレーシングフラグを設定します。
Max Search Result Records	100	検索結果の最大レコード数
パスワード		データベースに接続するために暗号化された DB ユーザアカウントのパスワード
Session Setting		Group Server によって作成された、すべてのデータベース接続に対して実行される SQL コマンド
Sync Period (秒)	60	データベースの sync テーブル更新間隔。

[データベースキーの値]

名称	値	説明
Synchronize ADO Connection Creation	Yes/No	データベースに接続中は、他の要求をブロックします。既定値は Yes です。
Temporary Connections	150	TPGS サーバが実行できるデータベース接続数この設定は、Group Server のデータベースへの接続数を決定します。HRESULT = 8004b002 のエラーが発生した場合は、Group Server が負荷を処理できず、すべての要求を処理するにはより多くのデータベース接続が必要であることを示します。Group Server に 1000 人以上のタイムシートユーザがいる場合は、この値は 400 とするようお勧めします。これによりさらに多くの接続が許容され、TPGS はより大きな負荷を処理することができます。Oracle Server マシンにも同様に考慮します。
Verbose Logging	Yes/No	エラーメッセージをイベントログに送出する際に、詳細ロギングを有効にするか、決定します。

[Threading key の値]

名称	値	説明
Caching Threads	1	キャッシュトランザクション処理を扱うスレッド数これは、最少キャッシュスレッド数です。Group Server のキャッシュスレッドは、キャッシュされるデータのデータ処理を担います。Group Server は、必要に応じて「CPU 当たりの最大一時スレッド数」のキャッシュスレッドを作成します。
Coalescing Jobs Busy Threshold	50	Coalescing プロセッサがビジーと認められる合体ジョブ数
Coalescing Threads	1	Coalesced トランザクション処理を扱うスレッド数これは、最少 Coalescing スレッド数です。Group Server の Coalescing スレッドは、合体可能なジョブの処理を担います。Coalescing は、類似の要求（例えば、Timesheets を開いたり更新する）をまとめて単一の SQL 要求に合体し、いくつものクライアント要求を 1 つの DB アクセスで満足させるもので、大幅な性能の向上を果たします。Group Server は、必要に応じて「CPU 当たりの最大一時スレッド数」の coalescing スレッドを作成します。
Coalescing Timeout (ミリ秒)	750	合体要求が処理される頻度
Connection Check Period (秒)	60	データベース接続がチェックされる頻度。

[Threading key の値]

名称	値	説明
Connection TimeOut Period (秒)	300	つながれたデータベース接続が有効とみなされる休止時間。
License Manager Interval (秒)	120	ライセンスマネージャが同時ユーザをチェックする頻度。
Message Threads Per CPU	3 (既定 =1)	クライアントからのソケット接続を扱うスレッド数。これは、クライアントからのソケット経由のメッセージを受け付け、Group Server で処理するジョブを作成する最少スレッド数です。Group Server は、必要に応じて「CPU 当たりの最大一時スレッド数」のメッセージスレッドを作成します。
Maximum Coalescing Size	20	処理前に待ち行列につなげることができる、最大合体トランザクション数。
Maximum Temporary Threads Per CPU (SMP)	15	各プロセッサで開始することができる最大スレッド数。 $\text{MaxTempThreads} = \text{CPU} > 1 ? \text{MaxTempThreads} + (\text{MaxTempThreads} * 4 / \text{CPU})$
Thread Inactivity TimeOut Period (seconds)	180	一時スレッドが遮断されるまでの休止時間。
Transaction Threads	1	トランザクション処理を扱うスレッド数。これは、Group Server でトランザクションを作成する最少スレッド数です。作成されるトランザクションは、キャッシュ、Coalescing、または更新です。Group Server は、必要に応じて「CPU 当たりの最大一時スレッド数」のトランザクションスレッドを作成します。
Update Threads	1	更新トランザクション処理を扱うスレッド数。これは、最少更新スレッド数です。Group Server の更新スレッドは、データ更新を担います。Group Server は、必要に応じて「CPU 当たりの最大一時スレッド数」の更新スレッドを作成します。
Watch Dog Period (seconds)	120	TPGS サーバが接続問題をチェックする頻度。

[Security keys]

キー	値	説明
Accept Filters	Filter #1, *.*.*.*	許容の、TCP/IP クライアントのアドレス
Reject Filters	Filter #1, *.*.*.255	不許容の、TCP/IP クライアントのアドレス

[インストールキーの値]

名称	値	説明
HTML Path	c:\inetpub\wwwroot\GroupServer	HTML ファイルへのパス。

P6 Web Access のインストール

本章の内容：

- P6 Web Access へのアップグレード
- 旧バージョンのアンインストール
- P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール
- P6 Web Access のインストールプロセス
- コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール
- P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開
- P6 Web Access 用サーバの起動
- P6 Web Access のプレコンパイル
- P6 Web Access 用サーバの停止
- クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス
- クライアントブラウザの構成設定
- データベース構成設定の変更
- 管理アプリケーションの使用方法
- P6 Web Access の設定の確認と変更
- P6 Web Access の設定
- アプリケーションサーバプラグインの実装

本章では、P6 Web Access（旧称「Primavera Web Application」または「myPrimavera」）を Windows、Solaris、AIX、Red Hat Enterprise Linux、または HP-UX サーバにインストールする方法を説明します。さらに、本章では、P6 Web Access の管理アプリケーションを使って、P6 Web Access のアプリケーションサーバ設定の確認、変更、追加、削除を行う方法を説明します。

P6 Web Access へのアップグレード

P6 Web Access にアップグレードする前に、Project Management および／または Methodology Management データベースをバージョン 6.2 にアップグレードして、Project Management および／または Methodology Management のクライアントモジュールをインストールする必要があります。



さらなる詳細については、253 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」および229 ページの「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」を参照してください。



現在 Interwoven/iManage を使用しており P6 Web Access バージョン 6.2 にアップグレードする場合、プロジェクトワークフロー、プロジェクトプロセス、ニュース、ディスカッション、イベント、ドキュメントデータは利用できなくなります。このデータが必要な場合は、Primavera カスタマーサポートに連絡してデータの移行や移行ツールに関する情報を入手してください。Primavera では、バージョン 6.2 にアップグレードする前にデータを移行するようお勧めします。

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている `¥Documentation¥<language>¥Tested Configurations` フォルダを参照してください。

myPrimavera 5.0、Primavera の Web アプリケーション 6.0、または P6 Web Access 6.1 から P6 Web Access 6.2 にアップグレードする方法

- myPrimavera、Primavera の Web アプリケーション、または P6 Web Access の現在のバージョンをアンインストールします。135 ページの「[旧バージョンのアンインストール](#)」を参照してください。
- サポートされているアプリケーションサーバの 1 つをインストールします。137 ページの「[P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール](#)」を参照してください。
サポートされているアプリケーションサーバの一覧は、18 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。
- P6 Web Access 6.2 をインストールします。139 ページの「[P6 Web Access のインストールプロセス](#)」を参照してください。
- アプリケーションサーバを設定、展開します。144 ページの「[P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開](#)」を参照してください。

旧バージョンのアンインストール

バージョン 6.2 にアップグレードする前に P6 Web Access の以前のバージョンをすべてアンインストールする必要があります。

myPrimavera 5.0 または Primavera Web Application 6.0 を Tomcat 5.5 Server からアンインストールする方法

Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール]を選びます。

Solaris では、Tomcat インストールディレクトリの下での webapps ディレクトリに移動し、uninstalltc.sh スクリプトを実行します。



Tomcat は、P6 Web Access のバージョン 6.1 以上ではサポートされていません。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 を JBoss Server からアンインストールする方法

「myprimavera」フォルダの名前を変更するか、JBoss がインストールされた場所（例えば、c:\jboss-4.0.4.GA\server）から「myprimavera」フォルダを削除します。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 を WebLogic Server からアンインストールする方法

- 1 Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール]を選びます。
Solaris では、<BEA_HOME>\user_projects\<domain> ディレクトリの uninstall.sh スクリプトを実行します。
- 2 ドメインの新規作成。°PWebLogic 10 (sp1) の設定 °± 手順で新規ドメインを使用します。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 を WebSphere Server からアンインストールする方法

- 1 Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール]を選びます。
Solaris では、WebSphere インストールディレクトリ下の installableApps/<アプリケーション>ディレクトリに移動し、uninstallws.sh スクリプトを実行します。

- 2 WebSphere Application コンソールを起動して、現在の「myPrimavera」インストールを削除します。



新しいインストールに、同じ <webaccesshome> ディレクトリを使用する場合は、既存の myprimavera.war ファイルは <webaccesshome> ディレクトリから削除して、新しい primaveraweb.war ファイルとの競合を避ける必要があります。

P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール

P6 Web Access は、Red Hat JBoss、BEA WebLogic、IBM WebSphere にも対応します。サポートされているアプリケーションサーバの完全な一覧（バージョン数を含む）については、18 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている [¥Documentation ¥<language> ¥Tested Configurations](#) フォルダを参照してください。



Windows では、アプリケーションサーバは、短い名前のフォルダにインストールすることをお勧めします。

Microsoft Windows に JBoss をインストール

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 5.0 update 15 (1.5.0_15) が必要です。Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBoss 4.0.5 GA のインストール

- 1 jboss-4.0.5.GA.zip をローカルドライブにコピーします。
- 2 <JBoss INSTALL LOCATION> でフォルダを解凍します（例えば、C:¥jboss-4.0.5.GA）。
- 3 <JBoss INSTALL LOCATION>¥server にアクセスします。
- 4 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。次に Ctrl-V を押します。これで「コピー～default」という名前のフォルダが作成されます。
- 5 「コピー～default」というフォルダの名前を「primaveraweb」に変更します。

Red Hat Enterprise Linux に JBoss をインストール

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 5.0 update 15 (1.5.0_15) が必要です。Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBOSS 4.0.5 GA のインストール

- 1 jboss-4.0.5.GA.zip をローカルドライブにコピーします。
- 2 <JBOSS INSTALL LOCATION> でフォルダを解凍します (例えば、/usr/jboss-4.0.5.GA)。
- 3 ファイルを実行できるように、以下のコマンドを実行します。
chmod -R +x *
- 4 <JBOSS INSTALL LOCATION>¥server にアクセスします。
- 5 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。次に Ctrl-V を押します。これで「コピー ~ default」という名前のフォルダが作成されます。
- 6 「コピー ~ default」というフォルダの名前を「primaveraweb」に変更します。

WebLogic のインストール

JDK のインストール

WebLogic の 10 (sp1) バージョンは自動的に、Windows と Red Hat Enterprise Linux 向けには Java 2 JDK version 5.0 update 11 (1.5.0_11)、HP-UX 向けには Java 2 JDK version 5 update 8 (1.5.0_08) をインストールします。P6 Web Access に必要な JDK バージョンがあります。

WebLogic 10 (sp1) のインストール

インストールの手順については、WebLogic のドキュメントを参照してください。

WebSphere のインストール

JDK のインストール

WebSphere のバージョン 6.1 では、IBM JDK が自動的にインストールされます。推奨された修正パックをインストールすると、JDK が自動的に更新されます。これは、P6 Web Access の必須 JDK です。どの修正パックが検証されているかについては『Tested Configurations』ドキュメントを参照してください。

WebSphere 6.1 のインストール

インストール手順については、WebSphere のドキュメントを参照してください。

P6 Web Access のインストールプロセス

Project Management データベースのインストール情報については、27 ページの「[データベースのインストールおよび設定](#)」を参照してください。互換性のため、データベースをアップグレードすることについての情報は、253 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」を参照してください。

P6 Web Access 6.2 にアップグレードする前に、Project Management および／または Methodology Management データベースのバージョン 6.2 をインストールするか、現在のバージョンをアップグレードして、Project Management および／または Methodology Management のクライアントモジュールのバージョン 6.2 をインストールする必要があります。



Project Management モジュールのインストール手順については、229 ページの「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

P6 Web Access インストーラはウィザードを提供し、以下のようなインストールプロセスをガイドします。

- 1 P6 Web Access に使われるアプリケーションサーバの特定
- 2 P6 Web Access と管理アプリケーションファイルのインストール
- 3 P6 Web Access のデータベースの設定と構成



JBoss をアプリケーションサーバとして使用している場合は、P6 Web Access をインストールする前に、Sun Java 2 JDK version 5.0 update 15 (1.5.0_15) をインストールする必要があります。

P6 Web Access のインストール

1 使用している OS に応じて、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Web_Access フォルダから以下のインストーラを起動します。

- Windows プラットフォームでは、「SetupMainWin.exe」をダブルクリックします。
- Unix プラットフォームでは、サポートされている JDK のバージョンがインストールされており、JDK の場所が Unix パスに追加されているものと想定して、ターミナルセッションから以下の適切なコマンドを実行します。

Red Hat Enterprise Linux または Solaris プラットフォームの場合：
`./SetupMainSol.bin`

IBM AIX プラットフォームの場合：
`./setupaix.bin`

HP-UX プラットフォームの場合：
`./setupHP11.bin`



上記の Unix プラットフォームのいずれかでバイナリファイルを実行できなかった場合は、以下のコマンドを使って一般的な Unix JAR インストーラを実行できます：`java -jar setupmain.jar`



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ]をクリックして次ステップへ進みます。

- 2 ようこそ画面で、次へをクリックします。
- 3 ライセンス同意の条件を承諾します。
- 4 **Please specify a Primavera Home folder...** ダイアログボックスで、P6 Web Access の <webaccessshome> フォルダをタイプするかブラウズして選びます (例：`c:\¥p6wahome`)。必要に応じて、**Yes** をクリックしてディレクトリを作成します。



ホームフォルダ名にはスペースは入れないでください。

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている `¥Documentation¥<language>¥Tested Configurations` フォルダを参照してください。



アプリケーション EAR ファイル (`primaveraweb.ear`) が P6 Web Access のホームフォルダにコピーされます。アプリケーションサーバの deployment tool を使用して P6 Web Access EAR ファイルをデプロイしなければなりません。また、サポートされている JDK を使用中のパスで変更できる環境として設定し、Java コマンドにアクセスできるようにしてください。



P6 Web Access は、アプリケーションサーバとデータベースサーバ間の SSL 通信に対応します。SSL 構成の詳細については、適切なデータベースサーバのドキュメントおよび Primavera ナレッジベースを参照してください。

- 5 **P6 Web Access will be installed...** ダイアログボックスで、次へをクリックし、インストールを開始します。
- 6 **Setup and Configuration of the Primavera Database** ダイアログボックスで、データベースタイプ (Oracle または SQL) を選択します。
- 7 **Please enter the following information...** ダイアログボックスで、データベース接続パラメータを指定します。
データベースユーザ名 (例えば、`pubuser`)、パスワード、データベース名、ホストアドレス、ホストポートを入力します。データベース名、ホストアドレス、ホストポートは、ユーザの Oracle または MS SQL Server の設置に固有な情報です。データベースホストポートフィールドには、選択したデータベースタイプの既定ポートが表示されます。このポートを編集します。
公開 Group ID は標準構成では、1 でなければなりません。
- 8 既存の Primavera 構成がある場合は、インストーラは、... を検出しましたダイアログボックスで、それを使用するか新しい構成を作成するか選択します。



同一のデータベースに対して、旧バージョンの P6 Web Access からアップグレードする場合は、新しい構成を作成するオプションを選択してください。これは、新たに追加された構成設定を導入するため必要です。

構成についてのさらなる情報については、166 ページの「[管理アプリケーションの使用方法](#)」を参照してください。

既存の Primavera 構成がない場合は、インストーラは、... を検出しましたダイアログボックスは表示されません。インストールプロセスは自動的に Primavera Configuration という名前の既定構成を作成します。この構成の設定は、P6 Web Access の管理アプリケーションで編集することができます。

さらなる詳細については、165 ページの「データベース構成設定の変更」を参照してください。



インストール後、必要に応じて、Database Configuration Setup ウィザードを使用して、他の構成を選ぶことができます。

- 9 データベースの正しい設定が完了したことを確認するメッセージが表示されたら、**OK** をクリックします。**Finish** をクリックし、設定ウィザードを終了します。

ジョブサービスのインストールについての情報は、237 ページの「ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール」を参照してください。



P6 Web Access のスケジュール計算、実績の適用、集計機能を実行するには、ジョブサービスのインストールが必要です。

コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール

コンテンツリポジトリを使用すると、P6 Web Access でドキュメントを共有したり共同で管理したりできます。ワークフローリポジトリを使用すると、プロジェクトの要求をトラッキングできます。P6 Web Access ユーザが拡張されたドキュメント管理機能とプロジェクト要求機能を利用できるようにするには、コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリをインストールする必要があります。

コンテンツリポジトリのインストール

データベースウィザードを実行して P6 Web Access をインストールすると、自動的にコンテンツリポジトリのインストールが完了します。さらなるインストールは必要ありません。ただし、コンテンツリポジトリに関連した機能を有効にするには、[Database/Instance/Content Repository Administration Application] 設定を入力しなくてはなりません。この設定のさらなる情報については、176 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」のデータベース設定サブセクションを参照してください。

データベースウィザードの詳細については、29 ページの「[データベースの自動インストール](#)」を参照してください。



コンテンツリポジトリのクラスタは
P6 version 6.2 ではサポートされていません。

ワークフローリポジトリのインストール

データベースウィザードを実行して P6 Web Access をインストールしても、ワークフローリポジトリはインストールされません。その代わりに、インストールファイルをオンラインで利用できます。インストールファイルを見つけてワークフローリポジトリを設定する詳細な方法は、P6 Web Access ホームフォルダ (c:\¥p6wahome など) にある **addWorkflowsJars.cmd** ファイルに記載されています。addWorkflowsJars.cmd ファイルはダブルクリックしないで最初に編集してください。ファイル内の手順を終了すると、これを実行して一部のステップを自動化できます。

ワークフローリポジトリのインストール後、[Database/Instance/Workflow Repository Administration Application] 設定を入力する必要があります。この設定のさらなる情報については、176 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」のデータベース設定サブセクションを参照してください。

P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開

Microsoft Windows で JBoss 4.0.5 GA を設定

- 1 P6 Web Access データベース設定ユーティリティ (セットアップ中に自動的に起動) を使って、使用中のデータベースに接続します。
- 2 primaveraweb.ear ファイルを以下の位置にコピーします。
<JBOSS INSTALL LOCATION>¥server¥primaveraweb¥deploy¥
- 3 国際的なサポート :

以下のファイルを編集します。

```
<JBOSS INSTALL LOCATION>¥server¥primaveraweb¥
deploy¥jbossweb-tomcat55.sar¥server.xml
```

コネクタ設定で、パラメータ `URIEncoding="UTF-8"` を追加します。例えば、以下のような状況を想定してください。

```
<!--A HTTP/1.1 Connector on port 8080-->
<Connector port="8080" URIEncoding="UTF-8"
address="{jboss.bind.address}"
maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"
emptySessionPath="true"
enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"
connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>
```



SSL コネクタを使用している場合は、このパラメータをコネクタの設定にも追加します。

- 4 <JBOSS INSTALL LOCATION>¥bin を検索します。
- 5 run.bat コマンドファイルを編集します。
以下のラインを : RESTART ラインの前に 1 行で挿入します。

```
set JAVA_OPTS=
"-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccesshome>"
%JAVA_OPTS%
```

必ず <webaccesshome> を適切な位置 (例えば、c:¥p6wahome) に変更します。また、<webaccesshome>" と %JAVA_OPTS% の間にはスペースがあります。

6 run.bat ファイルで以下を実行して Java オプションを設定します。

- 以下のラインを見つけてます。

```
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Xms128m -Xmx512m
```

- このラインを以下のラインに替えます (すべて 1 行)。

```
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -XX:PermSize=64m  
-XX:MaxPermSize=128m -Xms512m -Xmx512m
```

7 この変更を run.bat ファイルに保存します。

8 P6 Web Access がダッシュボードで適切にプロジェクト Gantt ポートレットを表示できるようにするには、以下のフォルダを削除する必要があります：

```
<JBoss INSTALL LOCATION>¥ server ¥ primaveraweb ¥  
deploy ¥ jbossweb-tomcat55.sar ¥ jsf-lib
```



Primavera アプリケーションではこのフォルダは必要ありませんが、これを削除すると現在 JBoss で実行している他のアプリケーションに影響が出る可能性があります。このフォルダを削除する前に、JBoss で実行しているサードパーティアプリケーションではこのフォルダが必要ないことを確認してください。このフォルダを削除しない場合、P6 Web Access ユーザダッシュボード上にプロジェクト Gantt ポートレットを表示できませんが、ポートレットの内容は適切に表示されません。

9 JBoss アプリケーションサーバを開始するには、以下を含む <webaccessshome> で「startP6WebAccessinJBoss.bat」という名前の bat ファイルを作成します。

```
@echo off  
set JBOSS_HOME=C: ¥ jboss-4.0.5.GA  
call %JBOSS_HOME% ¥ bin ¥ run.bat -c primaveraweb
```



以前に定義されていない場合は、startP6WebAccessinJBoss.bat ファイルに JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下のようになります。

```
set JAVA_HOME=C: ¥ Program Files ¥ Java ¥ jdk1.5.0_15
```

10 新しく作成された bat ファイルを実行します。

11 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、以下の JBoss ウェブページにアクセスしてください。

<http://www.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=SecureTheJmxConsole>

- 12 SQL Server を使用している場合は、151 ページの「Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の追加設定」に進みます。

Red Hat Enterprise Linux で JBoss 4.0.5 GA を設定

- 1 P6 Web Access データベース設定ユーティリティ（セットアップ中に自動的に起動）を使って、使用中のデータベースに接続します。

- 2 primaveraweb.ear ファイルを以下の位置にコピーします。

```
<JBOSS INSTALL LOCATION>/server/primaveraweb/deploy/
```

- 3 国際的なサポート :

```
<JBOSS INSTALL LOCATION>/server/primaveraweb/deploy/
jbossweb-tomcat55.sar/server.xml ファイルを編集します。
```

コネクタ設定で、パラメータ `URIEncoding="UTF-8"` を追加します。例えば、以下のような状況を想定してください。

```
<!--A HTTP/1.1 Connector on port 8080-->
<Connector port="8080" URIEncoding="UTF-8"
address="{jboss.bind.address}"
maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"
emptySessionPath="true"
enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"
connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>
```



SSL コネクタを使用している場合は、このパラメータをコネクタの設定にも追加します。

- 4 <JBOSS INSTALL LOCATION>/bin を検索します。

- 5 run.sh コマンドファイルを編集します。「# Setup JBoss specific properties」セクションに以下のラインを挿入します（すべて 1 行）。

```
JAVA_OPTS="-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccesshome>
$JAVA_OPTS"
```

必ず <webaccesshome> を適切な位置（例えば、/usr/p6wahome）に変更します。また、<webaccesshome> と \$JAVA_OPTS の間にはスペースがあります。



以前に定義されていない場合は、run.sh ファイルで JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下ようになります。

```
export JAVA_HOME = /usr/jdk 1.5.0_15
```

- 6 この変更を run.sh ファイルに保存します。
- 7 run.conf ファイルを編集して以下を実行し、Java オプションを設定します。

- 以下のラインを見つけます。

```
JAVA_OPTS="-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m -
Dsun.rmi.dgc.client.gcInterval=3600000 -
Dsun.rmi.dgc.server.gcInterval=3600000"
```

- 「-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m」を以下に置き換えます（すべて 1 行）。

```
"-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=128m -Xms512m
-Xmx512m"
```

- 8 この変更を run.conf ファイルに保存します。
- 9 P6 Web Access がダッシュボードで適切にプロジェクト Gantt ポートレットを表示できるようにするには、以下のフォルダを削除する必要があります：

```
<JBOSS INSTALL LOCATION>¥server¥primaveraweb¥
deploy¥jbossweb-tomcat55.sar¥jsf-lib
```



Primavera アプリケーションではこのフォルダは必要ありませんが、これを削除すると現在 JBoss で実行している他のアプリケーションに影響が出る可能性があります。このフォルダを削除する前に、JBoss で実行しているサードパーティアプリケーションではこのフォルダが必要ないことを確認してください。このフォルダを削除しない場合、P6 Web Access ユーザダッシュボード上にプロジェクト Gantt ポートレットを表示できますが、ポートレットの内容は適切に表示されません。

- 10 ターミナルを開きます。以下のコマンドを入力して、サーバを開始します。

```
cd /<JBOSS INSTALL LOCATION>/bin
./run.sh -c primaveraweb
```

- 11 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、以下の JBoss ウェブページにアクセスしてください。

<http://www.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=SecureTheJmxConsole>

- 12 SQL Server を使用している場合は、151 ページの「[Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の追加設定](#)」に進みます。

WebLogic 10 (sp1) の設定



物理的な媒体を使って P6 Web Access を HP-UX 11i にインストールする方法 :

コマンドプロンプトに進みます。P6 媒体の Web_Access フォルダを指すようディレクトリを変更します。次に以下のコマンドを入力して、必ずシステムパスで java 実行形式を指定します。

```
<physical media_mount> java -jar setupmain.jar
```

1 WebLogic 設定ウィザードを実行して、P6 Web Access のサーバドメインを作成します。[Configure Server Start Mode and JDK] ウィンドウで、[WebLogic Domain Startup Mode] の左のペーンで [Development Mode] モードを選択してください。

2 インストール中に作成された P6 Web Access ホームフォルダから primaveraweb.ear を以下のフォルダにコピーします。

```
<bea_home>%user_projects%domains%<your_domain>%autodeploy
```

3 変更を元に戻す必要がある場合に備えて、startWebLogic ファイルのバックアップ用コピーを作成します。

- Windows では、ファイル名は startweblogic.cmd で、保存場所は以下のとおりです :

```
<bea_home>%user_projects%domains%<your_domain>%bin%
```

- Unix では、ファイル名は startweblogic.sh で、保存場所は以下のとおりです :

```
<bea_home>/user_projects/domains/<your_domain>/bin/
```

4 startWebLogic ファイルを編集します。

5 「set JAVA_OPTIONS=」で始まるラインを見つけて、Primavera bootstrap 変数を追加します。

Windows では、以下に似たラインになります。

```
set JAVA_OPTIONS=%SAVE_JAVA_OPTIONS%
-Dprimavera.bootstrap.home=c:%p6wahome
```

Unix では、以下に似たラインになります。

```
JAVA_OPTIONS=%SAVE_JAVA_OPTIONS%
-Dprimavera.bootstrap.home="/usr/local/<webaccesshome>"
```

<webaccesshome> は、インストール中に設定された P6 Web Access ホームディレクトリです。

- 6 (Red Hat Enterprise Linux) デフォルトで、RedHat は P6 Web Access のライブラリすべてをインストールするわけではありません。P6 Web Access を RedHat の Weblogic 10 (sp1) で実行できるようにするには、Primavera bootstrap 変数 (ステップ 5 で追加) の後に以下を付け加えます。

```
-Djava.awt.headless=true
```



*-Djava の前に必ずスペースを入れてください。
bootstrap の後のプロパティの順序はどのようなものでも構いません。*

- 7 JAVA_OPTIONS のすぐ下に JAVA_VM の変数を入力して Java バージョンを設定します (ステップ 5 で追加)。

ラインは以下に似たものになります。

```
JAVA_VM=-server
```

- 8 WebLogic クラスパスの始めに「<webaccesshome>license」と「ojdbc5.jar」を含めます。

- Windows では、以下に似たラインになります。

```
set CLASSPATH=c:\¥<webaccesshome>\¥license ¥;c:\¥  
<webaccesshome>\¥lib ¥ojdbc5.jar;%SAVE_CLASSPATH%
```

- Unix では、以下に似たラインになります。

```
CLASSPATH="/usr/local/<webaccesshome>/license":"/usr/  
local/<webaccesshome>/lib/ojdbc5.jar":${CLASSPATH}
```

- 9 この変更を startWebLogic ファイルに保存します。
- 10 変更を元に戻す必要がある場合に備えて、setDomainEnv.cmd (また、Linux では setDomainEnv.sh) ファイルのバックアップ用コピーを作成します。
- 11 setDomainEnv ファイルを編集します。
- 12 メモリ不足になることを防ぐため、setDomainEnv ファイルで JVM MaxPermSize の設定を増やします。MaxPermSize 設定は少なくとも 256m に設定してください。

- Windows では、以下に似たラインになります。

```
if "%JAVA_VENDOR%"=="Sun" (  
    set MEM_ARGS=%MEM_ARGS% %MEM_DEV_ARGS%  
    -XX:MaxPermSize=256m  
)
```

- HP-UX では、以下に似たラインになります。

```
if [ "${JAVA_VENDOR}"="HP" ]; then
    MEM_ARGS="${MEM_ARGS} ${MEM_DEV_ARGS}
    -XX:MaxPermSize=256m"
export MEM_ARGS
```

- 13** パフォーマンスを最大化するには、setDomainEnv ファイルでメモリの設定を変更します。まず、NewSize、MaxNewSize、SurvivorRatio の値を設定できるように MEM_ARGS ラインを編集します。

例えば、ヒープサイズの合計が 1024 の場合、NewSize と Max NewSize は 256 に設定し、SurvivorRatio の値が 8 になるようにします。

完全なラインは以下に似たものになります。

```
set MEM_ARGS=-XX:NewSize=256m -XX:MaxNewSize=256m
-XX:SurvivorRatio=8 -Xms1024m -Xmx1024m
```

ここで

-XX:NewSize= は新世代ヒープの最低サイズ (eden と 2 つの Survivor スペースの合計)

-XX:MaxNewSize= は新世代ヒープの最大サイズ

-XX:SurvivorRatio= Survivor スペースのサイズ (Survivor スペースに対する eden の比率)

Young 世代は、eden と 2 つの Survivor スペースの合計に相当します。



ステップ 13 の終了後、P6 Web Access の WebLogic ドメインインスタンスを開始できます。

- 14** SQL Server を使用している場合は、151 ページの「Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の追加設定」に進みます。

Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の追加設定

以下は、Microsoft SQL Server 2005 データベースを使用している場合に適用されます。Microsoft SQL Server データベースがローカライズされているか、ローカライズされたオペレーティングシステム上にインストールされている場合は、P6 Web Access admin.jsp で SET DATEFORMAT 設定を使用する必要があります。この設定を使わなければ、Resource Planning や Capacity Analysis をナビゲートする際に SQL エラーが発生します。また、アクティビティ画面でも異変が起きる可能性があります。

管理アプリケーションの詳細については、166 ページの「[管理アプリケーションの使用方法](#)」を参照してください。

- 1 P6 Web Access admin.jsp ファイル (管理アプリケーション) で、P6 Web Access で使用している Microsoft SQL Server データベースのデータベースフォルダを探します。
- 2 このフォルダでインスタンスフォルダ (Instance[x]) を拡張し、セッション設定フォルダ (Session Settings) にアクセスします (選択肢は 1 ~ 5 です)。
- 3 以下の構文を使ってセッション設定を追加します。
set DATEFORMAT ymd
- 4 変更を保存します。
- 5 アプリケーションサーバを再起動すると、変更がすぐに有効になります。

WebSphere 6.1 の設定

Primavera Administrative BAT ファイル用の Java Home の変更

P6 Web Access のインストール後、dbconfigpv.cmd および adminpv.cmd ファイルで JAVA_HOME を変更する必要があります。これらのファイルは、P6 Web Access のホームディレクトリに含まれています。

- 1 テキストエディタで dbconfigpv.cmd および adminpv.cmd ファイルを開きます。各ファイルで以下のラインを変更します。

変更前 :

```
set JAVA_HOME=C:\¥\DOCUME~1¥\ADMINI~1¥\LOCALS~1¥\Temp...
```

変更後 :

```
set JAVA_HOME=<WEBSPHERE INSTALL DIRECTORY>¥\AppServer¥\java
```

- 2 dbconfigpv.cmd を実行し、139 ページの「[P6 Web Access のインストールプロセス](#)」に説明されているように新しいデータベース接続を作成します。

Windows でのインストール



P6 Web Access をインストールした直後に以下のステップを実行してください。

- 1 WebSphere アプリケーションサーバを起動します。
- 2 WebSphere アプリケーションサーバの管理者コンソールを起動します。
- 3 左側のナビゲーションペーンで [Servers] を拡張し、[Application Servers] をクリックします。
- 4 [Application Servers] 画面で、サーバ名のリンクをクリックします。
- 5 [Configuration] タブの [Server Infrastructure] で、[Java] と [Process Management] を拡張します。
- 6 [Process Definition] をクリックします。
- 7 [Additional Properties] で、[Java Virtual Machine] をクリックします。
- 8 [Generic JVM arguments] で以下を入力します。
-Dprimavera.bootstrap.home=c:\¥\<webaccesshome>
- 9 [OK] をクリックします。変更を報告するメッセージ内に表示されている [保存] リンクをクリックします。

- 10 左側のナビゲーションペーンで [Applications] を拡張し、[Install New Application] をクリックします。
- 11 P6 Web Access の <webaccesshome> フォルダへのパスを指定します。このフォルダには、primaveraweb.ear ファイルが含まれています。
例：c:\¥p6wahome¥primaveraweb.ear。
- 12 コンテキストルートに primaveraweb と入力し、[次へ] をクリックします。
- 13 [Choose to generate default bindings and mappings] 画面でデフォルトを承諾し、[次へ] をクリックします。



[Application Security Warnings] 画面が表示されたら、
[Continue] をクリックします。

- 14 [Specify options for installing enterprise applications and modules] 画面で以下を実行します。
 - ステップ 1 の [Pre-compile JSPs] のチェックボックスにマークを入れ、[次へ] をクリックします。
 - ステップ 2 の [Install new application] で [primaveraweb] にチェックを入れ、[次へ] をクリックします。
 - ステップ 3 の [Install new application] で [primaveraweb] にチェックを入れ、[次へ] をクリックします。
 - ステップ 4 の画面 (Summary) で [Finish] をクリックします。アプリケーション EAR ファイルが展開します。このプロセスには数分かかることもあります。
- 15 マスター WebSphere 設定を保存するには、[保存] をクリックします。このプロセスにも数分かかることがあります。
- 16 [Administrative Console Main] 画面の左側のナビゲーションで、[Applications] を拡張して [Enterprise Applications] をクリックします。
- 17 primaveraweb を検索して、アプリケーションのステータスを確認します。緑色の矢印でない場合は、[Select] 列の上にある [Start] ボタンをクリックします。
- 18 必要に応じて、WebSphere アプリケーションサーバを再起動します。

AIX 5.2 でのインストール

以下の手順 ([ステップ 1](#) から [ステップ 3](#)) は、AIX 5.2 に P6 Web Access をインストールする場合にのみ必要です。

- 1 物理的な媒体から P6 Web Access のインストールを開始するには、コマンドプロンプトにアクセスし、P6 Web_Access のルートを指すようディレクトリを変更します。「setupaix」ファイルを検索します。
- 2 以下のコマンドを入力して、インストールを開始します。
./setupaix
- 3 152 ページの「[Windows でのインストール](#)」のステップに従います。

P6 Web Access 用サーバの起動

以下の手順は、サポートされているアプリケーションサーバに P6 Web Access がインストールされており、144 ページの「[P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開](#)」で説明されている追加手順を完了していることを前提としています。

JBoss での P6 Web Access 用サーバの起動

- Windows では、145 ページの [ステップ 9](#) で作成した「startP6WebAccessinJoss.bat」ファイルをダブルクリックします。
- Linux では、ターミナルを開いて以下のコマンドを入力します。


```
cd /<JBOSS INSTALL LOCATION>/bin
./run.sh -c primaveraweb
```

WebLogic での P6 Web Access 用サーバの起動

- Windows では、[スタート]メニューから [BEA WebLogic] サブメニューをナビゲートし、[User Projects] [<domain>]、[サーバの起動] を選択します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。

- Solaris および HP-UX では、<bea_home>/user_projects/<domain> ディレクトリに変更し、startWebLogic.sh スクリプトを実行します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。



P6 Web Access がアプリケーションとしてインストールされており、WebLogic のプレコンパイルオプションが有効な場合、WebLogic コンソールにはプレコンパイルの完了時に「サーバは RUNNING モードで立ち上がりました」と表示されます。プレコンパイルの有効化の詳細情報については、WebLogic Server ドキュメントを参照してください。

WebSphere Advanced Server での P6 Web Access 用サーバの起動

- Windows、Linux、AIX では、WebSphere 管理者コンソールから Primaveraweb モジュールを起動します。Primaveraweb はインストール時に割り当てられた既定モジュール名です。

P6 Web Access のプレコンパイル

P6 Web Access では必須ではありませんが、プレコンパイルを行うとユーザが最初に P6 Web Access ページをロードする時間を短縮できます。

以下の手順は Primavera がサポートするすべてのアプリケーションサーバに適用され、アプリケーションサーバの実行中に実行する必要があります。

- 1 媒体またはダウンロードに含まれている `Web_Access` フォルダから、P6 Web Access がインストールされているサーバに「`precompile_utility`」ディレクトリをコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、新しく作成された「`precompile`」ディレクトリにアクセスします。
- 3 以下に類似したコマンドを実行します。

```
precompile -u <base URL> -f <input file>
```

ここで

<base URL> は P6 Web Access ベース URL

<input file> は P6 Web Access EAR ファイル



P6 Web Access EAR ファイルのファイルパスにはスペースを挿入できません。

WebLogic 上で P6 Web Access が標準インストールされていると想定します。

Windows では、コマンドは以下に似たものになります。

```
precompile -u http://localhost:7001/primaveraweb -f  
c:¥<webaccesshome>¥primaveraweb.ear
```

HPUX-11i では、コマンドは以下に似たものになります。

```
java -jar JSPPrecompile.jar -u http://localhost:7001/primaveraweb  
-f <webaccesshome>/primaveraweb.ear
```

P6 Web Access 用サーバの停止

JBoss 上でサーバの停止

Windows コマンドプロンプトで Ctrl+c を押します。

WebLogic 上でサーバの停止

Windows と Solaris では、WebLogic ターミナルコンソールで、Ctrl+c を押します。

WebSphere Advanced Server 上のサーバを停止

Windows、Linux、AIX では、WebSphere 管理者コンソールから Primaveraweb モジュールを停止します。Primaveraweb はインストール時に割り当てられた既定モジュール名です。

クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス

P6 Web Access の認証モードを選択するには、認証設定ウィザードを使用します (P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥ldap-config フォルダ内にある LDAPCfgWiz.exe)。また、認証に必要な P6 Web Access の設定を指定します。設定ウィザードの詳細については、279 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。認証設定情報については、174 ページの「[認証設定](#)」を参照してください。

ユーザは、アプリケーションサーバのプラットフォームに応じて、以下の URL 構造でクライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセスできます。

JBoss アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_cmt`

例 : `http://192.168.0.1:8080/primaveraweb/login_cmt`
既定の listenport は 8080 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。

WebLogic アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_cmt`

例 : `http://192.168.0.1:7001/primaveraweb/login_cmt`
新しい WebLogic ドメインの既定 listenport は 7001 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。

WebSphere アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_cmt`

例 : `http://192.168.0.1:9080/primaveraweb/login_cmt`
既定の listenport は 9080 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。



コンテキストルートは、すべてのサポートされているアプリケーションサーバで設定可能です。コンテキストルートの設定についての情報は、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。また、URL はアプリケーションサーバの構成によって、大文字小文字の区別がされる場合があります。



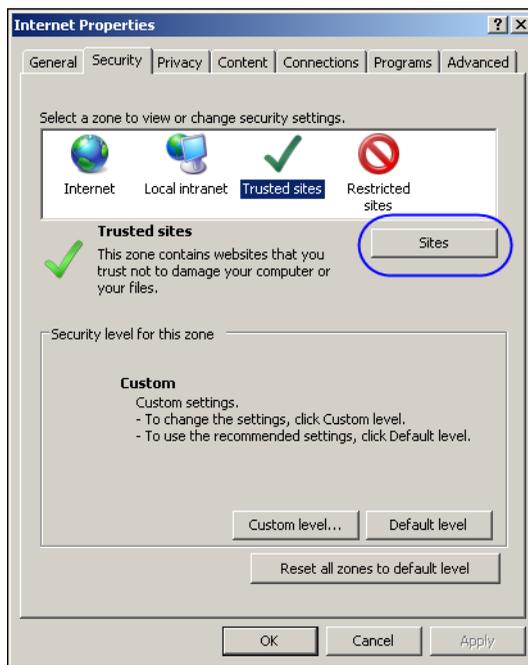
P6 Web Access カレンダー機能を表示するには、Adobe Flash Player バージョン 9 をクライアントマシンにインストールする必要があります。初めてカレンダーページにナビゲートすると、ユーザは適宜、Flash Player バージョン 9 をインストールするよう求められます。すでに Flash Player の旧バージョンがインストールされている場合は、自動的に Flash Player バージョン 9 にアップグレードされます。

クライアントブラウザの構成設定

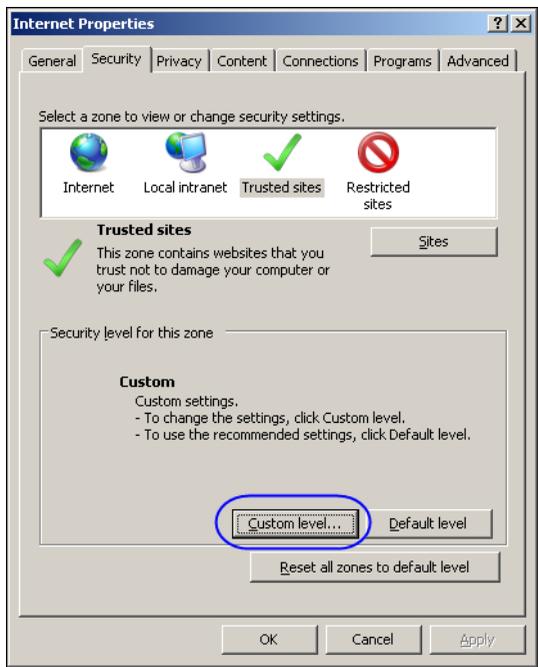
Microsoft Outlook からインポートするための設定変更

特定の Active X コントロールを許可するよう Internet Explorer が設定されていない場合は、Microsoft Outlook から P6 Web Access にデータをインポートすることはできません。Microsoft Outlook からインポートする必要がある場合は、各クライアントマシンで以下を実行してください。

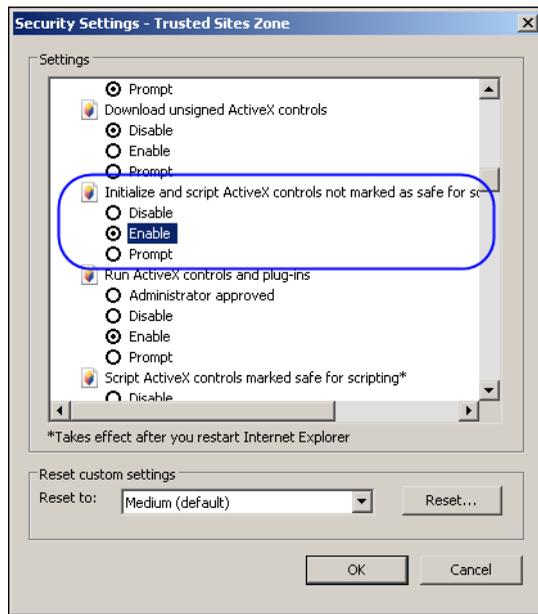
- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[インターネットオプション] を選択します。
- 2 セキュリティタブの [信頼済みサイト] をクリックします。
- 3 [サイト] ボタンをクリックして、使用している P6 Web Access URL をゾーンに追加します。



- 4 [信頼済みサイト] ウィンドウを閉じます。
- 5 [レベルのカスタマイズ] ボタンをクリックします。



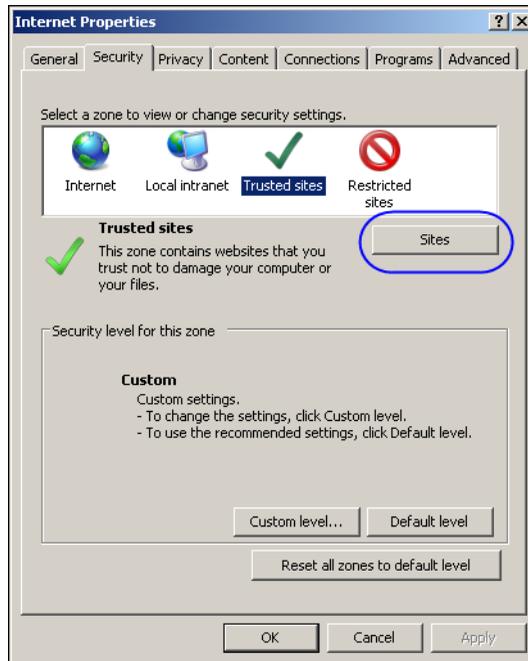
6 [Initialize and script Active X controls not marked as safe for scripting] 設定を有効にします。



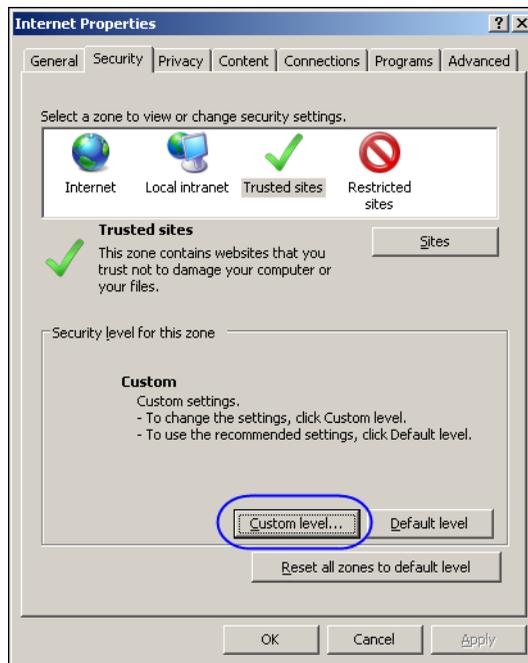
Excel へのエクスポートで発生した問題を解決するための設定変更

Internet Explorer を適切に設定しなければ、Excel にエクスポートするリンクをクリックしても P6 Web Access が反応しないことがあります（開く / 保存ダイアログボックスが表示されません）。この場合は、問題が発生しているクライアントマシンごとに以下を実行します。

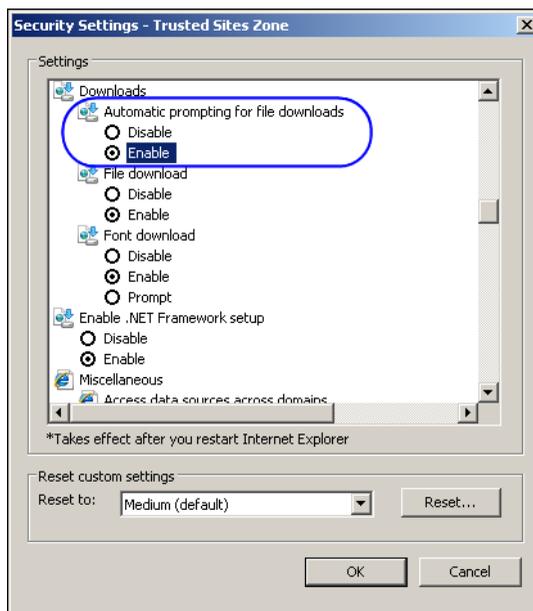
- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[インターネットオプション] を選択します。
- 2 セキュリティタブの [信頼済みサイト] をクリックします。
- 3 [サイト] ボタンをクリックして、使用している P6 Web Access URL をゾーンに追加します。



- 4 [信頼済みサイト] ウィンドウを閉じます。
- 5 [レベルのカスタマイズ] ボタンをクリックします。



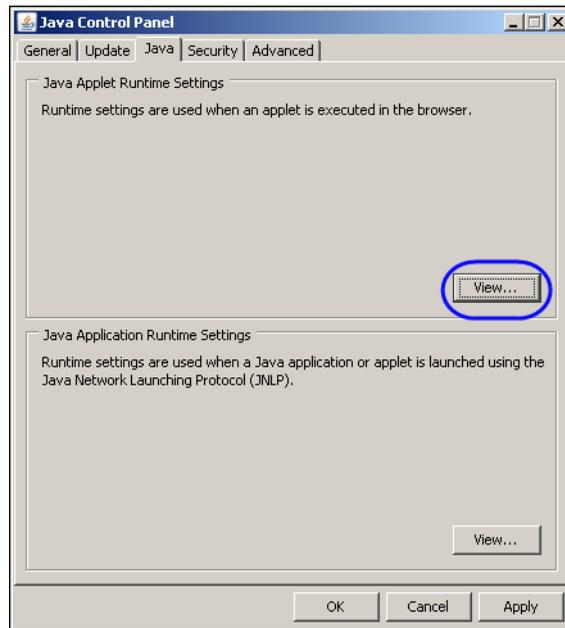
6 [ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示]
設定を有効にします。



Null ポインタの例外を解決するための設定変更

P6 Web Access の使用中に多数のアクティビティコード値（4 万以上）をロードすると、Null ポインタの例外を受け取ることがあります。この場合は、P6 Web Access を使用しているクライアントマシンごとに以下を実行します。

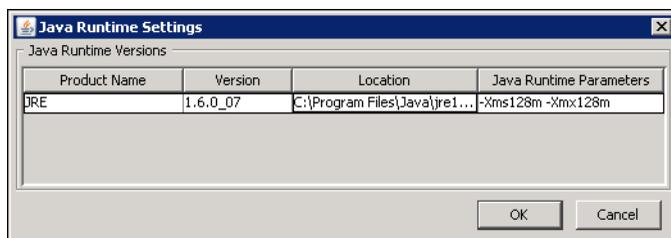
- 1 Windows の [コントロールパネル] で [Java] を選択します。
- 2 Java の [コントロールパネル] で [Java] タブを選択します。
- 3 [Java アプレットのランタイム設定] で [表示] をクリックします。



- 4 [Java ランタイム設定] 画面の [JRE/1.6.0.07] 行で、
-Xms<value>m and -Xmx<value>m を [Java ランタイムパラメータ] フィールドに追加します。

設定に応じて値は異なりますが、最初は以下の値を使用するようお勧めします。

-Xms128m -Xmx128m



5 Java の [コントロールパネル] を終了します。

データベース構成設定の変更

Database Configuration Wizard を使って、P6 Web Access をインストールしたときに指定したデータベース接続設定の変更を行うことができます。

インストール時に選択したデータベースには、1 つ以上の Primavera 構成が保存されています。それぞれに設定されたパラメータが保持され、P6 Web Access の動作を制御しています。インストール時に、既存の Primavera 構成、または新規作成をします。その後、Database Configuration ウィザードを使い、別の Primavera 構成を選択したり、新規に作成することができます。



P6 コンフィグレーション構成を変更、もしくは新規作成した後、P6 Web Access のアプリケーションサーバを停止・再起動して変更を有効にする必要があります。

JBoss 上でデータベース設定ウィザードを起動

スタートメニューから [プログラム]、[Primaveraweb]、[Database Configuration Setup] を選択します。

WebLogic 上でデータベース設定ウィザードを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある dbconfigpv.cmd を実行するか、[スタート]、[プログラム]、[Primavera Web Access 6.2]、[Database Configuration Setup] を選択します。
- Solaris と HP-UX では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリに移動して、dbconfigpv.sh スクリプトを実行します。

WebSphere 上でデータベース設定ウィザードを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある dbconfigpv.cmd を実行するか、[スタート]、[プログラム]、[Primavera Web Access 6.2]、[Database Configuration Setup] を選択します。
- Linux と IBM AIX では、WebSphere 下の <webaccesshome> ディレクトリに移動して、dbconfigpv.sh を実行します。

管理アプリケーションの使用方法

システム管理者として、ユーザは P6 Web Access の管理アプリケーションを使って、Primavera の設定の確認、変更、追加および削除を行うことができます。Primavera 構成は、ユーザがインストール時に指定した P6 Web Access のデータベースに保存されています。これらの構成には、P6 Web Access のアプリケーションサーバの実行に使われるすべての設定が含まれています。



管理アプリケーションを使って構成設定を変更するのは、経験豊富な管理者に限る必要があります。

P6 Web Access の管理アプリケーションは、ローカルでも、またはブラウザを通して遠隔地からでも実行することができます。管理アプリケーションを起動すると、データベースレベルのユーザ名とパスワードの入力を求められます。既定の PMDB データベースレベルのユーザ名とパスワードは、「privuser」です。これは大文字小文字の区別があり、ここではすべてが小文字です。

JBoss で管理アプリケーションを起動

P6 Web Access の設定時に指定した <webaccessshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、[スタート]、[プログラム]、[Primavera Web Access 6.2]、[管理アプリケーション] を選択します。

P6 Web Access のインストールでは、管理アプリケーションへのリモートアクセス用に既定 URL を設定します。アプリケーションサーバの構成ユーティリティを使って、listen ポート番号やコンテキストルートを変更することができます。

WebLogic で管理アプリケーションを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccessshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、[スタート]、[プログラム]、[Primavera Web Access 6.2]、[管理アプリケーション] を選択します。
- Solaris と HP-UX で管理アプリケーションをローカルで起動するには、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccessshome> ディレクトリに移動して、adminpv.sh スクリプトを実行します。
- 管理アプリケーションをリモート起動するには、ブラウザで `http://server IP:listenport/ContextRoot/admin.jsp` にアクセスします。ここで、`serverIP:listenport` は P6 Web Access サーバの IP アドレスと listen ポートです。既定のコンテキストルートは、myprimavera です。

WebSphere で管理アプリケーションを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、[スタート]、[プログラム]、[Primavera Web Access 6.2]、[管理アプリケーション] を選択します。
- Linux と IBM AIX で管理アプリケーションをローカルで起動するには、WebSphere をインストールしたディレクトリ下の、<primaveraweb> ディレクトリに移動し、adminpv.sh スクリプトを実行します。
- 管理アプリケーションをリモート起動するには、ブラウザで `http://server IP:listenport/ContextRoot/admin.jsp` にアクセスします。ここで、*serverIP:listenport* は P6 Web Access サーバの IP アドレスと listen ポートです。既定のコンテキストルートは、myprimavera です。

P6 Web Access の設定の確認と変更

P6 Web Access の管理アプリケーションでは、ダイアログボックスの各タブで設定を示します。現在の構成や設定について、ツリーやテーブル表示で示します。ログ表示は、設定の変更、追加、削除履歴を示します。



工場出荷時の既定設定は、編集できません。ユーザ設定項目のみ変更することができます。

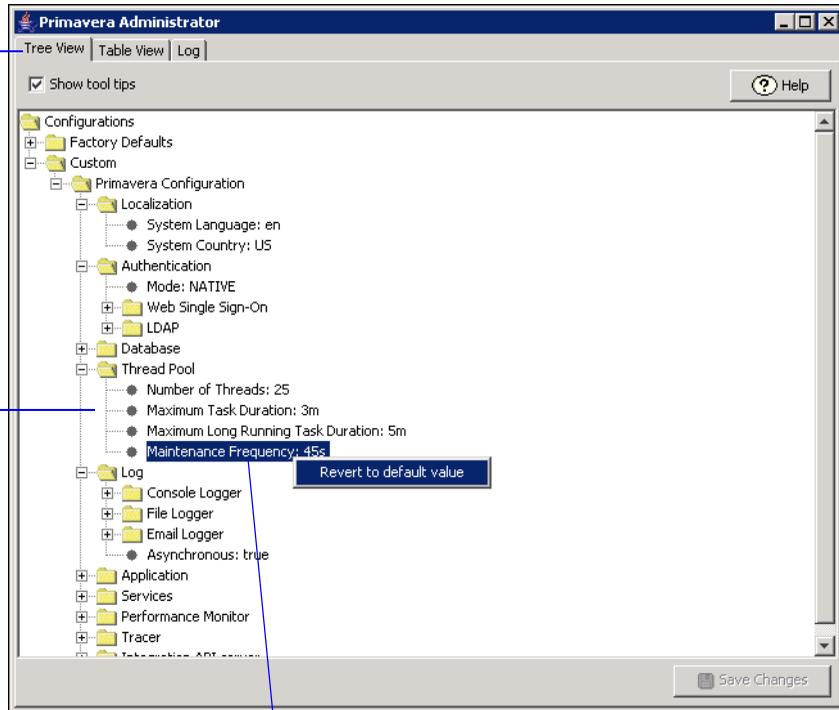
ツリーおよびテーブル表示で、簡単な設定の説明を表示するには、ツールチップのチェックボックスで [Show] をマークします。そしてマウスを設定項目の上に重ねると、ポップアップ説明が表示されます。



赤で示された設定は、期限切れです。Primavera は、これらの設定は削除するようにお勧めします。

設定データの階層表示をするのにクリックします。

設定値の変更には、設定名をトリプルクリックして新規の値をタイプします。Windowsでは、F2を押して編集モードに変更することもできます。

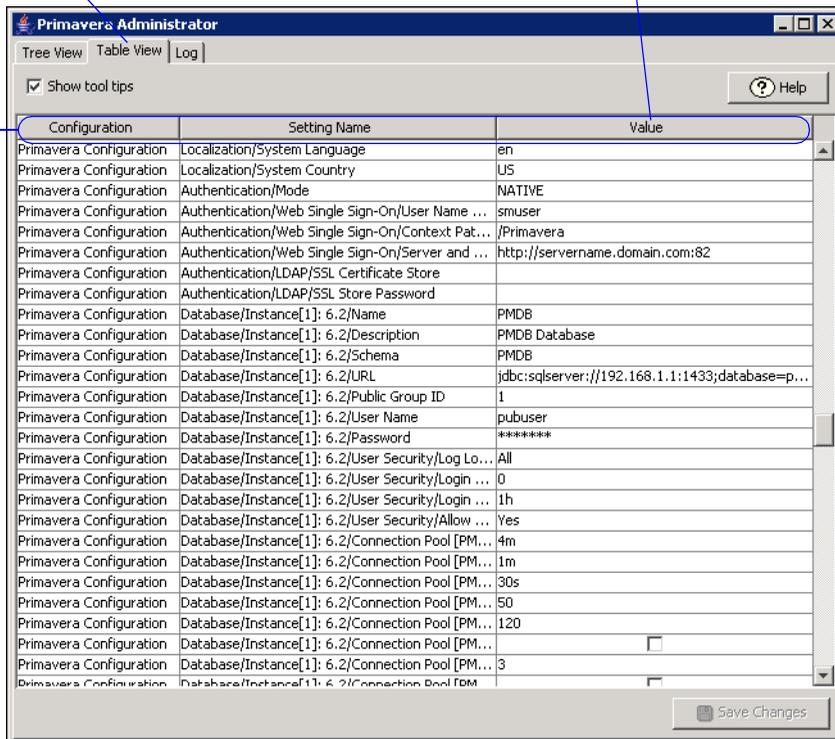


設定を既定値にもどすには、選択して右クリックし、[Revert to default value] を選択します。

テーブル形式で設定を表示するのにクリックします。

設定値の変更には、設定をクリックして値の列をクリックし、変更する値をタイプします。

テーブルのソーティングには、カラムの題名をクリックします。ソーティングを行うと複数の構成に含まれる類似の設定を見やすくします。



P6 Web Access の設定を追加 新しい設定を作成するには、既存の設定の複製を作成します。

- 設定の複製を作成するには、ツリー表示で設定名を選択し、右クリックして [Duplicate] を選択します。設定に名前を入力して [OK] をクリックします。必要に応じて設定を編集します。
- 工場出荷時の既定設定に基づいて新しい設定を作成するには、ツリー表示で [Factory Defaults] を右クリックして、[Duplicate] を選択します。

データベースインスタンスを設定に追加 新しいデータベースインスタンスを設定に追加するには、既存のインスタンスの複製を作成します。

- データベースインスタンスの複製を作成するには、インスタンスを示すアイコンを選択して右クリックし、[Duplicate] を選択します。新しいインスタンスに一意的な名前を入力し、必要に応じてその他の設定を編集します。

P6 Web Access の設定やデータベースインスタンスの削除 設定またはデータベースインスタンスを削除するには、それを選択し右クリックして [Delete] を選択します。

工場出荷時の既定設定は、削除できません。ユーザ設定項目はどれでも削除できますが、すべてを削除することはできません。少なくとも 1 つのユーザ設定がなければなりません。

設定に関連するデータベースインスタンスはどれでも削除できますが、すべてを削除することはできません。各設定には、少なくとも 1 つのデータベースインスタンスがなければなりません。



データベース設定時に指定したデータベースを削除することは、禁止されていません。それを行った場合は、データベース設定ウィザードを実行する必要があります (165 ページの「データベース構成設定の変更」を参照)。

Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定 P6 Web Access で Project Architect ジョブサービスを実行するには、P6 Web Access 設定を変更し、Project Architect を利用する Project Management データベースを、ジョブサービスマシンで指定されている Methodology Management DB Alias に接続する必要があります。

以下のステップを踏んで P6 Web Access を設定し、Project Architect ジョブサービスを実行します。



Methodology Management DB Alias がジョブサービスをインストールしたマシン上にない場合は、データベース設定ウィザードを使って作成または選択する必要があります。Methodology Management DB Alias がすでにジョブサービスマシン上に存在する場合は、以下の手順のステップ 1 をとばしてください。



この記述は、すでにジョブサービスがインストールされているものと想定しています。

ジョブサービスのインストールと設定についての情報は、237 ページの「ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール」を参照してください。

- 1 必要に応じて、ジョブサービスマシン上でデータベース設定ウィザードを実行し、ジョブサービスマシンを P6 Web Access に関連付けたい Methodology Management データベースに接続するための Methodology Management DB Alias を作成するか選択してください。

データベース接続の設定方法については、272 ページの「データベース接続設定の変更」を参照してください。

2 管理アプリケーションを起動します。

管理アプリケーションの起動方法については、166 ページの「管理アプリケーションの使用方法」を参照してください。

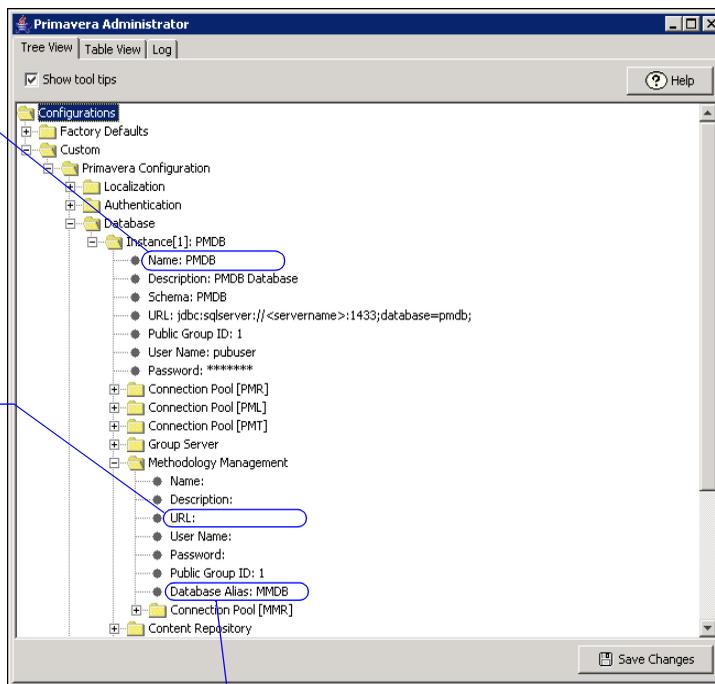
3 適切な Primavera 構成をツリー表示して、以下のロケーションにナビゲートします。Database/Instance/Methodology Management。

4 Methodology Management フォルダで URL を変更し、これがステップ 1 で指定したものと同一 Methodology Management データベースを指すようにします。

5 ステップ 1 で指定した Methodology Management データベースの DB Alias に一致するよう DBAlias 値を変更します。

ジョブサービスが、ユーザの P6 Web Access データベース設定で表示されている Project Management データベースインスタンス名を指定しているか確認します。

ジョブサービスマシン上で指定した Methodology Management データベースを指すよう URL を変更します。



ジョブサービスマシン上で指定した Methodology Management データベースの DB Alias に正確に一致するよう DB Alias を変更します。

複数のデータベースインスタンスへのアクセスを管理 P6 Web Access では、別の Project Management データベースのデータにアクセスすることができます。P6 Web Access の構成で、複数のデータベースインスタンスをサポートするように設定すると、ログインページでデータベースのドロップダウンリストが表示され、ユーザが接続したいデータベースインスタンスを選択することができます。

管理者は、管理アプリケーションで、URL にデータベースパラメータを要求することによって、特定のデータベースへのユーザアクセスを管理するよう P6 Web Access のサーバを設定することができます。データベースインスタンス名であるデータベースパラメータは、P6 Web Access のサーバ URL に追加され、特定のデータベースインスタンスを指定します。ユーザが指定された URL にアクセスすると、ログインページにデータベースドロップダウンリストは表示されず、データベースパラメータで定義されたデータベースインスタンスのみにログインアクセスすることができます。ユーザが必要なデータベースパラメータを指定せずにログインページ URL にアクセスしようとすると、URL は無効であるとのメッセージが表示され、P6 Web Access の管理者へ問い合わせるよう表示されます。

例えば、以下の URL は、ユーザを「Sample」というデータベースインスタンスにログインします。

```
http://serverIP:listenport/login_cmt?db=Sample
```

管理者として、データベースパラメータの要求をバイパスするキーワードを指定することができます。管理者はログインページのデータベースドロップダウンリストのすべてのデータベースにアクセスできます。

P6 Web Access で URL にデータベースパラメータを要求

- 1 管理アプリケーションを起動します。
- 2 変更したい設定で、Application/Database Dropdown Key 設定値を指定します。値を指定すると、サーバ URL にデータベースパラメータの要求が追加されます。

指定した値は、P6 Web Access サーバにログインする際にデータベース要求をバイパスするキーワードとして使用します。

例えば、`http://serverIP:listenport/login_cmt?db=bypass`

認証設定 P6 Web Access は最大 6 種類の設定を使用して認証をサポートします。

- Authentication/Mode
- Authentication/Web Single Sign-On/User Name Header Key
- Authentication/Web Single Sign-On/Context Path Override
- Authentication/Web Single Sign-On/Server and Port Override
- Authentication/LDAP/SSL Certificate Store
- Authentication/LDAP/SSL Store Password



Authentication/Mode 設定は、Group Server で選択したモードに一致する必要があります。

P6 Web Access の 1 つのサーバインスタンスは 1 つ以上のデータベースの管理をしている可能性があるため、LDAP 設定ウィザードでの認証モードの指定に加え、Authentication/Mode 設定を使用して P6 Web Access サーバで使いたい全体モードを指定することができます。Single Sign On を使用する場合は、さらにポリシーサーバに要求される 3 つの設定を変更する必要があります。P6 Web Access と LDAP サーバ間でセキュアな通信 (SSL) を行うための LDAP 認証では、さらに 2 つの設定が必要になります。

これら各設定のさらなる情報については、次セクション「[P6 Web Access の設定](#)」の認証設定サブセクションを参照してください。



P6 Web Access の設定には、P6 Web Access サーバと同じ認証モードに設定されていないデータベースインスタンスが含まれている可能性があります。ユーザが P6 Web Access サーバとは異なる認証モードに設定されているデータベースへの接続と要求を行う場合は、エラーメッセージが表示されます。ユーザは、P6 Web Access サーバ向けに設定された認証モードに一致したデータベースを選択する必要があります。

カスタムポートレットの設定 P6 Web Access のダッシュボードとプロジェクトワークスペースでは、現在ログオンしているユーザに対象アプリケーションへのパスワードを渡すためのカスタムポートレットを作成することができます。既定では、パスワードは暗号化されていません。パスワードを暗号化するには、Application/Custom Portlet URL Encryption Key 設定を使います。暗号化には、Sun/Blowfish アルゴリズムを使用します。

この設定のさらなる情報については、次セクション「[P6 Web Access の設定](#)」のアプリケーション設定サブセクションを参照してください。



この設定を表示するには、構成を更新する必要があります。そのためは、設定をハイライトして右クリックし、「Update to latest version」を選択します。

パスワードポリシーの設定と上書き P6 Web Access を使用すると、管理者はパスワード関連セキュリティを管理できます。アクセスを拒否されるまで何回ログインを試行できるか、またロックアウト後、どれくらい待てば再度ログインを試行できるかなどです。利用可能な設定については、178 ページの「[データベース設定](#)」の [Database](#) [Instance](#) [User Security](#) サブセクションに詳述されています。

管理者は必要に応じて、手動でロックアウトを上書きできます。P6 Web Access ユーザをリセットするには以下の手順に従ってください。

- 1 管理スーパーユーザとして P6 Web Access にログインします。
- 2 ブラウザのアドレスラインで「action」よりも後のすべてのテキストを削除して「/useradmin」に替え、ページをリロードします。

例えば、ログイン後の URL の既定のコンポーネントは以下のとおりです。

```
http://serverIP:listenport/ContextRoot/action/home
```

これを以下に変更します：

```
http://serverIP:listenport/ContextRoot/action/useradmin
```

- 3 ユーザ管理ページがロードされ、アクティブなユーザおよびロックアウトされているユーザ全員のリストが表示されます。ロックアウトされているユーザについては「Reset User」リンクをクリックします。複数のユーザがロックアウトされている場合は、ページ最上部の「Reset All Users」リンクをクリックします。

P6 Web Access の設定

管理アプリケーションのツリー表示またはテーブル表示で設定の確認、変更を行うことができます。構成設定は、管理者がインストール時に指定した、P6 Web Access のデータベースに保存されています。

時間設定値（時間に関連した値）はいくつかの方法で指定することができます。

- 単純な数字は、ミリ秒として扱われます。
例えば、240000 は 4 分相当です (240000/60000)。
- `<n>d<n>h<n>m<n>s` の形式では、「d」は日、「h」は時間、「m」は分、「s」は秒です。すべての入力は、省略可能です。
例えば、次のように入力できます。

1d2h30m20s

4m

1h30s



管理アプリケーションを使って P6 Web Access の構成設定を変更するのは、経験豊富な管理者に限る必要があります。

[ローカル設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Localization/System Language サーバストリング定数の言語	en	—
Localization/System Country サーバストリング定数の国	米国	—

[認証設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Authentication/Mode クライアント認証に使われるメソッド。	NATIVE	Native、LDAP、WebSSO
Authentication/Web Single Sign-On/User Name Header Key SiteMinder で指定した http ヘッダ名。 指定する値は、P6 Web Access の Web サーバ内のポリシードメイン/領域で作成した SiteMinder の応答プロパティと一致している必要があります。この応答の値は、smuser=uid のはずです。ここで smuser は、設定可能であり、uid は Primavera データベースの USER_Name フィールドにマップされた LDAP サーバ属性に一致しています。	smuser	—
Authentication/Web Single Sign-On/Context Path Override SiteMinder Web サーバから P6 Web Access のサーバに Web 要求を送るパス。	/Primavera	—
Authentication/Web Single Sign-On/Server and Port Override SiteMinder が管理する Web サーバの、完全修飾されたドメイン名とポートです。	http:// servername.domain.co m:82	—
Authentication/LDAP/SSL Certificate Store LDAP サーバ用の SSL certificate を保存する Keystore へのフルパス。	—	—
Authentication/LDAP/SSL Store Password SSL certificate を保有する Keystore のパスワード。	—	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Name データベースインスタンス名。	—	32 文字まで
Database/Instance/Description データベースインスタンスの説明。	—	128 文字まで
Database/Instance/Schema データベース向けに定義されるスキーマ。	PMDB	—
Database/Instance/URL データベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。	—	—
Oracle の例 : jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz		
SQL の例 : jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz;		
x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名		
Database/Instance/Public Group ID データベースとの接続を確立するために使われる公開グループ ID。	1	—
Database/Instance/User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。	pubuser	—
Database/Instance/Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。	pubuser	—
Database/Instance/User Security/Log Login Attempts Web Access ログで P6 Web Access へのログイン試行をトラッキングするかどうか指定します。	All	All、None、Failed Attempts、Successfull Attempts
Database/Instance/User Security/Login Lockout Count アカウントがロックされる前にユーザがログインを試行できる回数。設定を「0」にすると、試行回数は無制限になります。回数は、ログインに成功するたびにリセットされます。	0	0-100000

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/User Security/Login Lockout Duration P6 Web Access へのログインを阻止される期間。ログインロックアウト回数を超過した時点から始まります。この設定は、ユーザのセッションが管理スーパーユーザによってリセットされると上書きされます。さらなる詳細については、175 ページの「 パスワードポリシーの設定と上書き 」を参照してください。	1h	0 -24d
Database/Instance/User Security/Allow Multiple User Sessions 単一のユーザが同時に Web Access にログインできるかどうかを指定します。 [Yes] に設定すると、単一ユーザはどのマシンでも複数回ログインできます。 [No] に設定すると、ユーザは 1 度しかログインできなくなります。 [Single Machine] に設定すると、要請を行っているマシンの IP アドレスを判定できるようアプリケーションサーバが適切に設定されている限り、ユーザは同じマシンで複数回ログインできます。例えば、アプリケーションサーバがプロキシサーバの後ろにある場合、この設定は [Single Machine] ではなく既定で [Yes] になります。	Yes	Yes、No、Single Machine
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Resize Rate このタイムアウト時間後に、システムはデータベース接続数を最後のデータベース最大同時接続数と同じ値に調整します。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	4m	4m - 12h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/ Maintenance Frequency リースが最大期間を超えないことを確認する保守の実行頻度。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	1m	10s - 1h
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/ Lease Request Wait Timeout データベース接続要求が待機する時間。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	30s	5s - 2h
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/ Maximum Connections サーバとデータベース間の最大接続数。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	50	5 - 15000

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Fetch Size データベースドライバに同時に取得する行数を通知。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	120	—
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Trace SQL データベースに送出するすべての SQL をトレースします。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	false	true/false
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Renewable Free Limit リースの更新に利用可能な最少接続数。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	3	3 - 5

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Renewable Leases 偽であれば、各接続は MaxLeaseDuration までのみリースされ r ます。 真であれば、データベースステートメントが MaxLeaseDuration 時間に完了されれば、接続リースは更新されます。真の場合は、SQL ステートメントが MaxLeaseDuration 期間内に終了する限り、コードは必要だけ接続を保持することができます。真の場合、MaxLeaseDuration 期間内に SQL ステートメントが発行されないか、同期間内に 1 つのステートメントの実行が完了しないと、接続は切断されます。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	PMR - false PML - false PMT - true	true/false
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Maximum Lease Duration 切断される前に、データベース接続がリースされる最大時間。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	PMR - 2m PML - 10m PMT - 10m	PMR - 5s - 4h PML - 5s - 6h PMT - 5s - 6h
Database/Instance/Group Server/Protocol GroupServer のプロトコル	ソケット	http、https、ソケット
Database/Instance/Group Server/Server GroupServer ホストマシン名	servername	—
Database/Instance/Group Server/Port GroupServer ホスト listen ポート	9002	—
Database/Instance/Group Server/URL GroupServer サブレット URL。	http:// servername	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Methodology Management/Name このデータベースインスタンス名。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/Description このデータベースインスタンスの説明。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/URL データベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。	—	—
Oracle の例： jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz		
SQL の例： jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz;		
x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名		
Database/Instance/Methodology Management/User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/Public Group ID データベースとの接続を確立するために使われるグループ ID	1	—
Database/Instance/Methodology Management/データベース接続名 メソドロジーからプロジェクトプランを作成するため、Project Architect のジョブサービスで使われる DB 接続名	MMDB	—
Database/Instance/Methodology Management/接続プール [MMR] / サイズ変更レート このタイムアウト時間後に、システムはデータベース接続数を最後のデータベース最大同時接続数と同じ値に調整します。	4m	4m - 12h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Maintenance Frequency リースが最大期間を超えないことを確認する保守の実行頻度。	1m	10s - 1h
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Lease Request Wait Timeout データベース接続要求が待機する時間。	30s	5s - 2h
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Maximum Connections サーバとデータベース間の最大接続数。	50	5 - 15000
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Fetch Size データベースドライバに同時に取得する行数を通知。	120	—
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Trace SQL データベースに送出するすべての SQL をトレースします。	false	true/false
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Renewable Free Limit リースの更新に利用可能な最少接続数。	3	3 - 5
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Renewable Leases 偽であれば、各接続は MaxLeaseDuration までのみリースされ r ます。 真であれば、データベースステートメントが MaxLeaseDuration 時間に完了されれば、接続リースは更新されます。真の場合は、SQL ステートメントが MaxLeaseDuration 期間内に終了する限り、コードは必要なだけ接続を保持することができます。真の場合、MaxLeaseDuration 期間内に SQL ステートメントが発行されないか、同期間内に 1 つのステートメントの実行が完了しないと、接続は切断されます。	false	true/false
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR]/Maximum Lease Duration 切断される前に、データベース接続がリースされる最大時間。	2m	5s - 4h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Content Repository/URL データベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。 Oracle の例 : embedded://jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz SQL の例 : embedded://jdbc:sqlserver://xxx:yyy;database=zzzz; x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名	—	—
Database/Instance/Content Repository/Database User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Database Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Repository Home コンテンツリポジトリのファイルが保存される場所。場所を指定するか名前を入力すると、Bootstrap ホームディレクトリにフォルダが作成されます。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Admin User Name コンテンツリポジトリのアプリケーション管理者ユーザ名。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Admin Password コンテンツリポジトリのアプリケーション管理者のパスワード。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Enable Connection Pooling コンテンツリポジトリへの共有データベース接続プールを提供します。c3po 接続プールを利用します。	true	true/false

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Database/Instance/Content Repository/Maximum Connections リポジトリ接続プールとデータベース間の最大接続数。	25	2-5000
Database/Instance/Workflow Repository/URL データベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。	—	—
Oracle の例 : jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz		
SQL の例 : jdbc:sqlserver://xxx:yyy;database=zzzz;		
x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名		
Database/Instance/Workflow Repository/User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。	—	—
Database/Instance/Workflow Repository/Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。	—	—
Database/Instance/Workflow Repository/Enable Connection Pooling ワークフローシステムへの共有データベース接続プールを提供します。c3po 接続プールを利用します。	true	true/false
Database/Instance/Workflow Repository/Maximum Connections ワークフローリポジトリ接続プールとデータベース間の最大接続数。	25	1-5000
Database/Instance/Workflow Repository/Timeout 削除される前に接続がプールされ続ける秒数（ただし使用されない）。ゼロを入力すると、アイドル状態の接続は切断されません。	1m	5s-1h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Workflow Repository/Connection Test Period アイドル状態のすべての接続がテストされる時間(秒)。ゼロを入力すると、接続はテストされません。	5m	5s-1d
Database/Instance/Session Settings/Setting 1-5 カーソルの共有、ルールベースモード、SQL トレースなどを確立するために使われる、「セッションの変更」コマンドこれらのフィールドの無効な設定は無視されます。	—	alter session set _ = _
Database/Instance/Cost Based Optimization Settings/有効 真の場合は、コストベースの最適化を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/Cost Based Optimization Settings/Log File Name Primavera ホームで作成された CBO SQL ログファイル名。	—	—
Database/Instance/Cost Based Optimization Settings/Dump Matching SQL 特定の SQL ステートメントの QUERYLIB テーブルで整合性のある SQL をダンプする場合は、真に設定します。 特定の SQL ステートメントの QUERYLIB テーブルで整合性のない SQL をダンプする場合は、偽に設定します。	false	true/false

[スレッドプール設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Thread Pool/Number of Threads サーバスレッド数	25	2-300
Thread Pool/Maximum Task Duration 1つのタスクにスレッドを使用することができる最大時間。	3m	10s - 24d
Thread Pool/Maximum Long Running Task Duration 長時間実行タスクにスレッドを使用することができる最大時間。	5m	10s - 24d
Thread Pool/Maintenance Frequency スレッドの時間超過を確認する頻度。	45s	15s - 24d

[ログ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Log/Console Logger/Severity Level コンソールロガーのログ重要度レベル。 範囲は、包含関係にあります。例えば、「 デバッグ 」ですべてのメッセージをログすることを選び、「 警告 」には警告とエラーレベルのメッセージを含むことができます。	エラー	デバッグ、情報、警告、エラー
Log/Console Logger/Enabled コンソールロガーを有効にします。	false	true/false
Log/File Logger/Archive Size ログファイルがアーカイブされるようになるまでの最小サイズ (Kb)。	1024	1024 - 2073600000
Log/File Logger/Severity Level HTML ロガーのログ重要度レベル。 範囲は、包含関係にあります。例えば、「 デバッグ 」ですべてのメッセージをログすることを選び、「 警告 」には警告とエラーレベルのメッセージを含むことができます。	エラー	デバッグ、情報、警告、エラー
Log/File Logger/Number of Archive Files 使用される最大ログファイル数。既定ファイル名は、WebAccessLog0.html から WebAccessLog5.html です。	6	2 - 2073600000
Log/File Logger/HTML HTML としてログ。	true	true/false

[ログ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Log/File Logger/Enabled HTML ロガーを有効にします。	true	true/false
ログファイルは、以下のロケーションの WebAccessLogs フォルダに作成されます。 Windows 上の JBoss では、 <webaccesshome>¥WebAccessLogs Red Hat Enterprise Linux 上の JBoss では、 /mount_point/<webaccesshome>/AppServer/ WebAccessLogs Windows 上の WebLogic では、 <webaccesshome>¥WebAccessLogs Solaris 上の WebLogic では、 /mount_point/<webaccesshome>/WebAccessLogs Windows 上の WebSphere では、 <webaccesshome>¥WebAccessLogs Red Hat Enterprise Linux 上の WebSphere では、 /mount_point/WebSphere/AppServer/WebAccessLogs		
Log/Email Logger/SMTP Host E メールメッセージを送信する SMTP サーバ。	—	—
Log/Email Logger/From Email Address 送信メッセージをログしたい E メールアドレスに設定します。	—	—
Log/Email Logger/To Email Address 送信メッセージをログする宛先の E メールアドレスに設定します。	—	—
Log/Email Logger/Email subject 既定の E メール件名です。	P6 Web Access	—
Log/Email Logger/Enabled E メールロガーを有効にします。	false	true/false
Log/Asynchronous パフォーマンス向上のため、メッセージを非同期にログします。	true	true/false

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Application/Prototype User 新規 P6 Web Access ユーザの既定ダッシュボードとグローバル設定の作成と保存を行うために利用されるプロトタイプユーザログイン。	—	—
Application/Ignore Daylight Savings Time 夏時間を有効にするには、「偽」と設定します。	true	true/false
Application/Timesheet URL タイムシートプログラムを起動する URL	/action/ launchTimesheetSeemlessly	—
Application/Timesheet Codebase タイムシートアプリケーション Web サイトの URL	server/GroupServer	—
Application/Internet Explorer Java Plugin URL Internet Explorer ユーザが、Java Plug-in (JRE) をダウンロードするための URL。	セットアップ時にインストールされるプラグインバージョン 1.6.0_07 に既定設定されます。	—
Application/FireFox Java Plugin URL Firefox ユーザが、Java Plug-in (JRE) をダウンロードするための URL。	セットアップ時にインストールされるプラグインバージョン 1.6.0_07 に既定設定されます。	—
Application/Internet Explorer Java Plugin Version Internet Explorer のアプレットに使われる JRE のバージョン。	—	—
Application/FireFox Java Plugin Version Firefox のアプレットに使われる JRE のバージョン。	—	—
Application/Maximum Transactions for Excel Import .xls または .csv ファイルから一度にインポートすることができる、最大トランザクション数 (アクティビティまたはリソース)。	2000	100 - 2000
Application/Maximum Excel Import File Size インポート試行の際、アップロードされる最大の .xls または .csv サイズ (KB)	1048	64 - 4096

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Application/Allow Auto-Summarize Option リソーススタッフユーザプリファレンスで自動サマリを許容するには、「真」と設定します。	true	true/false
Application/Database Dropdown Key ログインページでデータベース選択制御を可能にするキーワード。URL パラメータ、db=keyword として渡されます。キーワードを不要にするときは、これを空白文字列にします。	—	—
Application/Logout URL ユーザが P6 Web Access のバナー内のログアウト・終了アイコンをクリックして終了したときに特定の URL に転送します。有効な URL なら何でも使用できます。URL が指定されない場合、P6 Web Access は、ユーザを P6 Web Access 起動ページに転送します。	—	—
Application/Compress Applet Communication アプレットとサーバ間の通信を圧縮する場合は、真に設定します。	true	true/false
Application/Compress HTML Content html、js、と css ファイル、および Ajax コンテンツを始めとする P6 Web Access で生成された HTML 関連のコンテンツを圧縮する場合は、真 (true) と設定します。	true	true/false
Application/Maximum Projects in Portfolio フィルタを使ってポートフォリオを作成する場合の、最大プロジェクト作成数。	1000	1 - 100000
Application/Maximum Loaded Resource Planning Projects リソース計画集計表で開くことができる最大プロジェクト数。	100	1 - 1000
Application/Maximum Portlets per Dashboard ダッシュボードホームページのダッシュボードに表示することができる、最大ポートレット数。	12	1 - 50
Application/Maximum Projects per Portfolio View ダッシュボードのポートフォリオ分析タブのポートフォリオ画面およびポートフォリオ表示ポートレットに表示することができる最大プロジェクト数。	5000	1 - 20000

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Application/Maximum Activities per Activity View プロジェクトセクションのアクティビティタブに表示することができる最大アクティビティ数。5000 を超える場合、Java Applets 設定（以下）に割り当てられる最大メモリは 128 以上でなくてはなりません。	2000	1 - 15000
バージョン 1.6.0_10 よりも前の JRE を使用する場合、表示される最大アクティビティ数は 5000 になります。Primavera ではユーザがアードバリューまたはベースライン関連情報を表示する必要がある場合には最大値を 5000（以下）に設定するようお勧めします。さもなければ、データベースのタイムアウトが発生します。		
Application/Maximum memory allocated to Java Applets Java Applets で使用できる最大メモリ容量（メガバイト）。アクティビティ表示設定（上記）ごとの最大アクティビティ数が 5000 よりも大きい場合、メモリ割当は 128 以上に設定する必要があります。	64	64-1024
この設定は、JRE バージョン 1.6.0_10（以降）を使用している場合にのみ有効です。		
Application/Maximum MRU List Items 最近使用 (MRU) リストに表示できる最大項目数。	5	1 - 10
Application/Maximum Project Activity Codes [アクティビティコード]セクションの[プロジェクト]タブで選択、表示できるプロジェクトの最大数。	350	1-350
Application/Maximum Activity Code Values アクティビティコードごとに作成または選択できるアクティビティコード値の最大数。	100000	1-1m
Application/Custom Portlet URL Encryption Key カスタムポートレットユーザパスワード用の暗号キー。キーを割り当てると、カスタムポートレットの表示のため URL の一部として渡されるパスワードを暗号化します。値を割り当てない場合は、パスワードは暗号化されません。値は、どんな英数字または、文字列でも構いません。暗号化には、Sun/Blowfish アルゴリズムを使用します。	—	—
Application/Transaction Monitor Execution Interval トランザクションがオフラインになっていないことを確認する、トランザクション監視のジョブ実行頻度。	10m	1s - 24d20h31m23s647

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Enable Cross Site Scripting Filter クロスサイトスクリプトフィルタを有効または無効にします。この設定の値を変更した後、サーバを再起動する必要はありません。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Issue Notifications 版数が追加または変更された場合、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Invitation Notifications 招待が追加された場合、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Initiation Notifications 招待が保留された場合の、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false
Application/Notifications/Override Notification Email from User 常にシステムの E メール発信者アドレスを使用する場合は、真に設定します。通知を発信するユーザの E メールアドレスが設定されていてそれを使用する場合は、偽に設定します。	false	true/false
Application/Notifications/Notification from Email User NotificationsFromEmailOverride が真か、ユーザの E メールアドレスが設定されていないときに、使われる通知の発信 E メールアドレス	—	—

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/License Service/Recalculate Rate 全ライセンス数の変更があるか、データベースをチェックする頻度。	5m	10s - 10m
Services/License Service/Update Rate ライセンス計数に関してビジネスルールエンジンがデータベースと同期する頻度。	30s	100 - 1m
Services/License Service/Expiration Check Rate ライセンスの有効期限を確認する頻度。	2m	500 - 15m

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Services/Timestamp Service/Refresh Rate テーブル変更通知が必要か、データベースがクエリを受ける頻度。	1m	15s - 1h
Services/Registry Service/Refresh Rate ビジネスルールエンジンのステータスでデータベースを更新する頻度。	1m30s	15s - 1h
Services/Registry Service/Stale Period ビジネスルールエンジンの動作停止を示す休止時間	4m	1m - 10m
Services/Registry Service/Port 動作停止のビジネスルールエンジンの再生要求を受け付ける TCP/IP ポート。	9192	1024 - 65535
Services/Next Key Service/Refresh Rate nextkey キャッシュがリフレッシュされる頻度。	1m	15s - 1h
Services/Next Key Service/Maximum Cached Keys テーブルごとのキャッシュされる最大 nextkey	10	1 - 100
Services/Performance/Use Enterprise Summary リソースとロールにエンタープライズレベルのサマリデータを使用します。 この設定では、リソース管理ヒストグラムを作成するのに、EPS レベルのレコードか、プロジェクトレベルのレコードを使用するのかを指定します。真の場合は、ヒストグラムに 1 つだけ (EPS レコード) のレコードを使うので性能がよくなります。偽の場合は、ヒストグラム図を作成するのに、より多くのレコード (プロジェクトレコード) を使用するのので、性能は遅くなります。しかし、偽に設定してプロジェクトレコードを使用したときの方が、ヒストグラムデータはより正確になることに注意してください。	false	true/false
Services/Performance/Maximum Summary Node Count リソース使用または、リソース分析のような表示に示すサマリデータのしきい値。ノードに含まれる子要素の数がこの値を超えた場合は、データは表示されません。	1000	1-50000
Services/Web Scheduler/Enabled 真の場合は、P6 Web Access から Web スケジューラーを使ってジョブのスケジュールを行います。偽の場合は、スケジュールには、ジョブサービススケジューラーを使用します。	true	true/false

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Services/Web Scheduler/Scheduling Interval Web スケジューラーが次のジョブをスケジュールするまで待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Web Scheduler/Concurrent Schedulers このサーバでスケジュールのために使われるプロセス (アクティブなスケジューラー) 数。値が 0 (ゼロ) の場合は、このサーバでスケジュールが行われないことを示します。	2	0-20
Services/Web Scheduler/Active Scheduler Mode 真の場合は、ジョブはスケジュールされるまで継続的に処理されます。偽の場合は、各ジョブはスケジュールされた間隔で処理されます。	true	true/false
Services/Web Scheduler/ASAP Cleanup Rate 完了した WebASAP スケジューラージョブがデータベースから削除される時間。	1d	1h - 24d20h31m23s647
Services/Store Period Performance/Enabled 期間実績を保存するサービス。真の場合は、この値が指定の報告期間に保存されます。	true	true/false
Services/Store Period Performance/Execution Interval 期間進捗ジョブをチェックするのにサービスが待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Store Period Performance/Concurrent Tasks このサーバで期間実績サービスのために使われるプロセス (アクティブなスケジューラー) 数。値が 0 (ゼロ) の場合は、このサーバでサービスが受けられないことを示します。	2	0 - 20
Services/Sync Actual This Period/Enabled 実際の値と ActualThisPeriod 値を同期するサービス。真の場合は、当期 (ThisPeriod) の実際のユニット数とコストを再計算します。	true	true/false
Services/Sync Actual This Period/Execution Interval SyncActualThisPeriod ジョブをチェックするまでサービスが待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Sync Actual This Period/Concurrent Tasks このサーバで SyncActualThisPeriod サービスのために使われるプロセス数。値が 0 (ゼロ) の場合は、このサーバでサービスが受けられないことを示します。	2	0 - 20

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Services/Project Hierarchy Cache/Cache Policy 使用するキャッシュポリシー。キャッシュポリシーは、キャッシュ内ののデータ量を計り、メモリを空けるためどのデータを削除するかを決めます。	PRR	FIFO, LRU, JVM, PRR, PRFIFO, PRLRU, PRCC
許容値は、 FIFO (First In First Out (先入れ先出し) プロジェクトは、メモリに保存された順序で消去されます) LRU (Least Recently Used (最近の使用頻度が最も少ない) プロジェクトがより使用頻度が高いプロジェクトより先にキャッシュから消去されます) JVM (Java Virtual Machine Managed (Java バイナリ管理) - は、キャッシュ要素をソフト参照に使用します。ソフト参照で使われるメモリは、JVM で必要と判断されます) PRR (キャッシュから消去されるプロジェクトは無作為に選ばれます) PRFIFO (Periodic Refresh First In First Out - FIFO と同じですが、ポリシーは保守頻度に基づいて実行されます) PRLRU (Periodic Refresh Least Recently Used - LRU と同じですが、ポリシーは保守頻度に基づいて実行されます) PRCC (Periodic Refresh Clear Cache- 保守頻度ポリシーに従い、CacheLimit を無視してキャッシュ全体を消去します。)		
Services/Project Hierarchy Cache/Cache Limit メモリに保存する最大プロジェクト数。	5000	1000 - 30000
Services/Project Hierarchy Cache/Maintenance Frequency 指定されたキャッシュポリシーを適用する頻度。キャッシュポリシーの適用では、キャッシュにより使われているメモリの再要求が行われる可能性があります。	5h	1m - 24d
Services/Collaboration Synchronization Service/Synchronization Interval コラボレーション同期サービスが実行される間隔。同期サービスにより、削除されたプロジェクトのドキュメントやワークフローが削除されます。	1h	1m - 24d20h31m23s647
Services/Asynchronous Jobs/Purge Interval 長期に実行されるジョブレコードをデータベースから除去する頻度。	1h	0 - 24d20h31m23s647
Services/Asynchronous Jobs/Grace Time パージ時に消去されるべき長期実行ジョブレコードの最小経過時間	1d	0 - 24d20h31m23s647

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Mail Service/Email Notification Server タイムシートの承認用の E メール通知サーバのホスト名または IP アドレス。	—	—
Services/Mail Service/SMTP Port SMTP サーバの TCP/IP ポート。	25	1 - 65535
Services/Mail Service/Send Interval 待ち合わせのメールメッセージが送出される頻度。	1m	0 - 24d20h31m23s647
Services/Mail Service/Maximum Queue Length メールメッセージ待ち合わせ Q の最大長。	250	0 - 2147483647
Services/Mail Service/Authorized User Name このメールサーバからメールを送出するときに使用するアカウント名。	—	—
Services/Mail Service/Authorized User Password このメールサーバからメールを送出するときに使用するアカウントのパスワード。	—	—

[性能監視設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Performance Monitor/Enabled 真の場合、性能監視パケットが送出されます。	false	true/false
Performance Monitor/Monitor Host 性能監視パケットの送出先 IP または マシン名	localhost	—
Performance Monitor/Monitor Port 性能監視パケットの送出先ポート	6990	1024 - 65535
Performance Monitor/Update Interval 性能監視パケットが送出される頻度。	1s	250 - 1m

[トレース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Tracer/Enabled 真の場合は、デバッグメッセージはトレーサアプリケーションに送出されます。	false	true/false
Tracer/Server Name トレーサ情報の送出先のホスト名または、IP アドレス。	localhost	—
Tracer/Port トレーサソケット接続に使うポート	9210	1024-65535
Tracer/Use Background Send Thread 真の場合は、バックグラウンドスレッドを使って TCP メッセージをトレーサに送出します。	true	true/false

[Integration API サーバの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Integration API server/RMI/Registry Port RMI レジストリのポート。値は通常、少なくとも 1024 に設定されます。	9099	1024 - 65535
Integration API server/RMI/Enable RMI サーバを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable Compression 圧縮サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable SSL SSL サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable Standard Service 標準サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable HTTP Service HTTP トンネルモードを有効にする設定。	false	true/false
Integration API server/RMI/Enable HTTPS Service セキュアな HTTP (SSL) トンネルモードを有効にする設定。	false	true/false

[Integration API サーバの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
Integration API server/RMI/Compression Service Port 圧縮サービスモードを使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/SSL Service Port SSL サービスモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/Standard Service Port 標準サービスモードを使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/HTTP Service Port HTTP トンネルモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/HTTPS Service Port セキュアな HTTP トンネルモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。	0	0 - 65535
Integration API Server/Session Timeout アイドル状態のクライアント接続が切断されるまでの時間。	120	1 -24d

アプリケーションサーバプラグインの実装

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている `¥Documentation¥<language>¥Tested Configurations` フォルダを参照してください。

JBoss、WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバには、さまざまなプラグインが提供されています。これにより、アプリケーションサーバが提供する以上の Web サーバのフロントエンドを設定することができます。Web サーバのプラグインを設定する手順については、それぞれのアプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

分散ジョブサービスの設定

本章の内容：

[分散ジョブサービスの概要](#)

[分散ジョブサービスのインストール](#)

[Windows ファイアウォールの無効化](#)

[分散ジョブサービスのアクセス権の設定](#)

[分散ジョブサービスの DCOM の設定](#)

[コントローラと DJS サーバの設定](#)

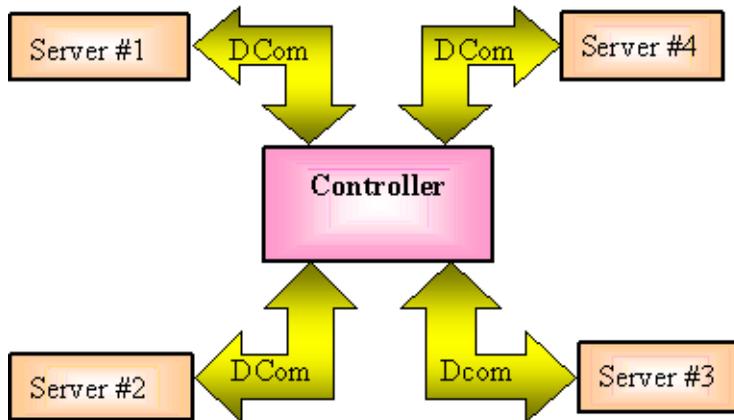
[ジョブサービスレジストリの設定](#)

分散ジョブサービス (DJS) は、同時に複数のジョブサービスサーバでジョブを独立に実行するために使用します。複数のマシンにジョブを分散し、分散ジョブサービスを管理するため、コントローラサーバを設定することができます。

分散ジョブサービスの概要

分散ジョブサービス (DJS) は、制御マシンが複数のジョブサービスを実行するマシン (サーバ) を管理する、ジョブサービスの拡張機能です。非分散ジョブサービスは、単一のマシンでジョブが実行されます。非分散ジョブサービスを複数のマシンにインストールすることは、各サービスが各マシンで独立に実行されることになります。

分散ジョブサービスでは、指定されたサーバは、以下の図に示されるように DCOM 通信によるコントローラからの要求でジョブを実行します。これにより、ジョブサービスの負荷は複数のマシンに分散されます。必要に応じてコントローラもジョブを実行することができます。



本セクションで述べる準備のほか、Project Architect ジョブサービスの実行には、P6 Web Access 用のデータベースを設定する必要があります。171 ページの「Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定」を参照してください。

コントローラと DJS サーバのインストールと設定を準備します。
 コントローラとサーバに DJS をインストールし、設定する前に以下の作業を行います。

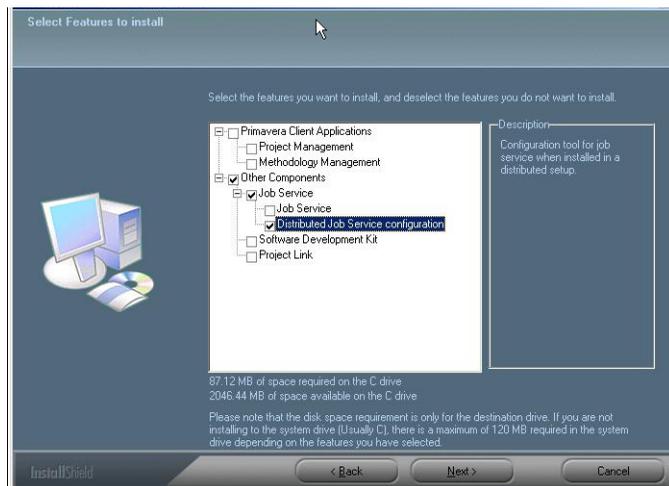
- コントローラとすべての DJS サーバで、環境変数の「Temp」と「TMP」変数を定義します (ユーザ変数とシステム変数の両方)。
- コントローラとすべての DJS サーバのシステムクロックを同期させ、ログファイルに同一のタイムスタンプが用いられるようにします。

分散ジョブサービスのインストール

分散ジョブサービスのインストール前に、制御サービスと DJS サーバ（最大 10 台）を特定します。237 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」で説明されているように、ジョブサービスを各マシンにインストールします。コントローラでは、次図に示すように、分散ジョブサービスオプションを選択します。インストールが完了したら、このセクションに戻り、ユーザアクセスを設定します。



Primavera は、コントローラとすべての関連サーバを同じネットワークドメインに置くことをお勧めします。また、各マシンの OS は、Windows Server 2003、Windows Server 2008 または Windows XP で、ファイアウォールは無効にしておかなければなりません。



Windows ファイアウォールの無効化

Windows ファイアウォールは、Windows 2003 サーバと XP では既定で有効になっていますが、DCOM 接続機能を妨げます。コントローラと各 DJS サーバでファイアウォールを無効にする必要があります。

Windows ファイアウォールを無効にするには、以下のステップを実行します。

- 1 Windows のコントロールパネルから、Windows ファイアウォールを選択します。
- 2 [Windows ファイアウォール] ダイアログの [全般] タブで、[無効] を選択し、[OK] をクリックします。

分散ジョブサービスのアクセス権の設定

DCOM と DJS の設定前に、ジョブサービスの起動、レジストリとコントローラのパス情報へのアクセス、ネットワークにわたるアプリケーションへのアクセスが可能な権限をもったユーザを作成する必要があります。

コントローラと DJS サーバが属するドメインを制御するサーバで、以下のステップを実施します。

- 1 ユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を作成します。
- 2 コントローラと各 DJS サーバに対し、作成したユーザグループにユーザ名を追加します。例えば、以下のようになります。

コントローラ名 : ControllerUser

サーバ 1 の名前 (DCOM サーバ) : Server1User

サーバ 2 の名前 (DCOM サーバ) : Server2User

サーバ 3 の名前 (DCOM サーバ) : Server3User

- 3 コントローラと各 DJS サーバで、作成したグループをローカル管理者グループに追加します。
- 4 [DCOM 設定] ダイアログの [セキュリティ] タブで、作成したグループを各カスタム許可に追加します。

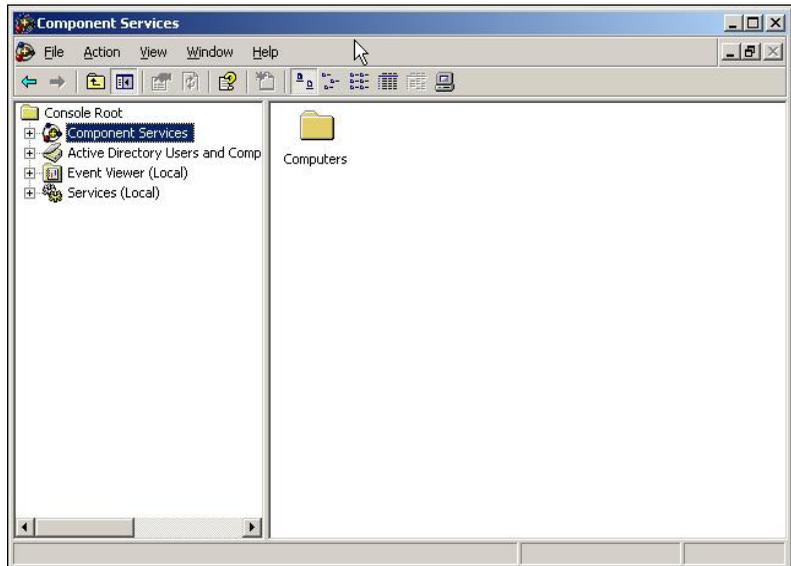


上記の例は、マルチユーザの場合です。シングルユーザアクセスの設定も可能です。例えば、シングルドメインユーザ（例えば、ControllerUser）を作成し、そのユーザをコントローラと各 DJS サーバのローカル管理者グループに追加することができます。その上で、DCOM の設定時に上記の PrmAdmins ユーザグループの代わりに ControllerUser を使用します。

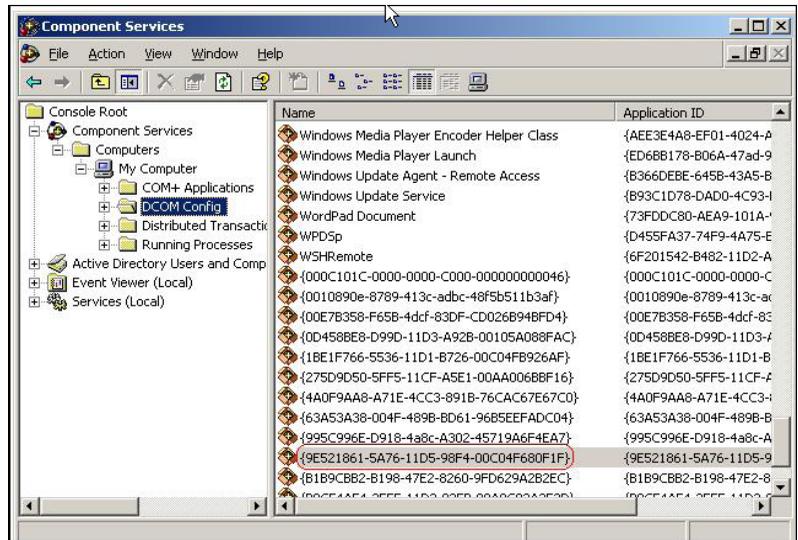
分散ジョブサービスの DCOM の設定

Windows Server 2003、Windows Server 2008 または Windows XP Professional 上で実行される分散ジョブサービス用に DCOM を設定するには、コントローラと各 DJS サーバで以下のステップを実施します。

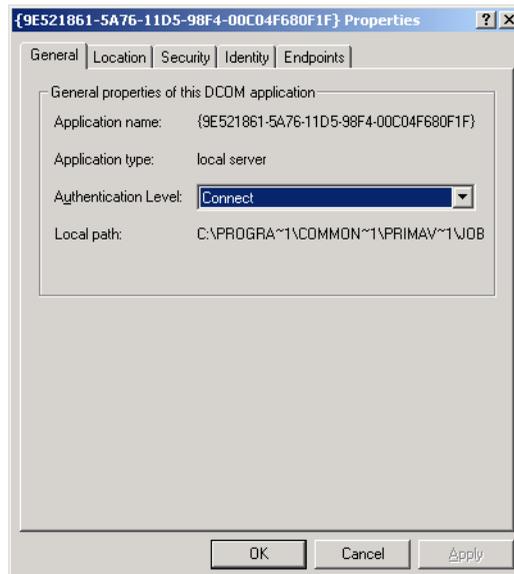
- 1 コマンドライン（または、スタートからユーティリティの実行）で、**dcomcnfg** を実行します。[コンポーネントサービス] ダイアログが表示されます。



- 2 [コンポーネントサービス] ダイアログで、左パネルのツリーの [コンポーネントサービス]、[コンピュータ]、[マイコンピュータ]、[DCOM の構成] をクリックして、展開します。



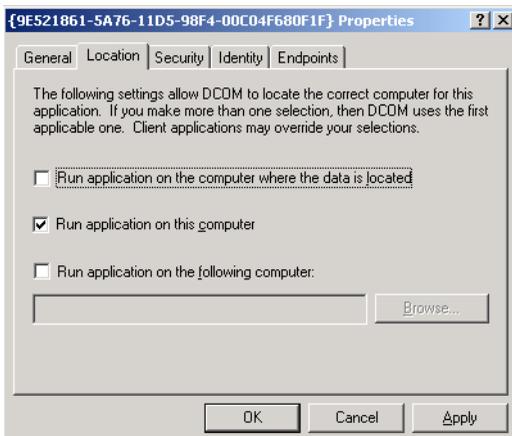
- 3 右パネルの {9E521861-5A76-11D5-98F4-00C04F680F1F} エントリを右クリックして [プロパティ] を選択します。
- 4 [プロパティ] ダイアログ、[全般] タブで [認証レベル] に「接続」を設定します。



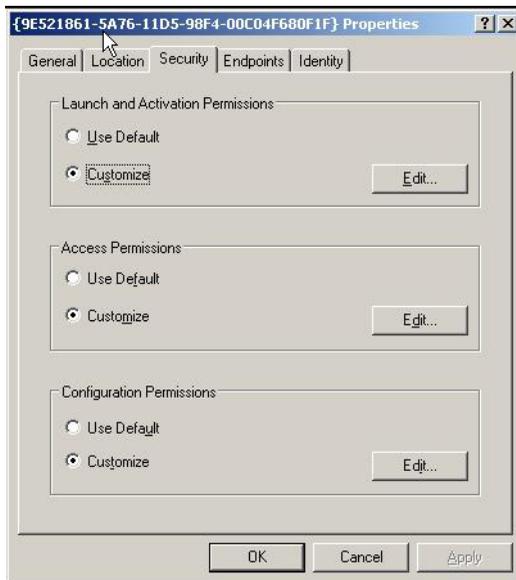


コントローラとすべての DJS サーバは、必ず同じ認証レベルに設定してください。[分散 COM 設定プロパティ] ダイアログの [既定のプロパティ] タブで、既定の認証レベルに「接続」を設定することもできます。

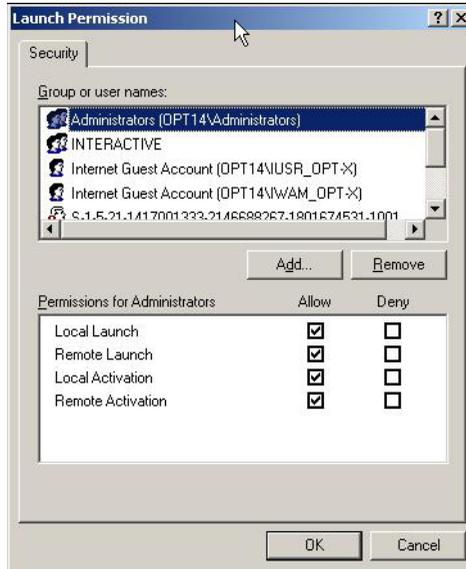
- 5 [プロパティ] ダイアログの [場所] タブで [このコンピュータでアプリケーションを実行する] というオプションを選択します。



- 6 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、次図に示すようにすべての許可タイプでカスタマイズオプションを選択します。



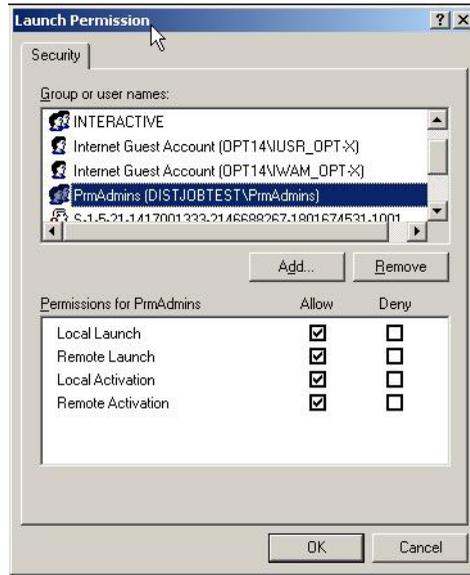
- 7 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、起動とアクティベーション許可に関する [編集] ボタンをクリックします。
- 8 [起動許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、[Add] をクリックします。



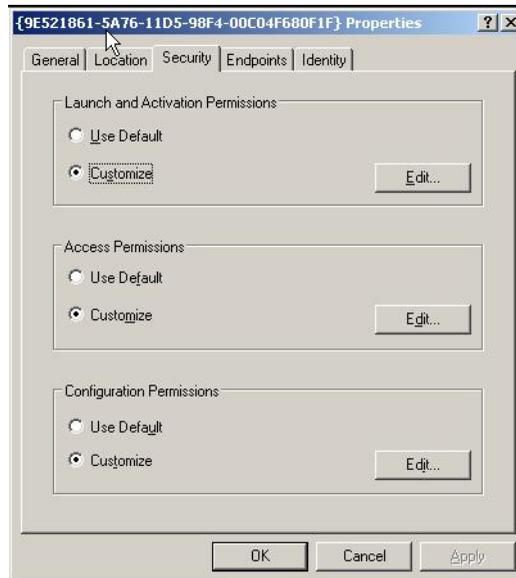
- 9 ユーザ、コンピュータまたはグループの選択ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



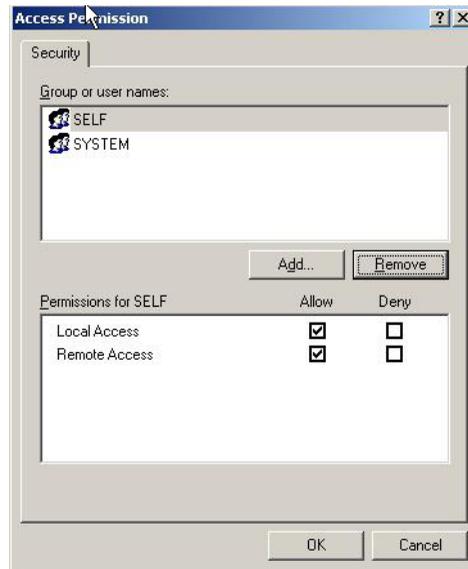
- 10 [起動許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように、すべての許可に対して「許可」を選択します。「OK」をクリックします。



- 11 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、アクセス許可の [編集] ボタンをクリックします。



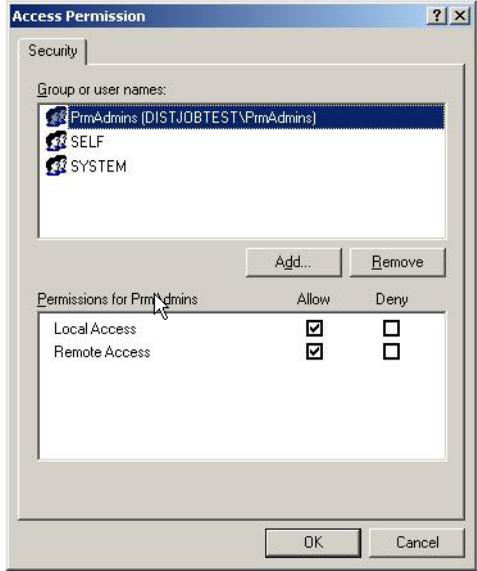
- 12 [アクセス許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、[Add] をクリックします。



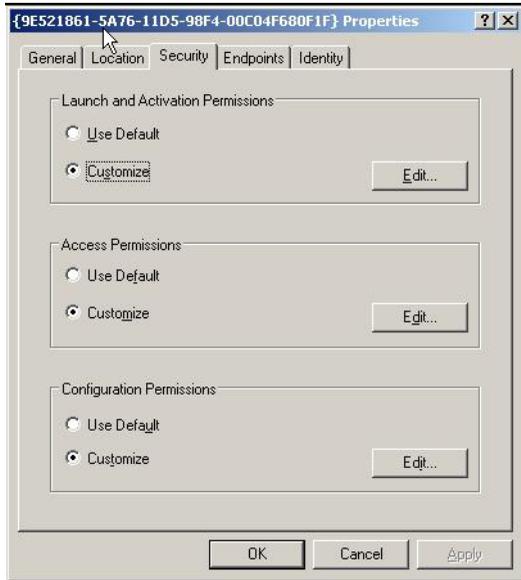
- 13 [ユーザ、コンピュータまたはグループの選択] ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



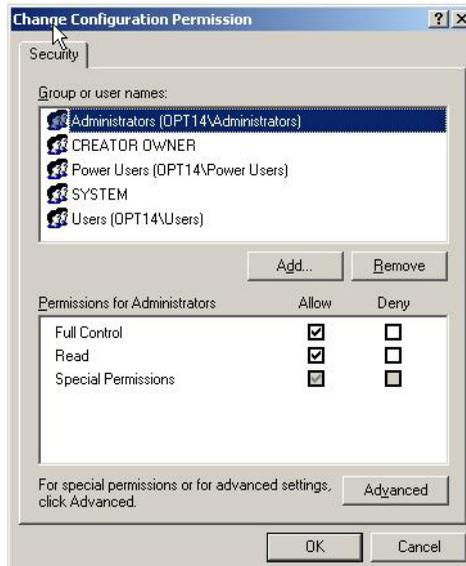
- 14 [アクセス許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように、すべての許可に対して「許可」を選択します。そして [OK] をクリックします。



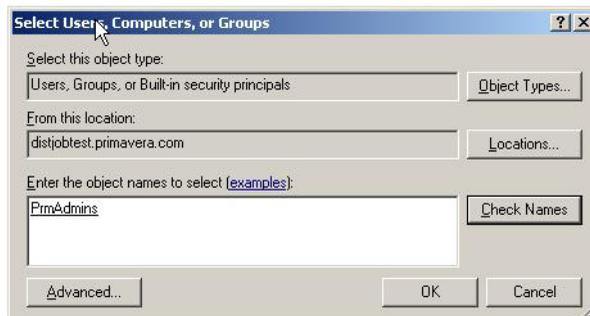
- 15 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、起動とアクティベーション許可に関する [編集] ボタンをクリックします。



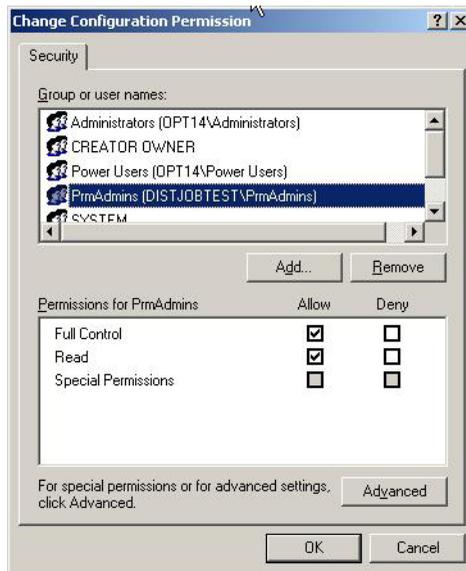
- 16 [権限の構成を変更する]ダイアログの[セキュリティ]タブで、[Add]をクリックします。



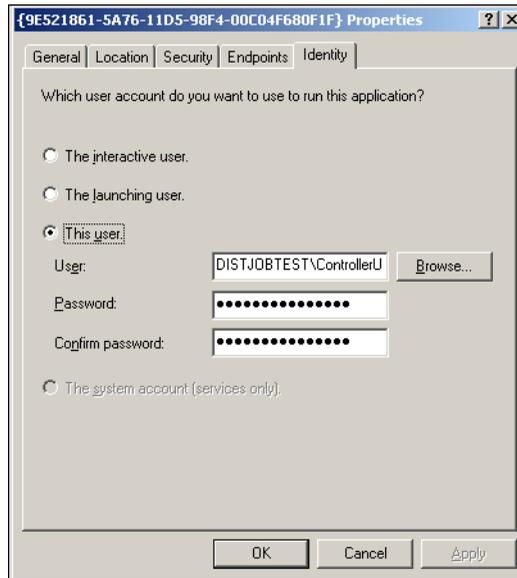
- 17 [ユーザ、コンピュータまたはグループの選択]ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



- 18 [権限の構成を変更する] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように許可を設定します。そして[OK]をクリックします。



- 19 [プロパティ] ダイアログ、[ID] タブで「このユーザ」オプションを選択します。使用中のマシンで管理者特権をもつユーザのパスワードを入力します。

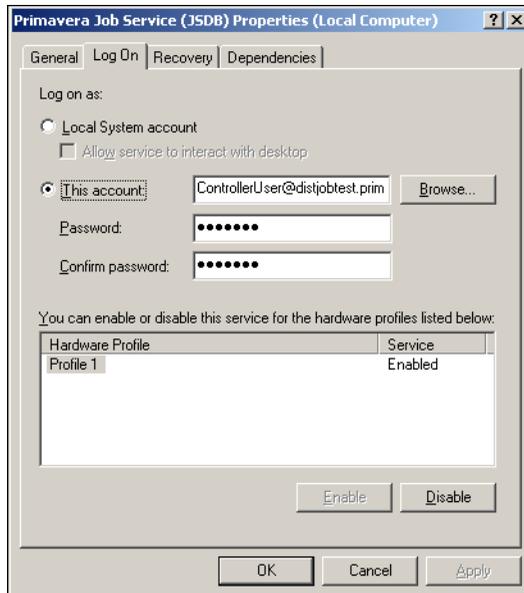


- 20 [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。
- 21 コントローラで、サービスコントロールパネルを起動します。
- 22 [サービス] ダイアログで、[Primavera ジョブサービス (JSDB)] をダブルクリックし、[プロパティ] ダイアログを開きます。

- 23 [プロパティ] ダイアログで、[このアカウント] を選択し、コントローラの管理者ユーザのパスワードを入力します。



21 ~ 23 のステップにより、DJS はすべてのサーバに対する起動ユーザとして DCOM 設定で指定した管理者名とパスワードを使用します。



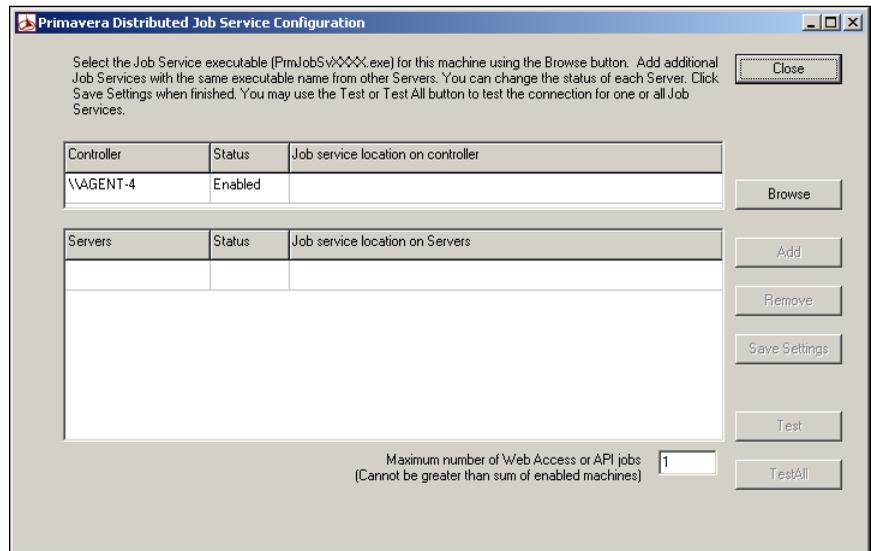
- 24 [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。

コントローラと DJS サーバの設定

分散ジョブサービス設定ツールを使って、コントローラと DJS サーバを設定します。手順に従って、設定ツールにアクセスし、コントローラと DJS サーバを設定してください。

- 1 コントローラで、以下の場所から DistributedJobsAdmin.exe を実行します。C:\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\JSConfig。

[Distributed Job Service Configuration] ダイアログが開きます (次図に示す)。

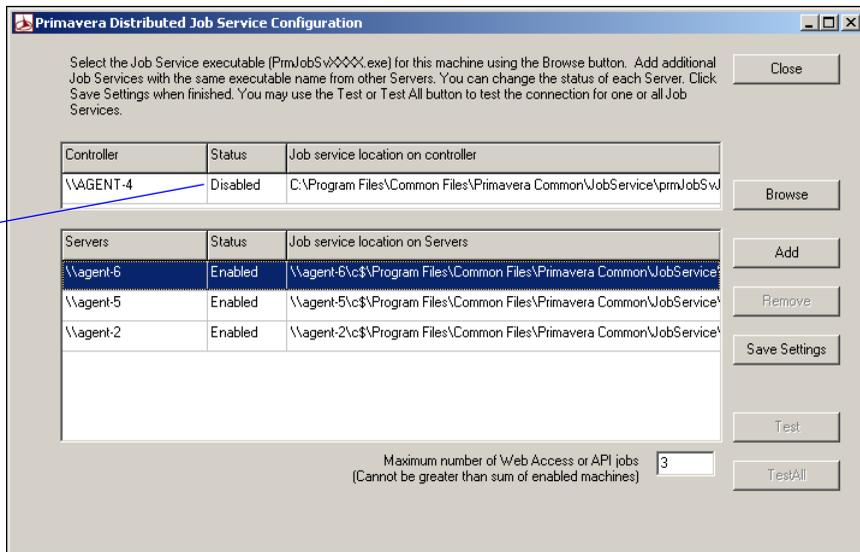


- 2 [Distributed Job Service Configuration] ダイアログで、[Browse] をクリックします。C:\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService フォルダにナビゲートし、PrmJobSvXXXX.exe を選択します。ここで、XXXX はデータベース接続の DB 接続名 (この例では、XXXX は次図に示すように JSDB です)。

3 [Distributed Job Service Configuration] ダイアログで、[Add] をクリックします。一覧の各サーバで該当の PrmJobSvXXXX.exe を選択します。

次図のような、[Distributed Job Service Configuration] ダイアログが開きます。

DJS を無効にするには、そのマシンで [Disabled] を選択します。この例では、コントローラはジョブを他のサーバで実行しますが、自身では実行しません。



 *すでに設定ツールを使用していれば、以前に設定したすべてのサーバがサーバの一覧に表示されます (前図の下部)。*

4 コントローラおよび各 DJS サーバのステータス (有効/無効) を設定します。

 *DJS ほどのマシンでも無効に設定することができます (例えば、DJS サーバだけでジョブを実行し、コントローラでは実行しない)。ただし、無効に設定したマシンにおいても、他に有効なマシンがない場合 (例えばネットワーク障害) は、ジョブが実行されます。*

5 [Test] をクリックし、DCOM 設定と PrmJob のインストールが各マシンで正しく動作していることを検証します。

-
- 6 [Maximum Number of Web Access or API jobs] フィールドに、0 から有効な DJS マシン数までの間の値を入力します。



[Maximum Number of Web Access or API jobs] の値に応じて、一度に実行できる P6 Web Access ジョブ数が決まります。この値は、Project Management モジュールでジョブ サービスダイアログを使って設定する、反復ジョブには影響しません。

- 7 [Save Settings] をクリックして閉じます。
- 8 コントローラとすべての DJS サーバを再開します。



コントローラが再開すると、ジョブスケジューリングの活動がイベントビューワに表示されます。すべてのジョブのログファイルは、コントローラのそれぞれのフォルダに置かれます（その他のサーバにはありません）。



コントローラと DJS サーバの再起動後に「206 ページの「分散ジョブサービスの DCOM の設定」」で実施した DCOM 設定を変更する場合は、変更したマシンを再起動する必要があります。

ジョブサービスレジストリの設定

(分散) ジョブサービスに適用するレジストリ設定とサマライザサービスを編集することができます (ジョブサービスと Project Management モジュールの両方で)。

(分散) **ジョブサービスレジストリ設定の編集** スタート、ユーティリティの実行で「regedit」とタイプして、レジストリエディタを開きます。レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。

My Computer ¥ HKEY_LOCAL_MACHINE ¥
SYSTEM ¥ CurrentControlSet ¥ Services ¥ P6JobSvXXXX ¥ Parameters
(ここで、XXXX はデータベース接続の DB 接続名です)。

以下の表にジョブサービスレジストリ設定の要約を示します。

[ジョブサービスの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
EstablishDBConnectionRetryCount スタートアップ時に接続を試みる回数。	3	1-10
MaxNumRecurringJobs 同時に実行できる反復 (Project Management) ジョブの最大数。	4	1- (最大数なし)
MaxNumNonRecurringJobs 同時に実行できる非反復 (P6 Web Access) ジョブの最大数。	1	1-5
NonRecurringJobCleanupRate 完了した P6 Web Access のジョブがデータベースから除去される頻度 (秒) (1 分から 7 日間)。	3600	60-604800

[ジョブサービスの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
NonRecurringJobRefreshRate P6 Web Access のジョブがデータベースからロードされる頻度 (秒)。	5	1-3600
RecurringJobRefreshRate Project Management ジョブがデータベースからロードされる頻度 (秒)。	600	60-1440
DeleteRemoteLog [test purposes only] 偽に設定されている場合、ログファイル「Prm*.tmp」は削除されません。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)

サマライザジョブのさらなる情報は、241 ページの「サマライザジョブと P6 Web Access について」を参照してください。

サマライザジョブのため、レジストリ設定を編集 スタート、ユーティリティの実行で「regedit」とタイプして、レジストリエディタを開きます。レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。

My Computer¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Primavera。

以下の設定のどれでも DWORD として設定し、既定の値を推奨値に変更することができます。



以下の設定は、ジョブサービスと Project Management モジュールに適用されます。通常、これらは性能の向上のために変更します。

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
NumProjectsSummarizedAtATime ジョブサービスまたは Project Management モジュールで同時に集計できるプロジェクト数。最高の性能を引き出すには、Primavera はこの値を 20 にすることをお勧めします。	1	1-xx
PreQuerySummarizablePct サマライザが分析するプロジェクトの集計に必要なしきい値のパーセンテージ下記に示す等式の値がしきい値より下回った場合、各プロジェクトは個別に集計対象となります。等式の値がしきい値より上回った場合は、すべてのプロジェクトが同時に集計と分析の対象になります。これを決定付けする等式を次に示します。 集計すべきプロジェクト数 / ユーザがアクセスできるプロジェクト数 * 100。	50	0-100
MaxDurationToSummarize 集計のためのアクティビティまたはアクティビティに割り当てられる、最大残り時間または元々の最大時間 (時間)。アクティビティまたはアクティビティの割り当ての残り時間がこのしきい値より長い場合は、集計中無視されます。すべてのアクティビティが集計されることを確実にするため、Primavera は設定値を 100000 とすることをお勧めします。	-1	—



次の設定も使用できます。しかし、これらの値は性能試験のとき以外、通常変更する必要はありません。

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
EnterpriseSummaries 真の場合は、EPS ノートが要約されます。 Project Management モジュールのみに適用します。 注：ジョブサービスは常に EPS ノードを集計します。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)
ResourceSummaries 真の場合、リソースは集計されます。 ジョブサービスと Project Management モジュールに適用されます。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
ForceEnterpriseSummaries 真の場合は、プロジェクトが集計されなくてもエンタープライズレベルの要約を強制します。 ジョブサービスのみに適用します。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)
EnterpriseCommit 処理したデータの行数に基づき、EPS サマリレコードのデータベースへのコミットする頻度を制御します。大規模のジョブを集計する場合に、性能を向上するのに便利です。 処理が完了すると EPS サマリレコードに値はコミットされません。 値を割り付けると、ジョブサービスと Project Management モジュールの両方に適用されます。	1000 Project Management モジュールには値なし	ジョブサービスには、1- (最大数なし)
PrmJobLogMemoryUsage 真の場合は、PrmJob のメモリ利用をメガバイトでログします。 ジョブサービスのみに適用します。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
RetrySleep 接続不良の場合に行うリトライの間隔（ミリ秒）。 ジョブサービスのみ適用します。	60000	—
MaxRetries 接続不良の場合の、最大リトライ回数。 ジョブサービスのみ適用します。	10	—
DumpSettings 真に設定すると、集計ジョブのためすべての設定を Job.txt ファイルにログします。 ジョブサービスのみ適用します。	0（偽）	0（偽） 1（真）

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲/値
<p>PreLoadTASKSUMFINForEPS EPS 全体を集計する前に全プロジェクトの TASKSUMFIN レコードをプレロードします。</p> <p>「load on demand」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TASKSUMFIN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。</p> <p>ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。</p>	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
<p>PreLoadTASKSUMFINForProject プロジェクトを集計する前に各プロジェクトの TASKSUMFIN レコードをプレロードします。</p> <p>「load on demand」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TASKSUMFIN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。</p> <p>ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。</p>	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
<p>PreLoadTRSRCSUMFN プロジェクトを集計する前に各プロジェクトの TRSRCSUMFN レコードをプレロードします。また、EPS 全体の集計中、一度にひとつのリソースまたはロールの TRSRCSUMFN レコードすべてをプレロードします。</p> <p>「ロード・オン・デマンド」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TRSRCSUMFN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。</p> <p>ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。</p>	1 (真)	0 (偽) 1 (真)

Primavera クライアントのインストールおよび設定

- 内容 :*
- クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール
 - 自動データベースアップグレード
 - 無人セットアップの作成と実行
 - データベース構成設定の変更
 - 認証モードの設定

本

パートを読んで、Primavera クライアントモジュール、その他のコンポーネントおよびスタンドアローン版のインストールと設定を行います。最初の「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」の章では、各モジュールとコンポーネントをクライアントワークステーションに設定する方法を説明します。

Primavera の旧バージョンからのアップグレードを行うには、「[自動データベースアップグレード](#)」を読んでください。ソフトウェアを自動インストール（無人セットアップ）する場合は、「[無人セットアップの作成と実行](#)」を参照してください。

モジュールのインストール後、「[データベース構成設定の変更](#)」を参照し、データベース構成ユーティリティを使用してデータベース接続情報の変更、ライセンス管理、ユーザパスワードの変更およびプライベートデータベースアカウントの設定を行う方法を理解します。ユーザがモジュールへアクセスする認証方法については「[認証モードの設定](#)」を参照します。

クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール

本章の内容：

データベースクライアントソフトウェアのインストール

旧バージョンのアンインストール
設定ウィザードの実行

クライアントモジュールのインストール

ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール

ソフトウェア開発キットのインストール

ProjectLink のインストール

スタンドアロン版のインストール
および/またはアップグレード

本章では、Primavera モジュール (Project Management and Methodology

Management)、その他のコンポーネント (Job Service, Software Development Kit, and ProjectLink)、スタンドアロン版のインストール方法を学びます。プロジェクト要員が使用するクライアントまたはデスクトップコンピュータで、設定プログラムを実行します。

Primavera のクライアントモジュールをインストールする前に、サーバのインストールと設定を完了させておいてください。設定ウィザードは、クライアントモジュールのインストールに、データベースサーバと接続する必要があります。

データベースクライアントソフトウェアのインストール

Primavera のクライアントモジュールをインストール前に、使用するデータベースのクライアントソフトウェアをインストールします。データベースクライアントソフトウェアは、クライアントコンピュータがネットワーク経由でサーバコンピュータのデータベースへの接続を可能にします。

Microsoft SQL Server/SQL Server Express Project

Management モジュールをクライアントコンピュータにインストールする際、Primavera モジュールに接続する必要がある Microsoft SQL Server クライアントファイルも自動的にインストールされます。SQL Server Express を使用する場合は、データベースクライアントソフトウェアをインストールするのはこの方法を使ってください。

Microsoft SQL Server を使用する場合は、Microsoft SQL Server インストール CD を使ってクライアントネットワークユーティリティをインストールすることもできます。このプロセスに詳しくない場合は、データベース管理者に連絡してください。

Oracle Oracle のインストール CD を使って、アプリケーションユーザを設定し、Oracle Net Services のクライアントファイルをユーザのネットワークに合わせて設定します。このプロセスに詳しくない場合は、データベース管理者に連絡してください。



すべてのクライアントは既定のネットワークプロトコルとして、TCP/IP を使用するよう設定してください。



パスで変更できる環境で TNSPING.EXE のロケーションを必ず参照してください。



TNSNAMES.ORA ファイルは、共有ロケーションではなくクライアント（ローカル）マシンの Oracle ホームフォルダにあるはずです。

旧バージョンのアンインストール

Primavera 5.0. からアップグレードする場合は、ジョブサービス以外のすべてのクライアントモジュールはインストールプロセスで自動的にアップグレードされます。ジョブサービス 5.0. をアップグレードする場合は、P6 をインストールする前にジョブサービスの 5.0. をアンインストールする必要があります。

画面で特に指示がない場合でも、アプリケーションのアンインストールと次のアプリケーションのインストールの間にコンピュータを再起動することを推奨します。

ジョブサービス 5.0. のアンインストール

- 1 [スタート]、[設定]、[コントロールパネル]、[プログラムの追加または削除]をクリックします。
- 2 Primavera の項目を選択して、変更/削除をクリックします。
- 3 インストールウィザードの「ようこそ」画面で、[変更]を選択します。
- 4 「インストールする機能の選択」画面で、[ジョブサービス]の選択を外し、[次へ]をクリックします。
- 5 「プログラムのインストール準備完了」画面で[インストール]をクリックします。

設定ウィザードの実行

ソフトウェアを手動でインストールしたくない場合は、無人セットアップを実行することができません。263 ページの「[無人セットアップの作成と実行](#)」を参照してください。

設定ウィザードを実行して、クライアントモジュール (Project Management と Methodology Management)、その他のコンポーネント (ジョブサービス、ソフトウェア開発キット、ProjectLink) およびスタンドアロン版をインストールします。インストールプロセスの最初のいくつかのステップは、これらすべての Primavera アプリケーションで共通です。本セクションでは、このステップを説明します。本セクションのステップを完了したら次セクションに進み、希望のモジュールやコンポーネントをインストールする手順に従ってください。

1 つまたはそれ以上のモジュールをインストールします。各モジュールには、約 20 MB のディスクスペースが必要になります。

Primavera のクライアントモジュールを Windows XP Professional、Windows Vista にインストールするには、管理者権限が必要です。



クライアントコンピュータには、TCP/IP ネットワークプロトコルがインストールされていなければなりません。



Primavera アプリケーションをインストールすると、すでにインストールされていない場合は、MDAC 2.8 (英語版) が自動的にインストールされます。Primavera アプリケーションを英語版でないオペレーティングシステムにインストールする場合は、Primavera のインストール前に適切な言語版の MDAC 2.8 をインストールしておくことをお勧めします。Primavera インストーラは既存の MDAC 2.8 を上書きしません。正しい MDAC 版をダウンロードするには、<http://www.microsoft.com/downloads> にアクセスしてください。

クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ

- 1 媒体からインストールする場合は、最初の画面が現れてインストールのオプションが表示されます。

この画面が現れない場合、またはネットワークからインストールする場合は、P6 の媒体あるいはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダで **setup.exe** をダブルクリックします。ステップ 3 に進んでください。

- 2 メインの **Primavera** 画面で、**P6 Client Applications** を選択します。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ]をクリックして次ステップへ進みます。ウィザードを終了するには、いつでも [Cancel] をクリックします。

- 3 ようこそ画面で、**次へ**をクリックします。
- 4 **Product Code** ダイアログボックスで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品キーを入力します。ネットワーク経由でインストールする場合、プロダクトキーが分からない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
- 5 **License Agreement** ダイアログボックスで、ライセンス契約を承諾します。
- 6 **Select Type** ダイアログボックスで、以下を選択します。
 - **Primavera Client Applications** クライアントモジュールのみをインストールしたい場合 (Project Management と Methodology Management)。
 - **Primavera Standalone** スタンドアローン版をインストールしたい場合。
 - **Custom** クライアントモジュールとその他のコンポーネントを指定したい場合 (ジョブサービス、ソフトウェア開発キット、ProjectLink を含む)。



その他のコンポーネントを個別にインストールする詳細手順については、本章の該当セクションを参照してください。

- 7 **Choose Destination Location** ダイアログボックスで、クライアントモジュールのインストール先フォルダを入力または選択します。
- 8 **Choose Destination Location (Common)** ダイアログボックスで、Primavera 共通ファイルのインストール先フォルダを入力または選択します。

既定で、共通ファイルはインストール時に作成された Primavera 共通フォルダにインストールされます。別のフォルダを選ぶこともできます。

- 9 インストールしたいモジュールやコンポーネントのインストール手順が説明されているセクションに進みます。

クライアントモジュールには、235 ページの「[クライアントモジュールのインストール](#)」に進みます。

ジョブサービスには、237 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」に進みます。

ソフトウェア開発キットには、244 ページの「[ソフトウェア開発キットのインストール](#)」に進みます。

ProjectLink には、247 ページの「[ProjectLink のインストール](#)」に進みます。

スタンドアロン版には、249 ページの「[スタンドアロン版のインストールおよび/またはアップグレード](#)」に進みます。

クライアントモジュールのインストール

Project Management や Methodology Management モジュールのインストールには、以下のステップを実行します。



以下の手順は、クライアントモジュールのみをインストールすること、および232ページの「クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

1 つあるいは複数のモジュールをインストール

- 1 インストールする機能の選択ダイアログボックスで、インストールしたくないモジュールを選択から外します。既定で、全モジュールが選択されています。
- 2 **[Select Program Folder]** ダイアログボックスで、Primavera クライアントアイコンを含めたい、[スタート]メニューのプログラムフォルダをタイプあるいは選択します。
変更しない場合は、これらのアイコンは[プログラム]、[Primavera]に保存されます。
- 3 [Next] をクリックしてインストールを開始します。
インストールが完了すると、データベースとの接続を設定するよう促されます。
- 4 **Select Driver Type** ダイアログボックスで、Primavera データベースのドライバタイプを選択します。

Project Management モジュールをインストールしている場合は、Project Management データベースへのクライアントの接続を設定しなければなりません。Methodology Management モジュールをインストールしている場合は、Methodology Management データベースへの接続を設定しなければなりません。両方をインストールしている場合は、先ず Project Management データベース接続の設定を行うよう促されます。

- 5 **[Configure SQL Server Connection]** ダイアログボックスまたは、**[Configure Oracle Connection]** ダイアログボックスで、データベース接続の設定を行います。

Microsoft SQL Server または SQL Server Express を設定の場合は、データベースのホスト名とデータベース名をタイプします。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDB です。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。

Oracle を設定の場合は、Oracle のデータベース名をタイプします。

- 6 **パブリックログオン情報の入力** ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。

- 7 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、**[Next]** をクリックし、データベース接続の試験を行います。

- 8 **Finish** をクリックし、データベース接続設定を終了します。

接続が不成功の場合は、**[Back]** をクリックして設定を変更します。

Project Management と Methodology Management モジュールの両方をインストールすることを選択した場合は、再びデータベース設定ウィザードが開き、Methodology Management データベースとの接続設定を行うことができます。

- 9 **Finish** をクリックし、インストールを終了します。

ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール

ジョブサービスでは、Project Management モジュールの特定機能の自動化が行えます。実績の適用、バッチレポートの実行、プロジェクトのエクスポート、プロジェクトのスケジュール計算、プロジェクトの集計を行うことができます。これらの作業は、指定された間隔でバックグラウンドで実行されます。ジョブサービスは、Windows 2003/2008 のサービスとして実行され、実行できるジョブ数に制限はありません。各ジョブは、それぞれ個別の実行スケジュールで動作します。ジョブは、Project Management モジュールで定義され、組織の Project Management データベースに保存されます。

複数の Project Management データベースで作業する場合でも、本セクションで説明するように、ジョブサービスの複数のインスタンスをインストールすることにより、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンからすべてのデータベースのジョブを実行することができます。

分散ジョブサービスについてのさらなる情報は、201 ページの「[分散ジョブサービスの設定](#)」を参照してください。

別々のサーバで同時に複数のジョブを実行したい場合は、ジョブサービスを管理する制御サーバに分散ジョブサービスをインストールし、ジョブサービスサーバにジョブを分散することができます。

Project Architect のジョブサービスを実行するには、ジョブサービスのインストールに加え、P6 Web Access のデータベースを設定する必要があります。171 ページの「[Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定](#)」を参照してください。

ジョブサービスのインストール

ジョブサービスおよび/または分散ジョブサービスのインストールには、以下のステップを実行してください。



以下の手順は、ジョブサービスのみをインストールすること、および232 ページの「[クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ](#)」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 **Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components、Job Service** を展開し、インストールするジョブサービスのタイプを選択します。

以下の場合は、**Job Service** を選択します。

- 非分散ジョブサービスをインストールしたい場合（1 つのサーバのみ）。
- 分散ジョブサービスを使用したいが、インストールしようとしているマシンが制御サーバでない場合。

分散ジョブサービスを利用したい場合で、インストールしようとしているマシンが制御サーバの場合は、**Distributed Job Service configuration** を選択します。



英語以外の言語でジョブサービスジョブを実行したい場合は、ジョブサービスマシンに Project Management モジュールをインストールする必要があります。ジョブサービスと同時にインストールすることも、後日インストールすることもできます。アプリケーションのインストール後の詳細な手順については、243 ページの「[ジョブサービスに別の言語を指定](#)」を参照してください。



設定は、ユーザにコンピュータの管理者権限があるか確認します。ユーザに管理者権限がない場合は、設定ウィザードは終了します。

2 Job Service Alias ダイアログボックスの **DB 接続名** フィールドに、JSDB のようなデータベース接続名を入力します。DB 接続名には、ダッシュを使わないでください。エラーになります。

複数のサービスを追加する場合は、[Add] ボタンをクリックします。

ジョブサービスの複数のインスタンスを作成すると、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンで、すべての Project Management データベースの複数ジョブサービスを実行できるようになります。各データベースで 1 つのジョブサービスインスタンスを作成します。



複数のジョブサービスインスタンスをインストールする場合は、先ずすべての既存のジョブサービスを停止する必要があります。

ジョブサービスを使用して複数のデータベースでジョブを実行することについてのさらなる情報は、240 ページの「[複数のデータベースでジョブサービスを実行](#)」を参照してください。

ジョブサービスは、データベースサーバへの接続に DB 接続名を使います。

- 3 プログラムフォルダを入力または選択します。
- 4 **Install** をクリックしてインストールを開始します。
- 5 **Select Driver Type** ダイアログボックスの、**Job Services driver type** フィールドでデータベースサーバタイプを選択します。Oracle または Microsoft SQL Server/SQL Express。

- 6 Oracle に接続する場合は、**Configure ORACLE Connection** ダイアログボックスで、TNSNAMES.ORA ファイルにある Oracle 接続文字列タイプ（データベース名）をタイプします。
Microsoft SQL Server または SQL Server Express に接続する場合は、**Configure SQL Server Connection** ダイアログボックスで、データベース名をタイプしサーバコンピュータ名を指定します。
- 7 **Enter Public Login** ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログイン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。
- 8 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、データベース接続を検証します。
指定の DB 接続名が作成されます。
- 9 **接続は成功しました！** ダイアログボックスで、**終了** をクリックします。
ジョブサービス接続名をテストするよう促されます。



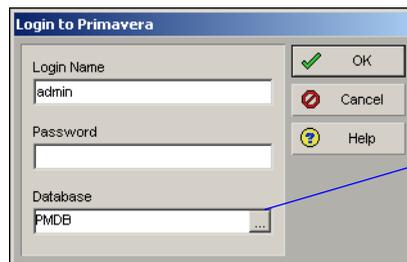
分散ジョブサービス環境で、サーバマシンにインストールしている場合は、以下のステップの [Test] ボタンはクリックしないでください。

- 10 **Yes** をクリックし、データベース接続をテストします。
テストが失敗しても、インストールを継続することができます。
- 11 **Finish** をクリックします。

ジョブサービスがコンピュータにインストールされ、データベースとの接続が成功すると、サービスは定期的に、Project Management モジュールでスケジュールされたユーザ定義のジョブを実行します。

複数のデータベースでジョブサービスを実行

すべての Project Management データベースでそれぞれのジョブサービスインスタンスをインストールすると、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンで、すべてのデータベースについて実績の適用、バッチレポートの実行、プロジェクトのエクスポート、プロジェクトのスケジュールまたは集計を行うことができるようになります。Project Management モジュールにログインし、集計したい Project Management データベースの 1 つを選択します。



集計したいデータベースの 1 つの接続名を選択。

Project Management モジュールで、[ツール]、[ジョブサービス] を選択します。そして、そのデータベースで実行したいジョブサービスを追加します。さらに別の Project Management データベースにジョブサービスを設定したい場合は、Project Management モジュールを終了します。再度ログインし、データベース接続名を選択することで、別の Project Management データベースを選択します。ジョブサービスダイアログボックスで、現在開いているデータベースを追加します。

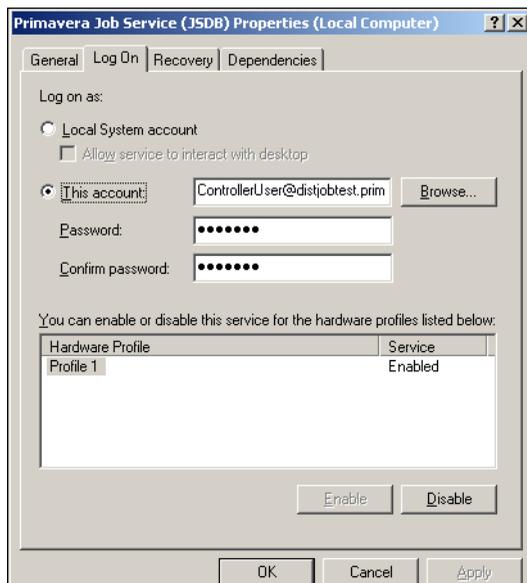
サマライザジョブと P6 Web Access について 集計データを使う P6 Web Access のリソース管理機能は、作製されたリソースレコードに依存しています。各レコードは、リソースごとに割り当てられたジョブの総和です。企業レコードを最新状況に維持するため、プロジェクトを集計する際には、以下の方法に従います。

- P6 Web Access 内からプロジェクトを集計します。サマライザジョブは常に、選択されたプロジェクトの企業リソースレコードを更新します。
- クライアント・サーバモジュールで、Admin Superuser としてログインし、指定プロジェクトのすべてのリソースについて企業リソースレコードサマライザジョブを作成します。
- クライアント・サーバモジュールで、集計にメニューオプションを使用する場合は、作成すべき企業リソースレコードにレジストリキーが存在している必要があります。キーを作成するには、HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/Primavera 下で EnterpriseSummaries を DWORD として追加し、設定値を (1) に変更します。

サマライザジョブのレジストリ設定についてのさらなる情報は、221 ページの「サマライザジョブのため、レジストリ設定を編集」を参照してください。

直接プリンタにジョブを送出するようにジョブサービスを設定
直接プリンタにジョブを送出するには、一般システムアカウントではなく、管理者アカウントでジョブサービスを実行する必要があります。ジョブサービスが実行されるマシンで、以下のステップを実行し、管理者ユーザ名とパスワードを使ってジョブサービスにログインします。

- 1 Windows のコントロールパネルから、**管理ツール**、**サービス** を選択します。
- 2 **Primavera Job Service** をダブルクリックします。
- 3 **Primavera Job Service** プロパティダイアログで、**ログオンタブ** を選択します。
- 4 **アカウントオプション** を選択し、管理者ユーザのアカウントおよびパスワードを入力します。
- 5 **適用**、**OK** をクリックします。



ジョブサービスに別の言語を指定 ジョブサービスのジョブからの出力言語を指定することができます。英語以外の言語を指定するには、以下のステップを実行します。

- 1 前セクションの「[直接プリンタにジョブを送出するようにジョブサービスを設定](#)」を実施し、システムアカウントではなく、管理者アカウントを使ってジョブサービスにログインします。
- 2 ジョブサービスをインストールした際に Project Management モジュールをインストールしなかった場合（[ページ 237](#) のステップ 1 に説明）、ジョブサービスマシンに Project Management モジュールをインストールします。

Project Management モジュールのインストール手順の詳細については、235 ページの「[クライアントモジュールのインストール](#)」を参照してください。
- 3 Project Management モジュールのインストールとデータベース設定のあと、[スタート]メニューから、[プログラム]、[Primavera]、[Project Management] を選択して、モジュールを起動します。
- 4 ジョブサービスにログインしたときに使用した管理者アカウントと同じアカウントを使って、Project Management モジュールにログインします。
- 5 [ようこそ]ダイアログで、[グローバルデータのみを開く](#)を選択します。
- 6 ツール、言語の設定を選択し、希望の言語を選択します。



ジョブサービスでは、ステップ1でログインした管理者アカウントを使用してジョブサービスを実行し続ける限り、選択した言語でジョブを実行することができます。ローカルシステムアカウントを使って違う言語でジョブサービスジョブを実行することはできません。

ソフトウェア開発キットのインストール

ソフトウェア開発キット (SDK) によって、Primavera データを外部アプリケーションで使うことができるようになります。データのほかに、SDK はアプリケーションのビジネスルールおよび計算値を提供し、アプリケーションのセキュリティを強化します。SDK は、Project Management データベースへの接続に、Open Database Connectivity (ODBC) 標準をサポートしています。OLE DB などの ODBC 準拠インタフェースもサポートします。



Integration API (Application Programming Interface) は、Project Management データベースに直接接続するために使うこともできます。このツールでは、Java でクライアントコードを書き込む必要があります。さらなる詳細については、Integration API アドミニストレータガイドを参照してください。



P6 Web Services では、XML や SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、Primavera の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

ソフトウェア開発キットのインストール

以下のステップを実行して、ソフトウェア開発キットをインストールします。



以下の手順は、クライアントモジュールのみをインストールすること、および 232 ページの「[クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ](#)」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 **Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components** を展開し、**Software Development Kit** を選択します。
- 2 **Install** をクリックします。
- 3 以降のプロセスに関する説明を読み、**OK** をクリックします。

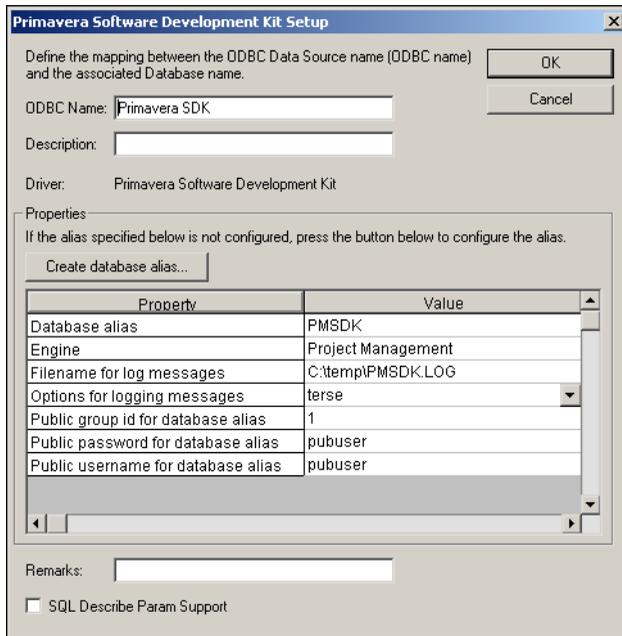
SDK で使う DB 接続名の PMSDK を作成します。その次に、PrimaveraSDK という名の、ODBC ユーザデータソース名 (DSN) を作成します。ODBC DSN では、Project Management データベースへの接続に、DB 接続名を使用します。

- 4 **ドライバタイプの選択** ダイアログボックスで、データベースサーバのドライバタイプを選択します。Oracle または Microsoft SQL Server/SQL Express を選択することができます。
- 5 データベースタイプに、要求される接続情報を入力します。Oracle の設定では、**ORACLE 接続の設定** ダイアログボックスで、Oracle の接続文字列をタイプします。

Microsoft SQL Server または SQL Server Express に接続する場合は、**Configure SQL Server Connection** ダイアログボックスで、データベース名とサーバコンピュータ名をタイプします。

- 6 **Enter Public Information** ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログイン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。
- 7 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、データベース接続を検証します。
- 8 **Connection Successful** ダイアログボックスで、接続が成功の場合は、PMSDK という名の DB 接続名が作成されました。**Finish** をクリックします。
接続が不成功の場合は、**Back** をクリックし、データベース情報を再入力します。
- 9 **Primavera Software Development Kit Setup** ダイアログボックスで、データベースに対する ODBC 接続値を確認して、**OK** をクリックします。

ODBC DSN 名、PrimaveraSDK が作成されました。



SDK がコンピュータにインストールされると、ODBC DSN を使用して Project Management データベースに接続することができます。SDK ドキュメントは、¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥PMSDK¥Doc にあります。



SDK にアクセスするには、Admin Superuser アクセス権があるユーザとして追加されるか、「SDK 経由でグローバル/プロジェクトデータの表示」権限が割り当てられる必要があります。



Windows Vista マシンでは、SDK および SDK を使うあらゆるアプリケーションを管理者モードで実行する必要があります。



SDK ドキュメントは、Web ブラウザで表示することができます。ドキュメントの目次を見るには、INDEX.HTM ファイルを開きます。

ProjectLink のインストール

ProjectLink は、Microsoft Project (MSP) ユーザが Primavera のエンタープライズ機能に接続している間に MSP 環境で作業を行えるようにするプラグインです。MSP ユーザは、MSP アプリケーション内から Project Management データベースを開いたり、プロジェクトを当該データベースに保存したりすることができます。ProjectLink では、MSP ユーザは MSP 環境から Primavera のリソース管理を起動することができます。ProjectLink によって、ユーザは MSP を日常的なプロジェクト管理に使用できるほか、Primavera アプリケーション内で利用できるエンタープライズ機能にアクセスすることもできるようになります。

ProjectLink のインストール

以下のステップに従い、ProjectLink をインストールします。



以下の手順は、ProjectLink のみをインストールすること、および 232 ページの「クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 **Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components** を展開し、**Project Link** を選択します。
- 2 プログラムフォルダを入力または選択します。
- 3 **Install** をクリックします。
- 4 ダウンロードが完了したら、**Finish** をクリックします。

インストールが正しく行われると、Primavera ProjectLink が Microsoft Project のツールバーに表示されます。また、Microsoft Project で、[ツール]、[Primavera ProjectLink] を選び、[ProjectLink] ダイアログボックスにアクセスすることもできます。ProjectLink ヘルプは、インストールしたプログラムと同じフォルダに自動的にインストールされます。ProjectLink ヘルプには、[ProjectLink] ダイアログボックスの [ヘルプ] アイコンをクリックしてアクセスすることもできます。

ProjectLink へのアクセスの確保

ProjectLink へのアクセスは、マシン固有ではなく、ユーザ固有です。マシンに ProjectLink をインストールしたユーザだけが、そのマシンでの ProjectLink を利用することができます。例えば、通常、コンピュータには複数のユーザが定義されています（例えば、管理者、すべてのユーザ、<ユーザ名>などです）。ProjectLink が「Administrator」ユーザとしてインストールされていた場合は、「Administrator」だけが Microsoft Project で ProjectLink の表示・アクセスが可能となります。ほかのユーザがそのマシンにログインしても ProjectLink は表示されません。

ユーザが自分のコンピュータで ProjectLink にアクセスできるようにするには、前セクションで説明したインストールウィザードを使って、ユーザが物理的に ProjectLink をインストールできるようにしなければなりません。各ユーザが物理的に ProjectLink をインストールすることが不可能な場合（例えば、管理者がすべてのユーザのインストールを行う場合）は、ProjectLink のインストール後に以下のステップを実行することで、ユーザのコンピュータに ProjectLink へのアクセスをできるようにします。

- 1 ユーザのコンピュータで、ProjectLink のインストールで使ったものと同じログイン情報でログインします（例えば、「Administrator」）。
- 2 [スタート]から[ユーティリティの実行]で、**regedit** をタイプし、[OK] をクリックします。
- 3 レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。
HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Office¥MSProject¥Addins
- 4 PMAAddin.PrimaveraAddin フォルダを選択します。
- 5 [レジストリ]、[レジストリファイルのエクスポート]を選択します。
- 6 レジストリファイルをユーザのコンピュータのユーザがアクセスできるロケーションにエクスポートします（例えば、c:¥<user>¥My Documents）。
- 7 ユーザのコンピュータにユーザのログイン情報でログインします。
- 8 2 と 3 のステップを繰り返します。
- 9 [レジストリ]、[レジストリファイルのインポート]を選択します。
- 10 ステップ 6 でエクスポートしたレジストリファイルをインポートします。

これで、ユーザが自マシンで ProjectLink にアクセスできるようになります。

スタンドアロン版のインストールおよび／またはアップグレード

開始する前に、コンピュータが Windows XP Professional (SP2) または Windows Vista で動いていることを確認してください。Primavera をスタンドアロン製品として使用するにしても、ネットワークインタフェースカードまたはモデムがコンピュータに搭載され、TCP/IP ネットワーキングソフトウェアが実行されていなければなりません。



Primavera は、アップグレード前にデータベースのバックアップコピーをとるようにお勧めします。



データベースの更新前にはチェックアウトされたプロジェクトがないか、プロジェクトにチェックインして確かめてください。



Primavera を Windows XP または Vista にインストールする場合は、コンピュータの管理者権限が必要です。さらなる情報については、ネットワーク管理者あるいは、Primavera のお客様サポートにお問い合わせください。



ライセンスキーファイルは、ソフトウェアを使用するために必要で、EメールまたはCDで提供されているはずですが、それには、ユーザのコンピュータ名、シリアル番号、購入した製品コンポーネントと版数、許容ユーザ数が含まれます。この手順でライセンスファイルを読み込む場合は、事前にライセンスファイルをローカルドライブにコピーしておきます。

スタンドアロン版のインストール／更新

Primavera のスタンドアロン版のインストール／アップグレードを行うには、以下のステップを実行します。



以下の手順は、スタンドアロン版のみをインストールまたはアップグレードすること、および 232 ページの「クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 コンピュータに初めてスタンドアロン版をインストールする際には、インストールする機能の選択ダイアログボックスで、サンプルプロジェクトをインストールしたい場合は、サンプルプロジェクトの横のチェックボックスにマークします。
- 2 Primavera クライアントアイコンを含めたい、[スタート]メニューのプログラムフォルダ名を選択します。

変更しない場合は、これらのアイコンは [プログラム]、[Primavera] に保存されます。



旧バージョンからのアップグレードの場合は、Primavera フォルダがすでに存在しているとプロンプトで通知されることもあります。[Yes] をクリックして、このフォルダに P6 をインストールします。

- 3 スタンドアロン版をアップグレードする際、Microsoft SQL Server Express (P5 では「prima」、P6 バージョン 6.0 と 6.1 では「Prima123Vera」) のログイン用の既定パスワードを維持する場合は、ステップ 5 に進みます。P5 からアップグレードする場合は、強力なパスワードポリシーの要求に基づいて Microsoft SQL Server Express へのログイン用のパスワードが自動的に「Prima123Vera」に更新されます。

スタンドアロン版をアップグレードする際、パスワードが Microsoft SQL Server の既定以外の場合は、パスワードを入力するよう求められます。パスワードの入力後、アップグレードしているバージョンによって以下のいずれかになります。

- P5 からアップグレードする場合、パスワードは自動的に「Prima123Vera」に変更されます。P6 バージョン 6.2 へのアップグレードを完了すると、カスタムのパスワードを設定できます。
- P6 バージョン 6.0 または 6.1 からアップグレードする場合は、カスタムのパスワードがそのまま残されます。

- 4 コンピュータに初めてスタンドアロン版をインストールする場合は、**ライセンスファイルの選択**ダイアログボックスの **Select a license file for the newly created database** フィールドで、LICENSE.TXT ファイルのロケーションにブラウズします。
- 5 **Install** をクリックしてインストール/アップグレードを開始します。

インストール中に、設定プログラムが自動的に Microsoft.NET Framework および Microsoft SQL Server Express のインストールと設定を行います。設定は、Project Management と Methodology Management データベースのインストール/アップグレードも行います。



Primavera MSDE インスタンスがすでにコンピュータに存在している場合は、設定は SQL Server Express インスタンスにアップグレードします。

- 6 **InstallShield Wizard Complete** ダイアログボックスで、コンピュータの再起動を今すぐ行うか後で行うかを選択し、**Finish** をクリックします。インストールが完了したら、ソフトウェアを使用するのにコンピュータの再起動が必要です。

[スタート]、[プログラム]、[Primavera]、希望のモジュールの選択でモジュールを起動します。

自動データベースアップグレード

本章の内容：

[アップグレードプロセスの概要](#)

[Oracle データベースの P6 へのアップグレード](#)

[Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード](#)

5.0、6.0、または 6.1 がインストールされている場合は、本章の手順に従ってデータベースを P6 バージョン 6.2 にアップグレードしてください。

Primavera の新バージョンでプロジェクトデータを使用するには、データベースをアップグレードする必要があります。ウィザードが自動的にデータベースのアップグレードを行います。

Primavera では、本章で説明されているようにデータベースを自動的にアップグレードするようお勧めしますが、手動でデータベースをアップグレードしたい場合の手順は、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている [¥Documentation¥<language>¥ Technical Documentation¥Manual Upgrades](#) フォルダに記載されています。

スタンドアローンインストールをアップグレードする場合は、249 ページの「[スタンドアローン版のインストールおよび／またはアップグレード](#)」を参照してください。

アップグレードプロセスの概要

既存の Primavera データベース (v5.0、6.0、または 6.1) を P6 のバージョン 6.2 にアップグレードすることができます。新バージョンで機能するためには、Project Management および Methodology Management データベースの両方をアップグレードしなければなりません。

スタンドアロンインストールでのアップグレードには、249 ページの「スタンドアロン版のインストールおよび/またはアップグレード」を参照してください。

データベースウィザードを使用して、自動的にデータベースをアップグレードすることができます。ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。



現在 Interwoven/iManage を使用しており P6 Web Access バージョン 6.2 にアップグレードする場合、プロジェクトワークフロー、プロジェクトプロセス、ニュース、ディスカッション、イベント、ドキュメントデータは利用できなくなります。このデータが必要な場合は、Primavera カスタマーサポートに連絡してデータの移行や移行ツールに関する情報を入手してください。Primavera では、バージョン 6.2 にアップグレードする前にデータを移行するようお勧めします。

5.0、6.0 または 6.1 からのアップグレード 以下に、P6 のバージョン 6.2 へのアップグレードに必要なステップの概要を示します。

- アップグレードプロセスを開始する前に、Project Management および Methodology Management データベースのバックアップをとり、不測の事態でデータを喪失しないようにします。
- データベースウィザードを実行し、既存の Project Management および Methodology Management データベースをアップグレードします。
- 新データベースをテストして、アップグレードが正しく行われたことを確認します。
- 本ガイドで説明されているように、新しい Group Server および追加のコンポーネントをインストールします。

権限 P6 Project Management モジュールに含まれる次の権限は、新規または変更されたものです。現在、旧バージョンを使用している場合は、必要に応じてこれらをユーザに割り当てます。

新規のグローバル権限**新規のプロジェクト権限**

グローバルカレンダーの編集

プロジェクトカレンダーの編集

リソースカレンダーの編集

未来の期間を編集

プロジェクト要求の作成

プロジェクト要求テンプレートの

編集

ユーザ定義フィールドの編集

現在、Primavera で Oracle を使用している場合は、256 ページの「[Oracle データベースの P6 へのアップグレード](#)」を参照してください。

現在、Primavera で Microsoft SQL Server を使用している場合は、259 ページの「[Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle データベースの P6 へのアップグレード

Primavera 5.0、6.0、または 6.1 からのデータベースを P6 のバージョン 6.2 で使用したい場合は、次の一連のステップを実行してデータベースをアップグレードする必要があります。このステップは、経験あるデータベース管理者が行うことをお勧めしますが、それは必ずしも必要ではありません。

ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。Project Management および Methodology Management データベースをアップグレードしなければなりません。

Oracle の要求事項 Oracle データベースのアップグレードには以下を注意してください。

- Oracle 10.2 より前のバージョンを使用している場合、アップグレードは正しく行われません。
- LOB テーブルスペース（例えば、PMDB_LOB1）のデータファイルは、自動拡張(AUTOEXTEND)に設定しておく必要があります。予測サイズは正確ではありません。データファイルが固定サイズの場合は、データファイル変換が正しく行われられない可能性があります。
- 既存のデータベースに、コードページ WE8ISO8859P1 を使用していてユーロ記号を使いたい場合は、データベースを次のステートメントを使用して WE8MSWIN1252 に変換する必要があります。

```
ALTER DATABASE CHARACTER SET WE8MSWIN1252;
```

Oracle の Project Management または Methodology Management データベースのアップグレード

- 1 データベースのオフラインバックアップ (cold backup) および完全エクスポートを実施します。

Oracle データベースのバックアップ方法が不確かな場合は、アップグレード作業を停止してください。データベース管理者、データベースのベンダ、または Primavera カスタマーサポートの協力を得て、データベースのアップグレードを実行する前にバックアップを行ってください。また、必要な場合に備えて、データベースのバックアップコピーからの復元プロセスについてよく理解しておいてください。

- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Client_Applications ¥ install ¥ database フォルダで dbsetup.bat をダブルクリックして、データベースウィザードを起動します。
- 3 **Primavera P6** ダイアログボックスで、
 - **Upgrade an existing database** を選択します。
 - サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
 - **Product Key** フィールドで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品コードを入力します。
- 4 **Connection Information** ダイアログボックスの
 - **Administrative User Name** フィールドで管理者ユーザ、例えば admuser としてデータベースにログオンします。ユーザ名には DBA 権限が付与されていて、アプリケーションテーブルのオーナーである必要があります。また、データベースは 10.2 以上の Oracle 互換パラメータセットでなければなりません。
 - **Administrative Password** フィールドで、入力したユーザ名に関連のあるパスワードを入力します。
 - **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Oracle がインストールされている IP アドレスを入力します。
 - **Database Host Port** フィールドに、Oracle が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
 - **Database Name (SID)** フィールドに Oracle SID を入力します。これは、ユーザまたはその DBA が Oracle クライアントを設定した際に作成された TNSNAMES.ORA ファイルにあります。
- 5 **Upgrade Options** ダイアログボックスで、データベースの権限ユーザ名またはパブリックユーザ名を選択します (privuser、pubuser など)。
- 6 **Ready to Begin Upgrading Data** ダイアログボックスで、既存データベースの現在のバージョンが正しくリストされていることを確認します。Yes, upgrade my database を選択してから、Upgrade をクリックします。

アップグレードプロセスには、サイズによって数分かかることがあります。
- 7 プロセスを完了したら、**Upgrading Database...** ダイアログボックスで、Next をクリックします。



データベースをアップグレードできなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください (「C:\¥ Documents and Settings¥Administrator」など)。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

- 8 Methodology Management モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。
- 9 必要に応じて、クライアントからデータベース設定ウィザードを実行し、データベースのライセンス更新を行います。
さらなる詳細については 271 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照してください。

以上の手順で P6 のバージョン 6.2 でデータベースを使用することができます。

Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード

Primavera 5.0、6.0 または 6.1 からのデータベースを P6 のバージョン 6.2 で使用する場合は、次の一連のステップを実行してデータベースをアップグレードする必要があります。これらのステップを実行するのに、経験あるデータベース管理者が行う必要はありません。

ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。

Project Management および Methodology Management データベースの両方をアップグレードしなければなりません。

Microsoft SQL Server データベースのアップグレード

- 1 現在のデータベースの完全なバックアップを実行します。

SQL Server データベースのバックアップ方法が不確かな場合は、アップグレードを停止してください。データベース管理者、データベースのベンダ、または Primavera カスタマーサポートの協力を得て、データベースのアップグレードを実行する前にバックアップを行ってください。また、必要な場合に備えて、データベースのバックアップコピーからの復元プロセスについてよく理解しておいてください。

- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Client_Applications ¥ install ¥ database フォルダで dbsetup.bat をダブルクリックして、データベースウィザードを起動します。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 Primavera P6 ダイアログボックスで、

- **Upgrade an existing database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Microsoft SQL Server/SQL Express** を選択します。
- **Product Key** フィールドで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品コードを入力します。

4 Connection Information ダイアログボックスの

- **Administrative User Name** フィールドに、Microsoft SQL Server システム管理者名を入力し、サーバに登録します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選んだ場合は、システム管理者名を SA のままにしておきます。
- **Administrative Password** フィールドに、このシステム管理者のパスワードを入力します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選択した場合は、パスワードフィールドを空白のままにしておきます。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Microsoft SQL Server がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、Microsoft SQL Server が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1433 です。
- **Database Name** フィールドに、アップグレードする既存のデータベース名を入力します。

5 Ready to Begin Upgrading Data ダイアログボックスで、既存データベースの現在のバージョンが正しくリストされていることを確認します。Yes, upgrade my database を選択してから、Upgrade をクリックします。

アップグレードプロセスには、サイズによって数分かかることがあります。

6 プロセスを完了したら、Upgrading Database... ダイアログボックスで、Next をクリックします。



データベースをアップグレードできなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください (「C:\¥Documents and Settings ¥ Administrator」など)。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

7 Methodology Management モジュールを使う場合は、Finish ダイアログボックスで Next をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、Finish をクリックしてウィザードを終了します。

Microsoft SQL Server データベースの設定

- 1 以下の指示に従って、アップグレードされたデータベースの分離レベルが「read committed snapshot」に設定されていることを確認してください。

- Microsoft SQL Server Management Studio を開きます。
- アップデートされたデータベース用に新しいクエリ画面を開き、以下のコマンドを実行します。

dbcc useroptions

- オプション設定カラムで分離レベルを探し、値が「**read committed snapshot**」に設定されていることを確認します。
 - 値が「**read committed snapshot**」に設定されている場合は、[ステップ 3](#)に進みます。値が「**read committed**」に設定されている場合は、[ステップ 2](#)に進みます。
- 2 以下のコマンドを実行して、分離レベルの設定を修正します。

```
alter database <database name> set read_committed_snapshot on
```



データベースの変更コマンドを実行している接続のみがデータベースで許可されます。コマンドの実行が完了するまで、データベースで他の接続を開くことはできません。

- 3 必要に応じて、クライアントからデータベース設定ウィザードを実行し、データベースのライセンスを更新します。

さらなる詳細については 271 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照してください。

以上の手順で P6 のバージョン 6.2 でデータベースを使用することができます。

無人セットアップの作成と実行

本章の内容：

無人セットアップファイルの作成

無人セットアップの実行

本セクションでは、Primavera アプリケーションの無人セットアップの作成と、クライアントコンピュータで無人セットアップを実行する手順を提供します。無人セットアップによって、管理者は毎回設定プロセスを実行することなく、Primavera アプリケーションをクライアントコンピュータにインストールすることができます。また、各ユーザが確実に同じ Primavera 設定を受けられる利点もあります。



スタンドアロン設定では、無人セットアップは使えません。

無人セットアップファイルの作成

無人設定では、管理者は設定ウィザードの設定プロンプトに答えずに Primavera モジュールをクライアントコンピュータにインストールすることができます。インストールについてのすべての設定詳細は、無人セットアップファイルを最初に作成するときに指定します。インストールするクライアントモジュールを選択し、Project Management データベースへの接続を設定し、プログラムファイルがコピーされるべきコピー先フォルダを指定します。無人インストールは、すべてのクライアントモジュールが全く同じ設定になることを確実にします。

無人セットアップを作成するには、コマンドラインを入力して、自動的に応答ファイルを作成し、Primavera の設定ウィザードを起動します。応答ファイルは、設定プロセスで管理者が指定する設定を記録します。完了すると応答ファイルは、管理者権限のあるユーザがアクセスできるネットワーク場所にコピーすることができます。

無人セットアップは、管理者により、適切なコマンドラインを投入してクライアントコンピュータ上で実行します。無人セットアップは、応答ファイルで指定した設定に従って、静かに Primavera をインストールします。

無人セットアップの実行方法についての情報は、268 ページの「無人セットアップの実行」を参照してください。



設定ウィザードは、無人セットアップファイルを作成し直したり、別々の構成のファイルを複数作成するのに使用することができます。

無人セットアップファイルの作成

- 1 Primavera がインストールされていないコンピュータを選びます。
- 2 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダの内容をローカルマシンのフォルダにコピーします。

Primavera は、新規フォルダを作成することをお勧めします (例えば、Primavera_Install)。フォルダ名にはスペースを入れないでください。

- 3 [Start]、[Run] を選択してコマンドラインを開きます。「cmd」とタイプして [OK] をクリックします。
- 4 Primavera のインストールファイルをコピーしたディレクトリにアクセスするコマンドラインを、入力します。例えば、以下のようになります。

```
cd c:¥Primavera_install
```



次のステップで、応答ファイルを作成するコマンドを入力します。そして記録モードで、Primavera の設定を起動します。応答ファイルが、Primavera 設定の進行に従い選択を記録します。管理者権限をもったユーザは、この作成した応答ファイルを使って Primavera をインストールすることができます。応答ファイル名には制限がありませんが、Primavera は、「setup.iss」と名づけるようにお勧めします。

- 5 以下のコマンドラインを入力し、応答ファイルを作成して、Primavera の設定を記録モードで起動します。ここで「pathname」はステップ 4 でアクセスしたディレクトリです (例えば、Primavera_install)。

```
setup /r /f1"c:¥pathname¥setup.iss"
```



f1 と引用符 " の間にスペースは入れないでください。

Primavera のセットアップは自動的に起動されます。**Welcome** ダイアログボックスで、推奨のコメントを読み **Next** をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 6 **Product Code** ダイアログボックスで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品キーを入力します。
- 7 ライセンス同意の条件を承諾します。

- 8 **Setup Type** ダイアログボックスで、**[Custom]** を選択します。
- 9 **Choose Destination Location** ダイアログボックスで、既定インストールフォルダを受け入れるかブラウズをクリックし、別のフォルダを指定します。
- 10 **Choose Destination Location (common files)** ダイアログボックスで、Primavera の共通ファイル場所を受け入れるかブラウズをクリックし、別のフォルダを指定します。
- 11 **Select Features to install** ダイアログボックスで、管理者権限のあるユーザがこの無人セットアップをクライアントマシンで実行するとき、インストールすべき各アプリケーションの横にあるチェックボックスをマークします。

ソフトウェア開発キットだけを選択した場合は、**Project Management** と **Methodology Management** モジュールのコンポーネントもインストールされます。



無人セットアップの作成では、ジョブサービスや分散ジョブサービスは含めるべきではありません。例外は、無人セットアップをジョブサービスまたは分散ジョブサービスサーバに使用するサーバマシンでのみ無人セットアップを実行するために作成する場合だけです。

- 12 ジョブサービスまたは分散ジョブサービスを前のステップで含めることを選択した場合は、ジョブサービスデータベースのデータベース接続名を入力あるいは選択します。
- 13 **Select Program Folder** ダイアログボックスで、Primavera プログラムアイコンの既定場所 (Primavera) を受け入れるか、別のフォルダ名を選択またはタイプします。
- 14 **Ready to Install the Program** ダイアログボックスで、インストールをクリックし、インストールを開始します。
- 15 インストールが完了すると、データベースとの接続を設定するよう促されます。設定する接続と促される順番は、ステップ 11 でインストールすることを選択したアプリケーションによります。



ジョブサービスまたは分散ジョブサービスを無人セットアップに含めることを選択した場合は、ジョブサービスデータベースをまず設定することを促されます。「はい」をクリックします。ジョブサービスデータベースの設定後は、データベース接続のテストを行うよう促されます。「Yes」をクリックし、接続をテストするか、「No」を選択して、引き続きデータベース接続設定を継続します。

プロンプトで求められた場合は、[Yes] をクリックして Project Management または Methodology Management データベースの接続を設定します。

- 16 **Select Driver Type** ダイアログボックスで、**Project Management** ドライバタイプフィールドの一覧からデータベースタイプを選択します。
- 17 ユーザが SQL Server を使って接続する場合は、**Configure SQL Server Connection** ダイアログボックスでサーバのホスト名とデータベース名を入力します。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDB です。
ユーザが Oracle を使用して接続する場合は、**Configure ORACLE Connection** ダイアログボックスで Oracle 接続文字列、例えば PMDB を入力します。



データベース情報の入力前に、無人セットアップを実行する管理者権限をもったすべてのユーザが、指定されたデータベースへのアクセス権をもっていることを確認します。

- 18 **パブリックログオン情報の入力** ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。
- 19 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、[Next] をクリックし、データベース接続の試験を行います。
接続ができない場合は、元に戻り設定を変えます。
- 20 **Connection Successful** ダイアログボックスで、[Finish] をクリックします。
- 21 **Methodology Management** モジュールを無人インストールに含めることを選択した場合は、15 ~ 20 のステップを繰り返して、Methodology Management データベースを設定します。
- 22 ステップ 2 で作成したフォルダの内容をコピーして、無人セットアップを実行する必要があるすべてのコンピュータにアクセスできるネットワーク場所に、貼り付けます。このフォルダには、P6 Client_Applications の内容と「setup.iss」応答ファイルが含まれます。

クライアントマシンへの無人セットアップに関する手引きについては、次セクションを参照してください。

無人セットアップの実行

無人セットアップは、前のセクション（264 ページの「[無人セットアップファイルの作成](#)」）で管理者が作成した、インストールすべきモジュールやデータベース接続の設定、インストール先フォルダなどの情報を含む設定ファイルを使う、特別なインストールプログラムです。この設定ファイルは通常、「`setup.iss`」と名づけられますが、設定ファイルを作成した管理者によって別の名前が付けられているかもしれません。

無人セットアップを実行することは、時間と労力の節約につながり、また設定時に全 Primavera クライアントモジュールを確実に同一の設定にします。「`setup.iss`」（または、その同等）ファイルがネットワークサーバに保存されていれば、そのサーバにネットワーク接続されているどのクライアントコンピュータからでも、無人セットアップを実行することができます。



「`setup.iss`」（またはその同等）ファイルと P6 Client_Applications フォルダの内容は、ネットワークサーバの同じフォルダに保存しておく必要があります。

管理者として、読者は Primavera をクライアントマシンに無人セットアップでインストールするいくつかのオプションがあります。例えば、各マシンで物理的に無人セットアップを実行するか、指定するクライアントマシンで無人セットアップを実行するスクリプトを書くか、管理者権限のあるユーザに指示してそのコンピュータで無人セットアップを実行させることができます。



次の手順は、管理者またはクライアントコンピュータのオーナーが、物理的に無人セットアップをクライアントコンピュータで実行することを想定します。また、例として、必要なファイルを含むフォルダは「`Primavera_install`」、設定ファイルは「`setup.iss`」、ログファイルは「`setup.log`」と名づけられていることとします。無人セットアップを作成した管理者は、別の名前を指定しているかもしれません。

無人セットアップの実行

- 1 クライアントコンピュータで、[Start]、[Run] を選択してコマンドラインを開きます。「cmd」とタイプして [OK] をクリックします。
- 2 P6 Client_Applications フォルダ、「setup.iss」ファイル、「setup.log」ファイルの内容を含むネットワークサーバのディレクトリへアクセスするコマンドラインを入力します。例えば、以下のようになります。

cd e:¥Primavera_install

無人セットアップファイルの場所が分からない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

- 3 無人セットアップを実行するコマンドラインを入力します。ここで **pathname** は、ステップ 2 でアクセスしたディレクトリ（例えば、Primavera_install）です。例えば、以下のような状況を想定してください。

setup.exe /s /f1"e:¥pathname¥setup.iss" /f2"c:¥pathname¥setup.log"

 **f1 と f2 と引用符 " の間にスペースは入れないでください。**

Primavera のインストールは自動的に起動されます。ダイアログボックスは表示されませんが、Primavera のタスクバーアイコンがインストールの進行中を示します。タスクバーのアイコンが閉じるとインストールの完了です。

- 4 ファイルが正しくインストールされたことを、ローカルドライブの適切なフォルダにナビゲートして確認します。

既定で、Primavera のアプリケーションは、c:¥Program Files ¥ Primavera にインストールされます。無人セットアップを設定した管理者は、別の既定インストールフォルダを指定していた可能性があります。

Primavera アプリケーションがインストールされていないか、Primavera アプリケーションが実行できない場合は、システム管理者に問い合わせてください。すべてのエラーは、「setup.log」ファイル（またはその相当）に記録されます。

データベース構成設定の変更

本章の内容：

[データベース接続設定の変更
管理タスクの実行](#)

データベース設定ウィザードを使って、Primavera クライアントモジュールのデータベース接続設定の変更ができます。本章では、データベース接続設定の変更、ライセンスの設定、ユーザパスワードの変更、ログイン名とパスワードの管理方法を説明します。

データベース接続設定の変更

データベースサーバの設定が変更された場合は、データベース設定ウィザードを使って、クライアントモジュールの接続設定の変更を行います。例えば、データベースが新しいサーバに移動された場合、データベース設定ウィザードを実行して、新しいサーバへの接続を設定します。



データベース接続設定を変更するには、データベース設定ウィザードがモジュールの初期化 (INI) ファイルにアクセスできなければなりません。このファイルは、モジュールのフォルダにあります。例えば Project Management モジュールの INI ファイルは、PM.INI です。ウィザードがモジュールの INI ファイルを見つけられない場合、ブラウズして指定するよう指示されます。

データベース設定の変更

- 1 クライアントコンピュータのデスクトップから、[スタート] をクリックして、[プログラム]、[Primavera]、[Help and Utilities]、[Database Configuration] を選びます。
- 2 **Welcome** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 どうしますか? ダイアログボックスで、**データベース接続の設定**を選択します。
- 4 **データベース接続名の選択**ダイアログボックスで、例えば PMDB のように、該当のデータベースを選択します。
- 5 **接続名の選択 / 作成**ダイアログボックスで、データベースの接続名とドライバタイプを選択します。
接続名またはデータベースドライバを変更する場合は、新しい接続名 (例えば、PMDb) をタイプするか、新しいドライバタイプを選択します。
- 6 データベースの新しい接続設定をタイプします。

クライアントコンピュータが、Oracle データベースに接続する場合は、**ORACLE 接続構成**ダイアログボックスで、TNSNAMES.ORA に含まれる接続文字列をタイプします。

クライアントコンピュータが、Microsoft SQL Server または SQL Server Express に接続する場合は、**SQL Server 接続の設定**ダイアログボックスで、サーバのホスト名とデータベース名をタイプします。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDB です。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。

- 7 **パブリックログオン情報の入力**ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。

モジュールのユーザは、公開ログインを使ってデータベースに接続します。

- 8 **データベース接続の有効化**ダイアログボックスで、**次へ**をクリックし、データベース接続の試験を行います。

接続テストが失敗した場合は、エラーを無視するか、[戻る] をクリックして設定を変更します。

- 9 **接続は成功しました!**ダイアログボックスで、**終了**をクリックします。

モジュールに新しい DB 接続名を作成した場合は、モジュールの INI ファイルはその変更を反映して更新されます。1 台のクライアントコンピュータに複数のモジュールがインストールされた場合、1 つのモジュールの DB 接続名の変更は他のモジュールに影響しません。

DB 接続名のデータベース接続設定を変更し、複数のモジュールがデータベースへのアクセスにその接続名を共有している場合は、変更はその接続名を共有しているすべてのモジュールに影響します。

管理タスクの実行

データベース設定ウィザードを使用して、アプリケーションライセンス、ユーザパスワードの変更、プライベートデータベースのログイン管理の設定を行います。

アプリケーションライセンスの設定をしたい場合は、ウィザードを使ってデータベースに接続し、データベースにライセンスを保存します。データベース設定ウィザードを使って、2種類のライセンスを保存することができます。新規またはアップグレードの Primavera インストールを実装するときに Primavera から与えられる新ライセンス、または既存のライセンスに追加ユーザライセンスを購入するときに Primavera から与えられる追加ライセンスです。

データベース設定ウィザードを使用して、モジュールにユーザがログインするときのパスワード変更を行うこともできます。このログインは、データベースログインではなく、Project Management モジュールを使って管理される Primavera ログインであることに注意してください。

プライベートデータベースログインは、主に管理者によって、データベースに直接アクセスするために使われます。例えば、データベースにアクセスするために使用する特権ユーザのログインは、プライベートデータベースログインです。データベース設定ウィザードを使用して、既存のログインを変更するか、あるいは新規のログインを作成することができます。

データベース設定ウィザード アプリケーションライセンスの設定であろうと、ユーザパスワードの変更またはプライベートデータベースログインの管理であろうと、ほとんどの管理タスクに必要なステップは同じです。これらのタスクを実行するには、以下のステップに従います。

- 1 クライアントコンピュータのデスクトップから、[スタート] をクリックして、[プログラム]、[Primavera]、[Help and Utilities]、[Database Configuration] を選びます。
- 2 **Welcome** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。

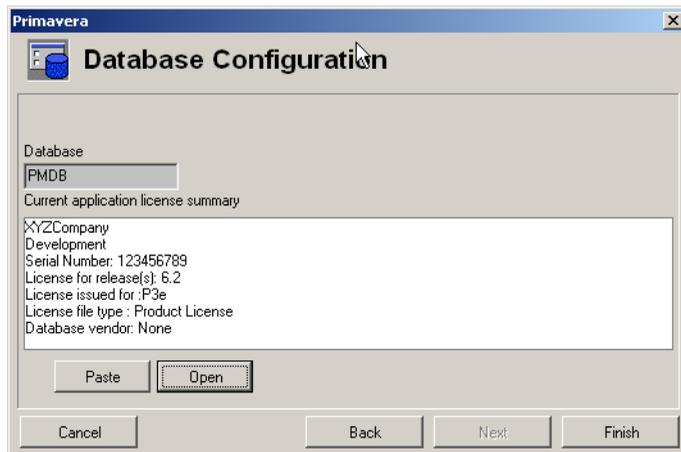


ウィザードの各ダイアログボックスで、[Next] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 どうしますか? ダイアログボックスで、**管理業務**を選択します。
- 4 **管理タスクの選択**ダイアログボックスで、目的の管理タスクを選択します。データベースライセンスの設定、アプリケーションユーザパスワードまたは管理者プライベートデータベースのログイン
- 5 **データベース接続名の選択**ダイアログボックスで、目的のデータベースを選択します。
- 6 **データベース構成**ダイアログボックスで特権データベースユーザの名前とパスワードを入力します。
このログインには、データベースの管理権限が必要です。
- 7 以下から、実行しようとしている管理タスクに対応する手順に従います。

アプリケーションライセンスの設定

ライセンスは貼り付けるか、ファイルからロードします。新ライセンスを旧ライセンスの代わりに貼り付けるには、ライセンスをコピーし、[貼付]をクリックし、[はい]をクリックして旧ライセンスに上書きします。ファイルからライセンスを追加するには、[開く]をクリックします。[Finish]をクリックし、ウィザードを閉じます。

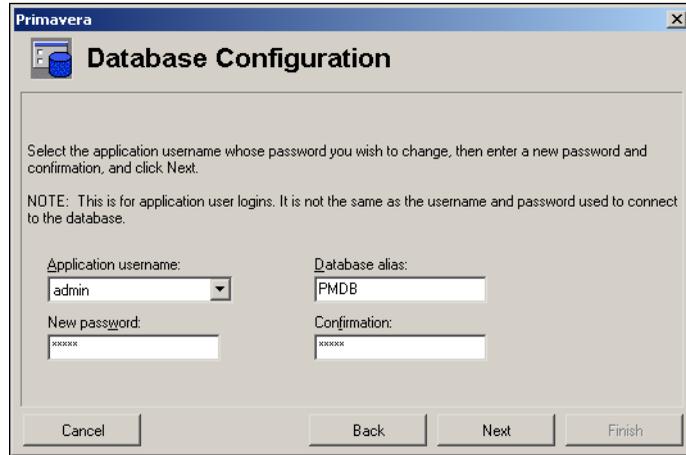


P6 Web Access に影響するライセンスを変更した場合は、その変更を有効にするため、P6 Web Access をホストしているアプリケーションサーバを再起動する必要があります。

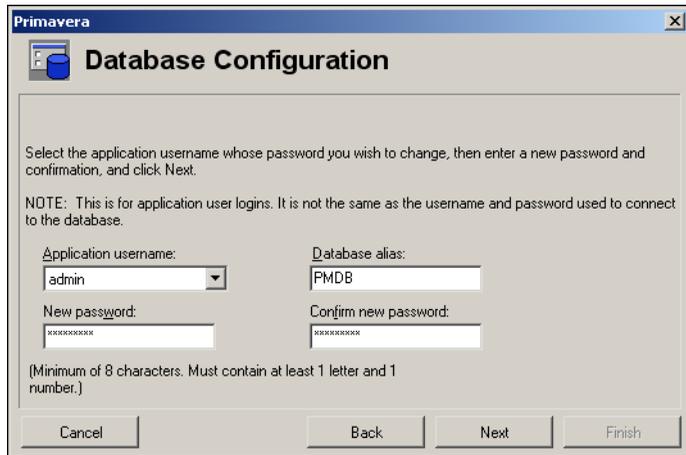
ユーザパスワードの変更

モジュールのログインを選択し、新パスワードを設定します。

[管理設定] でパスワードポリシーが有効になっていない場合は、以下の画面が表示されます。



[管理設定] でパスワードポリシーが有効になっている場合は、新しいパスワードの要求事項を詳述した以下の画面が表示されます。

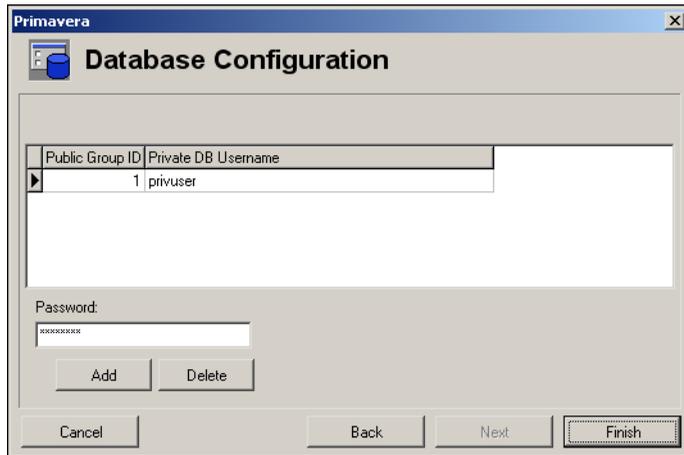


[OK]、[終了] をクリックし、ウィザードを閉じます。

プライベートデータベースログインの管理

プライベートデータベースログインについての説明を読み、[Next] をクリックします。

ログインの設定を変更するには、該当のセルをクリックし、変更の値をタイプします。新ログインを追加するには、[追加] をクリックします。ログインを削除するには、ログインを選択して、[削除] をクリックします。[Finish] をクリックし、ウィザードを閉じます。



認証モードの設定

本章の内容：

[Primavera における認証](#)

[プロセスの概要](#)

[認証方法の選択](#)

[Project Management モジュールの設定](#)

[ログイン手順および認証](#)

本章では、Primavera の認証モードを説明し、認証を実施するために必要なステップを概述し、クライアント・サーバおよび Web モジュールで設定ウィザードを使用してモードを指定する方法について説明します。また、Project Management モジュールの設定手順についても詳述します。

Primavera における認証

通常、組織では、ソフトウェアアプリケーションへのユーザーアクセスは、認証と承認のメカニズムで管理されます。簡単に言って、認証は、ユーザの資格を検証するもので、承認は特定のリソースまたはデータへのアクセスを管理するために使用されます。

Primavera は 3 種類の認証モードをサポートします。ネイティブ (Primavera 固有の認証方法)、シングルサインオンおよび LDAP です。

■ ネイティブ

ネイティブ認証は、すべての Primavera モジュールでの既定モードです。このモードでは、ユーザが Primavera モジュールにログインを行おうとすると、Primavera データベースを認証機関としてモジュールにより直接認証します。

■ シングルサインオン

Web アプリケーションへのアクセス管理を提供する、シングルサインオン認証は Group Server と P6 Web Access で利用可能です。このモードでは、ユーザが Primavera モジュール (保護リソース) にログインしようとする、Web エージェントが要求を遮りユーザにログイン証書を求めます。ユーザの証書は、ポリシーサーバに渡されユーザデータストアに対し認証されます。シングルサインオンでは、ユーザは 1 回のログオンだけで、ブラウザのセッション中すべての Web アプリケーションに対して認証されます (すべての Web アプリケーションが同じポリシーサーバで認証される場合)。

■ LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)

LDAP は、ディレクトリベースの認証で、クライアント・サーバおよび Web アプリケーションで利用可能です。このモードでは、ユーザが Primavera モジュールにログインしようとする、ユーザの資格は LDAP 準拠のディレクトリサーバデータベースで確認されます。さらに、Primavera は LDAP 参照をサポートします。これにより、別のドメインへの拡張を認証できます。



Project Management モジュールがシングルサインオンまたは LDAP 認証で設定されている場合は、すべての Project Management モジュールのアプリケーション（例えば、ベースラインの更新、Claim Digger など）または Primavera の Integration API を使うその他の Primavera アプリケーション（例えば、Pertmaster）は、API AdminApp Java ユーティリティを使って、シングルサインオンまたは LDAP 認証に設定されていなければなりません。API の詳細については、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Integration ¥ API フォルダ内の『Primavera Integration API アドミニストレータガイド』を参照してください。P6 Web Services は、LDAP 認証を使用できるように設定することもできます。P6 Web Services の詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

認証方法にかかわらず、Primavera は Project Management または Methodology Management データベースを使ってユーザ認証を管理します。ユーザ認証に関する詳細については、299 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」を参照してください。

プロセスの概要

既定で、Primavera モジュールはネイティブ認証を使ってインストールされます。Primavera クライアント・サーバモジュールのインストール後に、別の認証方法を選択することができます。

認証方法を指定するには、

認証設定ウィザードを実行するマシンには、*Borland Database Engine* およびデータベースクライアントソフトウェアがインストールされている必要があります。

- 認証設定ウィザードを実行し、Project Management データベース (PMDB) および、該当する場合は Methodology Management データベース (MMDB) に対する認証モードを選択します。必要に応じて、Project Management モジュールを設定します。
- Timesheets Web サイトファイル、erps8X6.html で設定を作成します。この情報については、99 ページの「[Timesheets 用の Group Server の調整](#)」を参照してください。
- P6 Web Access 管理設定の設定この情報については、133 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」を参照してください。



旧版の Primavera ソフトウェアからのアップグレードの場合は、[認証設定ウィザードを実行する前に、253 ページの「自動データベースアップグレード」の手順を参照してください。](#)

認証モードはデータベース主導です。したがって、認証設定ウィザードでは、データベース接続設定を最初に指定するようになっています。その後、データベースをアクセスするモジュールの認証モードを選択します。

ウィザードは、クライアント・サーバモジュールと Web モジュールを別々に選択するように指示しますが、ネイティブ認証を選択する場合は、Primavera の製品群の中では統一した認証でなければなりません。つまり、クライアント・サーバでも Web モジュールでもネイティブモードを使用しなければなりません。LDAP 認証は、クライアント・サーバでも Web モジュールでも使用できます。また、LDAP クライアント・サーバ認証は、Web モジュールのみで使用するシングルサインオンと組み合わせることができます。

LDAP 認証では、設定ユーティリティでも LDAP サーバの指定、LDAP 属性の Primavera データベースフィールドへのマッピング、ユーザのプロビジョニングを行うことができます。

認証方法の選択

Primavera のインストールが完了したら、認証設定ウィザードを使って認証方法を設定します。それには以下の 1 つまたはそれ以上のステップが必要になります。

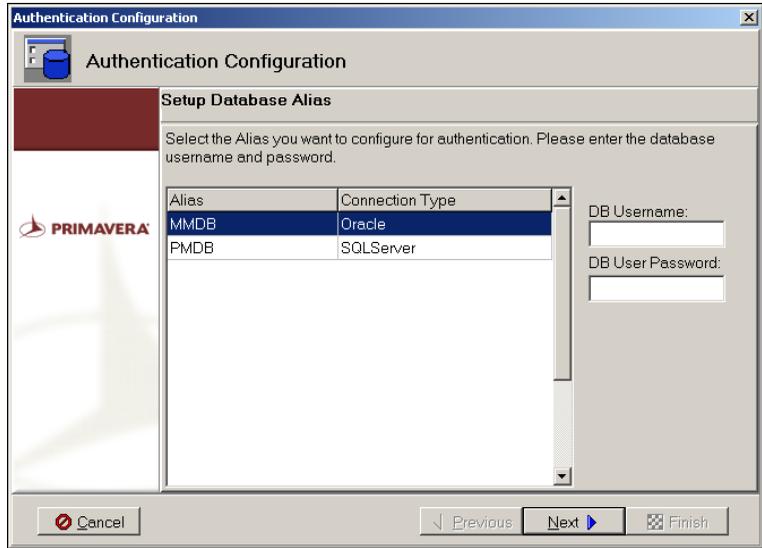
- 認証モードの選択
- LDAP サーバの設定
- LDAP ユーザ情報の Primavera データベースへのプロビジョニング

クライアント・サーバや Web モジュールで選択した認証モードに従い、ウィザードが該当するステップをガイドします。クライアント・サーバであっても Web モジュールであっても、Primavera モジュールを最初に LDAP モードを使うように設定するときにユーザのプロビジョニングを行います。LDAP 認証モードを一度設定したあとは、あとで必要に応じて認証設定ウィザードを実行して、ユーザ情報をプロビジョニングし直すことができます。

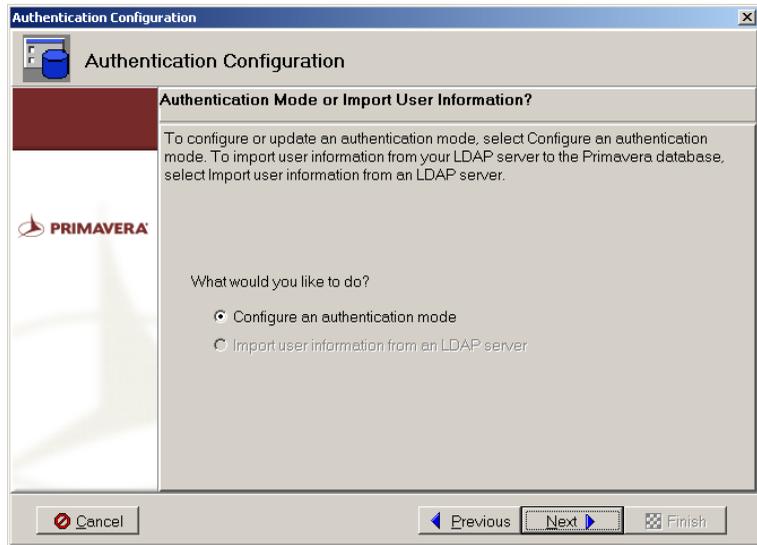
認証設定ウィザードは、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている Client_Applications フォルダ内にあります。このウィザードは媒体またはネットワーク内の場所から直接実行できます。

認証モードの選択と LDAP サーバの設定

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Client_Applications ¥ Install ¥ Database ¥ ldap_config フォルダで LDAPCfgWiz.exe をダブルクリックします。
- 2 LDAP 情報をプロビジョニングしたいデータベース接続名を選択し、データベースユーザ名とパスワードをタイプします。

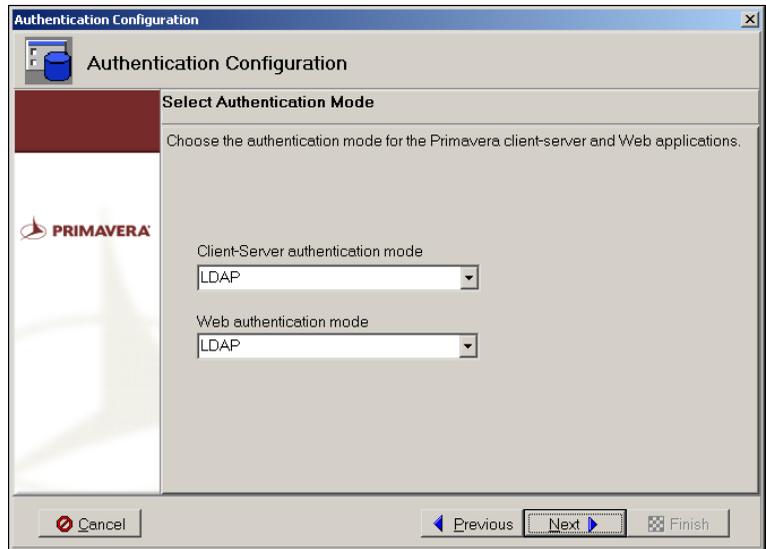


3 認定モードの設定を選択します。



 インポートオプションは、以前にデータベースがLDAP またはシングルサインオンモードで設定されているときだけ有効になります。

4 クライアント・サーバおよび Web モジュールで認証モードを選択します。

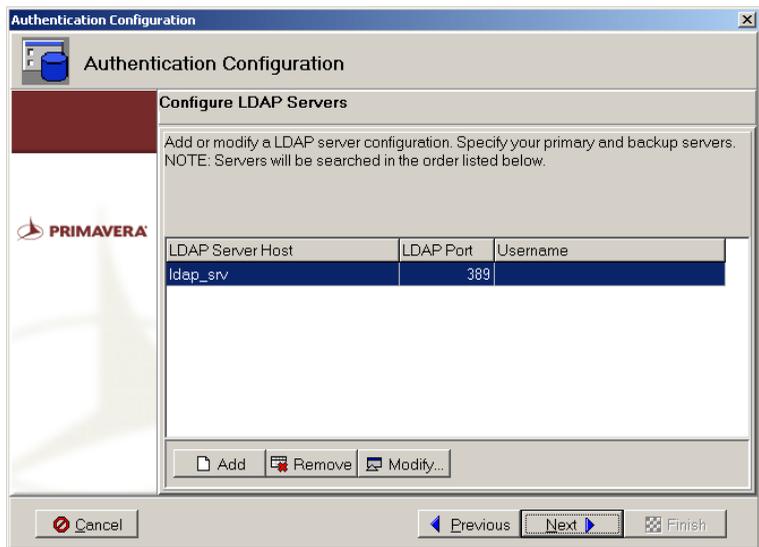


ネイティブを選択した場合は、[Finish] ボタンが有効になり、ウィザードを終了することができます。

その他の認証モードの選択では、引き続きウィザードを使って、以下のステップに述べるさらなる情報を設定します。

- 5 新規にLDAPサーバを [Add] するには、追加をクリックします。

以前に設定した LDAP サーバが表示されている場合は、情報を変更するか、サーバのエントリを削除します。



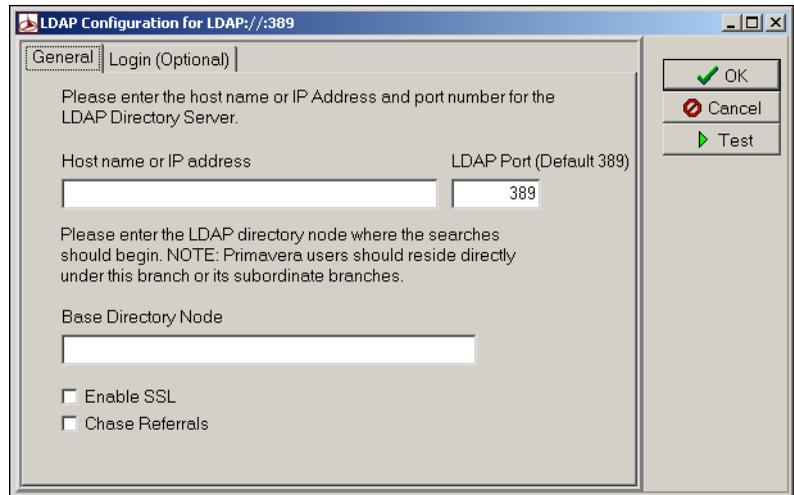
- 6 [General] タブで、LDAP ディレクトリサーバのホスト名または IP アドレス、listen ポート、ベースディレクトリノードを指定します。

ベースディレクトリノードでは、ログイン時にモジュールユーザの検索開始位置である、ディレクトリ情報ツリー (DIT) の場所を指定します。ベースディレクトリノードはまた、プロビジョニング機能がディレクトリサーバユーザの検索を開始する場所です。

LDAP サーバとの通信に SSL プロトコルを使う場合は、[Enable SSL] チェックボックスをマークします。参照を使用するには、[Chase Referrals] チェックボックスをマークします。



P6 Web Access で SSL を選択した場合は、SSL 証書を保存するキーストアの場所とパスワードを示す 2 つの設定を行う必要があります。P6 Web Access の設定についての詳細は、133 ページの「P6 Web Access のインストール」を参照してください。



The image shows a dialog box titled "LDAP Configuration for LDAP://:389". It has two tabs: "General" and "Login (Optional)". The "General" tab is selected. The dialog contains the following text and fields:

Please enter the host name or IP Address and port number for the LDAP Directory Server.

Host name or IP address: [Text Field]
LDAP Port (Default 389): [Text Field with value 389]

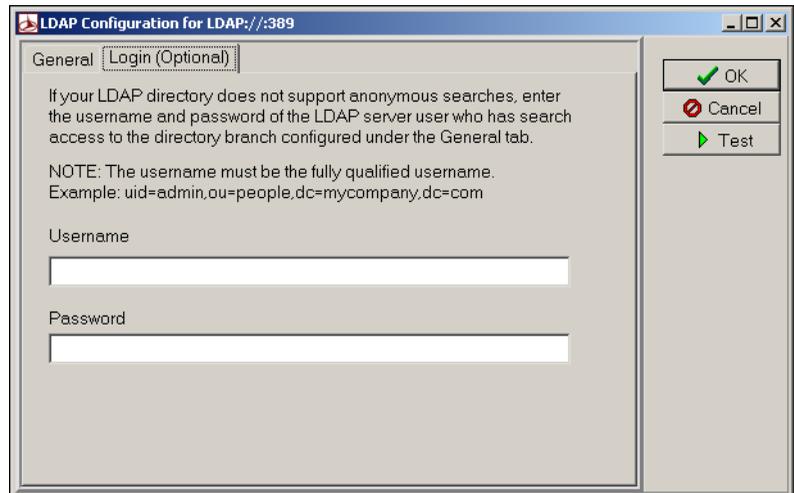
Please enter the LDAP directory node where the searches should begin. NOTE: Primavera users should reside directly under this branch or its subordinate branches.

Base Directory Node: [Text Field]

Enable SSL
 Chase Referrals

Buttons: OK (green checkmark), Cancel (red X), Test (green play button).

LDAP サーバが匿名検索を許容しない場合は、[Login] タブをクリックします。[General] タブで指定したベースディレクトリノードを検索するアクセス権がある、LDAP サーバユーザのユーザ名とパスワードをタイプします。



The image shows the same dialog box, but with the "Login (Optional)" tab selected. The dialog contains the following text and fields:

If your LDAP directory does not support anonymous searches, enter the username and password of the LDAP server user who has search access to the directory branch configured under the General tab.

NOTE: The username must be the fully qualified username.
Example: uid=admin,ou=people,dc=mycompany,dc=com

Username: [Text Field]
Password: [Text Field]

Buttons: OK (green checkmark), Cancel (red X), Test (green play button).

LDAP サーバの設定が完了したら、[OK] をクリックするか、あるいは LDAP サーバとの接続を検証するため、[Test] をクリックし、接続が成功したあと [OK] をクリックします。

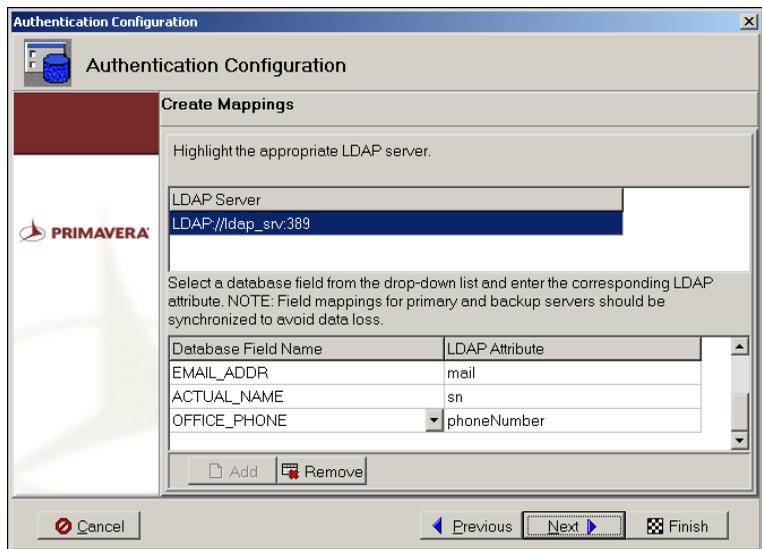
USER_NAME は必須
フィールドであり、マッピングが必要です。また削除することはできません。
LDAP ストアと Project Management/Methodology Management データベース間では、4 つのフィールドまでのマッピングができます。

- LDAP サーバを選択します。その後、LDAP 属性の列で、Primavera の Project Management/Methodology Management データベースの USER_NAME フィールドに対応する、LDAP ストアのターム/フィールドを指定します。

オプションで、E メールアドレス、実際の名前、職場の電話番号の LDAP ターム/フィールドを指定します。フィールドを追加するには、[Add] をクリックします。フィールドを削除するには、対象フィールドを選択し、[Remove] をクリックします。



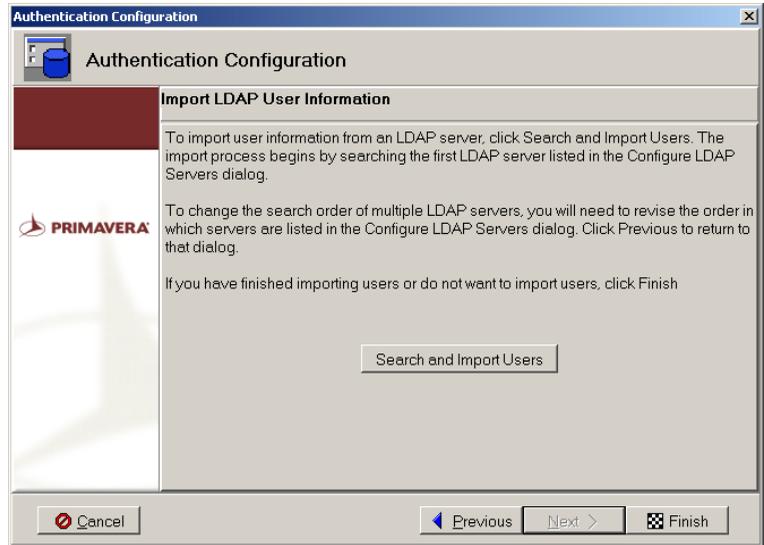
LDAP の正しいタームが確かでない場合は、LDAP ディレクトリサーバの管理者に確認してください。



- LDAP ユーザ情報を Primavera データベースに設定するには、[Next] をクリックします。LDAP ディレクトリサーバの検索、あるいは LDIF ファイルをインポートしてユーザを設定することができます。

ウィザードを終了するには、[Finish] をクリックします。

- [Search and Import Users] をクリックして、ユーザをインポートします。



ユーザを設定すると、変更されたレコードで Primavera データベースが更新され、新ユーザが追加されます。しかし、LDAP ディレクトリまたは LDIF ファイルから削除されたユーザは、Primavera データベースからは自動削除されません。これらのユーザは、手動で削除する必要があります。

10 LDIF ファイルからインポートするには、[Load LDIF] をクリックし、インポートしたいファイルへナビゲートして [OK] をクリックします。

LDAP サーバからインポートするには、既存の検索を行うか、新たな検索を定義します。

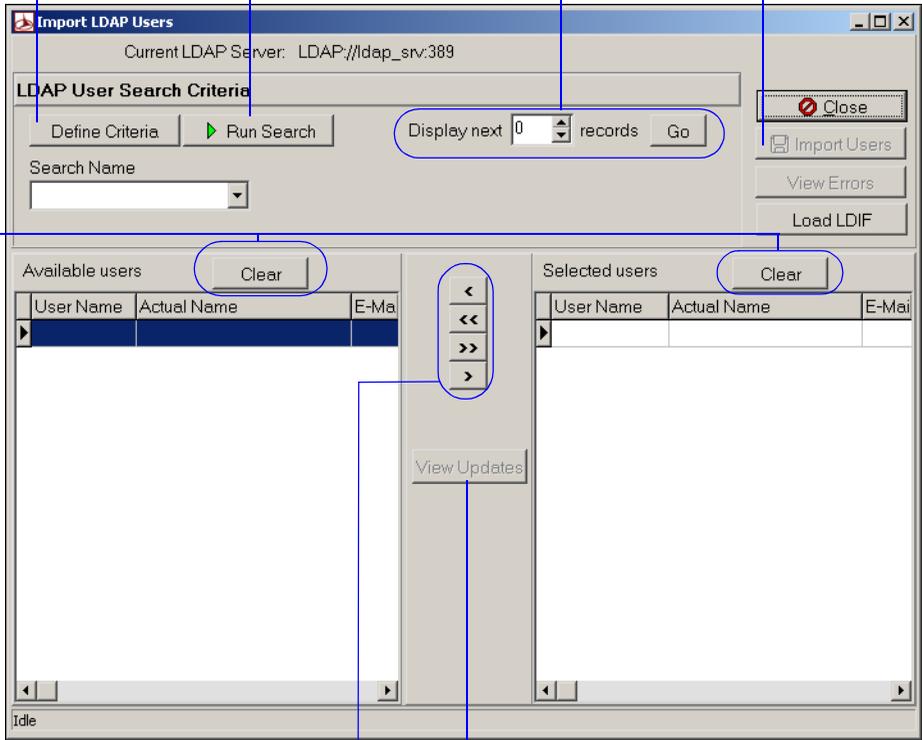
以前に定義した検索が 1 つまたは複数存在している場合は、一番最近に実行した検索が [Search Name] ドロップダウンリストの次に表示されます。現在の検索を開始するには、[Run Search] をクリックします。結果は「Available users」セクションに表示されます。新規検索を指定するには、[Define Criteria] をクリックします。

現在の検索名が表示されます。

[Search Name] ドロップダウンリストで選択したフィルタに基づき、検索を開始します。

一度に表示する検索結果数を設定するには、数をタイプするか、矢印ボタンをクリックします。リストを前進するには、[Go] をクリックします。

クリックして、選択したユーザ情報を Primavera データベースに保存します。



クリックして、現在の検索結果または、現在選択中のユーザを削除します。

検索を実行したあとは、Primavera データベースに追加したい既存のユーザを選択し、右矢印ボタンをクリックします。選択中のユーザリストからユーザを削除するには、左矢印ボタンをクリックします。二重矢印をクリックすると、表示されたすべてのユーザを一度に追加または削除できます。

クリックすると、選択されたユーザについて Primavera データベースと LDAP ストア間でレコードを比較します。ステータスは、背景色で示されます。白は一致を示し、青はデータベースレコードが LDAP ストアと異なっていることを、赤はユーザレコードがデータベースに存在しないことを示します。

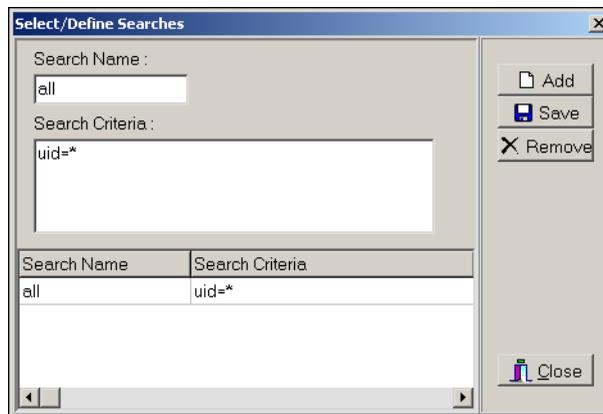
[Define Criteria] をクリックすると、[Select/Define Searches] ダイアログボックスが表示され、検索の追加、変更、削除ができます。

- 検索を追加するには、追加をクリックします。検索には固有の名前をタイプします。検索基準フィールドでは、ユーザが使いたいLDAP検索フィルタを指定します。基準を指定したあとは、[Save]をクリックし、[Close]をクリックします。



検索フィルタの文法は、RFC 2254 に記述されているルールに沿わなければなりません。

- 検出名または基準を変更するには、既存情報を編集し、[Save]、[Close]をクリックします。
- 検索を削除するには、それを選択し、[Remove]、[Close]をクリックします。



ユーザの設定後は、インポートされたユーザに Primavera ユーザアカウントを設定する必要があります。セキュリティ設定とライセンスを Project Management または Methodology Management モジュールを通して割り当てます。

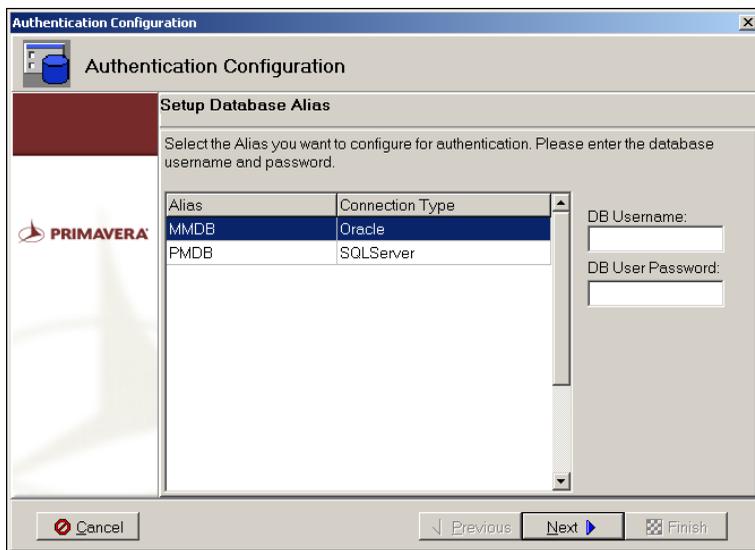
- [Import LDAP Users] ダイアログボックスでユーザ情報のインポートが済んだら、[Close]をクリックします。認証設定ウィザードを終了するには、[Finish]をクリックします。

LDAP ユーザ情報を Primavera データベースに設定

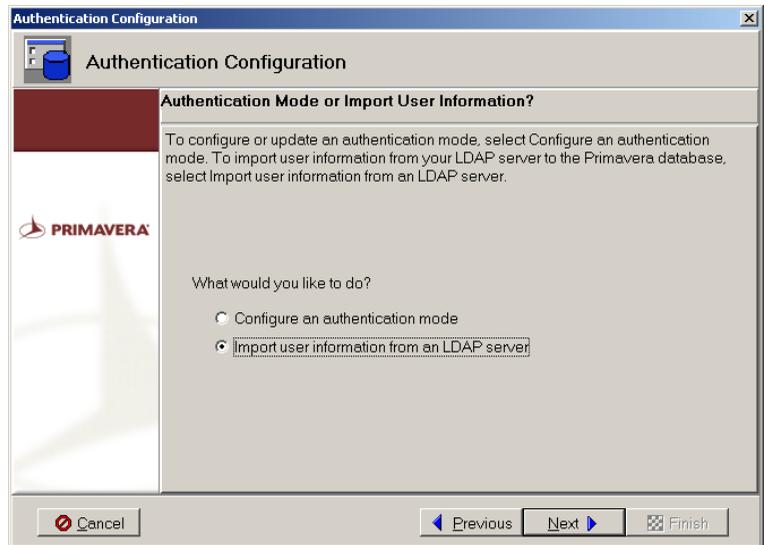


ユーザを設定すると、変更されたレコードで Primavera データベースが更新され、新ユーザが追加されます。しかし、LDAP ディレクトリまたは LDIF ファイルから削除されたユーザは、Primavera データベースからは自動削除されません。これらのユーザは、手動で削除する必要があります。

- 1 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Client_Applications ¥ Install ¥ Database ¥ ldap_config フォルダで LDAPCfgWiz.exe ファイルをダブルクリックします。
- 2 LDAP 情報をプロビジョニングしたいデータベース接続名を選択し、データベースユーザ名とパスワードをタイプします。



- 3 ユーザ情報をインポートするよう選択します。



インポートオプションは、以前にデータベースがLDAP またはシングルサインオンモードで設定されているときだけ有効になります。

- 4 ユーザのプロビジョニングを含む認証の設定方法を説明する、「[認証方法の選択](#)」のステップ 9 から 11 (288 ページ から開始) に従います。

Project Management モジュールの設定

Project Management モジュールには、[Update Baseline] および [Claim Digger] ツールが含まれています。これらの機能を LDAP モードで使えるようにするには、管理設定を変更する必要があります。以下のステップを実行します。

P6 Web Access の認証設定についての詳細は、174 ページの「[認証設定](#)」を参照してください。

- 1 Project Management をインストールするサーバ上で ¥ Program Files ¥ Common Files ¥ Primavera Common ¥ Java に進み、**admin.cmd** を実行して管理アプリケーションを起動します。
- 2 Custom/INTERNAL_PLUGINS/Authentication/Mode 設定の値が **LDAP** になっていることを確認してください。

ログイン手順および認証

Primavera モジュールのログイン手順は、選択した認証モードにより異なります。

ネイティブモードでは、

- Primavera モジュールでは、[ログイン]ダイアログを表示し、ユーザ名とパスワードの入力を促します。ネイティブモードでは、管理設定で選択したパスワードポリシーに応じてパスワードの使用はオプションです。

LDAP モードでは、

- すべての Primavera モジュール（Project Management、Methodology Management、Timesheets、P6 Web Access、ソフトウェア開発キット）ではログインパスワードが要求されます。さらに、パスワードは LDAP ディレクトリで保存され認証されるので、Primavera モジュールでのユーザのパスワード変更機能は、無効となっています。

シングルサインオンモードでは、

- タイムシートでは、[Primavera ログイン]ダイアログボックスは表示されません。その代わりに、ログイン証書が要求され、SiteMinder で検証されます。ユーザが認証されると、タイムシート起動ページが表示されます。
- P6 Web Access では、ログイン証書が要求され、SiteMinder で検証されます。ユーザが認証されると、P6 Web Access の起動ページが表示され、ユーザはデータベースと言語を選択することができます。

Timesheets と P6 Web Access のユーザパスワード変更機能は無効になり、パスワードは、ディレクトリサーバのユーザストアで保存、認証されます。

Primavera アプリケーション管理

内容 :

ユーザ管理とセキュリティ管理

Project Management での管理設定と分類の定義

Methodology Management での管理設定と分類の定義

Timesheets の実装

報告期間の定義

本

パートでは、必要な Primavera コンポーネントをすべてインストールした後のセキュリティおよび設定方法について説明します。

「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」を参照し、Project Management モジュールを使ってユーザアカウントを設定する方法を学びます。

「[Project Management での管理設定と分類の定義](#)」では、Project Management モジュールのすべてのプロジェクトに適用される一連のパラメータと値の適用方法について説明します。

「[Methodology Management での管理設定と分類の定義](#)」では、Methodology Management モジュールのすべてのメソッドに適用される一連のパラメータと値の適用方法について説明します。

タイムシートをインストールした場合は、「[Timesheets の実装](#)」を参照してユーザとタイムシートを設定し、Timesheet Approval へのアクセスを設定します。

ユーザ管理とセキュリティ管理

本章の内容：

Primavera におけるセキュリティの理解

プロセスの概要

グローバル設定の定義

プロジェクト設定の定義

Project Management モジュールでユーザを追加

OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て

EPS への OBS ノードの割り当て

リソースへのユーザアクセスの定義

P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義

Methodology Management モジュールのセキュリティ設定

Primavera では、組織全体で同時に同じプロジェクトに多くのユーザが作業することを可能にします。データの未承認の変更を防ぐため、アクセスを統制するグローバルおよびプロジェクトセキュリティ設定を作成することができます。その後、ユーザ設定を行い、組織ブレイクダウンストラクチャ (OBS) ノードにユーザ、プロジェクト設定およびエンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS) ノードを割り当てます。さらにリソースセキュリティを設定し、P6 Web Access 機能へのアクセスを定義することができます。

本章を読んで、Primavera におけるユーザの設定とセキュリティの実施方法を学んでください。

Primavera におけるセキュリティの理解

Primavera 製品群のコンポーネントの利用者は、すべて適切なライセンス権を持ち登録されていなければなりません。さらにセキュリティ権限によって、各ユーザのデータへのアクセス権が決まります。Project Management、Timesheets モジュール、P6 Web Access のセキュリティ管理には、Project Management モジュールを使います。Methodology Management モジュールは、それ自身のセキュリティを管理します。

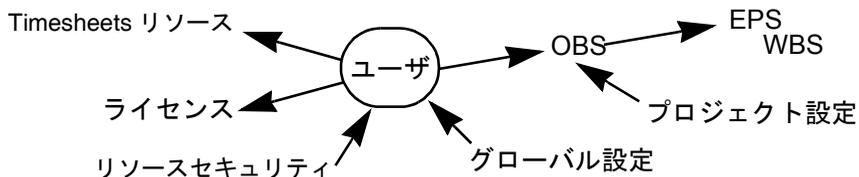
Methodology Management モジュールは、メソッドデータへのアクセス権を統制するためそれ自身のユーザとセキュリティ設定を使用します。358 ページの「**Methodology Management** モジュールのセキュリティ設定」を参照してください。

データの各レベルでのセキュリティを確保するため、Project Management モジュールは 2 セットのセキュリティ設定を提供します。

- **グローバル設定**は、ユーザのアプリケーション全体にわたるアクセス権情報と設定を定義します。例えば、エンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS)、リソース、ロール、コストアカウントなどです。各ユーザには、グローバル設定が定義されていなければなりません。
- **プロジェクト設定**は、プロジェクト固有の情報へのアクセス権を定義します。Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がされていなくても構いません。しかし、プロジェクト設定やグローバル設定がされているか、管理スーパーユーザでない限り、ユーザはプロジェクトにアクセスできません。

グローバル情報へのアクセスを制限する一連の設定を作成し、各ユーザに適したグローバル設定を割り当てることができます。同様に、各プロジェクトへの権限を制限するため、組織ブレイクダウンストラクチャ (OBS) ノード経由で各ユーザに適したプロジェクト設定を割り当てます。会社で EPS を作成する場合、EPS の各ノードとプロジェクトに OBS ノード、つまり責任者を特定する必要があります。この OBS ノードの割り当てによって、EPS レベル (およびそれ以下のレベル) へのユーザのアクセス権が決定されます。さらに、責任者である OBS ノードをプロジェクト内の各ワークブレイクダウンストラクチャ (WBS) に割り当てることによって、特定のプロジェクトデータへのアクセスを制限することができます。また、リソースセキュリティを実施することで、リソースデータへのユーザアクセスを制限することもできます。

以下の図は、ユーザ、OBS、EPS および WBS の関係を示します。ユーザが時間を更新するために Timesheets にアクセスする場合は、ユーザは、Project Management モジュールでリソースに関連付けられている必要があります。



Primavera 用語集

ユーザとセキュリティの管理をよりよく理解するため、以下の Primavera 用語集を利用してください。

ユーザ Project Management、Methodology Management、Timesheets モジュール、P6 Web Access などの Primavera コンポーネントにアクセスする必要があるすべての人。

リソース アクティビティを実行するための人、材料、および/または機器。Project Management モジュールで、組織の全プロジェクトにわたり、必要なリソースを含むリソース階層を構築することができます。リソースは、Project Management モジュールのアクティビティに割り当てられ、実際の作業時間を報告するため、Timesheets を使用するように設定されます。

OBS 組織でプロジェクトを遂行する責任マネージャを代表するグローバル階層。OBS は通常、会社を構成する最上位から様々なレベルまで、組織の管理構造を反映します。OBS はロールベースにも名前ベースにもすることができます。

EPS 組織内のプロジェクトブレイクダウンを示す階層。最高レベル（ルート）のノードは、社内部門やプロジェクトのフェーズ、場所、その他、組織のニーズを満たす主要なグループを示すことができます。一方、プロジェクトは常に階層構造の最低レベルに属します。組織内のプロジェクトはすべて、EPS ノードに含む必要があります。

WBS プロジェクト実行中にプロジェクトによって作成される製品およびサービスの階層構造。Project Management モジュールでは、プロジェクトは WBS において最高レベルに置かれます。一方、製品またはサービスを作り出すのに必要な個別のアクティビティは最低レベルとなります。EPS の各プロジェクトは、それぞれ WBS をもっています。

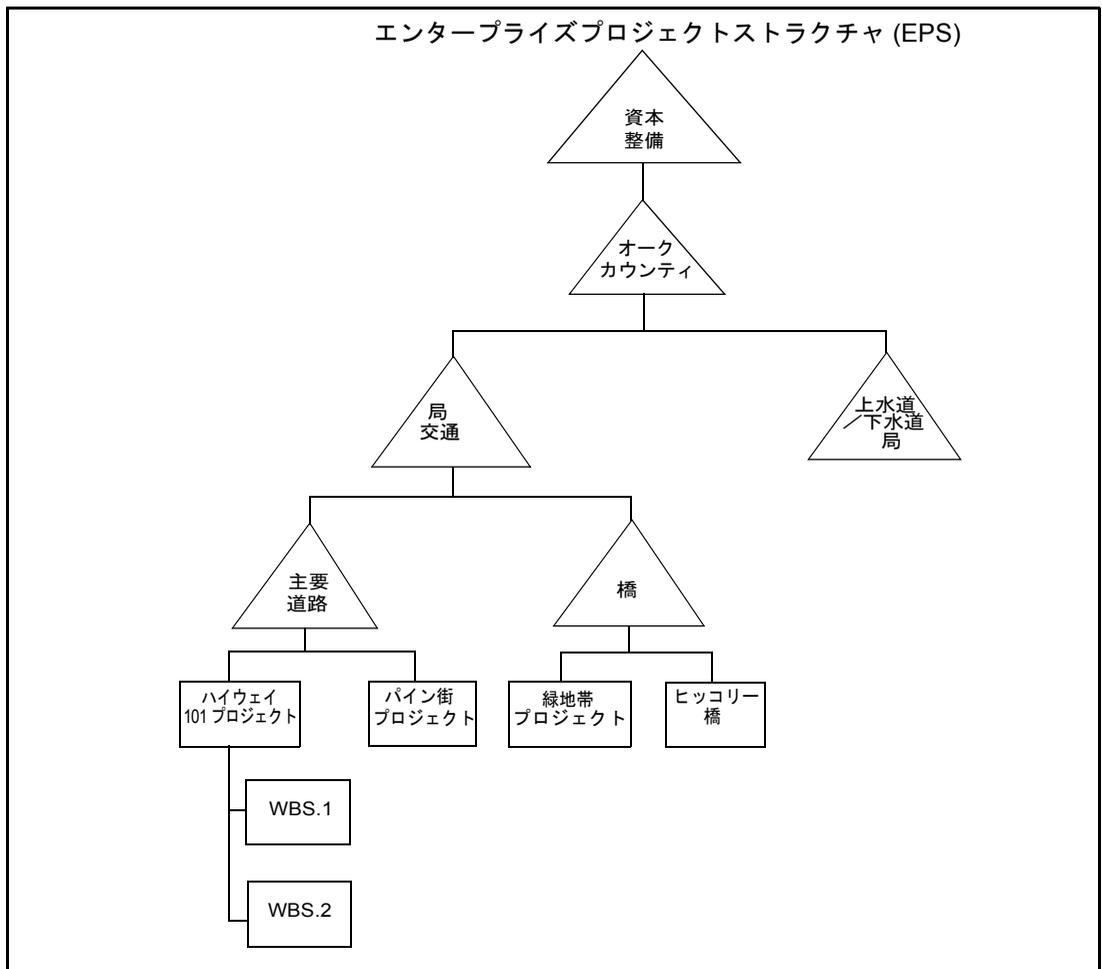
OBS は、リソースプールとは異なります。リソースはアクティビティに割り当てられますが、OBS ノードは EPS ノードおよびプロジェクトに関連付けられます。EPS ノードに対応する OBS ノードは、階層でそのブランチに含まれるすべての作業に責任をもつマネージャです。このため、OBS は、異なった分野を担当する複数のプロジェクトマネージャを含む、より大きなプロジェクトを支援します。

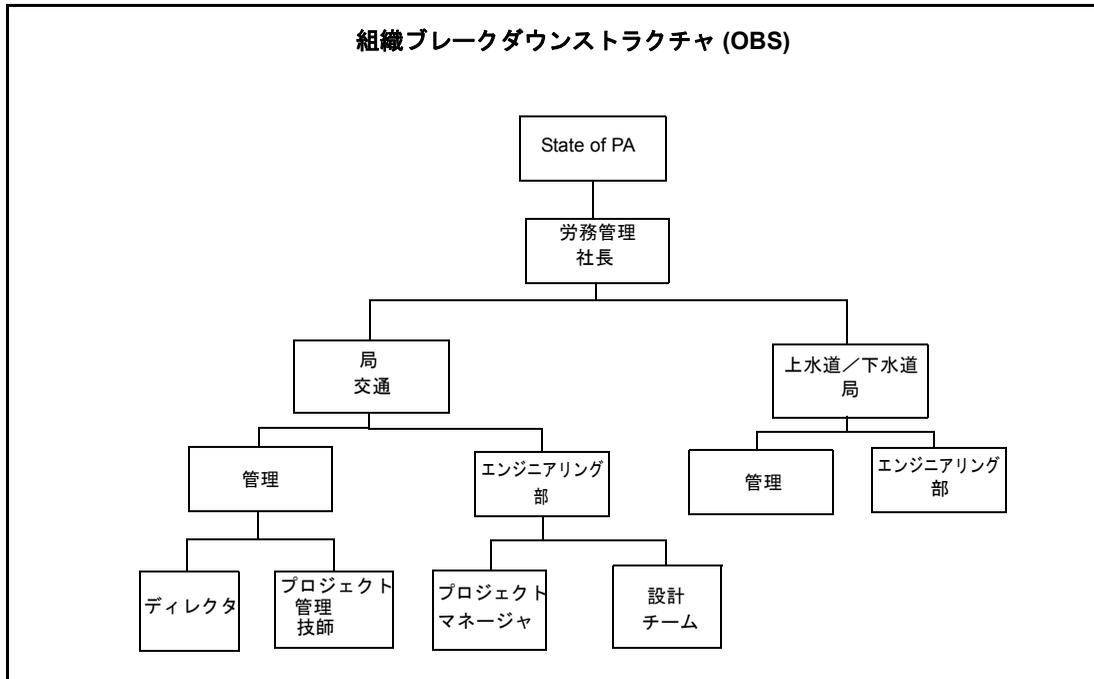
Project Management モジュールにアクセスする必要があるユーザでも、管理構造の中で責任がないユーザは OBS に含まれる必要はありません。同様に、ユーザはリソース階層の 1 部になることもならないこともあります。例えば、ユーザがアクティビティに割り当てられており、Timesheets で Timesheets の更新をす

る必要がある場合、そのユーザはリソース階層に含まれる必要があります。しかし、Web Project Management アプリケーションにアクセスする必要のある幹部はリソースプールの1部ではありません。

リソース、OBS、EPS および WBS のさらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルを参照してください。

下図に、オークカウンティの資本整備プロジェクトの EPS サンプルと対応する OBS を示します。



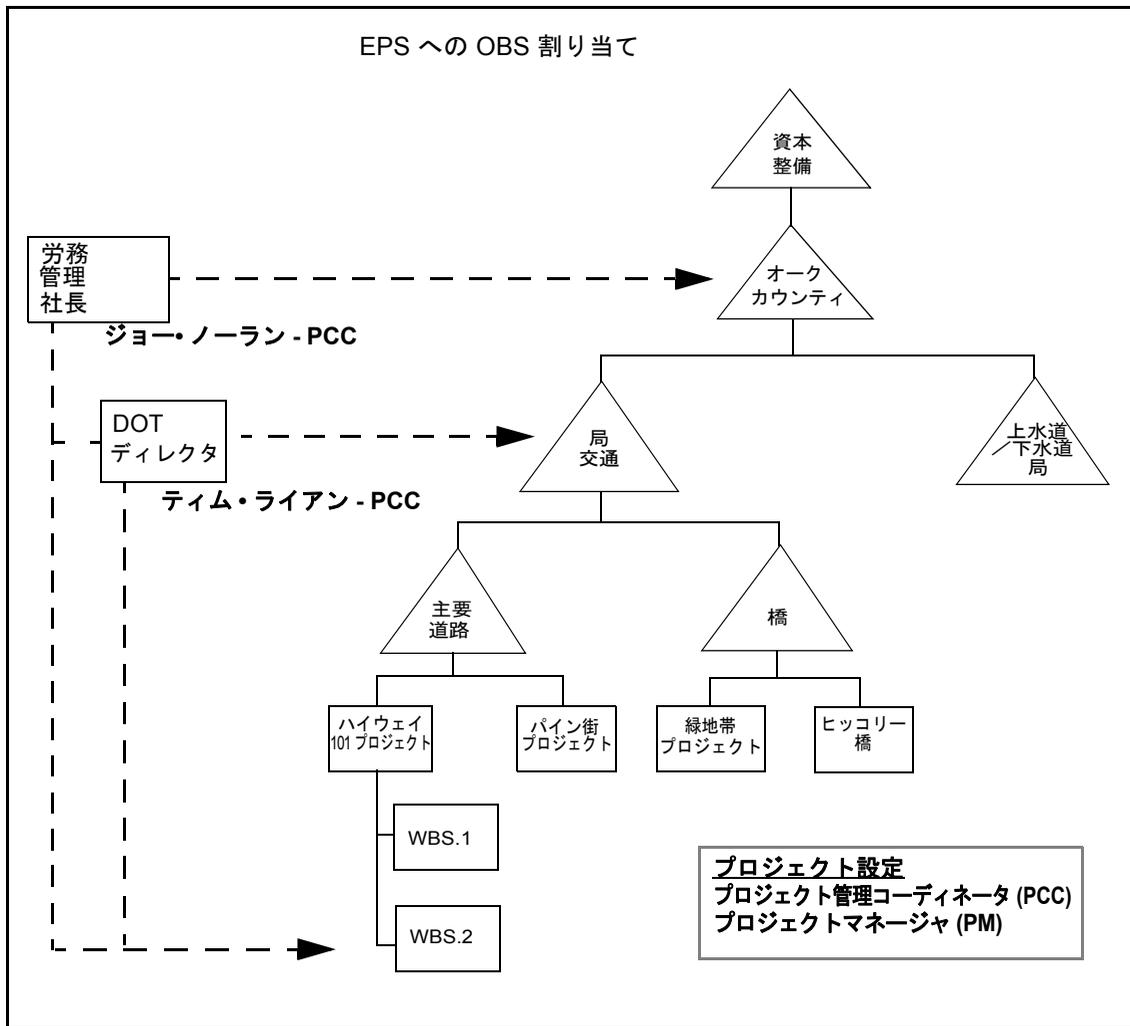


この構造を定義したら、OBS にそれぞれのロールでユーザを対応することができます。さらにそれを EPS の各レベルに割り当てることができます。OBS に割り当てる EPS レベルにより、対応するユーザがアクセスできるノード/プロジェクトが決まります。例えば、OBS ノードを EPS のルートノードに割り当てると、その OBS ノードに関連付けられたユーザは EPS 全体のプロジェクトにアクセスすることができます。OBS ノードを EPS の1つのブランチに割り当てると、それに関連付けられたユーザは、そのブランチ内のプロジェクトのみにアクセスすることができます。

各 OBS ノードに関連付けられたプロジェクト設定で、ユーザがアクセスできるプロジェクトのデータ項目を特定します。各 EPS レベルに割り当てることができるのは1つの OBS ノードです。

例えば、2つのプロジェクト設定が定義されたとします。1つは管理権も始め、すべてのデータの編集を許容するものです（プロジェクト管理コーディネータ設定）。もう1つは、すべてではないがほとんどのプロジェクトデータの表示と編集を可能とするものです（Project Management モジュール設定）。労務管理の社長である、ジョー・ノーランがプロジェクト管理コーディネータ設定に割り当てられます。OBS ノードの労務管理社長は、EPS のオークカウンティノードに責任マネージャとして割り当てられます。これは、ジョー・ノーランがオークカウンティのすべてのノードとプロジェクトへのアクセス権をもっていることを示します。

ティム・ライアンが交通局 (DOT) のディレクターであれば、彼に DOT 下のすべてのプロジェクトのプロジェクト管理コーディネータ権が割り当てられます。



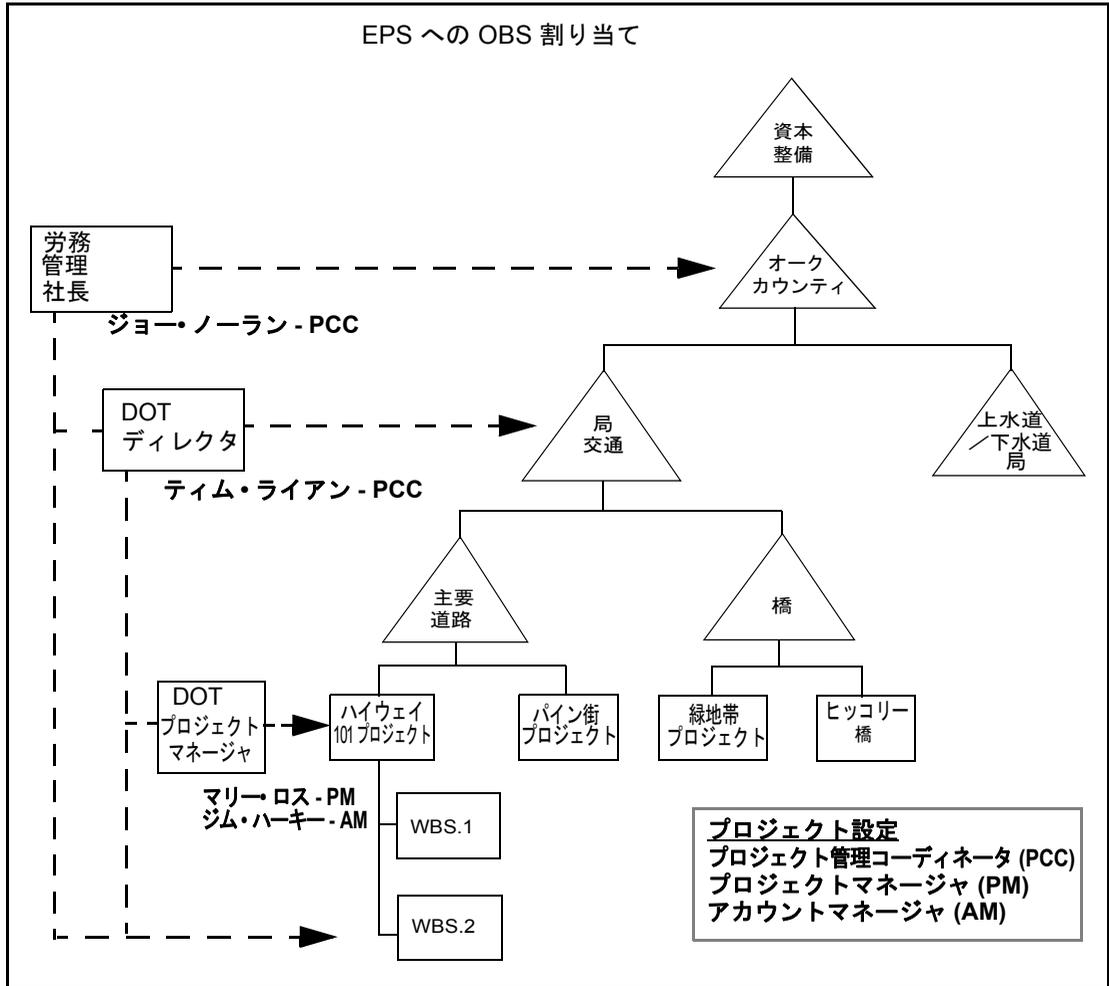
また、OBS ノードをプロジェクトおよび/または WBS レベルに割り当てることでさらにアクセスを管理することができます。前の例で、マリー・ロスがエンジニアリング部門のプロジェクトマネージャでハイウェイ 101 プロジェクトの責任者であれば、彼女をその OBS ノードにプロジェクトマネージャの設定で割り当てることができます。その場合は、彼女はそのプロジェクトだけの編集アクセス権をもつことになります。

ほかの例として、設計チームがハイウェイ 101 プロジェクトの設計部分だけのアクセスが $\pm y^{\text{TM}}$ だとします。その場合、設計チームにハイウェイ 101 プロジェクトのプロジェクト設計に関連した WBS ブランチだけを割り当てることができます。

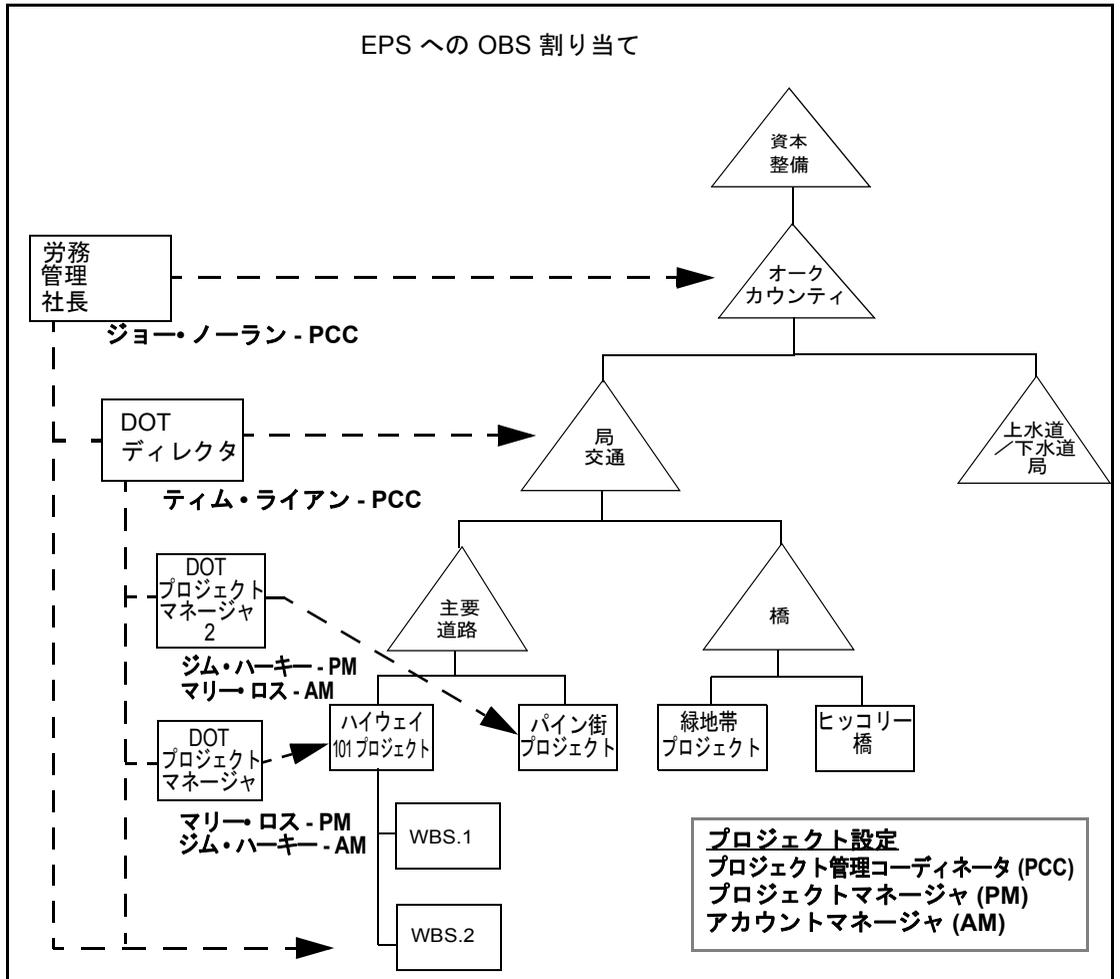
複数のユーザを同じ OBS ノードに割り当てることもできます。また、各ユーザを複数の OBS ノードの割り当てることもできます。この柔軟性により、複数の責任マネージャ（OBS ノード）に同じ EPS ブランチまたはプロジェクトへのアクセス権を与えることができます。そして同じユーザが複数の EPS ノードとプロジェクトにわたってアクセスすることを管理できます。

例えば、ハイウェイ 101 プロジェクトに責任のあるエンジニアリング部門のプロジェクトマネージャ、マリー・ロスが、パイン街プロジェクトにもアクセスする必要があるとします。但し、彼女がアクセスや編集できるのは財務データのみを制限したいとします。また、エンジニアリング部門のもう 1 人のプロジェクトマネージャ、ジム・ハーキーがパイン街プロジェクトにも責任があるとします。彼は、パイン街プロジェクトに対してプロジェクトマネージャアクセス権が必要です。しかし、彼はマリーのハイウェイ 101 プロジェクトの財務情報もレビューする必要があります。

先ず、プロジェクトコストと財務データの表示・編集権を指定する別のプロジェクト設定（アカウントマネージャ設定）を作成します。その次に以下の割り当てを行います。



ジム・ハーキーにパイン街プロジェクトのプロジェクトマネージャ権を付与し、マリー・ロスにパイン街プロジェクトのアカウントマネージャ権を付与するには、OBS に別のノードを追加する必要があります。



これらの割り当てにより、ジム・ハーキーと、マリー・ロスは主担当のプロジェクトのプロジェクトマネージャ権をもち、副担当のプロジェクトのアカウントマネージャ権をもちます。

次セクションでは、Primavera でユーザを設定し、セキュリティを管理する方法を説明します。

プロセスの概要

組織全体のプロジェクト管理には、いくつもの複数の場所で同時進行中のプロジェクトとチームを管理する構造的アプローチが必要になります。よい結果を生むには、事前の計画と組織要員の協力が必須です。Primavera を使ってプロジェクトを正しく管理するには、先ずユーザを組織し、Project Management モジュールで構造を確立する必要があります。それには、組織ブレイクダウンストラクチャ (OBS)、エンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS)、リソース階層が含まれます。ユーザと構造を設定した後、プロジェクトデータへのアクセスの許容と制限を行うセキュリティの設定を実施できます。

Methodology Management モジュールは、独自のセキュリティモデルを使って **Methodology Management** データベースへのアクセスを管理します。358 ページの「**Methodology Management** モジュールのセキュリティ設定」を参照してください。

以下のステップにユーザとセキュリティの管理に関する、ガイドラインと全般プロセスを示します。ストラクチャは、会社全体に適用されるグローバルなものなので、いくつかのステップは多くの参加者からの情報が必要になります。会社の実施計画に従って、順番を変えることができます。また、これらプロセスのいくつか、例えばリソースセキュリティの定義やユーザインターフェイスビューなどは組織のニーズによってオプションとして選ぶことができます。

1 Project Management モジュールにおける、グローバルセキュリティとプロジェクトセキュリティ設定の策定

グローバルデータとプロジェクト固有データへのアクセス権を決定する標準設定を定義します。このステップは管理者によって、実行されることが最適です。312 ページの「[グローバル設定の定義](#)」と 321 ページの「[プロジェクト設定の定義](#)」を参照してください。

2 Project Management モジュールでユーザを追加

Primavera コンポーネントにアクセスする必要があるすべてのユーザを追加しなければなりません。少なくとも、各ユーザにはログイン名、ライセンスおよびグローバル設定を割り当てる必要があります。さらなる詳細については、329 ページの「[Project Management モジュールでユーザを追加](#)」を参照してください。

『Project Management リファレンスマニュアル (PMRefMan.pdf)』はオンラインで利用でき、P6の媒体またはダウンロードに含まれている ¥ Documentation ¥

<language> ¥ フォルダ内の業界別フォルダからアクセスできます。Adobe Acrobat Reader を使って情報を表示します (ドキュメンテーションフォルダも利用できます)。

管理者も Project Management モジュールデータの設定を行うことができます。367 ページの「Project Management での管理設定と分類の定義」を参照してください。

- 3 会社に合わせて OBS を設定し、OBS の各ノードに該当するユーザとプロジェクト設定を割り当てます。

会社の管理構造を明らかにし、プロジェクトの責任者となる人たちの役割と名前、遂行すべき職務を含めます。さらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルの「組織ブレイクダウンストラクチャの設定」を参照してください。また、345 ページの「OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て」も参照してください。

- 4 会社の EPS を設定し、各ノードに責任マネージャ (OBS) を割り当てます。

組織で共通の、ユーザ会社固有のプロジェクト構造を明らかにします。さらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルの「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」を参照してください。

- 5 組織全体でプロジェクトを遂行するのに必要なリソースを定義し、Timesheets を使う場合は、リソースをユーザにリンクします。

さらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルの「リソースとロールの定義」を参照してください。また、本章に後述されている 329 ページの「Project Management モジュールでユーザを追加」も参照してください。

- 6 リソースデータへのユーザアクセスを定義します。

351 ページの「リソースへのユーザアクセスの定義」を参照してください。

- 7 会社内の機能ロールからの要求により、P6 Web Access 機能へのアクセスを提供するユーザインターフェイス画面を定義します。

355 ページの「P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義」を参照してください。

- 8 EPS へプロジェクトを追加し、各プロジェクトに WBS を定義します。

このステップは、プロジェクトマネージャが行います。プロジェクトマネージャは、それぞれのプロジェクトにおいて、特定の OBS ノードを WBS レベルに割り当てることによってさらにセキュリティを管理することができます。詳細については『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

本章のここ以降で、このプロセスについてのさらなる情報を説明します。

グローバル設定の定義

グローバル設定では、リソース、グローバルコード、OBS などのアプリケーション全体を通しての情報や設定に対するユーザアクセスを定義します。Project Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定を割り当てる必要があります。

Project Management モジュールでは、定義するグローバル設定数に制限はありません。Project Management モジュールでは、2つの予め定義されたグローバル設定が提供されています。管理スーパーユーザとグローバル権限無しユーザです。管理スーパーユーザの設定では、すべてのグローバル情報とすべてのプロジェクトへの完全なアクセスが許容されます。この設定は、Primavera モジュールのインストール時に、Admin ユーザに割り当てられます。セキュリティの理由により、管理スーパーユーザの付与はすべてのデータにアクセスする必要がある個人のみ

に制限することが重要です。



少なくとも、1人は管理スーパーユーザ設定を割り当てる必要があります。この設定に割り当てられた人が1人だけの場合は、Project Management モジュールでそのユーザの削除をすることはできません。

グローバル権限無しの設定では、グローバルデータのアクセスが制限されます。この設定は、Timesheets のみのユーザで、Project Management モジュールにアクセスする必要のない人に割り当てます。Project Management モジュールへのライセンスされたアクセス権があるユーザにこの設定が割り当てられた場合は、そのユーザは Project Management モジュールにログインすることはできませんが、プロジェクトデータにアクセスすることはできず、グローバルデータには読み取り専用となります。ユーザにこの設定と OBS ノードの両方が割り当てられた場合は、ユーザは、OBS ノードで定義されたプロジェクトデータにアクセスできますが、その他のグローバルデータへのアクセスは制限されます。

各グローバル設定を設定する場合、管理スーパーユーザはユーザにセキュアコードの追加、削除、編集、割り当て、表示の機能を指定することができます。セキュアコードによって、権限がないユーザに対し、プロジェクト、アクティビティ、リソースコードを非表示にすることができます。また、セキュリティ設定の編集権をもつユーザは、その他のユーザに対し、権限の編集、割り当て、表示を制限することができます。例えば、管理職はセキュアコードによってプロジェクト承認プロセスを追跡することができますが、その他の人は編集したり場合によっては見ることもできません。

セキュアコードは階層的に構築することができます。言い換えると、ユーザに追加・削除の権限が与えられると、そのユーザには自動的に編集、割り当て、表示権限が与えられます。ユーザに編集権が与えられると、そのユーザには、自動的に表示権が付与されます。ユーザに割り当て権が与えられると、そのユーザには、自動的に表示権が付与されます。



Project Management モジュールは、ユーザが編集したり割り当てる一連のコードを制限しません。セキュリティ権を付与すると、同じセキュリティ権限はすべてのコードに適用されます（セキュアとしても非セキュアとしても）。ユーザに権限の追加・削除、編集、割り当て、表示権を指定すると、そのユーザはすべての既存コードに対して追加・削除、編集、割り当て、表示を行うことが可能になります。

グローバル設定の作成 Project Management モジュールで、[管理]、[セキュリティ設定] を選択します。[グローバル設定] を選択し、[追加] をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のグローバル設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

グローバル設定を選択します...

...そして、その設定に付与された権限を確認します。

クリックすると、権限をアルファベット順に表示できます。

グローバル設定の割り当てに関する情報については、329 ページの「Project Management モジュールでユーザを追加」を参照してください。

以下の表で、各グローバル権を定義します：



以下に、グローバル権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。



P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
グローバルチェンジ定義の編集	すべてのユーザに使用可能な、グローバル変更仕様の作成、編集および削除を行います。
管理設定および分類の編集	[管理設定]と[管理分類]ダイアログボックスで定義の管理設定と管理分類を変更します。 [通貨]ダイアログボックスで通貨データの編集を行います。
リソースの削除	Project management データベースからリソースを削除します。この権限には「リソースの追加」権と「リソースの編集」権が自動的に付与されます。
リソースの追加	リソースを作成します。この権限には「リソースの編集」権が自動的に付与されます。
リソースの編集	リソースデータの編集を行います。レポートで、リソースの単価（「リソースコストの表示」グローバル権も付与されている場合）およびリソーススキルレベル（リソースのロール熟達度）を表示します。
リソース - ロール技能の表示	リソースとロール熟達度の表示、グループ化・ソーティング、フィルタおよびレポートを行います。 P6 Web Access を利用してリソースやロール熟達度で情報を表示したり検索を行うユーザには、この権限が必要です。
タイムシートの承認	リソースマネージャとして、 Timesheet Approval アプリケーションで提出されたタイムシートをレビュー、承認または却下します。
コストアカウントの編集	コストアカウントの作成、編集、削除を行います。
XER、MSP、XLS、P3のグローバルデータのインポート	XER、MSP、XLS、P3形式のプロジェクト、リソース、ロールをインポートします。新規プロジェクトのインポートと作成については、ユーザにはEPSでのプロジェクト作成権も必要です。 XER、XLS、P3形式のプロジェクト更新とProject Link を使用してのMSP形式のインポートには、ユーザにはスーパーユーザ権も必要です。
XMLのインポート	Project Management モジュールからXMLおよびMicrosoft Project XML形式でプロジェクトをインポートします。新規プロジェクトのインポートと作成については、ユーザにはEPSでのプロジェクト作成権も必要です。

権限名	権限の定義
グローバルレポートの編集	グローバルレポートの作成、編集、削除。レポートグループとグローバルレポートバッチの編集。レポートウィザードで作成または変更されたグローバルレポートの保存。
グローバルトラッキングレイアウトの編集	Project Management モジュールでグローバルトラッキングレイアウトの作成、編集、削除を行います。
ロールの編集	グローバルロールの作成、編集、削除を行います。
グローバルアクティビティコードの編集	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードの名前を編集します。この権限によって、自動的にグローバルアクティビティコード値の追加、編集、削除も可能になります。
グローバルアクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的に既存のグローバルアクティビティコードとコード値の編集も可能になります。
グローバルアクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にグローバルアクティビティコードとコード値の追加と編集も可能になります。
問題点フォームの編集	P6 Web Access における問題点フォームと問題点フォーム分類の追加、編集、削除を行います。
グローバルカレンダーの編集 *	P6 Web Access と Project Management モジュールの双方で、グローバルカレンダーとシフトの作成、編集、削除を行います。
リソースカレンダーの編集 *	P6 Web Access と Project Management モジュールの双方で、リソースカレンダーとシフトの作成、編集、削除を行います。
セキュリティ設定の編集	プロジェクトセキュリティ設定の作成、編集、削除を行います。
ユーザの編集	Project Management モジュールユーザの追加、編集、削除を行います。
タイムシート期間の編集	Timesheets バッチの作成および削除を行います。

権限名	権限の定義
アクティビティ/リソース割当のグローバルレイアウト/フィルタの編集	アクティビティとリソース割当のグローバルレイアウト、表示、フィルタの作成、編集および削除を行います。
OBS の編集	グローバル OBS 階層の作成、編集、削除を行います。
プロジェクトコードの編集	プロジェクトコード名を編集します。この権限によって、自動的にプロジェクトコード値の追加、編集、削除も可能になります。
プロジェクトコードの追加	新規のプロジェクトコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的に既存のコードとコード値の編集も可能になります。
プロジェクトコードの削除	プロジェクトコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にプロジェクトコードとコード値の追加と編集も可能になります。
リソースコードの編集	リソースコード名を編集します。この権限によって、自動的にリソースコード値の追加、編集、削除も可能になります。
リソースコードの追加	新規のリソースコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的にリソースコードとコード値の編集も可能になります。
リソースコードの削除	グローバルリソースコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にリソースコードとコード値の追加と編集も可能になります。
グローバルポートフォリオの編集	Project Management モジュールと P6 Web Access で、グローバルポートフォリオの作成、編集、削除を行います。
グローバル外部アプリケーションの管理	グローバル外部アプリケーションリストの管理を行います。
資金調達先の編集	資金調達先ディクショナリの資金調達先を作成、編集、削除します。
Project Architect の実行	Project Architect ウィザードを実行します。ウィザードによって、 Project Management モジュールユーザが Methodology Management モジュールからインポートしたメソドロジに基づき新規プロジェクトを作成すること、および既存プロジェクトにメソドロジを追加することが可能になります。

権限名	権限の定義
リソースとロールコストの表示	<p>労務と非労務リソースコストおよびロールの単価を表示します。ユーザにこの権限が付与されていない場合は、Project Management モジュールのすべてのロール、労務、材料、非労務リソースの金額表示エリアには、ダッシュが表示され、編集もできません。リソースについては、そのようなエリアには、時間当たりのリソース価格、アクティビティ画面のリソース設定値、トラッキングレイアウトの金額が含まれます。ロールについては、この対象エリアは [ロール] ダイアログボックスでの単価になります。</p>
ジョブサービスの管理	<p>ジョブサービスの管理。実績の適用、一括レポート、エクスポート、スケジューリング、サービスの要約を指定の間隔で実行するように設定します。</p>
パーソナルリソースカレンダーの編集	<p>ユーザに「グローバルカレンダーの編集」、「リソースカレンダーの編集」の権限がない場合、ユーザ自身のリソースカレンダーを編集することを可能にします。P6 Web Access で「アポイントメントのインポート」機能にアクセスするには、この権限または「グローバルカレンダーの編集」、「リソースカレンダーの編集」が必要です。</p>
プロジェクト要求の作成 *	<p>新規プロジェクト要求をレビューするために、予め定義されたワークフロープロセスを開始します。使用可能なワークフロープロセスを定義するテンプレートを作成するには、別の権限（プロジェクト要求の編集）が必要です。</p>
プロジェクト要求テンプレートの編集 *	<p>新規プロジェクト要求をレビューするためにワークフロープロセスを定義するテンプレートを作成、編集、変更します。</p>
セキュアコードの追加と削除	<p>すべてのグローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の作成、編集、割り当て、表示、削除を行います。</p>
セキュアコードの編集	<p>グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の作成、編集、割り当て、表示を行います。</p>

権限名	権限の定義
セキュアコードの割当	グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の割り当て、表示を行います。
セキュアコードの表示	グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の表示を行います。
ユーザインタフェース画面の編集	P6 Web Access のユーザインタフェース画面の作成、編集、削除を行います。この権限によって、P6 Web Access および Project Management モジュール双方でユーザにユーザインタフェース画面を割り当てる権限が得られます。
SDK 経由でグローバル/プロジェクトデータの表示	スーパーユーザ権限なしに読み取り専用モードで SDK にアクセスします。
グローバルリソース/ロールチームの編集	グローバルリソースチームとロールチームの作成、編集、削除を行います。リソースチーム、ロールチームとは、リソースやロールの集合です。リソースチーム、ロールチームは P6 Web Access で活用できます。
リソースカーブの編集	リソース分散カーブの作成、編集、削除を行います。
ユーザ定義フィールドの編集 *	ユーザ定義フィールドの作成、編集、削除を行います。この権限がない場合は、ユーザ定義フィールドの表示のみができます。P6 Web Access では、管理ページのプロジェクトユーザ定義フィールドセクションへのアクセスが可能となり、プロジェクトユーザ定義フィールドの作成、編集、削除ができます。
プロジェクト/WBSのグローバルレイアウト/ポートフォリオ画面の追加/編集	グローバルプロジェクトと WBS レイアウトの作成、編集、削除を行います。P6 Web Access で、ポートフォリオ画面の作成、編集、削除を行います。この権限は、P6 Web Access の [ポートフォリオ]>[ポートフォリオ分析] ページに加えられた表示の変更を保存する際に必要です。
Microsoft Project テンプレートの編集	Microsoft Project からデータをインポートあるいはエクスポートするのに使用する、Microsoft Project テンプレートの作成、編集、削除を行います。

権限名	権限の定義
ステップテンプレートの編集	複数のアクティビティに対する一連の共通ステップを追加するのに使用する、アクティビティステップテンプレートの作成、編集、削除を行います。
グローバル問題点コードの追加	P6 Web Access で新規問題点コードと問題点コード値を作成します。
グローバル問題点コードの編集	P6 Web Access で問題点コードと問題点コード値を編集します。
グローバル問題点コードの削除	P6 Web Access で問題点コードと問題点コード値を削除します。この権限によって、自動的にグローバル問題点コードと問題点コード値の追加と編集も可能になります。
報告期間の編集	報告期間ディクショナリの報告期間を作成、編集、削除します。期間データの編集を行うには、ユーザには「期間パフォーマンスの編集」プロジェクト権も割り当てられていることが必要です。
グローバルシナリオの編集	P6 Web Access で、グローバルシナリオの作成、編集、削除を行います。
グローバルダッシュボードの編集	P6 Web Access で、グローバルダッシュボードの作成、編集、削除を行います。
スコアカードからプロジェクトを編集	P6 Web Access でポートフォリオ表示ポートレットとポートフォリオ分析ページのスコアカードからプロジェクトの追加、編集、削除を行います。この権限は、[ポートフォリオ分析]ページで行われたデータの変更を保存する際に必要です。スコアカードのプロジェクトデータを編集するには、ユーザには「財務以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権も割り当てられていることが必要です。スコアカードのプロジェクトコストデータを編集するには、ユーザには「WBS 財務情報の編集」プロジェクト権も割り当てられていることが必要です。スコアカードにプロジェクトを追加するには、ユーザには「EPS 以下でプロジェクトの作成」プロジェクト権も割り当てられていることが必要です。スコアカードからプロジェクトを追加するには、ユーザには「EPS 以下でプロジェクトの削除」プロジェクト権も割り当てられていることが必要です。

プロジェクト設定の定義

プロジェクト設定は、ロールベースの設定で、例えばベースライン、WBS、しきい値などのように特定の権限を制限します。Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がされていなくても構いません。しかし、プロジェクト設定やグローバル設定がされているか、管理スーパーユーザでない限り、ユーザはプロジェクトにアクセスできません。

Project Management モジュールでは、定義するプロジェクト設定数に制限はありません。Project Management モジュールでは、予め定義されたプロジェクト設定として、プロジェクトスーパーユーザを提供します。プロジェクトスーパーユーザの設定では、プロジェクト内のノードへの完全なアクセスが許容されます。

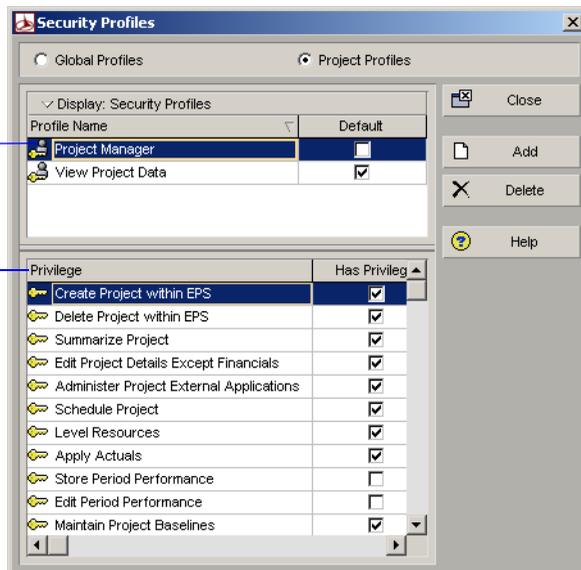
OBS ノードへのユーザ割り当てに関するさらなる情報は、345 ページの「OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て」を参照してください。

プロジェクト設定は、OBS の割り当てによりユーザに適用されます。Project Management モジュールでは、すべての EPS と WBS ノードおよびプロジェクトが責任 OBS に割り当てられていることが必要です。OBS 割り当てに対するプロジェクト設定/ユーザ割り当てと EPS/WBS に対する OBS 割り当ての組み合わせによって、ユーザがアクセスできるプロジェクトとデータが決まります。

プロジェクト設定の作成 [管理]、[セキュリティ設定]を選択します。[プロジェクト設定]を選択し、[追加]をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のプロジェクト設定とするには、[既定]チェックボックスをマークします。[権限]エリアで、適宜[権限あり]チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

会社内のさまざまなロールに対し、作成できるプロジェクト設定数には制限がありません。

クリックすると、権限をアルファベット順に表示できます。



プロジェクトのすべての局面での書き込みと読み取りを許容するには、プロジェクトのルート OBS ノードにユーザを割り当て、プロジェクトスーパーユーザをその OBS に割り当てます。

以下の表で、各プロジェクト権限を定義します。



以下に、各権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。



P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名

権限の定義

EPS 以下でプロジェクトの作成	EPS 内でプロジェクトの作成、コピー、貼り付けを行います。
EPS 以下でプロジェクトの削除	EPS 内でプロジェクトの削除、切り取り、貼り付けを行います。
プロジェクトの集計	EPS 内のすべてのプロジェクトデータを集計します。

権限名	権限の定義
財務情報以外のプロジェクト詳細編集	プロジェクト詳細の [設定] タブで、[全般]、[日付]、[既定]、[リソース] フィールドを編集します。プロジェクトベースラインを選択するために、1人のユーザにはこの権限が付与されている必要があります。
プロジェクト外部アプリケーションの管理	外部アプリケーションへのリンクを管理します。
スケジュール計算	プロジェクトのスケジュールを立てます。
リソースの平準化	プロジェクトのリソースを平準化します。
実績の適用	プロジェクトのアクティビティに実績を適用します。
期間締切	プロジェクトの当報告期間に工数実績とコスト実績を保存します。この権限を付与するには、そのユーザに「接続以外のアクティビティ情報の追加/編集」プロジェクト権が割り当てられていることが必要です。
期間実績の編集	労務と非労務単位と労務、非労務、材料、経費コストの期間成績を編集します。この権限を付与するには、そのユーザに「プロジェクトコスト/財務情報の表示」プロジェクト権が割り当てられていることが必要です。
プロジェクトベースラインの保守	プロジェクトのベースラインを追加、保存、削除します。 Project Management モジュールでプロジェクトベースラインを追加するには、ユーザにこの権限と「財務情報以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権が割り当てられていることが必要です。
ベースラインの更新の実行	ベースラインの更新ユーティリティを使い、プロジェクトのベースラインを新しいプロジェクトデータで更新します。
プロジェクトベースラインの割当	プロジェクトにそのプロジェクトベースラインを選択します。プロジェクトベースラインの選択のためには、ユーザに「財務情報以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権が割り当てられていることが必要です。

権限名	権限の定義
プロジェクトドキュメントの編集	プロジェクト成果物とドキュメントの作成、編集、削除を行います。P6 Web Access で、ドキュメントへの項目の関係付け、ドキュメントアクセスレベルの変更、フォルダの追加と削除、プロジェクトドキュメントレビューの開始を行います。この権限のほか、コンテンツリポジトリはドキュメントのアクセスレベル変更や、フォルダの追加と削除、プロジェクトドキュメントレビューの開始を実行できるよう設定する必要があります。
プロジェクトテンプレートドキュメントの追加／編集	P6 Web Access で、プロジェクトテンプレートドキュメントの作成、編集、削除、チェックアウト、レビューの開始を行います。ユーザには、「プロジェクトドキュメントの編集」権限も必要です。この権限のほか、コンテンツリポジトリは、プロジェクトテンプレートドキュメントのレビューをチェックアウトしたり開始したりできるよう設定する必要があります。
プロジェクトコスト／財務情報の表示	プロジェクトのすべての金額を表示します。ユーザにプロジェクトコストの表示を許容しない場合は、Project Management では、金額を表示するすべての機能は 3 本のダッシュ (---) で置き換わり、ユーザは編集することができません。リソース価格／時間の表示機能は、「リソースとロールコストの表示」グローバル権限で管理されます。
プロジェクトアクティビティコードの編集	P6 Web Access と Project Management の双方でプロジェクトのアクティビティコードを変更します。
プロジェクトアクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方でプロジェクトのアクティビティコードを作成します。
プロジェクトアクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方でプロジェクトデータベースからのプロジェクトのアクティビティコードを削除します。
EPS アクティビティコードの編集	P6 Web Access と Project Management の双方で EPS レベルのアクティビティコードを変更します。

権限名	権限の定義
EPS アクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方で EPS レベルのアクティビティコードを作成します。この権限によって、自動的に既存の EPS レベルアクティビティコードの編集も可能になります。
EPS アクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方で EPS レベルのアクティビティコードを削除します。この権限によって、自動的に既存の EPS レベルアクティビティコードの追加と編集も可能になります。
しきい値の監視	プロジェクトのしきい値監視を実行します。
プロジェクト Web サイト発行	プロジェクト Web サイトの発行
プロジェクトレポートの編集	プロジェクトレポートを編集し、プロジェクトレポートバッチを編集します。
プロジェクトカレンダーの編集*	P6 Web Access と Project Management モジュールの双方で、プロジェクトのカレンダーの作成、編集、削除を行います。
グローバルチェンジの実行	グローバルチェンジを実行し、アクティビティ詳細情報を更新します。
チェックイン／チェックアウト	Project Management モジュールからのプロジェクトのチェックインおよびチェックアウトを行います。
問題点フォームの割当	P6 Web Access で、問題点フォームをプロジェクトに割り当てます。
レポートでタイムシートを表示	P6 Web Access の My Reports ポートレットからプロジェクトのリソースすべてのタイムシートについてレポートを実行します。この権限は、Timesheet Approval アプリケーションへのアクセス権を授与するものではありません。
Contract Manager データのインポート／表示	Contract Manager データのインポートと表示を行います。
財務情報以外の WBS 詳細編集	WBS 階層 (WBS ノードの追加／削除／移動)、ノートの入力、アーンドバリュー、進捗 (ステップ)、ワーク成果物とドキュメント、日付の編集を行います。

権限名	権限の定義
WBS 財務情報の編集	プロジェクトレベルの WBS 予算ログ、資金調達先、支出計画、および財務データを編集します。アクティビティレベルのコストデータを編集します。
財務情報以外の EPS 財務	EPS 階層の編集 (EPS ノードの追加/削除/移動)、EPS ノートブックの編集、財務情報以外のすべての EPS 関連データの編集を行います。
EPS 財務情報の編集	EPS 予算ログ、資金調達先、支出計画を編集します。
トップダウン見積	プロジェクトのトップダウン見積を実行します。
プロジェクトマネージャとしてタイムシートの承認	プロジェクトのタイムシートをレビューして承認または却下します。
経費の編集	プロジェクト経費の作成、編集、削除を行います。
しきい値、問題点およびリスクの編集	プロジェクトしきい値、問題点、リスクの作成、編集、削除を行います。
アクティビティ接続の編集	プロジェクトのアクティビティ接続関係の作成、編集、削除を行います。
接続以外のアクティビティ情報の追加/編集	アクティビティ接続関係以外のプロジェクトアクティビティ情報の作成と編集を行います。
アクティビティリソース要求の実施	P6 Web Access のアクティビティにリソース要求を割り当てます。
タイムシート実績を含むアクティビティ	プロジェクトアクティビティを削除します。
タイムシート実績を含むプロジェクトデータの削除	タイムシート実績が適用されたプロジェクトアクティビティを削除します。ユーザは、「プロジェクトアクティビティの削除」の権限も必要です。
ワークグループの作成	P6 Web Access で新規ワークグループを追加します。
ワークグループの削除	P6 Web Access でワークグループを削除します。
プロジェクトワークスペースとワークグループ設定の修正	P6 Web Access で、プロジェクトワークスペースとワークグループ設定をカスタマイズします。

権限名	権限の定義
リソース計画の割り当 の編集	Web Resource Management モジュールにおいて、プロジェクトまたは WBS レベルでリソース割り当ての実行、削除、変更を行います。ユーザは、検索基準の定義とリソース割り当ての検索を行うことができます。この権限がないユーザにとっては、その特定プロジェクトまたは WBS 用のリソース計画ページにあるリソース割り当て情報は、読み取り専用となります。プロジェクトレベルのセキュリティ権限は WBS レベルにまで影響するので、プロジェクトの 1 つの WBS にリソースを割り当て、その他に割り当てないことも可能です。
Contract Manager プロ ジェクトのリンクの 編集	Primavera Contract Manager のプロジェクトへのリンクを作成、編集、削除します。
アクティビティ ID の 編集	Project Management モジュールと P6 Web Access のアクティビティ ID を編集します。
リソース計画のロー ル割当の編集	Web Resource Management モジュールにおいて、プロジェクトまたは WBS レベルでロール割り当ての実行、削除、変更を行います。ユーザは、ロール割り当ての検索基準を定義することもできます。この権限がないユーザにとっては、その特定プロジェクトまたは WBS 用のリソース計画ページにあるロール割り当て情報は、読み取り専用となります。プロジェクトレベルのセキュリティ権限は WBS レベルにまで影響するので、プロジェクトの 1 つの WBS にロールを割り当て、その他に割り当てないことも可能です。

権限名	権限の定義
リソース計画確定済みフラグの編集	Web Resource Management モジュールのリソース計画ページにおけるプロジェクトまたは WBS レベルのコミットされたリソースとロール割り当てを特定します。この権限には、「リソース計画の割当の編集」権限も必要です。
未来の期間を編集 *	P6 Web Access と Project Management モジュールの予算工数と残工数（最早）フィールドに将来期間値を入力または編集します。この権限をユーザに割り当てるには、先ずそのユーザに「接続関係以外のアクティビティ情報の追加／編集」プロジェクト権限を割り当てる必要があります。そうしないとこの権限を選択することはできません。
プロジェクトレベルレイアウトの追加／編集	アクティビティ、割り当て、または WBS 表示にてプロジェクトレベルレイアウトの作成、編集および削除を行います。

Project Management モジュールでユーザを追加

セキュリティ設定によって、ユーザダイアログボックスからユーザの追加と削除および Primavera コンポーネントへのユーザアクセスの管理を行うことができます。独自のセキュリティデータを使用する Methodology Management モジュールを例外として、すべての Primavera のコンポーネントにアクセスする必要のある人には、Project Management モジュールにユーザ登録を追加しなければなりません。

会社の OBS が確立しており、OBS ノードに割り当てられているユーザが決まっていれば、[ユーザ]ダイアログボックスの[プロジェクトアクセス]タブで割り当てを実施することができます。345 ページの「[OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て](#)」を参照してください。

少なくとも各ユーザには、ログイン名、グローバル設定、ライセンス情報（コンポーネントとアクセスレベル）が必要です。E メールアドレスやオフィスの電話番号などのその他のユーザ情報も提供することができます。



会社がユーザ情報を LDAP ディレクトリに中央管理している場合は、Primavera ユーザを LDAP ストアからプロビジョニングして追加することができます。さらなる詳細については、279 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。ユーザをプロビジョニングしたあと、各ユーザにセキュリティ設定とライセンスを割り当てる必要があります。

会社が P6 Web Access を使っている場合は、新規ユーザを追加する前に既定のプロトタイプユーザを作成することができます。プロトタイプユーザでは、既定のダッシュボードとグローバル設定を定義し、P6 Web Access の全ユーザに適用することができます。さらなる詳細については、343 ページの「[プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義](#)」を参照してください。

新規ユーザの追加 [管理]、[ユーザ]を選択します。「追加」をクリックします。

- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっていない場合は、[全般] タブをクリックしてユーザのログイン名と個人名を入力し、[パスワード] をクリックします。ユーザのパスワードをタイプし、さらにもう一回パスワードをタイプし直して確認します。「OK」をクリックします。ユーザが Timesheets にアクセスをする場合は、ここでユーザを Project Management モジュールのリソースに関連付けることができます。あるいは、リソースを追加するときに、リンクを作成することができます。[連絡] タブをクリックし、ユーザの E メールアドレスと電話番号をタイプします。

- [管理設定]でパスワードポリシーが有効になっている場合は [ユーザの追加] ダイアログボックスが表示されます。ログイン名、個人名、新規パスワードの入力、新規パスワードの確認の各フィールドに入力する必要があります。「OK」をクリックします。ユーザが Timesheets にアクセスをする場合は、ここでユーザを Project Management モジュールのリソースに関連付けることができます。あるいは、リソースを追加するときに、リンクを作成することができます。[連絡] タブをクリックし、ユーザの E メールアドレスと電話番号をタイプします。



管理設定の詳細については、368 ページの「既定設定の定義」を参照してください。



Project Management モジュールが LDAP 認証モードで実行されている場合は、[追加]をクリックすると、ダイアログが現れ、ユーザ名を入力してそれを LDAP ストアと照合するよう求められます。テストをクリックすると、LDAP ストアにユーザが存在していれば、実際の名前、E メールアドレス、電話番号フィールドで埋められます。これは認証設定ツールでそれらのフィールドが事前に対応付けされている場合です。ユーザを追加するには、[追加]をクリックします。[テスト]をクリックしてユーザが LDAP ストアに見つからない場合は、ユーザを追加できない旨を通知するメッセージが表示されます。

Primavera コンポーネントにアクセスする必要があるユーザのリストを表示します

Primavera にログインする必要がある名前を特定します
コンポーネント

Project Management モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[パスワード] ボタンは表示されません。

ユーザが Timesheets にアクセスする場合は、ユーザは Project Management モジュールのリソースにリンクされていなければなりません。

Login Name	Personal Name	Global Profile	Resource
RMAR	Robert Marshall	<Admin Superuser>	RMAR
Robert Lane	Robert Lane	Resource Manager	
Russell Mead	Russell Mead	<Admin Superuser>	
Sally Young	Sally Young	<No Global Privileges>	
Stephanie Morg	Stephanie Morgan	Resource Manager	
Steve Johnson	Steve Johnson	All Except Users & Profiles	
Stuart Bronsky	Stuart Bronsky	Administrator	
Taneisha	Taneisha	<Admin Superuser>	

リソースとユーザの関連付け [管理]、[ユーザ] を選択します。[全般] タブをクリックして、[リソース ID/ リソース名] フィールドで [ブラウズ] ボタンをクリックし、選択したユーザのリソースを選択します。リソースがすでに他のユーザと関連付けられている場合は、関連付けを置き換えるよう指示されます。Project Management モジュールでは、リソースは 1 人のユーザとだけ関連付けられることが許容されます。これによって、Project Management モジュールと Timesheets の両方で、プロジェクトリソースとユーザに単一のログイン名が維持されるようにしています。この関連付けは、リソース詳細の [タイムシート] タブで設定することもできます。

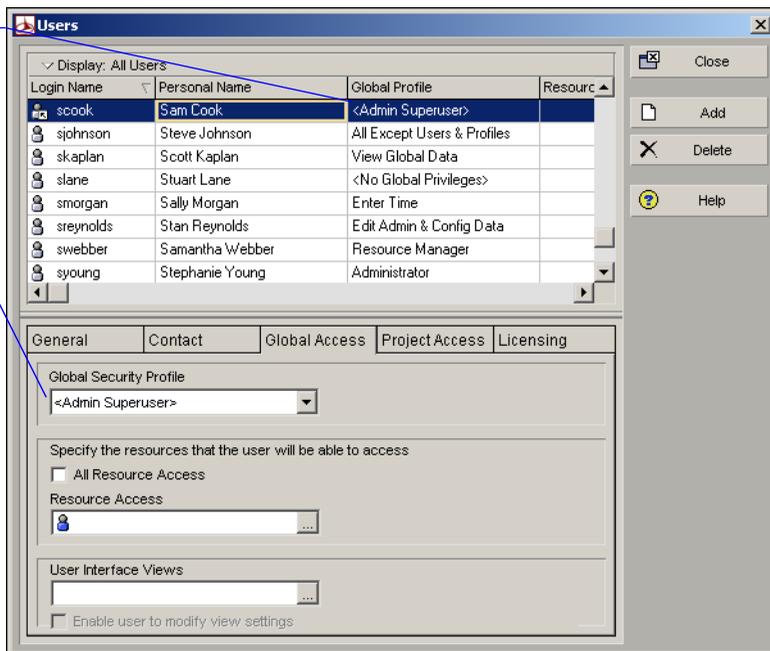
さらなる詳細については、312 ページの「グローバル設定の定義」を参照してください。

グローバル設定の割当 グローバル設定は、リソースとロールのように、アプリケーションにわたる機能へのユーザアクセスを決定付けます。Project Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定がされていることが要求されます。[管理]、[ユーザ]を選択します。グローバル設定を割り当てたいユーザを選択します。[グローバルアクセス]タブをクリックして、ユーザのグローバル設定を選択します。

[グローバル設定]列をダブルクリックして、選択したユーザに適した設定を選ぶこともできます。

管理スーパーユーザ設定では、すべてのグローバルとプロジェクトデータの読み書きが許容されます。

ユーザへのリソースアクセス設定の定義についての情報は、351 ページの「リソースへのユーザアクセスの定義」を参照してください。ユーザヘユーザインタフェース表示を割り当てることについての情報は、355 ページの「P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義」を参照してください。

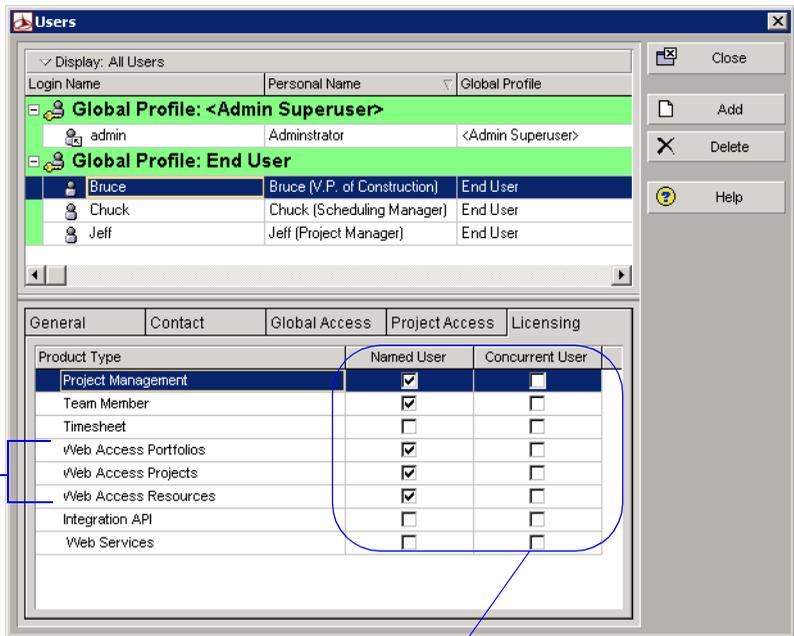


グローバル設定、<グローバル権限なし>は、Timesheets へのアクセスのみのユーザに割り当てます。これらのユーザには、「チームメンバ」または「Timesheets」ライセンスによって、Timesheets へのアクセス権も与えられてる必要があります。

製品ライセンスの割当 Primavera にアクセスする各ユーザには、適切なライセンスが割り当てられなければなりません。

Primavera の各コンポーネントでは、指名ユーザとして特定されたユーザは指定の製品へのアクセスが保証されます。同時アクセスのユーザは、同時ライセンスの最大数を超えない限り、別の同時アクセスユーザと指定コンポーネントにアクセスすることができます。

[管理]、[ユーザ] を選択します。Primavera 製品のライセンスユーザとして、データベースアクセスを設定したいユーザを選択します。[ライセンス] タブをクリックします。ユーザにアクセスさせたい各コンポーネントに対し、指名または同時の列のチェックボックスにマークします。対象の会社が指名および同時ライセンスの両方がある場合は、指名と同時ライセンスの組み合わせを別々のコンポーネントへのユーザに割り当てることができます（例えば、P6 Web Access に対して指名ユーザ、Project Management に対して同時ユーザ）。但し、1 人のユーザが同じコンポーネントに対し指名と同時ライセンスをもつことはできません。ユーザが、該当する Primavera コンポーネントに対する有効なライセンスユーザでない場合は、チェックボックスをクリアします。



これらのライセンスは、Primavera Web アプリケーション (ポータル、プロジェクトおよびリソース) の各機能エリアへのアクセスを制御します。

選択したユーザの、該当する Primavera コンポーネントへのライセンスアクセス権を示すため、マークあるいはクリアします。



指名ユーザの合計数は、保存されているライセンスファイルの指名ユーザの最大数を超えてはいけません。Primavera System では、購入した指名ユーザ数に基づいてライセンスファイルを提供しています。許容最大数以上の同時ユーザを指定することができます。同時ユーザのソフトウェアへのアクセスは、到着順ベースです。同時アクセスユーザの最大数を超えると、それ以上のユーザはソフトウェアにログインすることはできません。Primavera System では、購入した同時ユーザ数に基づいてライセンスファイルを提供しています。

コンポーネントのチェックボックスにマークすることで、ユーザには以下にアクセスできるようになります。



Timesheet、Integration API、Web Services 以外のすべてのライセンスでは、P6 Web Access のダッシュボードページにアクセスできます。ただし、ダッシュボードホームページで利用できるポータルとダッシュボードアクションメニュー項目では、各ユーザのライセンスとセキュリティ権限が必要です。

- **Project Management** – Project Management モジュールおよび P6 Web Access のプロジェクトセクションへのアクセスを提供します。ユーザに Project Management と Web Access Projects のライセンスの両方がある場合、ユーザが P6 Web Access にログインしたときは、Web Access Projects ライセンスだけが使われます。
- **Team Member** – Primavera Timesheets へのアクセスを提供し、ダッシュボードやプロジェクトセクションを含む制限された P6 Web Access の機能（ワークスペースおよびアクティビティタブのみ利用可）が提供されます。P6 Web Access 機能へのアクセスは、さらにユーザの OBS アクセスやプロジェクトとの関連、つまりユーザがアクティビティにリソースとして割り当てられているか、アクティビティオーナーとして指定されているか、あるいはプロジェクトへ招待されているか、によって決まります。Timesheets にアクセスする必要のあるユーザには、チームメンバライセンスまたは Timesheets ライセンスを付与しなければなりません。両方のライセンスを付与することはできません。チームメンバライセンスについてのさらなる詳細情報については、337 ページの「[Team Member ライセンスにより可能となるユーザアクセス](#)」を参照してください。
- **Timesheet** – Primavera Timesheets へのアクセスを提供し、ユーザにアポイントメントのインポート機能のみの P6 Web Access ログインが提供されます（設定されている場合のみ利用可）。Timesheets にアクセスする必要のあるユーザには、チームメンバライセンスまたは Timesheets ライセンスを付与しなければなりません。両方のライセンスを付与することはできません。
- **Web Access ポートフォリオ** – P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。ポートフォリオセクション、プロジェクトパフォーマンスポートレット、ダッシュボードセクションのポートフォリオ表示ポートレットおよびドキュメント管理機能（コンテンツリポジトリが設定されている場合）。
- **Web Access プロジェクト** – P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。プロジェクトセクション、ダッシュボードセクションのプロジェクトパフォーマンスポートレット、ドキュメント管理機能（コンテンツリポジトリが設定されている場合）。ユーザに Project Management と Web Access Projects のライセンスの両方がある場合、ユーザが P6 Web Access にログインしたときは、Web Access Projects ライセンスだけが使われます。

- **Web Access リソース** – P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。リソースセクション、ダッシュボードセクションのリソースポートレット、ドキュメント管理機能 (コンテンツリポジトリが設定されている場合)。
- **Integration API** – API のみへのアクセスを提供します。API を使うと、Project Management モジュールに Java から直接アクセスできます。
- **Web Services** – P6 Web Services へのアクセスを提供します。これにより、XML、SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、Primavera の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。P6 Web Services を利用すると、オペレーティングシステムやプログラミング言語に関係なく、Primavera プロジェクト管理データをアプリケーション間で共有できるようになります。



Timesheets, Integration API, Web Services 以外のすべてのライセンスは、Primavera ProjectLink へのアクセスを提供します。Primavera ProjectLink のプロジェクトデータへのアクセスは、ライセンスに関わらずセキュリティ権限の設定およびプロジェクトへの OBS アクセスによって決まります。



SDK やジョブサービスなど、Primavera 製品によってはライセンスを必要としません。



Web Access Portfolios, Web Access Projects, または Web Access Resources ライセンスがあるユーザは、Team Member ライセンスなしに P6 Web Access のプロジェクトデータを表示することができます。この場合、ユーザは、プロジェクトのアクティビティにリソースとして割り当てられているか、プロジェクトに招待を受けているか、あるいはプロジェクトのオーナーとして OBS アクセスがあるときに、そのプロジェクトのデータを表示できます。

Team Member ライセンスにより可能となるユーザアクセス

Team Member ライセンスは、Timesheets およびいくつかの P6 Web Access 機能へのアクセスを提供します。以下のセクションで、Team Member ライセンスのあるユーザがアクセスすることができる P6 Web Access 機能を説明します。



このセクションのすべての情報では、Team Member ライセンスがユーザに割り当てられている唯一のライセンスであることを想定しています。Team Member ライセンスがユーザに割り当てられている唯一のライセンスでない場合、ユーザは、ユーザに割り当てられている他のライセンスによって有効になっている機能のほかに、このセクションで説明されている機能すべてにアクセスできません。

通常、すべてのチームメンバライセンスのあるユーザは以下ができます。

- プライベートおよびマルチユーザダッシュボードの作成
- プライベートおよびマルチユーザポートフォリオの作成 (ダッシュボードアクションメニューからのみ)
- インポート指定
- プライベートおよびマルチユーザアクティビティ表示の作成
- グローバルおよびプロジェクト設定の策定

プロジェクトに対する OBS アクセス権によって、チームメンバライセンスのあるユーザは、以下も行うことができます。

- プロジェクト問題点の追加 / 編集
- リソース割付の追加 / 編集
- アクティビティステップの追加
- アクティビティ日付の編集
- アクティビティステータスの編集
- アクティビティ接続関係の追加 / 編集 / 削除
- アクティビティ経費の追加 / 編集
- アクティビティノートトピックの追加 / 編集
- ユーザ定義フィールドの追加 / 編集
- プライベートドキュメントの追加



プロジェクトに招待ユーザは、本セクションで述べたように、プロジェクトに対する OBS アクセス権のないチームメンバーライセンスをもったユーザと同等のプロジェクトデータにアクセスすることができます。P6 Web Access では、必要なライセンスと権限があるユーザは、プロジェクトセクションの招待ユーザページ、またはワークグループの招待ユーザ管理ページでプロジェクトにユーザを招待することができます。



Team Member ライセンスのみをもつユーザにユーザインターフェイス画面を割り当てた場合、その表示設定は無視されます。Team Member ライセンスを持ったユーザが利用できる機能は常にライセンスによって制御されますユーザインターフェイス画面割当の詳細については、355 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

ダッシュボード

P6 Web Access のダッシュボードセクションでは、Team Member のライセンスがあるユーザはプライベートとマルチユーザダッシュボード、プライベートとマルチユーザポートフォリオの作成、およびタイムシートの承認（必要なセキュリティ権限内）を行うことができます。ダッシュボードポートレットは、指定ダッシュボードフィルタの基準を満たす、ユーザが関連するプロジェクトデータを表示します。ユーザのプロジェクトへの関連性、OBS アクセス、セキュリティ権限が相まってプロジェクトデータの表示および編集アクセス権が決まります。ライセンスのある Team Member は、OBS アクセス経由、アクティビティのリソースとしての割り当て、プロジェクト参加への招待、ミラープロジェクトでアクティビティオーナーとしての割り付け、によってプロジェクトに関連付けられます。



ミラープロジェクトおよびアクティビティオーナー機能は合わせて使用し、アクティビティリソースとして割り当てられておらず、Timesheets アプリケーションをステータスレポートに使わないライセンスのある Team Member チームメンバーのアクティビティ進捗情報を収集しレビューすることができます。さらなる詳細については、Project Management ヘルプの「[ミラープロジェクトとアクティビティオーナー機能を使用してアクティビティステータスを収集、レビューする](#)」を参照してください。

Team Member のライセンスがあるユーザは、以下のダッシュボードポートレットにアクセスすることができます（特記のない限り全機能が使用できます）。

- プロジェクト
- ワークグループ
- アクティビティ
- リスクー ユーザはリスクを表示できますが、追加することはできません。
- 問題点ー プロジェクトの OBS アクセス権がないユーザは問題点の表示はできますが、追加することはできません。必要なセキュリティ権限があれば、プロジェクトの OBS アクセス権がないユーザでも問題点を追加することができます。
- コミュニケーションセンター
- ドキュメントー ユーザはプライベートドキュメントの追加のみができます。このポートレットは、ユーザのライセンスに関わりなく、コンテンツリポジトリを P6 Web Access で使用できるよう設定した場合にのみ利用できます。
- カレンダー
- マイレポート
- アクション要求
- プロジェクト/ドキュメントワークフロー
- コストワークシート
- カスタムポートレット

その他のポートレットは、Team Member ライセンスのあるユーザは利用できません。

プロジェクト

P6 Web Access のプロジェクトセクションで、Team Member ライセンスのあるユーザは [Open Project] ダイアログ、[Manage Activity Views] ページ、[Project Workspace]、および [Activities] ページにアクセスすることができます。

[Open Projects] ダイアログは、EPS、ポートフォリオ、またはプロジェクトコード別に整理できます。各グループカテゴリ内のダイアログには、ユーザが OBS アクセス権をもっているすべてのプロジェクト、アクティビティリソースとしてユーザが割り当てられているすべてのプロジェクト、ユーザがアクティビティオーナーとしてリフレクションプロジェクトで指定されているすべてのプロジェクト、ユーザが招待されているすべてのプロジェクトが表示されます。ユーザは、グローバルナビゲーションバーのプロジェクトアクションメニューから [Open Projects] を選択すると [Open Projects] ダイアログにアクセスできます。

[Manage Activity Views] ページで、Team Member ライセンスのあるユーザはプライベートおよびマルチユーザアクティビティ表示を作成、編集することができます。ユーザは、グローバルナビゲーションバーのプロジェクトアクションメニューから [Manage Activity Views] を選択すると [Manage Activity Views] ページにアクセスできます。

プロジェクトセクションのアクティビティページには、ユーザがリソースとして、またはアクティビティオーナーとしての割り当てで関連付けられている、すべてのアクティビティが表示されます。アクティビティに関連付けられているが、OBS アクセス権がないユーザは、データの表示、印刷、エクスポートはできますが、プロジェクトデータの変更を伴う機能にアクセスすることはできません。例えば、テーブルのアクティビティデータの編集、Gantt チャートの変更、またはアクティビティ詳細の変更はできません。プロジェクトの OBS アクセス権および必要なセキュリティ権限があるアクティビティ関連ユーザは、アクティビティへのアクセス、アクティビティの追加と編集、アクティビティテーブルのフィールド編集、Gantt チャートバーの変更、接続関係の確立、情報の印刷、エクスポートおよびインポートが可能です。



Team Member ライセンスのユーザは、アクティビティの削除または WBS ノードの追加/編集はできません。

プロジェクトワークスペースでは、Team Member のライセンスがあるユーザは、以下のポートレットにアクセスすることができます（特記のない限り全機能が使用できます）。

- プロジェクトドキュメントー ユーザは、プロジェクトドキュメントの表示、ダウンロード、チェックアウトができますが、追加はできません。詳細なドキュメント管理機能は、ユーザのライセンスに関わりなく、コンテンツリポジトリを **P6 Web Access** で使用できるよう設定した場合にのみ利用できます。
- プロジェクトリスクー ユーザはプロジェクトリスクの表示はできますが、リスクを追加することはできません。
- プロジェクト問題点ー プロジェクトへの **OBS** アクセス権がないユーザは表示はできますが、プロジェクト問題点を追加したり編集することはできません。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、必要なプロジェクト権限がある限り、問題点の追加および編集ができます。
- プロジェクトノートー ユーザはプロジェクトノートの表示はできますが、追加または編集はできません。
- 超過割りリソース
- 遅延中のクリティカルアクティビティーー ユーザは、プロジェクトで遅延中のすべてのアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- マイルストーンステータスー ユーザはプロジェクトのすべてのマイルストーンアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- プロジェクトレポート
- コミュニケーションセンター

- プロジェクトカレンダー ユーザは、選択した週に予定されているすべてのプロジェクトアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- ワークグループ
- カスタムポートレット
- **Contract Manager** ポートレット ユーザは、**P6 Web Access** が **Contract Manager** にアクセスするように設定されており、**P6 Web Access** プロジェクトが **Contract Manager** プロジェクトにリンクされていれば、すべての **Contract Manager** ポートレットを表示することができます。

Team Member ライセンスのあるユーザは、その他すべてのプロジェクトワークスペースポートレットの利用ができません。

プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義

新規ユーザの既定ユーザインタフェース表示の作成についての情報は、355 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

管理者として、プロトタイプユーザを作成し、これによって既定のグローバルダッシュボードの作成とすべての新規 P6 Web Access ユーザに適用するグローバル設定の選択を行うことができます。プロトタイプユーザ設定の定義と、ユーザインタフェース画面の定義を併せることで、P6 Web Access の新規ユーザに対し組織のビジネスニーズにカスタマイズされ、一貫したインタフェースを確保することができます。以下のステップを実行すると、作成したプロトタイプユーザ設定は、追加する各新規 P6 Web Access ユーザに自動的にコピーされます。



プロトタイプユーザ設定を作成しないと、Primavera は自動的に各新規ユーザに対し、既定の個人的ワークスペースダッシュボードをユーザロールに基づいて作成します。

プロトタイプユーザ設定の作成には、以下を行います。

- 1 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。
- 2 追加をクリックします。ユーザ表に、(新規ユーザ) 行が追加されます。
- 3 [ログイン名] 列、あるいは [全般] タブのログイン名フィールドにプロトタイプユーザのログイン名をタイプします (例えば、prototype_user)。
- 4 グローバル設定列で、グローバル設定 (例えば、管理スーパーユーザ) を選択します。これが、プロトタイプユーザに適切な既定ダッシュボードとグローバル設定を新規ユーザに設定できるようにします。
グローバル設定の割り当てに関するさらなる情報については、332 ページの「[グローバル設定の割り当て](#)」を参照してください。
- 5 P6 Web Access に、新規プロトタイプユーザとしてプロトタイプユーザに設定したログイン名でログインします。
- 6 グローバルナビゲーションバーのダッシュボードアクションメニューで、[ダッシュボードの管理] をクリックし、各新規 P6 Web Access ユーザに表示される既定グローバルダッシュボードを作成します。作成するすべてのダッシュボードがグローバルダッシュボードとなるよう、ダッシュボード設定の [アクセス] タブでアクセスタイプとして [すべてのユーザ] を必ず選択してください。

ダッシュボードの管理またはダッシュボード設定ページで [ヘルプ] をクリックし、ダッシュボードの作成詳細、ダッシュボードで表示されるポートレットの選択、ユーザアクセスの指定を表示します。



myPrimavera 5.0 から P6 Web Access にアップグレードする場合：アップグレード後、新規ユーザを追加する前にプロトタイプユーザとして P6 Web Access にログインし、プロトタイプユーザ用に選択されたダッシュボードがすべてグローバルであることを確認します。これを行わない場合、プロトタイプに依存しているユーザはアップグレード後にダッシュボードを表示できないことがあります。



既定により、ダッシュボードで表示できるポートレットの最大数は 12 です。この設定は、Primavera 管理アプリケーションで変更することができます。変更すべき Primavera 構成の「ダッシュボードごとの最大ポートレット数」の設定はアプリケーションフォルダにあります。さらなる詳細については 176 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」を参照してください。

myPrimavera 5.0 から P6 Web Access にアップグレードする場合：アップグレード後は 12 個のポートレットのみが選択されます。プログラムは自動的に、幅広、幅狭、カスタムポートレットの順序でポートレットを選択します。

- 7 P6 Web Access の右上にある [設定] をクリックします。[グローバル] タブで、新規ユーザに適用したいグローバル設定を指定します。完了したら [保存]、[閉じる] をクリックします。
- 8 P6 Web Access をログアウトします。
- 9 Primavera 管理アプリケーションにログインします。
- 10 プロトタイプユーザを追加したい設定（例えば、Primavera 設定）を展開し、アプリケーションフォルダを展開します。
設定変更についての情報は、168 ページの「[P6 Web Access の設定の確認と変更](#)」を参照してください。
- 11 PrototypeUser 設定を選択し、F2 を押してフィールドを編集します。
- 12 作成したプロトタイプのユーザログイン名をタイプし、[変更の保存] をクリックし、管理アプリケーションを終了します。
- 13 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択し、作成したプロトタイプユーザのログイン名を選択します。[ライセンス] タブで、未承認ログインを防ぐため「指名ユーザ」と「同時ユーザ」のすべてのボックスをクリアします。

OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て

プロジェクトとデータへのアクセスの制限や許諾のため、ユーザにプロジェクト設定を割り当てる必要があります。プロジェクト設定は、ロールベースの設定で、例えばベースライン、WBS、しきい値などのように特定の権限を制限します。プロジェクト設定は、1つまたは複数の OBS 割り当てにより、ユーザにリンクされます。EPS と各プロジェクトの WBS の各レベルに OBS ノードを割り当てることで、責任を個別のプロジェクトとプロジェクト内の作業に割り当てます。

OBS ノードに対するユーザ割り当てと EPS/プロジェクト/WBS に対する OBS 割り当ての組み合わせによって、ユーザが表示できるプロジェクトとプロジェクトデータが決まります。ユーザが割り当てられている各 OBS ノードについては、ユーザに割り当てられたプロジェクトセキュリティ設定 (OBS 割り当てごと) によってユーザが表示または編集できるプロジェクトデータがさらに詳細に決まります。



OBS はプロジェクトと WBS の双方のレベルで割り当てられるため、プロジェクトとその WBS ノードの OBS 割り当てでは異なる場合があります。この場合、ユーザの OBS 割り当て/プロジェクトセキュリティ設定のみが WBS ノード (プロジェクトと同じ OBS 割り当て) に適用されます。OBS 割り当てがプロジェクトとは異なる WBS ノードの場合、WBS ノードと同じ OBS ノードに割り当てられていないユーザはデータを読み取ることしかできません。プロジェクトとは異なる OBS が割り当てられている WBS ノードに対する権利 (読み取り以上の権利) をユーザに授与するには、WBS ノードが割り当てられているものと同じ OBS ノードにユーザを割り当てた後、新しい OBS 割り当て用に適切なプロジェクトセキュリティ設定を選択する必要があります。

プロジェクト設定の割り当てに関する情報については、321 ページの「[プロジェクト設定の定義](#)」を参照してください。

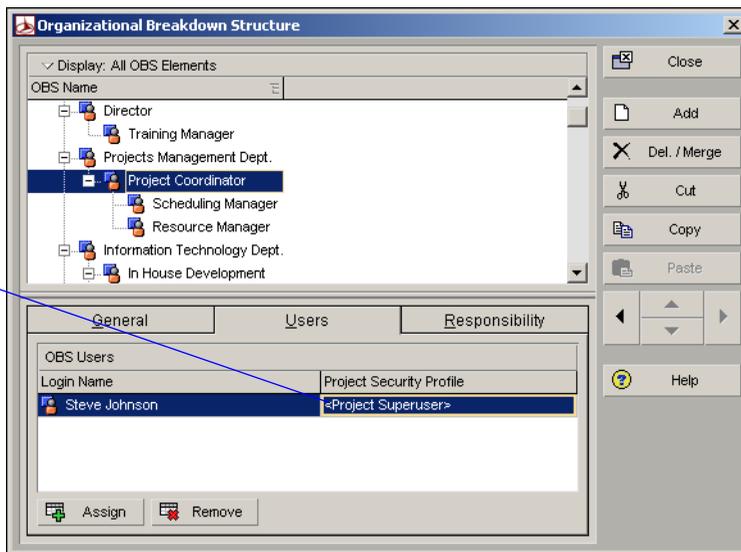
[ユーザ] ダイアログボックスで、ユーザの追加時にユーザに OBS ノードと対応するプロジェクト設定を割り当てることができます。あるいは、OBS の作成時に、[OBS] ダイアログボックスで割り当てを行うことができます。



Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がなされていることは必要としませんが、ユーザはプロジェクト設定またはグローバル設定があるか、管理スーパーユーザでない限りプロジェクトにアクセスすることはできません。

ユーザとプロジェクト設定の OBS ノードへの割り当て「エンタープライズ」、「OBS」を選択します。[ユーザ] タブをクリックします。指定したいユーザとプロジェクト設定の [OBS ノード] を選択して、[割り当て] をクリックします。指定した OBS ノードに関連付けるユーザを選択し、[選択] ボタンをクリックします。既定のプロジェクト設定がユーザと関連付けられています。プロジェクト設定をダブルクリックし、予め定義されている一覧から別のプロジェクト設定を選択します。

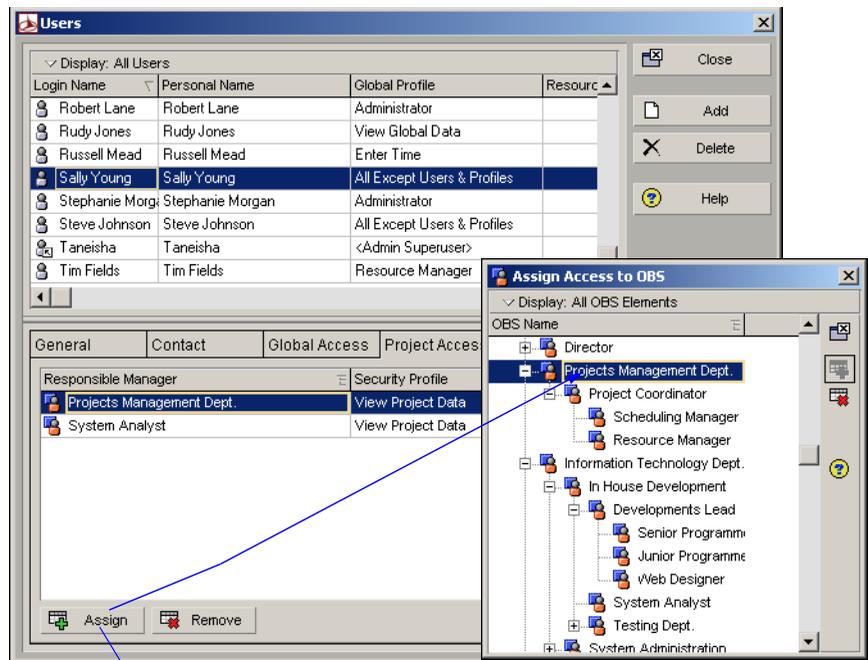
ダブルクリックして別のプロジェクト設定を選択します。ユーザにプロジェクトのすべての側面での読み書きの権限を与えるには、プロジェクトスーパーユーザを選択します。



OBS ノードとプロジェクト設定のユーザへの割当 最初にユーザを追加するときに、OBS ノードとプロジェクト設定をユーザに割り当てることもできます。[管理]、[ユーザ]を選択します。[プロジェクトアクセス]タブをクリックします。OBS ノードとプロジェクト設定を割り当てたいユーザを選択し、[割り当て]をクリックします。ユーザに関連付けられた OBS ノードを選んで「選択」ボタンをクリックします。既定のプロジェクト設定がユーザと関連付けられています。プロジェクト設定をダブルクリックし、予め定義されている一覧から別の設定を選択します。



OBS ノードが、EPS のいくつかのプロジェクトの責任マネージャの場合は、その OBS ノードに関連付けられたどのユーザも該当するすべてのプロジェクトへアクセスできます。



クリックして、選択したユーザに関連付けられる OBS ノードを割り当てます。ユーザには、さまざまなプロジェクトにおけるロールによって、1つ以上の OBS 割り当てを行うことができます。



ある OBS ノードにプロジェクト情報へのユーザアクセスを拒否するには、責任マネージャの名前を選択し、[削除]をクリックします。

EPS への OBS ノードの割り当て

EPS についてのさらなる情報については、*Project Management リファレンスマニュアル*の「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」を参照してください。

Project Management モジュールでは、プロジェクトのデータベースはエンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS) と呼ばれる階層構造で構成されます。EPS は、必要に応じて組織の作業と平衡できるよう多くのレベルやノードに細分化できます。最高レベル (ルート) のノードは、社内部門やプロジェクトのフェーズ、場所、その他、組織のニーズを満たす主要なグループを示すことができます。一方、プロジェクトは常に階層構造の最低レベルに属します。組織内のプロジェクトはすべて、EPS ノードに含む必要があります。

EPS 階層構造内のノードに対するユーザのアクセスや権限は、EPS のプロジェクトを担当する経営陣を示すグローバル OBS によって実行されます。OBS の各マネージャは、EPS の 1 エリアおよび WBS 階層の特定のレベルにノードまたはプロジェクトで関連付けられています。

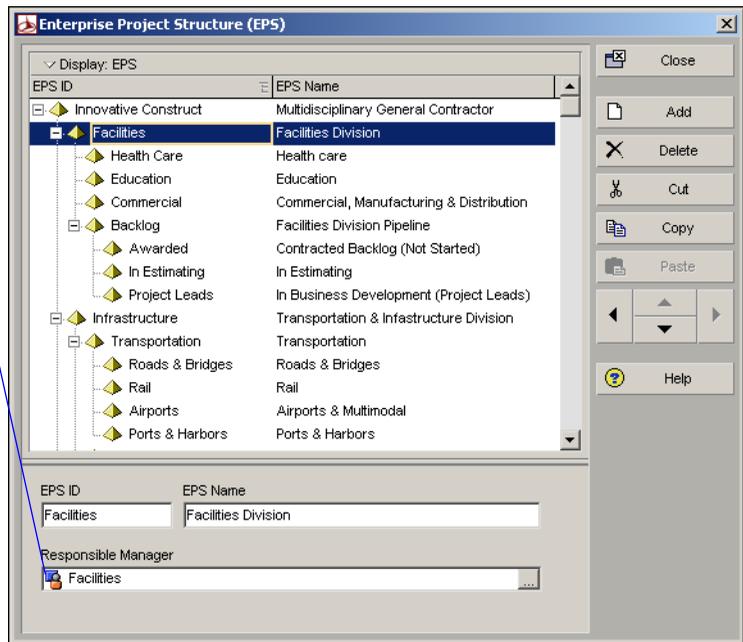
ユーザを追加し、OBS ノードとプロジェクト設定に関連付けると、EPS を定義し責任マネージャ (OBS ノード) を各レベルに割り当てることができます。EPS の各ノードに責任マネージャを指定しなければなりません。

EPS への OBS ノードの割当 プロジェクト構造を作成するときに、EPS の各レベルに責任マネージャ (OBS ノード) を割り当てることができます。[エンタープライズ]、[エンタープライズプロジェクトストラクチャ]を選択します。EPS ノードを選択し、責任マネージャフィールドで[ブラウズ]ボタンをクリックし、適切な OBS ノードを選択します。責任マネージャとして関連付けられたユーザには、選択されたノードとそのブランチのすべてのノード/プロジェクトのアクセス権があります。プロジェクト内でアクセスできる特定のデータは、OBS ノードに対応するプロジェクト設定により決まります。



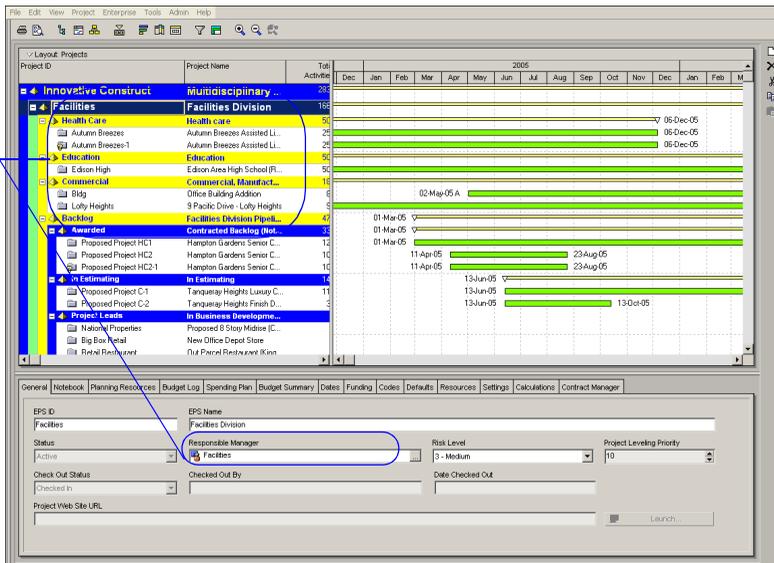
EPS の同じノードに複数のユーザが責任を負う場合は、それらのユーザを対象の OBS ノードに割り当てなければなりません。

セキュリティ権と特権を有効にするため、EPS の各ノードに責任マネージャを指定しなければなりません。Project Management モジュールは、設定しない限り、OBS ルートをすべてのノードの既定として使います。



プロジェクト画面でも責任マネージャを割り当て/レビューすることもできます。[エンタープライズ]、[プロジェクト]を選択し、[全般]タブをクリックします。

この OBS ノードに割り当てられたユーザは、Apex プロジェクトノードとそれ以下のすべてのノード/プロジェクトにアクセスすることができます。



EPS と OBS 構造を定義し、EPS レベルでセキュリティを設定できたら、プロジェクトマネージャは階層に自身のプロジェクトを追加し始めることができます。プロジェクト内でさらにセキュリティ管理を行うには、プロジェクトマネージャは WBS レベルに、特定の OBS ノードを割り当てることができます。さらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルの「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」と「ワークブレイクダウンストラクチャのレビュー」を参照してください。

リソースへのユーザアクセスの定義

リソースセキュリティによって、リソースへのユーザアクセスを制限することができます。各ユーザは、リソース階層で、すべてのリソースへのアクセス権、限られた数のリソースへのアクセス権、あるいはまったくアクセス権なしに設定することができます。アクセスを限られた数のリソースに制限するには、各ユーザのルートリソースを、リソース階層の1つのリソースに割り当てることで指定します。階層の割り当てられたリソース位置でユーザのリソースアクセス権が決まります。ユーザがログインすると、リソース階層は割り当てられたリソースとその子階層が表示されます。ユーザのルートリソース外のリソースは表示されません。



リソースアクセスが制限されたユーザでも、適切なプロジェクト権限があれば、すべての現在のすべてのプロジェクトリソース割り当てを表示し編集することができます。

各ユーザには、以下の3種のリソースアクセス権の1つが割り当てられます。

- **すべてのリソースアクセス権**では、リソースセキュリティが無効となり、すべてのリソースへのアクセスが許容されます。これは、アップグレードされるユーザには既定のオプションです。管理スーパーユーザには、オプションの選択にかかわらず、常にすべてのリソースアクセス権があります。
- **リソースアクセス権なし**では、すべてのリソースへのアクセスができません。これは、新規ユーザには既定のオプションです。リソースアクセス権がないので、ユーザはリソースディクショナリでまったくグローバルリソースデータを表示することができません。
- **リソースノード**では、1つの選ばれたリソースと、リソース階層でのそのすべての子リソースにアクセスすることができます。このアクセスが制限されたユーザは、アクセス権があるリソースのグローバルリソースデータを表示することができます。



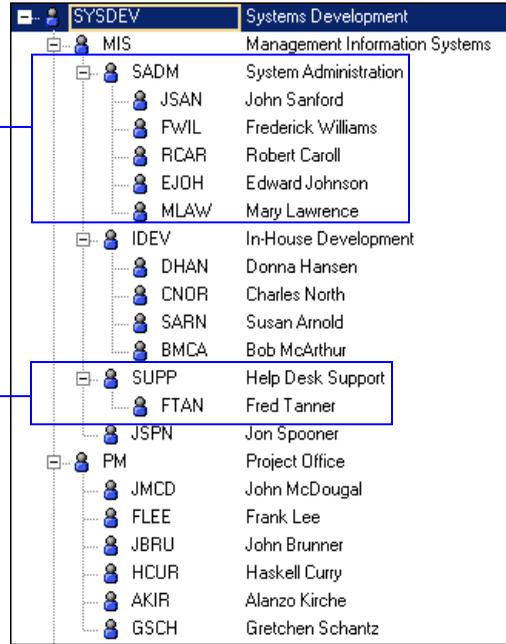
各ユーザには、1つのリソースノードだけを割り当てることができます。複数のリソースノードを割り当てることはできません。

以下の例で、様々なユーザにルートリソースが割り当てられる
 ているときのリソースアクセスの決定の仕方を示します。

USER1 にアクセス制限があり、ルートリ
 ソース SADM が割り当てられている場合、
 USER1 はリソースディクショナリにある
 これらのリソースのみを見ることができ
 ます。

USER2 にアクセス制限があり、ルートリ
 ソース SJPP が割り当てられている場合、
 USER2 はリソースディクショナリにある
 これらのリソースのみを見ることができ
 ます。

USER3 にリソースアクセス権がまったく
 無い場合は、USER3 はリソースディク
 ショナリのリソースをまったく見ること
 できません。



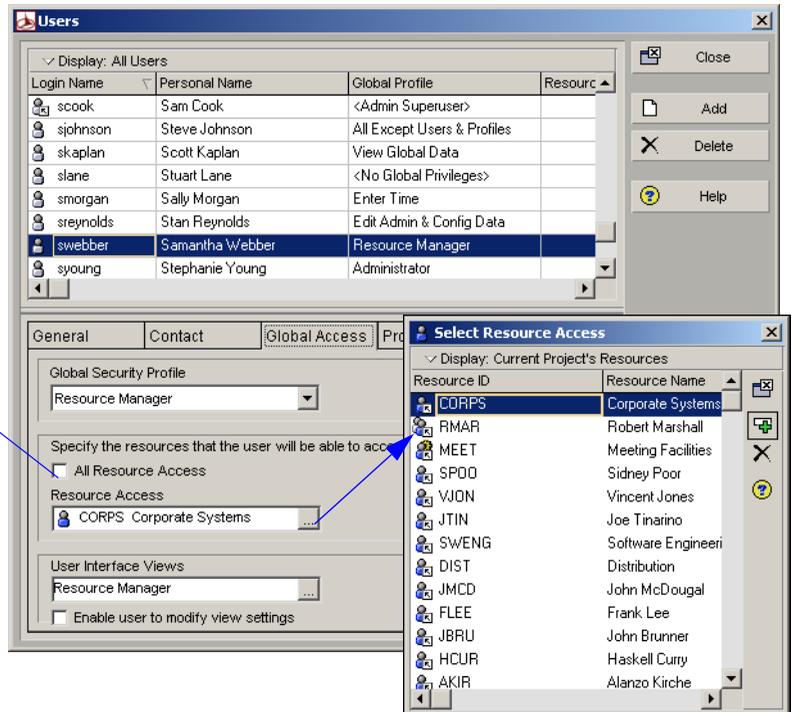
リソース階層の設定に関する情報については、**Project Management リファレンスマニュアル**の「リソースとロールの定義」を参照してください。

リソースセキュリティの実行 リソースセキュリティを実行するには、まず各ユーザを単一のリソースノードに割り当てることができるように、リソース階層を設定する必要があります。例えば、リソースセキュリティを使い、同じ部門または地域に属していないユーザのリソースへのアクセスを制限することができます。この場合、各部門または地域ごとに別のブランチをもつリソース階層を作成します。リソース階層の作成が完了すると、以下のステップに従って、リソースセキュリティを実施することができます。

- 1 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。

ユーザダイアログが、リソースアクセス条件に適合したユーザのリストを表示します。

「全リソースアクセス」および「リソースアクセス」の列を表示し、リソースアクセス設定の入力あるいは編集ができます。これら2つの列には、[グローバルアクセス] タブと同じリソースセキュリティ情報が表示されます。



ユーザに全リソースへのアクセス権を付与したい場合は、そのユーザを選択し、[全リソースアクセス] を選択します。ユーザのリソースアクセス権を特定のリソースノードに制限したい場合は、[ブラウズ] ボタンをクリックして、ユーザにアクセス権を与えたいリソースノードを選択します。

- 2 [グローバルアクセス] タブを選択します。
- 3 リソースセキュリティを設定したいユーザを選択します。
1 度には 1 人のユーザだけを選択できます。

管理スーパーユーザではリソースアクセス設定は無視されます。管理スーパーユーザは、常に全リソースのアクセスができます。

- 4 選択したユーザのリソースアクセスを以下のように設定します。
 - 選択したユーザに全リソースアクセスを付与するには、[全リソースアクセス]チェックボックスをマークします。
 - 選択したユーザのリソースアクセスを単一のリソースノードに制限する場合は、[全リソースアクセス]チェックボックスのマークを外します。その後、「リソースアクセス」フィールドの[ブラウズ]ボタンをクリックし、リソースを選択します。
 - 選択したユーザにリソースアクセス権を付与したくない場合は、[全リソースアクセス]チェックボックスのマークを外し、「リソースアクセス」フィールドでリソースが選択されていないことを確認します。

P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義

ユーザインタフェース画面と P6 Web Access でのユーザインタフェース画面の作成と割当に関する詳細手順については、P6 Web Access のヘルプを参照してください。

ライセンスとセキュリティ権限に加え、ユーザインタフェース画面を使って P6 Web Access 機能へのアクセスをさらに管理することができます。ユーザインタフェース画面は、あらかじめ定義されたタブ、ページおよびアクションメニュー項目のセットであり、その画面を割り当てられたユーザは、P6 Web Access の各セクション（ダッシュボード、ポートフォリオ、プロジェクト、リソース）にアクセスすることができます。組織の中で各ロールによって遂行される職務に対応する、ユーザインタフェース画面を複数作成することができます。あるいは、各個別ユーザのニーズを満たすユーザインタフェース画面を作成することもできます。ユーザインタフェース画面は、P6 Web Access でのみ定義することができますが、ユーザに割り当てるのは、P6 Web Access および Project Management モジュールのどちらから行うことができます。



最低 1 つのユーザインタフェース画面を P6 Web Access ユーザの既定表示として指定しなければなりません。既定画面は、ユーザインタフェース画面が割り当てられていない新規ユーザのみに適用され、機能へのユーザアクセスを制限します。ユーザインタフェース画面が割り当てられていない既存の P6 Web Access ユーザは、全機能へのアクセスが可能です。

P6 Web Access で、ユーザインタフェース画面を作成する場合は、ユーザインタフェース画面に対応する機能が簡単に区別できるようにわかりやすい名前をつけます。

ユーザインタフェース画面の作成は、セキュリティを強化し、ユーザがプロジェクト作業とプロジェクト管理を実行する際、機能へのアクセスがより簡単にできるようになる便利な方法です。例えば、幹部はすべてのプロジェクト情報にアクセスする必要はありませんが、その 1 部にアクセスする必要があります。その場合、「幹部」という名のユーザインタフェース画面を作成し、いくつかまたはすべてのポートフォリオ機能にアクセスする権限と幹部が必要とするプロジェクトデータへのアクセス権を与えます。



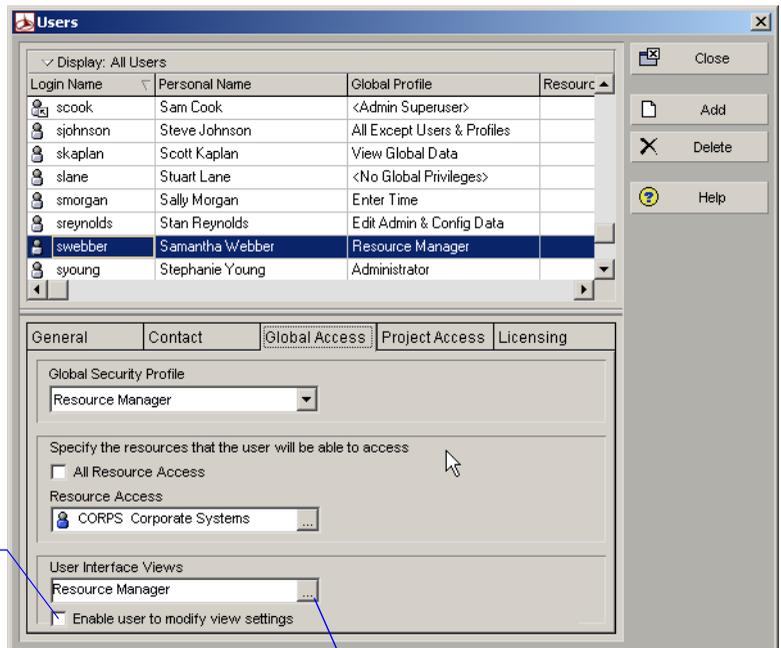
ユーザに付与されたライセンスとセキュリティ権限の設定は、常にユーザに割り当てられたユーザインタフェース画面に優先します。例えば、ユーザに Primavera Web Resources ライセンスがあり、Primavera Web Portfolios ライセンスがない場合、このユーザはユーザインタフェース画面でポートフォリオ機能が有効となっても、P6 Web Access のポートフォリオセクションの機能にはアクセスすることはできません。さらに、Team Member ライセンスのみをもつユーザにユーザインターフェイス画面を割り当てた場合、その画面設定は無視されます。Team Member ライセンスを持ったユーザが利用できる機能は常にライセンスによって制御されず Team Member ライセンスのあるユーザが利用できる機能についてのさらなる情報は、337 ページの「[Team Member ライセンスにより可能となるユーザアクセス](#)」を参照してください。

また、ユーザインタフェース画面を使って、会社で使わない P6 Web Access 機能を非表示にすることができます。例えば、会社が時間の報告に Primavera Timesheets を使っていない場合はダッシュボードセクションの [タイムシート承認] アクションメニュー項目を非表示にできます。

Project Management モジュールでユーザインタフェース画面をユーザに割り当て [管理]、[ユーザ]を選択します。ユーザインタフェース画面を割り当てたいユーザを選択して、[グローバルアクセス]タブをクリックします。ユーザインタフェース画面セクションで、[ブラウズ]ボタンをクリックして、[ユーザインタフェース画面]を選択します。ユーザに、P6 Web Access の表示設定で、個人のユーザインタフェース画面設定の変更を許容する場合は、[ユーザによる画面オプションの変更を許可]チェックボックスをマークします。

ユーザインタフェース画面で、P6 Web Access のカスタマイズを行うことに加え、プロトタイプユーザを作成し、既定のダッシュボードとグローバル設定の指定を行うことができます。343 ページの「プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義」を参照してください。

このチェックボックスをマークし、ユーザに自身のユーザインタフェース画面設定の変更を許容します。ユーザがユーザインタフェース画面設定を変更しても、同じ画面に割り当てられた他のユーザの設定には影響しません。



クリックして、ユーザインタフェース画面を選択します。

Methodology Management モジュールのセキュリティ設定

Methodology Management モジュールは、独自のユーザ、グローバル設定、メソドロジ設定を使用して、Methodology Management データへのアクセスを管理します。このセキュリティデータは、Methodology Management データベースに保存されます。

Project Management と Methodology Management モジュール間ではセキュリティデータは共有していません。Methodology Management では、独自の OBS、ユーザ、グローバル、メソドロジ設定とライセンスを使用します。

Methodology Management におけるセキュリティモデルは、Project Management モジュールとは異なっています。同時に開けるのは、1 つのメソドロジのみで、EPS はありません。ユーザとメソドロジ設定は、OBS ノードに割り当てることはできません。メソドロジ設定は、ユーザに直接割り当てられ、メソドロジへのユーザアクセスを許容します。

本セクションでは、Methodology Management モジュールでのセキュリティ設定とユーザの作成プロセスを説明します。

グローバル設定の作成 Methodology Management モジュールで、[管理]、[セキュリティ設定] を選択します。[グローバル設定] を選択し、[追加] をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のグローバル設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

グローバル設定を選択します…

…そして、その設定に付与された権限を確認します。

クリックすると、権限をアルファベット順に表示できます。

以下の表で、各グローバル権を定義します。



以下に、各権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。



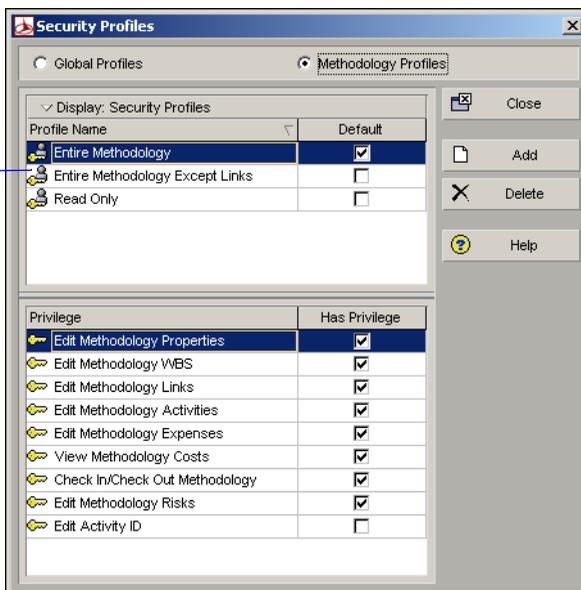
P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
セキュリティ設定の編集	セキュリティ設定情報を変更します。
ユーザの編集	Methodology Management モジュールユーザの作成と削除、およびユーザアクセス許可を変更します。
管理設定および分類の編集	[管理設定] ダイアログボックスで定義された、管理設定の変更を行います。[管理分類] ダイアログボックスで定義された管理分類の作成、変更、削除を行います。[通貨] ダイアログボックスで通貨データの編集を行います。
メソドロジの新規作成/コピー	メソドロジの作成、インポートまたはコピーを行います。
リソースの編集	リソース階層のノードの作成、削除、変更を行います。
ロールの編集	ロール情報の作成、削除、変更を行います。
作業成果物とドキュメントの編集	作業成果物とドキュメントレコードの作成、削除、変更を行います。
グローバル/メソドロジ情報のインポート	グローバルおよびメソドロジ情報をインポートします。
レポートの編集	レポートの作成、編集、削除とレポートウィザードでレポートを保存します。
アクティビティ属性の編集	アクティビティ属性の作成、変更、削除を行います。
アクティビティコードの編集	グローバルアクティビティコードとコード値の作成、変更、削除を行います。
見積ファクタの編集	見積ファクタの作成、変更、削除を行います。
リソース単価の表示	リソース価格を表示します。
アクティビティレイアウト/フィルタの編集	グローバルアクティビティレイアウトとフィルタの作成、削除、変更を行います。
OBS の編集	組織ブレイクダウンストラクチャ情報の作成、削除、変更を行います。
メソドロジ/リソースコード編集	メソドロジコードとリソースコードの作成、削除、変更を行います。

権限名	権限の定義
ユーザ定義フィールドの編集	ユーザ定義フィールドの作成、編集、削除を行います。この権限のないユーザは、ユーザ定義フィールドの表示はできません。
Microsoft Project テンプレートの編集	Microsoft Project からデータをインポートあるいはエクスポートするのに使用する、Microsoft Project テンプレートの作成、編集、削除を行います。
ステップテンプレートの編集	複数のアクティビティに対する一連の共通ステップを追加するのに使用する、アクティビティステップテンプレートの作成、編集、削除を行います。

メソドロジ設定の作成 [管理]、[セキュリティ設定]を選択します。[メソドロジ設定]を選択し、[追加]をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のメソドロジ設定とするには、[既定]チェックボックスをマークします。[権限]エリアで、適宜[権限あり]チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

会社内のさまざまな
ロールに対し、作成
できるメソドロジ設
定数には制限があり
ません。



以下の表で、各メソドロジ権を定義します。



P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク () が付記されています。*

権限名	権限の定義
メソドロジ属性の編集	[メソドロジプロパティ] ダイアログボックスに定義されたように、メソドロジプロパティの作成、削除、変更を行います。
メソドロジ WBS の編集	メソドロジのワークブレイクダウンストラクチャ (WBS) ノードとバージョンの作成、削除、変更を行います。
メソドロジリンクの編集	ユーザに、リンクする両方のメソドロジに対してこの権限があれば、メソドロジリンクの作成、削除、変更を行います。
メソドロジアクティビティの編集	アクティビティとアクティビティ情報の追加、変更、削除を行います。
メソドロジ経費の編集	経費の追加、変更、削除を行います。
メソドロジコストの表示	メソドロジコスト情報を表示します。
メソドロジコストのチェックイン/チェックアウト	Methodology Management モジュールからのメソドロジのチェックインおよびチェックアウトを行います。
メソドロジリスクの編集	メソドロジリスクの作成、削除、変更を行います。
アクティビティ ID の編集	メソドロジアクティビティ ID の編集を行います。

新規ユーザの追加 [管理]、[ユーザ] を選択します。「追加」をクリックします。

- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっていない場合は、[全般] タブをクリックしてユーザのログイン名と個人名を入力し、[パスワード] をクリックします。ユーザのパスワードをタイプし、さらにもう一回パスワードをタイプし直して確認します。「OK」をクリックします。

- [管理設定]でパスワードポリシーが有効になっている場合は [ユーザの追加] ダイアログボックスが表示されます。ログイン名、個人名、新規パスワードの入力、新規パスワードの確認の各フィールドに入力する必要があります。[OK]をクリックします。



管理設定の詳細については、394 ページの「既定設定の定義」を参照してください。



Methodology Management モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[追加]をクリックすると、ダイアログが現れ、ユーザ名を入力してそれをLDAP ストアと照合するよう求められます。テストをクリックすると、LDAP ストアにユーザが存在していれば、実際の名前、Eメールアドレス、電話番号フィールドで埋められます。これは認証設定ツールでそれらのフィールドが事前に対応付けられている場合です。ユーザを追加するには、[追加]をクリックします。[テスト]をクリックしてユーザがLDAP ストアに見つからない場合は、ユーザを追加できない旨を通知するメッセージが表示されます。

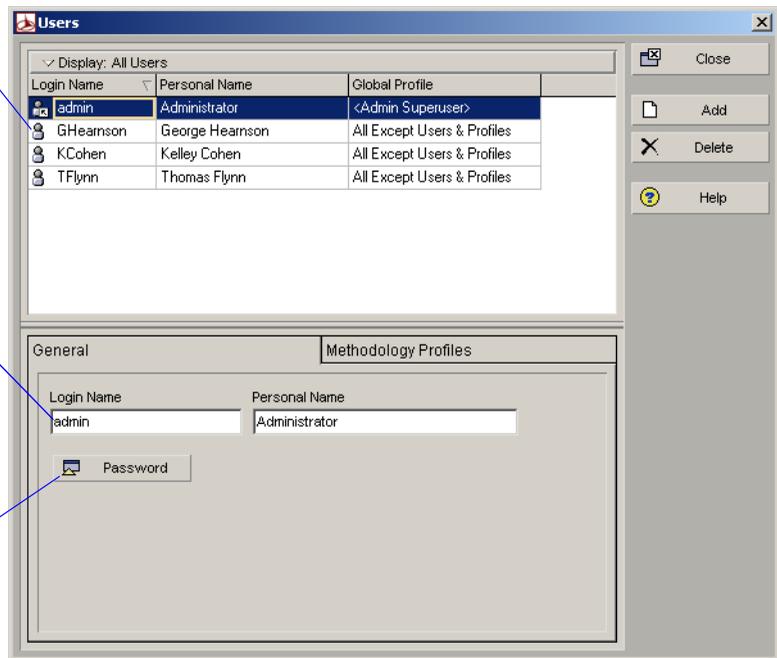


会社がユーザ情報をLDAP ディレクトリに中央管理している場合は、Primavera ユーザをLDAP ストアからプロビジョニングして追加することができます。さらなる詳細については、279 ページの「認証モードの設定」を参照してください。ユーザをプロビジョニングしたあと、各ユーザにセキュリティ設定を割り当てる必要があります。

Methodology Management
モジュールにアクセス権のあるユーザの一覧を表示します

Methodology Management
モジュールにログインするのに必要な名前を明らかにします

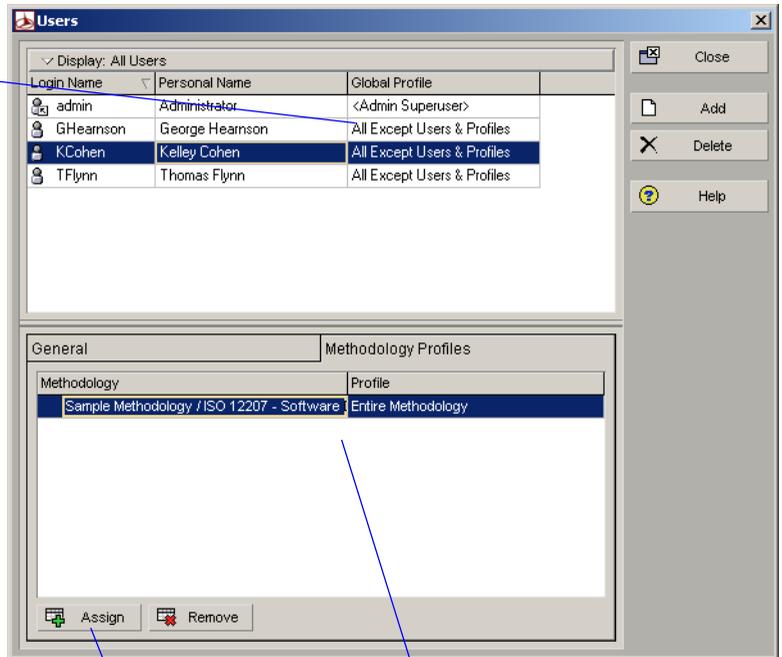
Methodology Management
モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[パスワード] ボタンは表示されません。



製品ライセンス Methodology Management モジュールでは、製品ライセンスを割り当てる必要はありません。購入した Project Management モジュールの各ライセンスで、自動的に Methodology Management モジュールのライセンスが与えられています。

グローバル設定とメソドロジ設定の割当 グローバル設定は、リソースやロールなどのグローバルデータに対するユーザのアクセス権を決めます。メソドロジ設定は、メソドロジデータに対するユーザアクセスを制限します。Methodology Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定がされていることが要求されます。メソドロジを開くには、ユーザはそのメソドロジに対するメソドロジ設定が割り当てられていなければなりません。[管理]、[ユーザ] を選択します。グローバル設定とメソドロジ設定を割り当てたいユーザを選択します。[メソドロジ設定] タブをクリックします。

[グローバル設定]列をダブルクリックして、選択したユーザに適した設定を選ぶことができます。



クリックして、ユーザがアクセスに必要なメソドロジを選択します…

…[設定]列をダブルクリックして、選択したユーザにメソドロジ設定を選びます。



Methodology Management モジュールには管理スーパーユーザ (Admin Superuser) グローバル権限も含まれます。この権限には、すべてのグローバル情報とメソドロジへの完全なアクセスが許可されています。



メソドロジスーパーユーザ設定は、メソドロジのすべての側面での読み書き権限が与えられています。管理スーパーユーザ権限のあるユーザには、自動的にすべてのメソドロジに対するメソドロジスーパーユーザアクセス権が付与されています。ユーザが新規メソドロジを作成すると、そのユーザには自動的にそのメソドロジに対するメソドロジスーパーユーザ設定が与えられます。

Project Management での管理設定と分類の定義

本章の内容：

既定設定の定義

標準的な分類と値の定義

通貨の定義

Project Management では、エンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS) のあらゆるプロジェクトに適用されるパラメータや値をモジュール全体で定義できます。この設定を使うと、特定のプロジェクト管理要件や規格を満たすようモジュールをカスタマイズできます。このような設定はあらゆるユーザが閲覧できますが、これを編集する特別なセキュリティ権限を得られるのは1人だけです。

本章では、指定できる設定のタイプについて説明します。「管理設定」は、既定の設定です。「管理分類」は、あらゆるプロジェクトに適用される標準的な値です。また、「通貨」には、データベースにコストを保存するための基準通貨と、ウィンドウやダイアログボックスにコストを表示するための表示通貨があります。

既定設定の定義

[管理設定] の各フィールドの詳細な情報が必要な場合は、[管理設定] ダイアログボックスの [ヘルプ] をクリックしてください。

「管理設定」ダイアログボックスを利用すると、プロジェクト管理コーディネータによる既定の設定を指定できます。「管理」、「管理設定」を選択します。

全般情報 「全般」タブを使うと、カレンダー上の週の最初の日など一般的な既定オプションを指定できます。また、リソースやプロジェクト、アクティビティコード、ルール、WBS ノードで階層レベルを分離するために使用する文字を変更することもできます。

<p>グローバル、プロジェクト、リソースカレンダーの週の初日。</p>	<p>Code Separator</p> <p>Specify the character for separating concatenated codes. It is also the default WBS code separator for new projects.</p> <p>Code Separator <input type="text"/></p>	<p>ルールやリソースコード、プロジェクトコード、コストアカウント、アクティビティコードで階層レベルを分離する文字。あらゆる新規プロジェクトにおける WBS コードの既定区切文字でもあります。WBS コード区切文字は「プロジェクト詳細」の「設定」タブで特定のプロジェクト用に入力できます。</p>
<p>あらゆるプロジェクトにおける新規アクティビティの既定所要期間。新規アクティビティの追加プロセスを簡素化。</p>	<p>Starting Day of Week</p> <p>Specify the starting day of the week for calendars.</p> <p>First day of week <input type="text" value="Sunday"/></p>	
<p>パスワードの作成と変更に使われるポリシー。チェックマークを入れると、強力なパスワードポリシーを有効にできます。マークが入っていない場合、パスワードは 0 ~ 20 字の文字または数字になります。</p>	<p>Activity Duration</p> <p>Specify the default duration for new activities.</p> <p>Default Duration <input type="text" value="1"/></p> <p>Password Policy</p> <p>Primavera requires a minimum length of 8 characters and at least one number and one letter in a user's password.</p> <p><input type="checkbox"/> Enable password policy</p>	



週の最初の日は、1 週間の日にちがグラフやスプレッドシートなど週間のタイムスケールを示すレイアウトに表示される方法に影響を与えます。例えば、水曜日が週の最初の日の場合、「アクティビティ稼働グラフ」では 1 週間は「\WTFSSMT」と表示されます。

Timesheets 「タイムシート」タブを使うと、Timesheets モジュールを使用する際の既定設定オプションを指定できます。

ここを選択すると新たに作成されたあらゆるプロジェクトの権限を割り当てられます。各プロジェクトでは、「プロジェクト詳細リソース」タブでこの設定を変更できます。

ここを選択するとタイムシートの提出、承認、却下、レビュー担当者、関連のある日付の履歴を保存することができます。このオプションを選んだ場合は、履歴データを表示するために「タイムシートの履歴」という部分がタイムシートレポートに追加されます。

ここを選択すると、各割当アクティビティについて毎日、作業時間を報告するよう全リソースレポートに求めることができます。このオプションを選ぶと、リソースが毎日入力できる最大時間数をオプションで指定することができます。

タイムシート期間に含まれている日数に関わりなく、タイムシート報告期間の各割当アクティビティについて稼働時間を単一の値として報告するよう全リソースに求めることができます。

ここを選択すると別途指示がない限りあらゆる新規リソースでタイムシートを使用するよう指定できます。

General Settings		
<input checked="" type="checkbox"/>	New resources use timesheets by default	
<input checked="" type="checkbox"/>	Resources can assign themselves to activities by default	
<input checked="" type="checkbox"/>	Enable Timesheet Auditing	
Entering Timesheets		
Timesheets users enter timesheet hours		
<input checked="" type="radio"/>	Daily	
<input checked="" type="checkbox"/>	Maximum hours a resource can enter per day	8
<input type="radio"/>	By Reporting Period	
	Number of decimal digits for recording hours in timesheets	2
	Number of future timesheets users are allowed to access.	36
	Number of past timesheets users are allowed to access.	35
Timesheet Approval Level		
<input type="radio"/>	Auto Submission - No submission or approval is required	
<input type="radio"/>	Auto Approval - Automatically approve upon submission	
<input type="radio"/>	1 Approval Level - Resource manager approval required	
<input checked="" type="radio"/>	2 Approval Levels - Project and resource managers approval required	
<input type="checkbox"/>	Project manager must approve before resource manager	
Default resource manager approving timesheets		admin Project Admin ...



[リソースが入力可能な1日あたりの最大時間数]と[タイムシート記録時間の小数点桁数]フィールドで入力した小数点以下の桁数に相違がある場合は、タイムシートフィールドでユーザの入力した値が四捨五入され表示されます。四捨五入は表示目的のみであり、最初に入力された値がデータベースに保存されます。例えば、1日あたりの最大時間数を10.5と指定したものの、タイムシートで記録できる時間の小数点以下の桁数を0(ゼロ)にした場合、ユーザがタイムシートフィールドに10.5と入力してもタイムシートではこの値が11に切り上げられます。データベースには10.5という値が保存されるため、リソースは1日あたりの最大時間数の設定を超えることはできません。

「タイムシート承認レベル」セクションには以下のオプションが含まれています。

- **自動提出** — これを選択すると、リソースのタイムシートが提出または承認される必要がないことを示します。タイムシートデータは、実績を適用すると自動的にデータベースで更新されます。
- **自動承認** — これを選択すると、リソースのタイムシートが管理者の承認を必要としないことを示します。タイムシートは、提出時に自動的に承認されます。
- **承認レベル 1** — これを選択すると、リソースのタイムシートは、リソース/コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、承認担当マネージャが当該ステータスを変更するまでは「提出済」のままになります。以前はプロジェクトマネージャとリソース/コストマネージャ双方の承認を必要としていた場合にこのオプションを選択すると、1レベルの承認を受けた現行タイムシートすべてのステータスが「承認」に変わります。
- **承認レベル 2** — これを選択すると、リソースのタイムシートは、プロジェクトマネージャとリソース/コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、両マネージャがタイムシートを承認するまでは「提出済」のままになります。
- **プロジェクトマネージャがリソースマネージャの前に必要** — 承認レベル 2 を選択した場合、これをマークするとプロジェクトマネージャがタイムシートの承認をリソース/コストマネージャの前に行う必要があることを示します。
- **タイムシート承認の既定リソースマネージャ** — 特に変更しない限り、リソースのタイムシートを承認するマネージャ名。「ブラウズ」ボタンをクリックして新規マネージャを選択します。

Timesheets モジュール実装の詳細については、99 ページの「Timesheets 用の Group Server の調整」と 407 ページの「Timesheets の実装」を参照してください。

タイムシート権限 「タイムシート権限」タブを利用すると、時間を報告する権限を定義できます。

アクティビティの開始前にユーザが
プレビューできる既定の日数。

Default time window to access activities

Not-started activities (days) 60

Completed activities (days) 60

Privileges for logging hours on timesheets

- Log hours on future timesheets
- Log hours on not-started activities
- Log hours on completed
 - Activities and Assignments
 - Assignments only
- Log hours on activities before the activity start date
- Log hours on activities after the activity finish date

アクティビティの終了後にユーザが
プレビューできる既定の日数。

タイムシートに時間を入力するリソース権限を指定します。

階層制限 「階層制限」タブを使用すると、階層構造レベルの最大数を指定できます。また、プロジェクトに含むことのできるベースラインとアクティビティコードの最大数も指定できます。

EPS と WBS における階層レベルの合計最大数は、1 が最低、50 が最高となります。

Data Limits	
Specify the maximum number of levels for trees.	
EPS/WBS tree maximum levels	5
OBS tree maximum levels	8
Resources tree maximum levels	20
Role tree maximum levels	4
Cost Account tree maximum levels	8
Activity Code tree maximum levels	4
Resource Code tree maximum levels	4
Project Code tree maximum levels	4
Maximum activity codes per project	8
Maximum baselines per project	4
Maximum baselines copied with project	1

このような構造内の最大階層レベル数は、1 が最低、25 が最高となります。

プロジェクトにおけるアクティビティコードの最大数は、0 が最低、500 が最高となります。

プロジェクトにおけるベースラインの最大数は、無制限の数を入力できます。

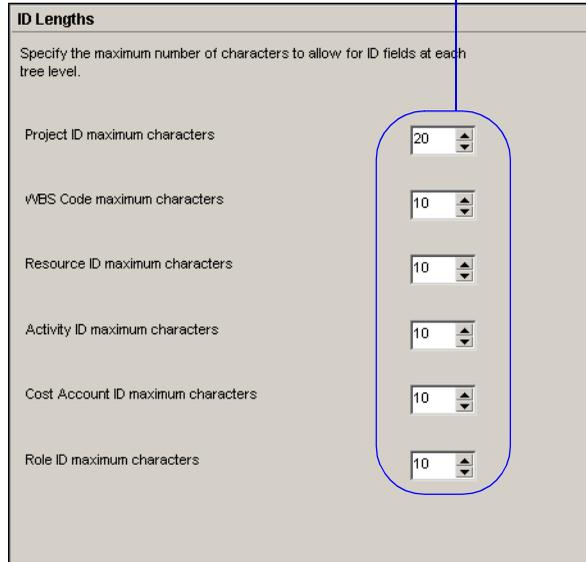
プロジェクトにおいてコピーできるベースライン最大数。プロジェクトでコピーできるベースラインの最大数は、このフィールドに1 から 50 までの数字を入力することができます。



最大階層レベル数の設定を変更すると、新規ノードを追加したり既存ノードを編集したりした場合にのみ新規設定が適用されます。

ID 文字数 「ID 文字数」タブを使うと、ID やコードの最大文字数を指定できます。

このような ID やコードの最大文字数は、1 が最低、20 が最高となります。



ID Lengths	
Specify the maximum number of characters to allow for ID fields at each tree level.	
Project ID maximum characters	20
WBS Code maximum characters	10
Resource ID maximum characters	10
Activity ID maximum characters	10
Cost Account ID maximum characters	10
Role ID maximum characters	10



ID またはコードの最大文字数を変更すると、新規 ID/ コードを追加したり既存の ID/ コードを編集したりする際に新しい文字数が適用されます。

期間 「期間」タブを使用すると、稼働日、稼働週、稼働月、および稼働年あたりの既定時間数を定義できます。選択した期間単位や所要期間の表示形式を表示する際にこのような値を変換ファクタとして使用します。分、時間、日、週、月、年を表示するために略称を指定することもできます。

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 168.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 744.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 24.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 8784.0.

選択した期間単位や所要期間の表示形式を表示する際は、1 字の略語を入力します。

Hours/Day	Hours/Week	Hours/Month	Hours/Year
8.0	40.0	172.0	2000.0

Allow users to specify the number of work hours for each time period

Minutes	Hours	Days
n	h	d
Weeks	Months	Years
w	m	y

ユーザが期間毎の既定時間を定義

Primavera は 1 時間単位で値を計算、保存します。ただし、「ユーザ定義」を利用すると各ユーザは期間単位の値を時間、日、週、月、または年で表示するよう選択できます。ユーザが期間単位フィールドで時間以外の増分でデータを表示すると、Project Management は「管理設定」の「期間稼働時間」の設定に基づいてデータを変換します。反対に、ユーザが時間以外の期間単位を入力すると、「管理設定」の「期間稼働時間」の設定を使ってデータベースの計算と保存用に入力値が時間に換算されます。

管理者は変換ファクタを指定したり、ユーザに変換ファクタを指定させたりすることができます。変換ファクタを指定する場合は、「期間稼働時間」フィールドで変換ファクタとして使用する時間数を入力します。ユーザに変換ファクタを指定させる場合は、「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスにマークを入れます。

ユーザに「ユーザ設定」で期間毎の時間設定を独自に入力するよう許可すると、スプレッドシートやレポートなどでアクティビティのサマリや詳細スケジュールデータを表示する際に期間単位データが不適正に表示されることがなくなります（管理期間設定とアクティビティカレンダーの期間設定が一致しなければ不適正に表示されることがあります）。ユーザに「ユーザ設定」の「期間稼働時間」の指定を許可せず、ユーザ設定の表示が時間以外に設定されている場合は、「管理設定」の「期間稼働時間」の設定以外の時間 / 期間カレンダー値を使用するアクティビティの時間をユーザが入力すると、予期しない表示が行われる可能性があります。これは、表示がアクティビティのカレンダーにより定義された時間 / 期間ではなく「管理設定」の「期間稼働時間」設定の変換ファクタを反映しているために発生します。例えば、以下のようになります。

ユーザ設定、期間単位 = 日

管理設定、期間稼働時間 = 8 時間 / 日

アクティビティカレンダー = 10 時間 / 日

ユーザの入力したアクティビティ期間 = 30 時間

期間表示 = 3 日 6 時間 (30 時間の期間 / 1 日あたり 8 時間、
変換ファクタに基づく)

予期しない表示結果を避けるには、「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスにマークを入れます。次に、組織内のロールが使用するアクティビティカレンダーに基づいて「ユーザ設定」で「期間稼働時間」値を設定するようユーザに勧めます。例えば、エンジニアが 8 時間のアクティビティカレンダーを使用する場合は「時間 / 日」ユーザ設定に「8」を入力します。同様に、建設労働者が 10 時間のアクティビティカレンダーを使用する場合は「時間 / 日」ユーザ設定に「10」と入力します。ロールに応じてユーザ設定を行うよう勧めると、ユーザはアクティビティ期間を正確に把握できます。

アーンドバリュー 「アーンドバリュー」タブを使うと、アーンドバリューを計算する既定の設定を指定できます。「ワークブレイクダウンストラクチャ詳細」の「アーンドバリュー」タブで特定の WBS ノードの設定を変更できます。

「アーンドバリュー」タブのフィールドの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

Technique for computing performance percent complete	
<input type="radio"/> Activity % Complete	<input type="radio"/> 50/50 % Complete
<input checked="" type="radio"/> Use WBS Milestones	<input type="radio"/> Custom % Complete
<input type="radio"/> 0/100 % Complete	<input type="text" value="8"/>
Technique for computing Estimate to Complete (ETC)	
<input type="radio"/> ETC = remaining cost for activity	
or	
ETC = PF * (Budget at Completion - Earned Value), where:	
<input checked="" type="radio"/> PF = 1	
<input type="radio"/> PF = 1 / Cost Performance Index	
<input type="radio"/> PF = 1 / (Cost Performance Index * Schedule Performance Index)	
<input type="radio"/> PF = <input type="text" value="0.82"/>	
Earned value calculation	
When calculating earned value from a baseline use	
<input type="text" value="At Completion values with current dates"/>	

アーンドバリューの計算に使用するベースライン値のタイプを選択します。

レポート 「レポート」タブを使うと、最高3セットのレポートのヘッダ、フッタ、カスタムラベルを定義できます。

Report Headers and Footers		
Specify three sets of header, footer, and custom labels to place on application reports.		
<input checked="" type="radio"/> First Set	<input type="radio"/> Second Set	<input type="radio"/> Third Set
Header Label 1	<input type="text" value="Header 1"/>	
Footer Label 1	<input type="text" value="(c) Primavera Systems, Inc."/>	
Custom Label 1	<input type="text" value="User Variable 1"/>	

ヘッダ、フッタ、カスタムテキストラベルから成るセットを定義するために選択します。

次に、当該セットのヘッダ、フッタ、カスタムラベル用のカスタムテキストを指定します。

オプション 「オプション」タブを使うと、アクティビティやリソース/ロール用にコストや定量サマ리를計算する間隔を指定できます。カレンダー間隔、報告期間の間隔、またはその双方を利用できます。選択した間隔に応じて、チャートやスプレッドシートに表示できるデータが決まります。このようなチャートやスプレッドシートでは、P6 Web Access や Project Management モジュールで集計されたアクティビティや割当データが表示されます。カレンダー間隔のオプションがデフォルトで選択されています。カレンダー間隔で集計しないよう選択できますが、これはほとんどの企業では推奨されません。

チャートやスプレッドシートで、P6 Web Access ユーザが報告期間のタイムスケール間隔でアクティビティと割当データ（現時点実績および過去の期間実績の双方）を表示できるようにするには、報告期間による集計を選択します。このオプションを選ぶと、Project Management モジュールの報告期間タイムスケール間隔は格納中のプロジェクトの集計済みの現時点実績値を正確に表示します。



P6 バージョン 6.0 から P6 Web Access バージョン 6.2 にアップグレードした後に集計の設定を変更すると（例えば、「報告期間別」オプション）、すべてのプロジェクトを集計しても無視されるプロジェクトが出てきます。特に、アップグレードの前に集計され、それ以降は変更されていないプロジェクトは、すべてのプロジェクトを集計しようとしても集計できません。

このようなプロジェクトの報告期間データの集計を含むには、アップグレード後にこれらのプロジェクトの既存集計データを削除して、各プロジェクトを集計する必要があります（個々に、またはジョブサービスによって集計します）。ひとつのプロジェクトの集計データを削除するには、Project Management の [プロジェクト] ウィンドウでプロジェクト名を右クリックし、[プロジェクト集計の削除] を選択します。

カレンダーおよび報告期間間隔の双方で集計を行うと、サマライズジョブの実行時間が増えます。パフォーマンス上の問題が発生した場合は、220 ページの「[ジョブサービスレジストリの設定](#)」を参照して、サマライズパフォーマンスの改善方法に関する情報を入手してください。



データを報告期間別に集計する場合でも、報告期間タイムスケールを表示できるよう P6 Web Access ユーザ向けに報告期間を適切に定義する必要があります。報告期間の設定については、429 ページの「[報告期間の定義](#)」を参照してください。



報告期間間隔で集計することを選択し、ユーザが報告期間タイムスケールを表示する場合に格納中のプロジェクトのデータを含めたい際は、格納中のプロジェクトを各々1回集計する必要があります。プロジェクト集計の詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

Project Architect を使ってアクティビティを追加したり新規プロジェクトを作成したりするためにユーザがメソドロジにアクセスできるかどうか選択できます。ユーザが Project Management からコンテンツリポジトリドキュメントや Timesheet Approval アプリケーションを起動できるようにするには、URL を P6 Web Access サーバに入力します。ワークフロー管理者は、P6 Web Access のワークフローテンプレート（プロジェクトの要求に使用）を管理する Web ユーザです。「ブラウズ」ボタンをクリックして選択します。さらに、このタブを使うと Contract Manager（旧称：Expedition）へのリンクを設定できます。

アクティビティのコストや量を
集計する間隔。

このオプションを選択すると、
ユーザは P6 Web Access でサ
マリデータを表示したり、報
告期間タイムスケール間隔で
高レベルの計画割当を編集し
たりできるほか、Project
Management モジュールで正
確なデータが報告期間タイム
スケール間隔で表示されるよ
う確認できます。

ユーザが Project
Management からコンテン
ツリポジトリドキュメント
や Timesheet Approval ア
プリケーションを起動でき
るようにするには、URL を
P6 Web Access サーバに入
力します。

Specify the interval to summarize and store resource spreads

Select summarization periods

By calendar

vWBS Level Week

Resource/Role Assignment Level Week

By financial period

Project Architect

Allow use of Project Architect

myPrimavera Server URL

Workflow Administrator

Link to Contract Manager

Enable Link to Contract Manager

8.5.4

9.x and higher URL:

リソース/
ロール割当
のコストや
量を集計す
る間隔。

Contract Manager バージョン 9.x 以上に接続する場合は、
Contract Manager Web サーバの URL を入力します。URL
にはサーバ名（または IP アドレス）を含む必要がありま
す。既定ポートである「80」を使用しない場合はポート番
号も必要です。



Contract Manager へのリンクを設定すると、Contract
Manager プロジェクトへのリンクを作成してプロジェクト
レベルのデータをインポートしたり表示したりできます。
詳細については『Project Management リファレンスマニ
ュアル』を参照してください。

単価タイプ 「単価タイプ」タブを使うと、利用可能な5つの「単価」フィールドにそれぞれタイトルを付けられます。タイトルは単価タイプの内容を説明したものでなくてはなりません。単価タイプがリストや列で表示される場合に定義した単価タイプのタイトルも表示されます。

このようなタイプの単価には新たなタイトルを定義できます（「商用単価」や「政府用単価」など）。

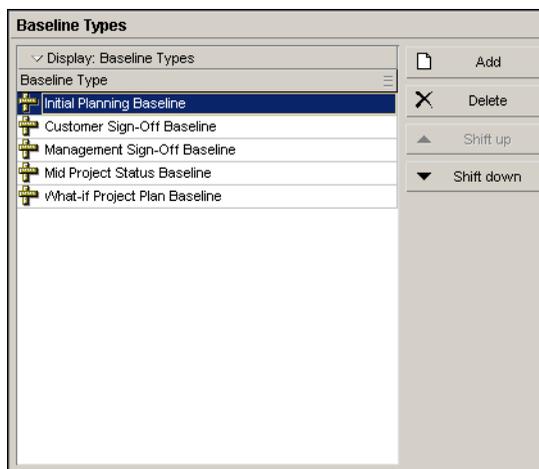
Default Title	User-defined Title
cost_per_qty	Price / Unit
cost_per_qty2	Price / Unit2
cost_per_qty3	Price / Unit3
cost_per_qty4	Price / Unit4
cost_per_qty5	Price / Unit5

標準的な分類と値の定義

「管理分類」ダイアログボックスを使うと、あらゆるプロジェクトに適用できる標準的な分類と値を定義できます。「管理」、「管理分類」を選択します。

ベースラインの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

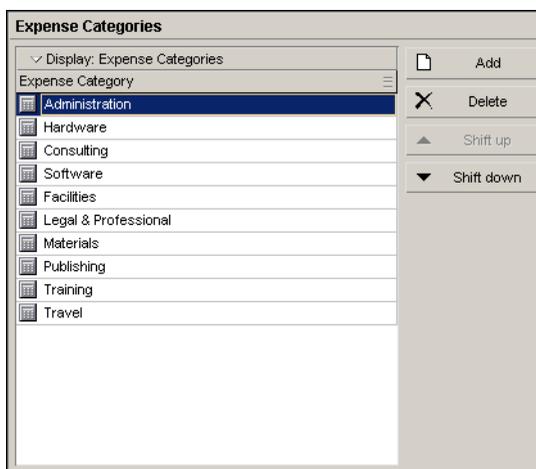
ベースラインタイプ 「ベースラインタイプ」タブを使用すると、ベースラインのタイプを作成、編集、削除できます。ベースラインタイプを利用すると、プロジェクト全体でベースラインを分類して標準化できます。ベースラインのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ベースラインが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



「上へシフト/下へシフト」ボタンをクリックすると、選択した分類/タイプを上下に移動できます。これにより割当の際に分類/タイプが表示される順序が変わります。このボタンは、リストがアルファベット順にソートされていない場合に限り利用できます。

経費の詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

経費分類 「経費分類」タブを使用すると、経費のカテゴリを作成、編集、削除できます。経費分類は、プロジェクト経費を分類して標準化したり、経費情報を整理、維持するために利用できます。経費分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、経費アイテムが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。

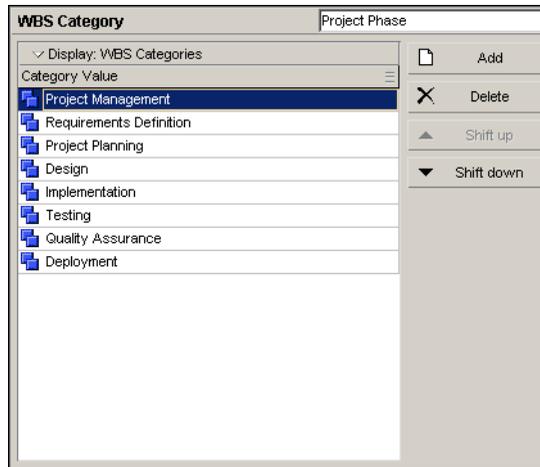


WBSの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

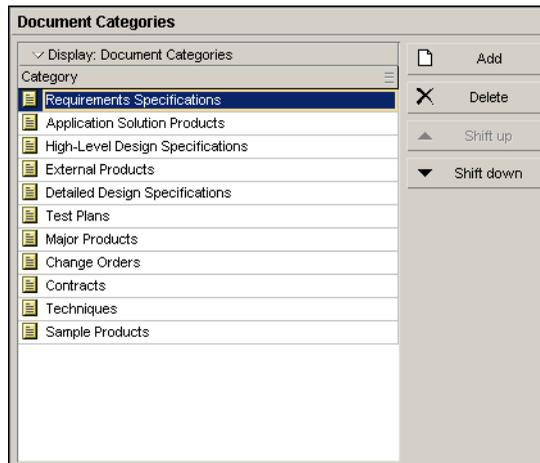
WBS カスタム分類 「管理分類」ダイアログボックスの3番目のタブを利用すると、カスタム WBS 分類と分類値を定義できます。タブには、定義した名前が表示されます。分類名を変更するには、右上にあるフィールドをクリックして新しい名前を入力してください。この分類を使うと、あらゆるプロジェクトで WBS 情報を整理、フィルタ、報告できます。分類値を変更するには、当該値をダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、WBS アイテムが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



WBS 分類を変更しても、分類の値や値割当は変わりません。

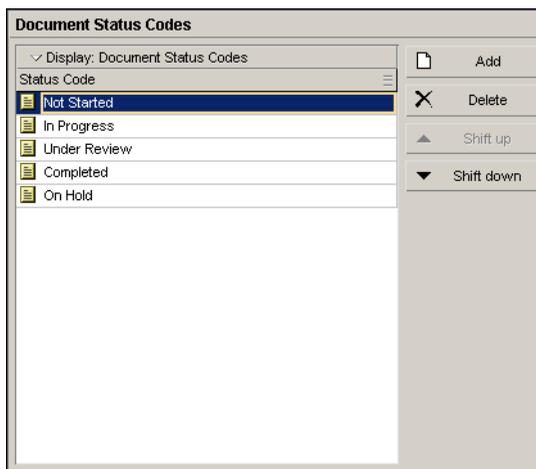


ドキュメント分類 「ドキュメント分類」タブを使うと、作業成果物やドキュメントの分類を設定してこの分類を「ドキュメント」ウィンドウのドキュメントや「アクティビティ詳細」の「ドキュメント」タブのアクティビティに割り当てられます。ドキュメントの分類を変更するには、当該カテゴリをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ドキュメントが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



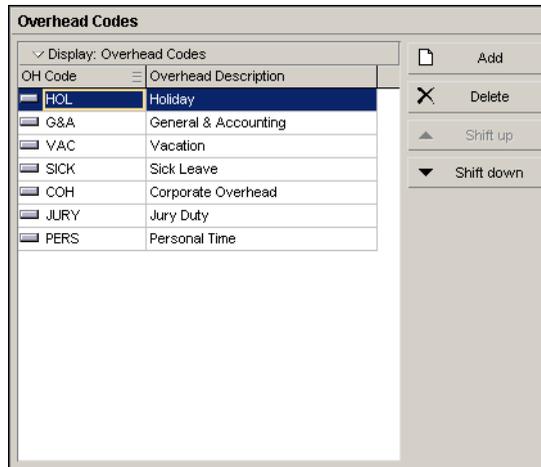
作業成果物とドキュメントの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

ドキュメントステータス 「ドキュメントステータス」タブを使用すると、ドキュメントステータスのタイプを作成、編集、削除できます。ステータスのタイプは、プロジェクト内の作業成果物やドキュメントの現在のステータスを識別します。これを使うと、アクティビティや WBS ノードに割り当てられるドキュメントを判定できます。ステータスのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ドキュメントが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



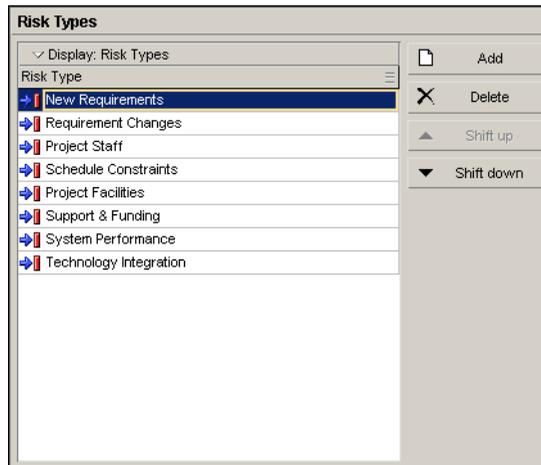
Timesheets モジュールの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

間接コード 「間接コード」タブを使うと、Timesheets ユーザ用の間接アクティビティコードを作成、編集、削除できます。Timesheets ユーザは間接アクティビティを自分のタイムシートに追加して、プロジェクトアクティビティとは関係のないタイムシート時間をログすることができます。コードを変更するには、当該コードをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、コードが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



リスクの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

リスクタイプ 「リスクタイプ」タブを使うと、リスクのタイプや潜在的なリスクの分類を作成、編集、削除できます。リスクタイプを利用すると、プロジェクト全体でリスクを分類して標準化できます。リスクのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、リスクが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。

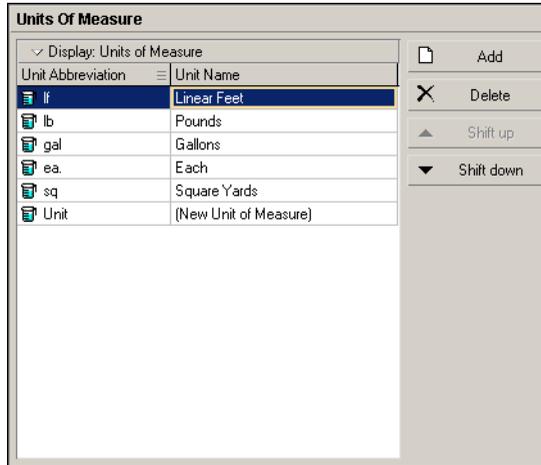


アクティビティノートの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

ノートトピック 「ノートトピック」タブを使用すると、ノートのトピックを作成、編集、削除できます。ノートトピックは通常、アクティビティを実施するための指示や説明で構成されています。ただし、ノートトピックはEPS、プロジェクト、WBSレベルで割り当てることもできます。トピックには、目的や入力基準、ツールとテクニック、終了基準などがあります。ノートトピックを変更するには、当該トピックをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容はあらゆるノートの割当に適用されます。

Notebook					
▼ Display: Notebook Topics					
Notebook Topic	EPS	Proj	WBS	Actv	
 Purpose	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	 Add
 Activity Constraint R	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	 Delete
 Lessons Learned	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	 Shift up
 Scope	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	 Shift down
 Objectives	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Recent Highlights	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Anticipated Problems	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Status Report	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Rationale	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Entry Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Core Requirements	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Verification / Validati	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Tools / Techniques	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Metrics	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Exit Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
 Description	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

計量単位 「計量単位」タブを使うと、材料リソースに割り当てられる計量単位のラベルを設定できます。計量単位のラベルを変更するには、当該ラベルをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、あらゆる計量単位の割当に適用されます。



通貨の定義

データベースのあらゆるプロジェクトでコストデータを保存するための通貨単位（**基準通貨**）と、ウィンドウやダイアログボックスでコストデータを表示するための通貨単位（**表示通貨**）を指定できます。



管理スーパーユーザ権限のあるユーザのみが基準通貨を変更したり、追加表示通貨のタイプを定義したりできます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。コストデータを表示するために基準通貨以外の通貨を選択すると、コストおよび価格フィールドに表示される値を計算するために、基準通貨の値に表示通貨用の現在の為替レートが乗算されます。

例えば、基準通貨が米ドルで表示通貨がユーロ、ユーロの為替レートが 0.75 だとします。データベースに保管されている 10 ドルの値は、ウィンドウやダイアログボックスのコストおよび価格フィールドでは 7.5 ユーロと表示されます。同様に、10 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$13.30 と保存されます。



コストおよび価格フィールドに値を入力すると、常に表示通貨で表示されます。

通貨がコストデータの保存に使われるベースであることを示します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rat
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538200
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	EUR	Euro	€	0.771367
<input type="checkbox"/>	HKD	Hong Kong Dollar	HK\$	7.799200
<input type="checkbox"/>	INR	Indian Rupee	Rs.	48.969700
<input type="checkbox"/>	ILS	Israel Shekel	NIS	4.864600

WBS: F-SY51.FU5Y5.IM System Implementation

General | Appearance

Currency ID: USD Currency name: Dollar

Currency symbol: \$ Exchange rate: 1.000000

「通貨」ダイアログボックスを使うと、基準通貨と表示通貨を設定できます。



Project Management の古いバージョンから更新している場合は、プロジェクトを追加、変更する前に新しいバージョンで基本通貨を設定する必要があります。

基準通貨の定義 基準通貨は既定で米ドルになっています。異なった通貨を基準通貨として定義するには、「管理」、「通貨」を選択します。基準通貨を選択してから、「全般」タブで通貨の ID、名称、記号を入力します。基本通貨の為替レートは常に 1 です。「表示」タブをクリックすると、通貨の表示方法をさらに詳しく定義できます。

通貨の表示では、整数と小数を分離し
ます (500.5 など)。

通貨表示の桁を分けます
(300,000 または 300,000 など)。

小数点以下に表示される数字の数を示します。例えば、「なし」(70)、「1」(70.1)、「2」(70.14) などです。



古い基準通貨でコストを表示したい場合は、これを利用可能な通貨の一覧に追加する必要があります。

表示通貨の追加 「管理」、「通貨」を選択します。「追加」をクリックします。通貨の ID、名称、記号、為替レートを指定して、通貨を表示する方法を示します。

「編集」、「ユーザ設定」を選択し、「通貨」タブをクリックして、コストの表示に使用する通貨を選択します。

通貨のタイプを明確に定義する ID を入力します。

通貨を識別するために一般的に使用されている記号を入力します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rat
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input checked="" type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538200
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	EUR	Euro	€	0.771367
<input type="checkbox"/>	HKD	Hong Kong Dollar	HK\$	7.799200
<input type="checkbox"/>	INR	Indian Rupee	Rs.	48.969700
<input type="checkbox"/>	ILS	Israel Shekel	NIS	4.864600

WBS: F-SYS1.FUSYS.IM System Implementation

General | Appearance

Currency ID	Currency name
CAD	Canadian Dollar
Currency symbol	Exchange rate
CA\$	1.538200

当該通貨の現在の世界的な為替レートを入力します。

Methodology Management での管理 設定と分類の定義

本章の内容：

既定設定の定義

標準的な分類と値の定義

通貨の定義

Methodology Management モジュールでは、あらゆるメソドロジに適用されるパラメータや値をモジュール全体で定義できます。この設定を使うと、特定のプロジェクト管理要件や規格を満たすようモジュールをカスタマイズできます。このような設定はあらゆるユーザが閲覧できますが、これを編集する特別なセキュリティ権限を得られるのは1人だけです。

本章では、指定できる設定のタイプについて説明します。「管理設定」は、本モジュールで使用されている既定の設定です。「管理分類」は、本モジュールのあらゆるメソドロジに適用される標準的な値です。また、「通貨」には、データベースにコストデータを保存するための基準通貨と、ウィンドウやダイアログボックスにコストデータを表示するための表示通貨があります。

既定設定の定義

「管理設定」ダイアログボックスを利用すると、プロジェクト管理コーディネータによる既定の設定を指定できます。「管理」、「管理設定」を選択します。

全般情報「全般」タブを使うと、期間タイプや進捗率タイプ、アクティビティタイプなど、新規アクティビティの一般的な既定オプションを指定できます。また、リソースやメソドロジ、アクティビティコード、ロール、ワークブレイクダウンストラクチャ (WBS) ノードで階層レベルを分離するために使用する文字を変更することもできます。

ロールやリソースコード、メソドロジコード、アクティビティコードで階層レベルを分離する文字です。あらゆる新規メソドロジにおける WBS コードの既定区切文字でもあります。

このような既定タイプは、新規アクティビティでのみ使用できます。この設定を変更しても、既存のアクティビティには影響しません。

パスワードの作成と変更に使われるポリシー。チェックマークを入れると、強力なパスワードポリシーを有効にできます。マークが入っていない場合、パスワードは 0 ~ 20 字の文字または数字になります。

Code Separator
Specify the character for separating code fields for WBS, Activity Code, Resource Code and Methodology Code trees.

Code Separator

Defaults for New Activities
Specify the default settings for new activities.

Duration Type
Fixed Duration & Units

Percent Complete Type
Duration

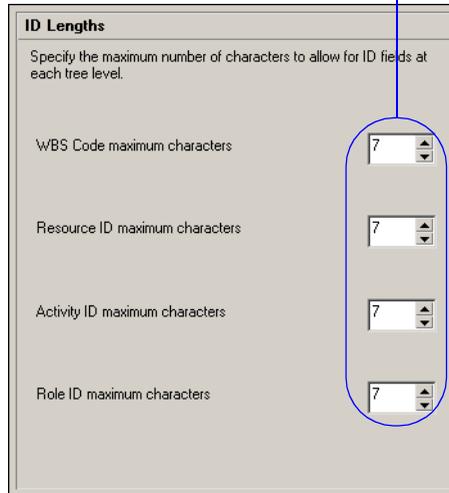
Activity Type
Task Dependent

Password Policy
Primavera requires a minimum length of 8 characters and at least one number and one letter in a user's password.

Enable password policy

ID 文字数 「ID 文字数」タブを使うと、ID やコードの最大文字数を指定できます。

このような ID やコードの最大文字数は、1 が最低、20 が最高となります。



ID Lengths

Specify the maximum number of characters to allow for ID fields at each tree level.

WBS Code maximum characters	7
Resource ID maximum characters	7
Activity ID maximum characters	7
Role ID maximum characters	7



ID またはコードの最大文字数を変更すると、新規 ID/ コードを追加したり既存の ID/ コードを編集したりする際に新しい文字数が適用されます。

データ 限度 「データ 限度」 タブを使用すると、階層構造レベルの最大数を指定できます。

Tree Type	Maximum Levels
WBS tree maximum levels	10
OBS tree maximum levels	10
Resource tree maximum levels	10
Role tree maximum levels	20
Activity Code tree maximum levels	10
Resource Code tree maximum levels	20
Methodology Code tree maximum levels	20

このようなタイプのコードにおける最大階層レベル数は、1 が最低、25 が最高となります。

このような構造内の最大階層レベル数は、1 が最低、25 が最高となります。



最大階層レベル数の設定を変更すると、新規ノードを追加したり既存ノードを編集したりした場合にのみ新規設定が適用されます。

期間 「期間」タブを使用すると、稼働日、稼働週、稼働月、および稼働年あたりの既定時間数を定義できます。このモジュールでは、選択した時間の単位や期間表示形式を表示する際にこのような値を変換ファクタとして使用します。分、時間、日、週、月、年を表示するために略称を指定することもできます。

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 168.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 744.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 24.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 8784.0.

Hours per Time Period

Specify the number of work hours for each time period.

Hrs/Day	Hrs/Week	Hrs/Month	Hrs/Year
8.0	40.0	172.0	2000.0

Time Period Abbreviations

Specify the abbreviation for each time period.

Minutes n	Hours h	Days d
Weeks w	Months m	Years y

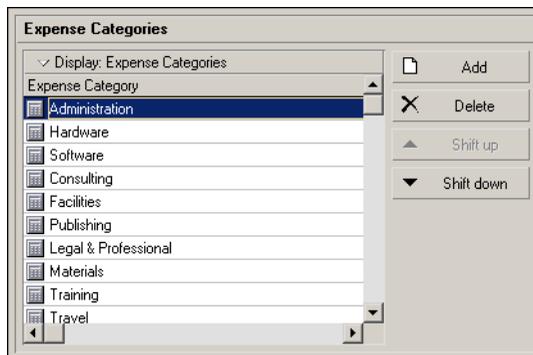
このモジュールでは、選択した時間の単位や期間表示形式を表示する際は、このような略語を使用します。新しい1文字の略語を入力できます。

標準的な分類と値の定義

「管理分類」ダイアログボックスを使うと、あらゆるメソドロジに適用できる標準的な分類と値を定義できます。「管理」、「管理分類」を選択します。

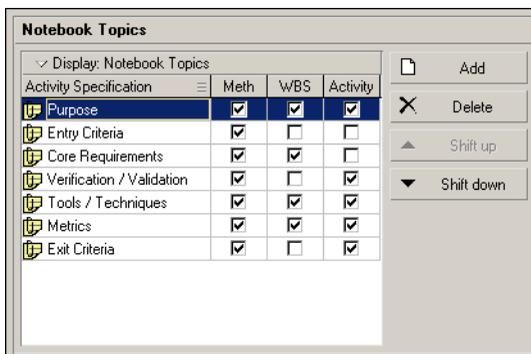
経費の詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

経費分類 「経費分類」タブを使用すると、経費のカテゴリを作成、編集、削除できます。経費分類は、メソドロジ経費を分類して標準化したり、経費情報を整理、維持するために利用できます。経費分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、変更内容を当該経費アイテムが割り当てられているアクティビティすべてに適用します。



ノートトピックの詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

ノートトピック 「ノートトピック」タブを使用すると、ノートトピックを作成、編集、削除できます。ノートは通常、アクティビティを実施するための指示や説明で構成されています。メソドロジや WBS ノードに関する注記を分類するためにノートを割り当てることもできます。適切な「メソドロジ」や「WBS」、「アクティビティ」チェックボックスにマークを入れると、「ノートトピック」タブで選択したノートトピックを有効にできます。トピックには、目的や入力基準、ツールとテクニック、終了基準などがあります。ノートトピックを変更するには、当該トピックをダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、ノートトピックが割り当てられるメソドロジや WBS ノード、アクティビティすべてに変更内容を適用します。

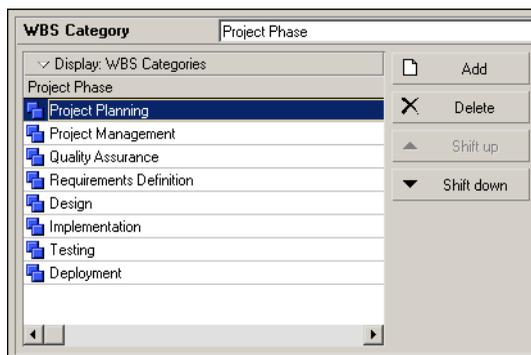


WBS の詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

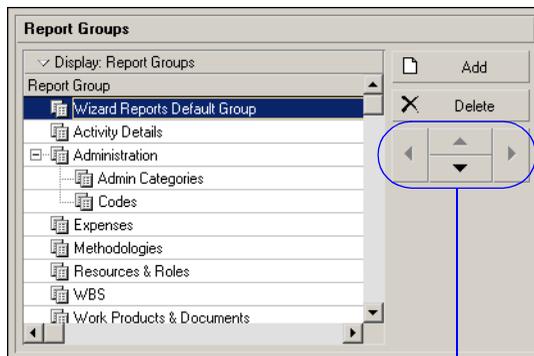
WBS カスタム分類 「管理分類」ダイアログボックスの3番目のタブを利用すると、カスタム WBS 分類と分類値を定義できます。分類名を変更するには、右上にあるフィールドをクリックして新しい名前を入力してください。この分類を使うと、開示中のメソドロジで WBS 情報を整理、フィルタ、報告できます。分類値を変更するには、当該値をダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、WBS アイテムが割り当てられているメソドロジすべてに変更内容を適用します。



WBS 分類を変更しても、このモジュールは分類の値や値の割当を変更しません。

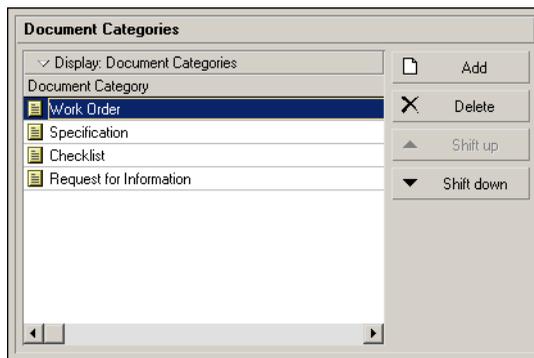


レポートグループ 「レポートグループ」タブを使うと、レポートグループを作成、編集、削除してレポートを整理できます。



左または右向き矢印をクリックすると、
 選択したレポートの分類をインデントまたはアウトデントして、階層
 内のレポートをさらに分類できます。上または下向き矢印をクリッ
 くと、選択したレポートの分類を階層内で上下に移動できます。

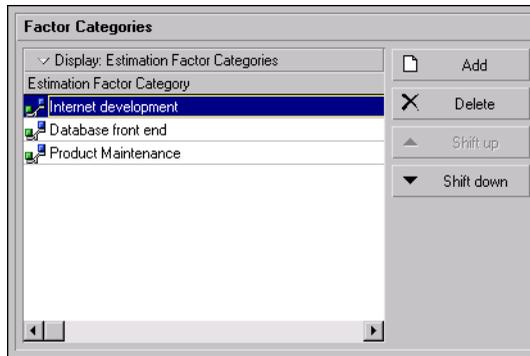
ドキュメント分類 作業成果物は通常、青写真やテスト計画などの
 のアクティビティアウトプットを指し、ドキュメントは基準や
 ガイドラインなどのアイテムを指します。「ドキュメント分類」
 タブを使うと、作業成果物やドキュメントの分類を設定して、
 これを「ドキュメント」ウィンドウの作業成果物やドキュメン
 ト、「ワークブレイクダウンストラクチャ詳細」と「アクティビ
 ティ詳細」の「ドキュメント」タブの **WBS** ノードおよびアク
 ティビティに割り当てられます。ドキュメントの分類を変更す
 するには、当該カテゴリをダブルクリックして新しい名前を入力
 してください。このモジュールでは、ドキュメントの分類が割
 り当てられる **WBS** ノードやアクティビティすべてに変更内容を
 適用します。



見積データ作成の詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

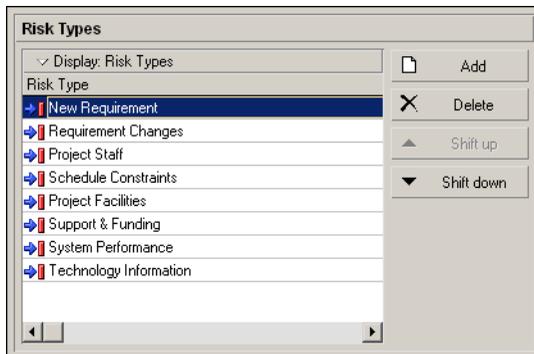
ファクタ分類 「ファクタ分類」タブを使うと、メソドロジで見積ファクタを整理するための分類を設定できます。このようなファクタを使って、Project Management モジュールでボトムアップ見積を実行するためのプロジェクトの規模や複雑度の値が Project Architect で計算されます。

見積ファクタの分類は、ファクタのセットを各メソドロジに割り当てて、これを特定の分野またはフェーズ（インターネットの開発や製品の維持など）に応じて分類する際に有用です。見積ファクタの分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。Methodology Management モジュールでは、見積ファクタの分類が割り当てられているメソドロジすべてに変更内容を適用します。

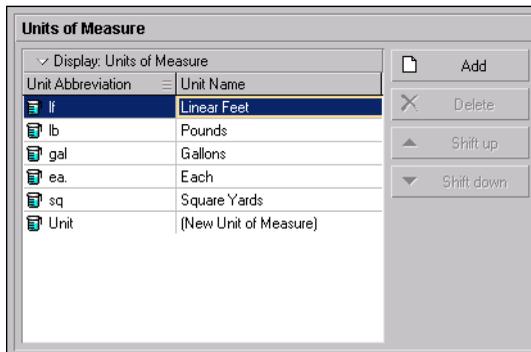


見積ファクタの分類を設定すると、ひとつまたは複数の見積ファクタを「見積ファクタ」ダイアログボックスで分類に割り当てられます（「定義」、「見積ファクタ」を選択）。

リスクタイプ 「リスクタイプ」を使うと、特定の WBS ノードに
 関係する潜在的なリスクを識別、分類して優先順位をつけられ
 ます。リスクのタイプを変更するには、当該タイプをダブルク
 リックして新しい名前を入力してください。このモジュールで
 は、関連のあるリスクのタイプが割り当てられている WBS ノー
 ドすべてに変更内容を適用します。



計量単位 「計量単位」タブを使うと、材料リソースに割り当て
 られる計量単位のラベルを設定できます。計量単位のラベルを
 変更するには、当該ラベルをダブルクリックして新しい名前を
 入力してください。変更内容は、あらゆる計量単位の割当に適
 用されます。



通貨の定義

データベースのあらゆるメソッドでコストデータを保存するための通貨単位（**基準通貨**）と、ウィンドウやダイアログボックスでコストデータを表示するための通貨単位（**表示通貨**）を指定できます。



管理スーパーユーザ権限のあるユーザのみが基準通貨を変更したり、追加表示通貨のタイプを定義したりできます。

基準通貨の為替レートは常に 1.0 です。コストデータを表示するために基準通貨以外の通貨を選択すると、コストおよび価格フィールドに表示される値を計算するために、基準通貨の値に表示通貨用の現在の為替レートが乗算されます。

例えば、基準通貨が米ドルで表示通貨がユーロ、ユーロの為替レートが 0.75 だとします。データベースに保管されている 10 ドルの値は、ウィンドウやダイアログボックスのコストおよび価格フィールドでは 7.5 ユーロと表示されます。同様に、10 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$13.30 と保存されます。



コストおよび価格フィールドに値を入力すると、常に表示通貨で表示されます。

通貨がコストデータの保存に使われるベースであることを示します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rate
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	ARS	Argentine Peso	\$	3.569740
<input type="checkbox"/>	AUST	Australian Dollar	A\$	1.796400
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	U.K.£	British Sterling Pound	£	0.685097
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538180
<input type="checkbox"/>	CNY	Chinese Yuan	Y	8.276900

Field	Value
Currency ID	USD
Currency name	Dollar
Currency symbol	\$
Exchange rate	1.000000

「通貨」ダイアログボックスを使うと、基準通貨と表示通貨を設定できます。



モジュールを古いバージョンから更新している場合は、メソッドログを追加、変更する前に新しいバージョンで基準通貨を設定する必要があります。

基準通貨の定義 基準通貨は既定で米ドルになっています。異なる通貨を基準通貨として定義するには、「管理」、「通貨」を選択します。基準通貨を選択してから、「全般」タブで通貨の ID、名称、記号を入力します。基準通貨の為替レートは常に 1.0 です。「表示」タブをクリックすると、通貨の表示方法をさらに詳しく定義できます。

通貨の表示では、整数と小数を分離し
ず (500.5 など)。

通貨表示の桁を分けます
(300,000 または
300,000 など)。

小数点以下に表示される
数字の数を示します。
例えば、「なし」(70)、
「1」(70.1)、「2」
(70.14) などです。



古い基準通貨でコストを表示したい場合は、これを利用可能な通貨の一覧に追加する必要があります。

表示通貨の追加 「管理」、「通貨」を選択します。「追加」をクリックします。通貨の ID、名称、記号、為替レートを指定して、通貨を表示する方法を示します。

「編集」、「ユーザ設定」を選択し、「通貨」タブをクリックして、コストの表示に使用する通貨を選択します。

通貨のタイプを明確に定義する ID を入力します。

通貨を識別するために一般的に使用されている記号を入力します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rate
<input checked="" type="checkbox"/>	U.S.	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollars	\$	0.656500

General | Appearance

Currency ID: CAD
Currency name: Canadian Dollars
Currency symbol: \$
Exchange rate: 0.656500

当該通貨の現在の世界的な為替レートを入力します。

Timesheets の実装

本章の内容 :

[実装の概要](#)

[Timesheet 設定の実行](#)

[Timesheets 使用のためのリソースの設定](#)

[Timesheets ユーザのために Timesheets を作成](#)

[プロジェクト固有の Timesheets 設定](#)

[間接コードの使用](#)

[Timesheets の Web ブラウザ版と Java Web Start 版の実行](#)

[Timesheet Approval へのアクセス設定](#)

プロジェクトチームメンバは、Project Management モジュールで自分のアクティビティを更新するため、Timesheets を提出するのに、Timesheets モジュールを使用することができます。本章では、Timesheets を使用するための Project Management モジュールの設定方法、設定後の Timesheets の実行方法、タイムシート承認マネージャのための Timesheet Approval アプリケーションへのアクセス設定方法について説明します。

実装の概要

Timesheets によって、プロジェクトチームメンバはどこからでも Web を使ってタイムシートとアクティビティ状況を直接組織のデータベースに通知することができるようになります。これにより、プロジェクトマネージャは常に最新のプロジェクト情報をもって作業することが可能となり、リソース計画や問題の調整が容易になります。

Timesheets は、Timesheets クライアント、組織のプロジェクトを含むデータベースサーバ、Timesheets クライアントとデータベースを結ぶ Group Server から構成されています。さらに、P6 Web Access アプリケーションサーバは Timesheet Approval アプリケーションをホストします。タイムシート承認マネージャはこれを利用してリソースタイムシートをレビューします。



Timesheets のインストールと設定は、Web ブラウザ版と Java Web Start 版で若干異なっています。いずれのバージョンでも Timesheets の設定についての完全な詳細は、99 ページの「[Timesheets 用の Group Server の調整](#)」を参照してください。



Primavera Timesheets の完全な機能に対応するには、サポートされているブラウザを使う必要があります。サポートされている設定の詳細については、18 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。

Timesheets の実装には、先ず以下のステップが完了していることが必要です。

- 27 ページの「[データベースのインストールおよび設定](#)」で説明されている、Project Management データベースのインストール。
- 利用できる Web サーバがない場合はこれをインストールします。
- 99 ページの「[Timesheets 用の Group Server の調整](#)」で説明されている、Group Server のインストール。
- 101 ページの「[Group Server および Timesheets Web サイトのインストール](#)」で説明されている、Web サーバに Timesheets の Jave ファイルのインストール。
- Timesheets Java Web Start 版を使用する場合は、120 ページの「[Timesheets のための Java Web Start の設定](#)」で説明の Java Web Start の設定を行います。

Timesheets ファイルがインストールされたら、Project Management モジュールを使って、以下のステップを実行します。これについては、本章でさらに詳細に説明します。

- ユーザの Timesheets の使い方に関する設定。
- Timesheets を使うためのリソースの設定。
- Timesheets の作成。
- Timesheets のプロジェクト固有の設定。
- 非プロジェクト作業時間を記録するための間接コードの作成。

最後に、組織が Timesheet Approval アプリケーションを使用する計画がある場合は説明に従って以下を実行します。

Timesheet Approval アプリケーションは適切に設定すると、P6 Web Access や Project Management モジュールからアクセスできるほか、スタンドアローン型のアプリケーションとして使用できます。P6 Web Access は Timesheet Approval アプリケーションをホストしているため、ユーザがアプリケーションにアクセスする方法に関わらず、P6 Web Access をインストールする必要があります。

- 133 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」の説明に従い、P6 Web Access をインストール、設定します。
- 本章で説明されているように [管理設定] でタイムシート承認要件を指定します。
- 299 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」の説明に従い、製品ライセンスと必要なセキュリティ権限をタイムシート承認マネージャに割り当てます。
- 426 ページの「[Timesheet Approval へのアクセス設定](#)」の説明に従い、Timesheet Approval へのアクセスを設定します。

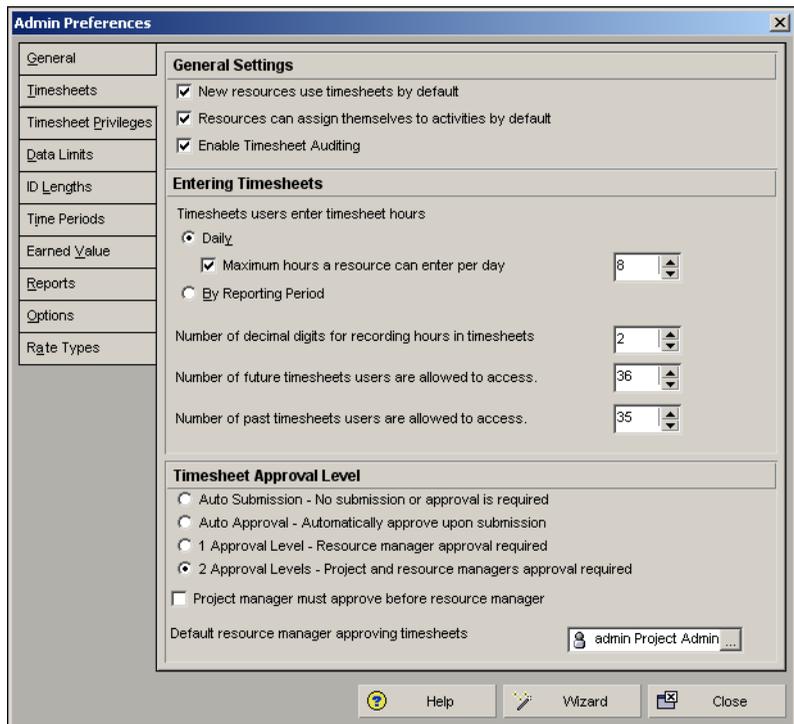


リソース割り当てに実績を割り当てる場合（インポートされたプロジェクトに対する場合でもプロジェクトの途中から Timesheets を使い始めた場合でも）、すべての既存の実績値は、Timesheet Actualizer を実行しない限り、最初に Timesheets を使い始めたときに失われます。詳細については、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Tools ¥Actualizer フォルダ内の「[readme](#)」を参照してください。

Timesheet 設定の実行

Project Management モジュールの [管理設定] ダイアログボックスの [タイムシート] と [タイムシート権限] タブを使って、タイムシートユーザが Timesheets を使用し、Project Management モジュールのプロジェクトデータを更新する方法についての設定を行います。ユーザが作業時間を報告する頻度、ユーザが見ることができるアクティビティと Timesheets の内容、プロジェクトデータが更新される前の Timesheets の承認方法、ユーザが時間を記録するのに与えられる権限について、決めることができます。

Timesheets 設定の実行 Project Management モジュールで、[管理]、[管理設定] を選択します。[タイムシート] タブをクリックします。



全般設定セクションには以下のオプションがあります。

- **新規リソースは既定でタイムシートを使用** 特に指定しない限り、新規リソースは Timesheets を使用することを要求する場合にマークします。

- **リソースは既定で自身をアクティビティに割当可能** すべての新規に作成したプロジェクトがリソースに自身でアクティビティの割り当てを行うことを許容する場合にマークします。この設定の変更は、既存のプロジェクトには影響しません。新しい設定は、新規プロジェクトが作成されたときのみ適用されます。各プロジェクトでは、「プロジェクト詳細リソース」タブでこの設定を変更できます。
- **タイムシートの監査を有効にする** タイムシートの提出、承認、却下、レビュー担当者、関連のある日付の履歴を保存することができます。このオプションを選んだ場合は、履歴データを表示するために「タイムシートの履歴」という部分をタイムシートレポートに追加できます。

タイムシートの入力セクションには、以下のオプションがあります。

- **Timesheets ユーザのタイムシート入力時間 - 日次** すべてのリソースに、職務ごとのアクティビティ時間を毎日報告することを要求する場合に選択します。
- **リソースが入力可能な 1 日あたりの最大時間** あらゆるリソースに毎日時間を報告するよう求める場合は、割り当てられたアクティビティすべてについてリソースが毎日入力できる最大時間数をオプションで指定できます (最低 0.5 時間、最高 24 時間)。例えば、この値を 12 に設定すると、あらゆるアクティビティについてリソースは毎日合計 12 時間以上を報告することはできません。
- **Timesheets ユーザのタイムシート入力時間 - レポート期間毎** すべてのリソースにタイムシート報告期間内の日数にかかわらず割り当てられたアクティビティごとの合計時間を報告させる場合に選択します。
- **タイムシート記録時間の小数桁数** リソースが Timesheets に時間を入力するのに使うことができる小数点の桁数。タイプするか矢印をクリックして、入力数字を選びます。
- **Timesheets ユーザがアクセスすることができる未来のタイムシート数** リソースが表示することができる現在のタイムシート期間後の将来のタイムシート数。タイプするか矢印をクリックして、入力数字を選びます。
- **Timesheets ユーザがアクセスすることができる過去のタイムシート数** リソースが表示することができる現在のタイムシート期間前の過去のタイムシート数。タイプするか矢印をクリックして、入力数字を選びます。



[リソースが入力可能な1日あたりの最大時間数]と[タイムシート記録時間の小数点桁数]フィールドで入力した小数点以下の桁数に相違がある場合は、タイムシートフィールドでユーザの入力した値が四捨五入され表示されます。四捨五入は表示目的のみであり、最初に入力された値がデータベースに保存されます。例えば、1日あたりの最大時間数を10.5と指定したものの、タイムシートで記録できる時間の小数点以下の桁数を0（ゼロ）にした場合、ユーザがタイムシートフィールドに10.5と入力してもタイムシートではこの値が11に切り上げられます。データベースには10.5という値が保存されるため、リソースは1日あたりの最大時間数の設定を超えることはできません。

Timesheetsの承認に関する情報は、*Project Management* リファレンスマニュアルの「更新、スケジューリング、平準化」の章を参照してください。

タイムシートの承認レベルセクションには、以下のオプションがあります。

- **自動提出** これを選択すると、リソースのタイムシートが提出または承認される必要がないことを示します。実績を記入すると、Timesheetのデータは自動的にデータベースで更新されます。
- **自動承認** これを選択すると、リソースのタイムシートが管理者の承認を必要としないことを示します。タイムシートは、提出時に自動的に承認されます。
- **承認レベル1** これを選択すると、リソースのタイムシートは、リソース/コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、承認担当マネージャが当該ステータスを変更するまでは「提出済」のままになります。以前はプロジェクトマネージャとリソース/コストマネージャ双方の承認を必要としていた場合にこのオプションを選択すると、1レベルの承認を受けた現行タイムシートすべてのステータスが「承認」に変わります。
- **承認レベル2** これを選択すると、リソースのタイムシートは、プロジェクトマネージャとリソース/コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、両マネージャがタイムシートを承認するまでは「提出済」のままになります。
- **プロジェクトマネージャがリソースマネージャの前に承認** 承認レベル2を選択した場合、これをマークするとプロジェクトマネージャがタイムシートの承認をリソース/コストマネージャの前に行う必要があることを示します。

- **タイムシート承認の既定リソースマネージャ** 特に変更しない限り、リソースのタイムシートを承認するマネージャ名。「ブラウズ」ボタンをクリックして新規マネージャを選択します。



Timesheets ユーザがタイムシートの提出を開始した後に承認レベルを低く設定すると、すべての現在提出済みのタイムシートは、変更を反映して改変されます。例えば、設定を承認レベル 2 から自動提出に変更すると、現在 1 人だけのマネージャに承認されたタイムシートを含むすべてのタイムシートは、提出・承認が不要と変更されます。そして Project Management データベースは実績が入力されると更新されます。

Timesheets ユーザ権限の設定 Project Management モジュールで、[管理]、[管理設定] を選択します。「タイムシート権限」タブをクリックします。

Timesheets ユーザがアクティビティの開始前に下見ができる既定の日数。

Timesheets ユーザがアクティビティの終了後に見直すことができる既定の日数。

The screenshot shows the 'Admin Preferences' dialog box with the 'Timesheets' tab selected. The 'Default time window to access activities' section has two spinners: 'Not-started activities (days)' and 'Completed activities (days)', both set to 60. The 'Privileges for logging hours on timesheets' section has the following options checked: 'Log hours on future timesheets', 'Log hours on completed', 'Log hours on activities before the activity start date', and 'Log hours on activities after the activity finish date'. There are also radio buttons for 'Activities and Assignments' and 'Assignments only', and an unchecked checkbox for 'Log hours on not-started activities'.

Timesheets セクションに時間を記録する権限には、以下のオプションがあります。

- **タイムシートに未来の実績時間を記録** これをマークすると、現在のタイムシート期間以降の日付で時間を報告することができることを示します（例えば、事前に休暇時間を入力など）。
- **未開始アクティビティに実績時間を記録** これをマークすると、ユーザは開始されたとマークされていないアクティビティに時間を報告することができることを示します。
- **以下の完了した時間を記録 – アクティビティと割当** これをマークすると、ユーザは終了したとマークされているアクティビティや任務に時間を報告することができることを示します。
- **以下の完了した時間を記録 – 割当のみ** これをマークすると、ユーザは終了とマークされている任務のみに時間を報告することができることを示します。
- **開始日前のアクティビティに時間を記録** これをマークするとユーザはアクティビティの開始日以前の日付で時間を報告することができることを示します。
- **終了日以降にアクティビティに時間を記録** これをマークするとユーザはアクティビティの終了日以降の日付で時間を報告することができることを示します。

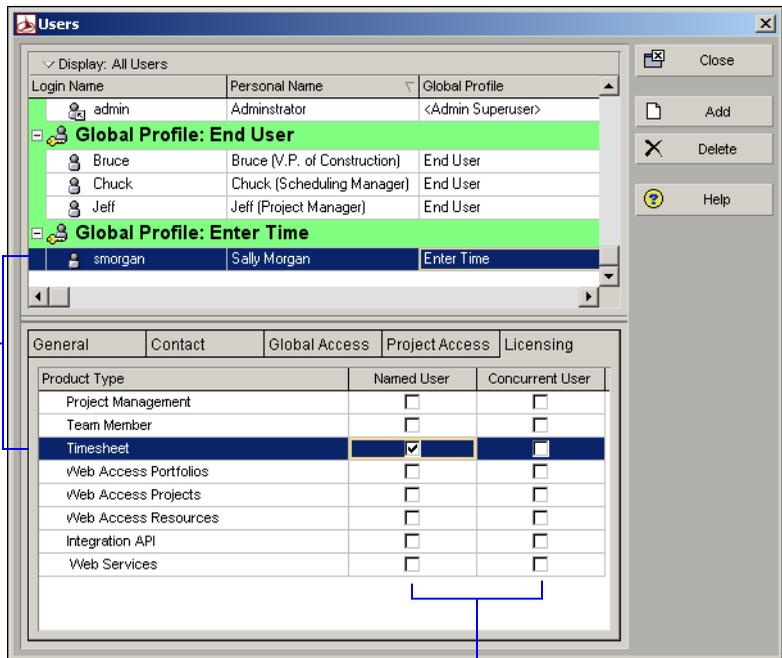
Timesheets 使用のためのリソースの設定

プロジェクトリソースが Timesheets を使用することができるようにするには、リソースにユーザログインアカウントを割り当て、リソースが Timesheets を使用するように設定しなければなりません。

Timesheets 用のユーザログインの作成 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。[追加] をクリックします。一意のログイン名をタイプし、[ライセンス] タブをクリックします。チームメンバまたは Timesheets の次にある [指名ユーザ] または [同時ユーザ] チェックボックスをマークします。

ライセンスに関連した機能のさらなる情報については、333 ページの「製品ライセンスの割当」を参照してください。

Timesheet ライセンスは、ユーザに Timesheets アプリケーションへのアクセスを提供し、アポイントメントのインポート機能のみの P6 Web Access ログインを許容します（この機能がユーザに設定されている場合）。Team Member ライセンスは、Timesheets アプリケーションへのアクセスを提供し、ユーザに P6 Web Access における、ダッシュボードポートレットの一部、プロジェクトワークスペース（ユーザがアクセス権をもつプロジェクト）、ユーザに割り当てられているアクティビティ、その他、にアクセスすることを可能にします。ユーザにチームメンバと Timesheets ライセンスの両方を付与することはできません。どちらを割り当てるかを選ぶ必要があります。



ユーザに Timesheets へのログイン許可が与えられていることを確認します。

指名ユーザには、そのログイン名に固有のライセンスがあり、特定のアプリケーションとデータベースへアクセスが保証されています。同時ユーザは、特定の同時ライセンス数のユーザ同士でアクセスを共有します。同時ユーザは、ユーザのログイン時に同時ライセンスが有効であれば、アプリケーションとデータベースにアクセスすることができます。



ユーザが Timesheets にアクセスできるようにするには、ユーザログインにリソースを割り当てる必要があります。リソースを [ユーザ] ダイアログボックスのログイン名に割り当てるには、[全般] タブを選択します。[Timesheets のリソース ID / リソース名] フィールドでブラウズボタンをクリックし、リソースを選びます。また、417 ページの「Timesheets を使うためのリソースの設定。」で説明されているように [リソース] ウィンドウでユーザをリソースに関連付けることもできます。

Timesheets を使うためのリソースの設定。 Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[ユーザ] を選択します。リソース詳細を表示し、[タイムシート] タブをクリックします。

1 リソースを選択します。

2 [ブラウズ] ボタンをクリックし、ユーザログインをリソースに割り当てます。

3 マークして、リソースが進捗報告のために Timesheets を使えるようにします。

4 クリックして、承認マネージャを選択します。

リソースは、1つのユーザログインだけに関連付けられることができます。



1 新規リソースの作成時に、[管理設定] ダイアログボックスの [タイムシート] タブで [新規リソースは既定でタイムシートを使用] チェックボックスをマークした場合は、[タイムシート使用] チェックボックスは自動的にマークされます。しかし、ユーザログインをリソースに割り当て、ユーザが Timesheets にログインする許可を付与しなければなりません。



タイムシート承認マネージャとして指定されているユーザは、必要なライセンスが割り当てられている場合でも自動的に Timesheets へのアクセスを授与されません。タイムシート承認マネージャが Timesheets にアクセスできるようにするには、Timesheets へのアクセスが必要な他のリソース同様、これをタイムシートリソースとして設定する必要があります。タイムシート承認マネージャをタイムシートリソースとして設定すると、承認マネージャは Timesheets にログインして報告リソースのタイムシートを編集することができます。

超過勤務ポリシーの設定 ユーザが超過時間をタイムシートに入力することができるようにします。Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[リソース]を選択し、[詳細]タブをクリックします。[残業許可]チェックボックスをマークします。リソースの標準価格を乗じてリソースの超過勤務価格を出すための超過勤務ファクタを入力します（標準価格 x 超過勤務ファクタ = 超過勤務価格）。



時間フィールドでリソースの超過時間はスラッシュで示されます。例えば、リソースが通常勤務 8 時間の日に 10 時間労働したとすると、ユーザはその日は 8/2 とタイプします。

Timesheets ユーザのために Timesheets を作成

[タイムシート期間管理] ダイアログボックスを使って Timesheets ユーザのためにタイムシートを作成します。また、以前のタイムシートのリストを見ることもできます。そしてどのタイムシートが現在、Primavera Timesheets ユーザに使われているのかを特定できます。Project Management モジュールで Timesheets を作成するまで、ユーザはタイムシートを見ることはできません。

タイムシートバッチの作成 Project Management モジュールで、[管理]、[タイムシート期間] を選択します。

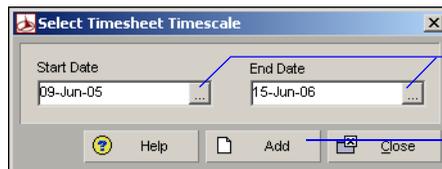
このタイムシートバッチの開始日と終了日を設定します。

各タイムシートが管理する期間を選択します。

クリックして、これらの設定に基づいたタイムシートのバッチを生成します。

別のタイムシートセットを作成するには、バッチの開始日と終了日をリセットし、適切なタイムシート期間を選択して、[バッチの作成] をクリックします。

単独のタイムシートの作成 Project Management モジュールで、
[管理]、[タイムシート期間]を選択します。「追加」をクリック
します。



クリックして、このタイム
シートの開始日と終了日を設
定します。
クリックしてタイムシート
を生成します。



既存のタイムシート日と開始日・終了日が重複するタイム
シートを新規に作成することはできません。

プロジェクト固有の Timesheets 設定

組織の各プロジェクトで、リソースがそのアクティビティを報告する方法を管理することができます。

プロジェクト固有の Timesheets 設定 Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[プロジェクト]を選択します。プロジェクトを選択し、[リソース]タブをクリックします。

マークすると、リソースが休止中プロジェクトのアクティビティを参照したり、アクティビティや任務の完了を報告したり、次に開始すべきアクティビティの選択を行うことを可能にします。

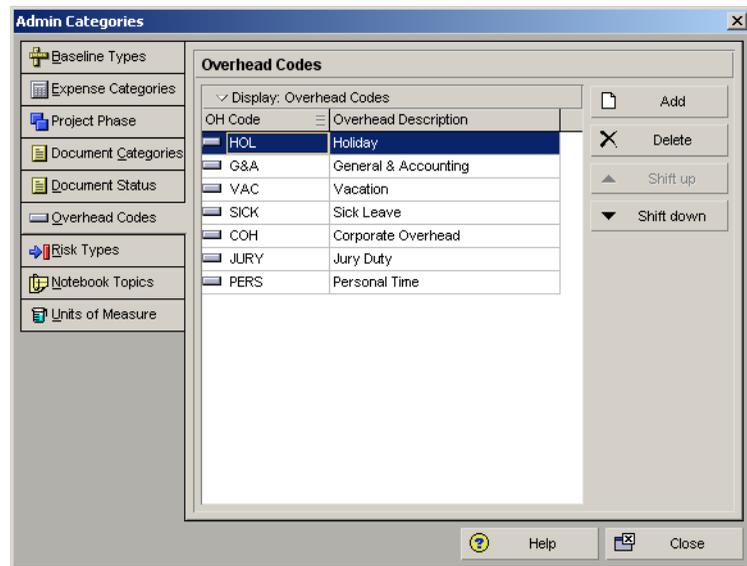
Timesheets	Assignment Defaults
<input type="checkbox"/> Resource can view activities from an inactive project	Specify the default Rate Type for new assignments
<input checked="" type="checkbox"/> Resources can assign themselves to activities	Price / Unit <input type="text"/>
<input type="checkbox"/> Primary resources can mark activities as completed	<input checked="" type="checkbox"/> Drive activity dates by default
<input type="checkbox"/> Resources can mark assignments as completed	Resource Assignments
<input checked="" type="radio"/> Resources can edit activity assignment percent complete	<input checked="" type="checkbox"/> Resources can be assigned to the same activity more than once
<input type="radio"/> Resources can edit activity assignment remaining units	

リソースが、残工程の割合や時間を入力することでアクティビティの進捗を示すことを可能にするかどうかを選択します。

間接コードの使用

間接コードによって、ユーザはプロジェクトアクティビティに関連しない時間を記録することができます。例えば、ユーザは、休暇、休日時間、病欠時間または、一般管理作業を間接アクティビティとして入力することができます。

間接コードの追加 既存の間接コードが適切でない場合は、新しいコードを追加することができます。Project Management モジュールで、[管理]、[管理分類] を選択し、[間接コード] タブをクリックします。[追加] をクリックします。固有のコードと短い説明をタイプします。



タイムシートの承認に必要な承認レベルを2つと指定すると、間接アクティビティのみを含むタイムシートはプロジェクトマネージャの承認をバイパスして、リソース/コストマネージャに直接送付されます。通常のアクティビティと間接アクティビティの双方を含むタイムシートについては、プロジェクトマネージャは間接アクティビティを表示できますが、承認はできません。

Timesheets の Web ブラウザ版と Java Web Start 版の実行

(99 ページの「[Timesheets 用の Group Server の調整](#)」で説明のように) Group Server/ Timesheets のインストールと設定が終了し、本章で説明した Timesheets の実装が完了すると、ユーザは本セクションの手順に従って、Web ブラウザ版または、Java Web Start 版でアクセスすることができますようになります。



Timesheets の Java Web Start 版ユーザは、最初に Timesheets にアクセスするときだけ、これを行う必要があります。これらのステップを終了すると、ユーザは [スタート]、[プログラム]、[Primavera Timesheets]、[Primavera Timesheets] を選択することで、Timesheets Java Web Start 版にアクセスすることができます。

Timesheets Web ブラウザ版のユーザは、常にステップ 1 で指定した URL を使って Timesheets にアクセスする必要があります。

Timesheets の実行

- 1 Timesheets 版をサーバからロードするには、Timesheets 起動ページがある URL にアクセスします (インストール時に指定したサーバ)。

- **Timesheets Web ブラウザ版**では、以下を入力します。

<Web server>/GroupServer/en/Index.html。ここで /en は言語サブフォルダです。

例えば、`http://10.12.14.123/Groupserver/en/index.html` です。

- **Timesheets Java Web Start 版**では、以下を入力します。

<Web server>/GroupServer/App/index.html。

例えば、`http://10.12.14.123/Groupserver/App/index.html` です。



Web サーバが既定のポートを使用していない場合は、IP アドレスのあとにセミコロン (:) で分けてポート番号を入力する必要があります。

2 Timesheets Web ブラウザ版では、以下を行います。

[Timesheets 実行] をクリックします。プロンプトで促された場合は、[はい] をクリックして Primavera Systems から Java ファイルをインストールします。設定プログラムが、必要な Java Runtime Environment (JRE) を検索します。必要な版がマシンに見つからない場合は、それをインストールするセットアッププロセスが自動的に起動されます。[はい] をクリックして必要な JRE をインストールして、ライセンス同意書に承諾します。



Java ファイルのダウンロードを指示されるのは、
[Timesheets の実行] リンクを初めてクリックしたときだけです。

Timesheets Java Web Start 版では、

[Launch Primavera Timesheets Application] をクリックします。現在の JRE バージョンによって以下のいずれかが起動されます。

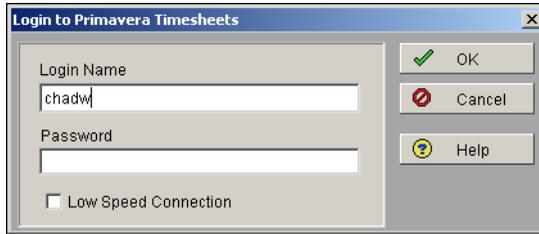
- **JRE がインストールされていない場合**、必要な JRE 版をダウンロードするよう指示されます。表示のリンクをクリックした、JRE をダウンロードします。JRE のインストールが完了したら、Java Web Start は Timesheets を起動します。
- **必要な JRE 版が存在していれば**、Java Web Start は既存の JRE を使用します。
- **必要な JRE 版より以前の版数が存在している場合は**、Java Web Start は自動的に必要な JRE をダウンロード、インストールして、Timesheets を起動します。Java Web Start はインストール完了後もクライアントマシンのブラウザ用既定 JRE 版数を変更しません。既定の版数は、Web ブラウザで [ツール]、[インターネットオプション] を選択して変更することができます。[詳細設定] タブの Java (Sun) セクションで、既定の JRE を選択します。



JRE のダウンロードには、ネットワーク速度によって多少
時間がかかります。

- 3 プロンプトで要求された場合は、常に付与をクリックしてアプレットを実行します。
- 4 ログイン名とパスワードをタイプします。

Java Web Start 版では、このダイアログには Timesheets の言語を選択できるドロップダウンメニューが含まれます。Web ブラウザ版では、言語はステップ 1 で入力した URL によって決まります。



The dialog box titled "Login to Primavera Timesheets" contains the following elements:

- Login Name:** A text input field containing "chadw".
- Password:** A text input field.
- Low Speed Connection:** A checkbox that is currently unchecked.
- Buttons:** "OK" (with a green checkmark icon), "Cancel" (with a red X icon), and "Help" (with a question mark icon).

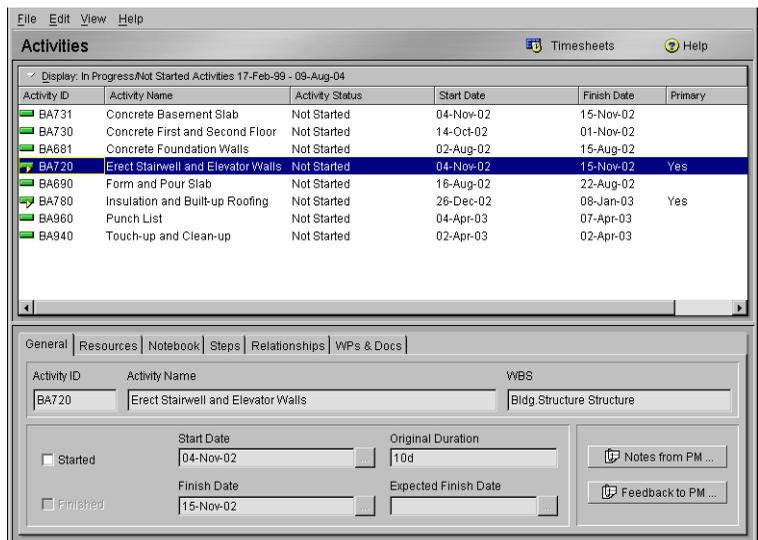


Timesheets がシングルサインオン認証モードで実行されている場合は、前のダイアログボックスは現れません。その代わりに、ログイン証書をポリシーサーバで検証することが要求されます。

アクティビティがアクティビティ画面に表示されます。



Timesheets へのログオンに、プロジェクト管理者が Timesheets ユーザを Project Management モジュールで設定する必要があります。407 ページの「Timesheets の実装」を参照してください。



The screenshot shows the "Activities" window in Primavera Timesheets. The window title is "Activities" and it includes a menu bar (File, Edit, View, Help) and a toolbar (Timesheets, Help). The main area displays a table of activities with the following data:

Activity ID	Activity Name	Activity Status	Start Date	Finish Date	Primary
BA731	Concrete Basement Slab	Not Started	04-Nov-02	15-Nov-02	
BA730	Concrete First and Second Floor	Not Started	14-Oct-02	01-Nov-02	
BA681	Concrete Foundation Walls	Not Started	02-Aug-02	15-Aug-02	
BA720	Erect Stairwell and Elevator Walls	Not Started	04-Nov-02	15-Nov-02	Yes
BA890	Form and Pour Slab	Not Started	16-Aug-02	22-Aug-02	
BA780	Insulation and Built-up Roofing	Not Started	26-Dec-02	08-Jan-03	Yes
BA960	Punch List	Not Started	04-Apr-03	07-Apr-03	
BA940	Touch-up and Clean-up	Not Started	02-Apr-03	02-Apr-03	

Below the table, there are tabs for "General", "Resources", "Notebook", "Steps", "Relationships", "WPs & Docs". The "General" tab is active and shows details for the selected activity (BA720):

- Activity ID:** BA720
- Activity Name:** Erect Stairwell and Elevator Walls
- WBS:** Bldg.Structure Structure
- Start Date:** 04-Nov-02
- Original Duration:** 10d
- Finish Date:** 15-Nov-02
- Expected Finish Date:** (empty)
- Buttons:** "Notes from PM ..." and "Feedback to PM ..."

Timesheet Approval へのアクセス設定

Timesheet Approval 使用方の詳細については、Timesheet Approval アプリケーションの [ヘルプ] をクリックするか、P6 Web Access または Project Management のヘルプあるいは Project Management リファレンスマニュアルを参照してください。

リソース/コストマネージャやプロジェクトマネージャがリソースタイムシートを承認するよう会社が求めている場合は、Timesheet Approval アプリケーションでタイムシートをレビューできます。適切に設定すると、ライセンスやセキュリティ権限のあるユーザは P6 Web Access または Project Management モジュールから Timesheet Approval にアクセスしたり、これをバーチャルスタンドアローン型アプリケーションとして使用したりできます。



P6.1 よりも以前のバージョンでは、Timesheet Approval は Project Management と P6 Web Access の双方から別個のアプリケーションとして使われていました。P6.1 では、Timesheet Approval のウェブバージョンに P6 Web Access と Project Management モジュール内からアクセスしたり、スタンドアローン型アプリケーションとして使用したりできます。このような拡張のため、Timesheet Approval の新規使用やアップグレードを望む企業はすべて、P6 WEB ACCESS をインストールする必要があります。

予備設定 Timesheet Approval へのアクセスを設定する前に以下を完了してください。

- 133 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」の説明に従い、サポートされているアプリケーションサーバ上に P6 Web Access をインストールして設定します。
- 333 ページの「[製品ライセンスの割当](#)」の説明に従って、ユーザライセンスを設定します。

P6 Web Access から Timesheet Approval にアクセスしたり、これをスタンドアローン型アプリケーションとして使用したりするには、以下のライセンスのうち最低ひとつをユーザに割り当てる必要があります：Project Management、Team Member、Web Access Portfolios、Web Access Projects、または Web Access Resources。Project Management から Timesheet Approval にアクセスするには、Project Management ライセンスをユーザに割り当てる必要があります。

- 299 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」の説明に従い、グローバル設定やプロジェクト設定をタイムシート承認マネージャに割り当てます。この中には、承認マネージャがタイムシートをレビューするために Timesheet Approval へのアクセスで必要とするセキュリティ権限が含まれています。ユーザがリソース/コストマネージャとしてリソースタイムシートを承認できるようにするには、「リソースタイムシート承認」グローバル権限をユーザに割り当てる必要があります。プロジェクトマネージャとしてリソースタイムシートを承認するには、ユーザは「プロジェクトマネージャとしてタイムシートを承認」プロジェクト権限が必要です。

- 410 ページの「**Timesheet 設定の実行**」の説明に従い、必要なタイムシート承認レベルを指定します。

ユーザインターフェイス画面の作成と割当の詳細については、355 ページの「**P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義**」を参照してください。

P6 Web Access から Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なライセンスとセキュリティ権限のある P6 Web Access ユーザは、Timesheet Approval にアクセスできます。グローバルナビゲーションバーのダッシュボードアクションメニューにある [**タイムシート承認**] リンクをクリックしてください。オプションを確実に表示するには、各承認マネージャに割り当てられたユーザインターフェイス画面に [**タイムシート承認**] メニュー項目を含む必要があります。

新しく作成したユーザインターフェイス、およびユーザインターフェイス画面を使用しない企業については、[**タイムシート承認**] アクションメニュー項目が既定で表示されます。ユーザがタイムシート承認にアクセスする権利を持っていない場合、ユーザに割り当てられたユーザインターフェイス画面にリンクを含めてもメニュー項目は表示されません。

P6.1 以降にアップグレードしているユーザの場合、以前のリリースでタイムシートを承認する権限のあったユーザであれば [**タイムシート承認**] アクションメニュー項目が表示されます。

Project Management から Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なライセンスとセキュリティ権限のある Project Management ユーザは、Timesheet Approval にアクセスできます。[**ツール**] > [**時間承認**] を選択してください。ユーザが選択した際に確実に Timesheet Approval が開くようにするには、P6 Web Access URL を指定する必要があります。

- 1 Project Management で [**管理**] > [**管理設定**] を選択してから [**オプション**] タブを選びます。
- 2 [**Web Access Server URL**] フィールドで、P6 Web Access サーバへの URL を以下の形式で入力します :

http://P6_Web_Access_Server_Name:port_number/context_root.

例えば、以下のような状況を想定してください。http://P6WebServer:8080/primaveraweb
- 3 [**閉じる**] をクリックします。



Project Management から Timesheet Approval を開いても、P6 Web Access の他のエリアにはアクセスできません。

スタンドアロン型アプリケーションとしての Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なライセンスとセキュリティ権限のあるユーザであれば誰でもバーチャルスタンドアロン型アプリケーションとしての Timesheet Approval にアクセスできます。タイムシート承認マネージャが確実にスタンドアロン型アプリケーションとしての Timesheet Approval にアクセスできるようにするには、P6 Web Access をインストールして設定し、P6 Web Access サーバ上で Timesheet Approval アプリケーションのロケーションを伝える必要があります。

P6 Web Access のインストールと設定後、以下の手順を実行します。

- 1 以下の形式の Timesheet Approval の URL を含む E-mail をタイムシート承認マネージャに送信します。

`http://P6_Web_Access_Server_Name:port_number/context_root/action/timesheetapproval.jnlp`

例えば、以下のような状況を想定してください。 `http://P6WebServer:8080/primaveraweb/action/timesheetapproval.jnlp`

- 2 リンクをクリックするようユーザに指示します。

Java Web Start と必要な JRE がユーザのマシンにインストールされます (必要な場合)。Primavera にログインするようユーザに指示が出ます。

- 3 ユーザは自分の Primavera ユーザ名とパスワードを入力し、適切なデータベースを選択してから、Timesheet Approval にログインする言語を選ぶよう指示されます。

Timesheet Approval をダウンロードすると、ユーザは Timesheet Approval にログインできます。Windows の [スタート] メニューから [Primavera] > [Primavera Timesheet Approval] を選択してください。

報告期間の定義

本章の内容：

**Project Management モジュールで
報告期間を定義**

Project Management モジュールの報告期間ディクショナリで報告期間の定義をカスタマイズする場合は、本章を読んでください。報告期間を作成すると、報告期間ごとにアクティビティや割当の進捗状況を計画、記録できるほか、期間終了後は過去の期間実績としてこれらの値を保存しておくことができます。さらに、P6 Web Access ユーザは報告期間タイムスケール間隔でアクティビティや割当データを表示できます。場合によってはこれを編集できることもあります。

Project Management モジュールで報告期間を定義

期間パフォーマンスおよび過去実績の編集を始めとする報告期間に関するさらなる情報は *Project Management* リファレンスマニュアルまたはヘルプを参照してください。

P6 Web Access での報告期間タイムスケールの表示の詳細については、**P6 Web Access** のヘルプを参照してください。

Project Management モジュールでは、[報告期間] ダイアログボックスで組織のグローバル報告期間を定義することができます。カスタマイズした報告期間によって、実績工数とコストのより正確な表示とレポートを提供することができます。プロジェクト期間に一律に工数とコストを分散するのではなく、報告期間をカスタマイズすることで、ユーザは実際の工数とコストの発生を表示することができます。ユーザは、報告期間ディクショナリで予め定義した期間で期間パフォーマンスを保存することができます。

P6 Web Access では、定義された報告期間範囲において、サマリプロジェクトデータを報告期間タイムスケール間隔でグラフやスプレッドシートに表示することができます。また、高レベルのリソース割当を報告期間間隔で編集することも可能です。



報告期間ダイアログボックスでデータの追加や編集を行うには、「報告期間の編集」のグローバル権限が必要です。プロジェクトの定義された報告期間に対して過去実績を保存するには、「期間締切」のプロジェクト権限が必要です。期間実績を保存した後、過去の実績データを編集するには、ユーザは「期間実績の編集」のプロジェクト権限をもつ必要があります。

P6 Web Access ユーザ用の報告期間の特記事項 P6 Web Access では、ユーザは多くのタブやページをカスタマイズして、報告期間タイムスケールを表示できます。ただし、Project Management モジュールで報告期間を適切に定義する必要があります。P6 Web Access でユーザが報告期間タイムスケール間隔を表示できるようにするには、報告期間を作成する際に以下のガイドラインに従う必要があります。

- 定義済みのあらゆる報告期間は最低 1 週間（7 日）でなくてはなりません。
- 2 つの報告期間の間には時間的なギャップがあってはなりません。



このような要件に従うと、P6 Web Access ユーザは確実に報告期間タイムスケールを表示できます。P6 Web Access でデータを報告期間タイムスケール間隔で表示するには、さらに報告期間別にプロジェクトを集計する必要があります。報告期間別にプロジェクトを集計するには、[管理]、[管理設定]、[オプション] タブを選択してから [報告期間ごと] オプションを選びます。このオプションに関する情報については、378 ページの「オプション」を参照してください。

報告期間のバッチ作成 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。

バッチを作成したら、[期間名] 列をクリックして、名前を編集します。名前は固有でなければなりません。報告期間を作成すると、既定の名前は「YYYY-MM-DD」になります（「2007 - 04 - 01」など）。報告期間が適切な順序で一覧表示されるよう（[列] ダイアログボックスなど）、デフォルトの名前、または連続した命名規則を使います（「2005 Fiscal Month 1」、「2005 Fiscal Month 2」など）。

バッチ開始日と終了日を入力します。

バッチの各報告期間に対し、タイムスケールと期間終了の曜日を選択します。

ここをクリックして報告期間バッチを生成します。

Period Name	Start Date	End Date
Fiscal Month 1	Jan-01-05	Jan-31-05
Fiscal Month 2	Feb-01-05	Feb-28-05
Fiscal Month 3	Mar-01-05	Mar-31-05
Fiscal Month 4	Apr-01-05	Apr-30-05
Fiscal Month 5	May-01-05	May-31-05
Fiscal Month 6	Jun-01-05	Jun-30-05
Fiscal Month 7	Jul-01-05	Jul-31-05
Fiscal Month 8	Aug-01-05	Aug-31-05
Fiscal Month 9	Sep-01-05	Sep-30-05
Fiscal Month 10	Oct-01-05	Oct-31-05
Fiscal Month 11	Nov-01-05	Nov-30-05
Fiscal Month 12	Dec-01-05	Dec-31-05
FY 2004	Jan-01-06	Jan-28-06

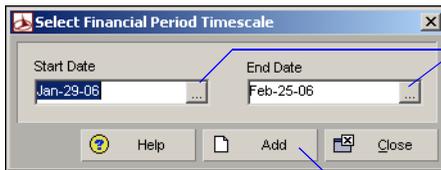


報告期間の開始日と終了日は、既存の報告期間と重複してはいけません。また、作成した後は報告期間の開始日と終了日の変更はできません。



報告期間別（[管理設定]、[オプション] タブで指定）にプロジェクトデータを集計する場合は、データベースのあらゆるプロジェクトデータ（格納中のプロジェクトを含む）が確実に集計されるよう、データベース内のあらゆるプロジェクトの日付を含む報告期間を作成する必要があります。例えば、データベース内の最も古いプロジェクトの開始日が2001年10月1日の場合、報告期間はその日付以前から始まらなくてはなりません。

単一の報告期間の作成 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。「追加」をクリックします。



クリックして報告期間の開始日と終了日を設定します。

クリックして期間をデフォルトに追加します。



すべての期間は真夜中（午前 12 時）に始まり、午後 11 時 59 分に終了します。終了日は少なくとも開始日より 1 日遅くなくてはなりません。このため、作成できる最短の報告期間は 2 日間です。たとえば、開始日が 2007 年 7 月 1 日、終了日が 2007 年 7 月 2 日の報告期間を作成すると、当該期間は 7 月 1 日の午前 12 時に始まり、7 月 2 日の午後 11 時 59 分に終了します。ユーザが P6 Web Access で報告期間タイムスケール間隔を表示できるようにするには、あらゆる報告期間の最低期間が 1 週間（7 日間）でなくてはなりません。

報告期間の削除 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。削除したい報告期間を選択します。「削除」をクリックします。



過去のプロジェクト期間実績が保存されている報告期間を削除することはできません。複数の報告期間を一度に削除しようとする場合、その中のいずれかの期間に過去のプロジェクト期間実績が保存されていればどの報告期間も削除されません。その場合、報告期間を削除するには、過去の期間実績を含むプロジェクトの保管を行ってから削除し、その後報告期間を削除します。



報告期間に過去の期間実績が含まれていない場合、高レベルのリソース割当の計画値を持つ報告期間を削除することができます（P6 Web Access の「リソース計画」ページで入力された内容）。高レベルのリソース割当の存在する報告期間を削除すると、その割当情報も削除されます。

付録

付録 A: Primavera のデータベースを単一の Oracle インスタンスで実行

付録 B : Project Management データベースの変更を元に戻す



この付録では、Project Management および Methodoloby Management モジュールを 1 つの Oracle データベースインスタンスで実行する方法や、Project Management データベースに加えた変更を元に戻す方法について説明します。

付録 A: Primavera のデータベースを単一の Oracle インスタンスで実行

本付録の内容 :

プロセスの概要

MMDB および PMDB を単一の Oracle インスタンスで実行

単一インスタンスデータベースの Primavera 5.0、6.0、または 6.1 から P6 バージョン 6.2 へのアップグレード

単一の Oracle インスタンスで Project Management データベース (PMDB) と Methodology Management (MMDB) を実行したい場合は、この付録を読んでください。すでに PMDB と MMDB を単一の Oracle インスタンスで実行している場合は、アップグレードについてのセクションを読んでください。

プロセスの概要

以下のステップで、PMDB と MMDB データベースを単一の Oracle インスタンスで実行するプロセスを概説します。

- Oracle インスタンスを作成し、27 ページの「[データベースのインストールおよび設定](#)」で説明されているように、PMDB データベースサーバをインストールします。
- 本セクションの説明に従い、MMDB データベースを作成しデータをロードします。
- 227 ページの「[Primavera クライアントのインストールおよび設定](#)」の説明に従い、Primavera クライアントをインストールして、Project Management および／または Methodology Management モジュールをインストールします。
- PMDB のデータベース接続名を設定します。
- MMDB のデータベース接続名を設定します。



同一の Oracle インスタンスで両方のデータベースを実行するのに十分なディスクスペースがあることを確認してください。

このプロセスの最後には、データベースは以下のようになっていなければなりません。

PMDB では、

ユーザ	既定のテーブルスペース
admuser	pmdb_dat1
privuser	pmdb_dat1
pubuser	pmdb_dat1

MMDB では、

ユーザ	既定のテーブルスペース
admuser1	mmdb_dat1
privuser1	mmdb_dat1
pubuser1	mmdb_dat1

MMDB および PMDB を単一の Oracle インスタンスで実行

以下のステップでは、MMDB と PMDB を同じ Oracle インスタンスで実行する方法を説明します。これらのステップは、データベース管理者 (DBA) が行う必要があります。PMDB と MMDB データベースのシェルは、データベース構造の作成とデータのロードについて説明した以下の指示を開始する前に作成しておく必要があります。



ライセンスキーファイルは、ソフトウェアを使用するために必要で、E メールまたは CD で提供されているはずですが。この中には、ユーザの会社名、シリアル番号、購入した製品コンポーネントと版数、許容ユーザ数が含まれます。この手順でライセンスキーファイルを読み込む場合は、事前にライセンスファイルをローカルドライブにコピーしておきます。

データベースの作成

Project Management データベースの作成

- 1 32 ページの「Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行」で説明のように、データベースを作成し、PMDB データベースをロードします。



既存の Project Management データベースがありデータを保持しなければならない場合は、41 ページの「手動データベース構成」の手順でデータベースの設定とインストールをしてはいけません。この手順では、既存データは削除され上書きされます。

- 2 **Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックし、Methodology Management モジュールで再度データベースウィザードを実行します。引き続き以下の指示に従います。

Methodology Management データベースの作成

- 1 **Primavera P6** ダイアログボックスで、
 - **Install a new database** を選択します。
 - サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
 - **Product Key** フィールドで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品コードを入力します。
- 2 **Database Selection** ダイアログボックスで、
 - **Methodology Management database** を選択します。

3 Connection Information ダイアログボックスの

- **DBA ユーザ名**フィールドで、Oracle システムのユーザ名を入力し、データベースにログオンします。例えば、**system** (既定) と入力します。
- **DBA パスワード**フィールドにパスワードを入力し、データベースにログオンします。DBA ユーザ名に **system** を選んだ場合は、**manager** をパスワードとして使ってください。そうでない場合は、入力したユーザ名に対応するパスワードを入力します。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Oracle がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、Oracle が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
- **Database Name (SID)** フィールドに MMDB で使用する Oracle SID を入力します。これは、ユーザまたはその DBA が Oracle クライアントを設定した際に作成された TNSNAMES.ORA ファイルにあります。

4 Oracle テーブルスペースの設定ダイアログボックスで、次へをクリックし、データ、インデックス、LOB テーブルスペースおよび推定テーブルスペースサイズを承諾します。

推定テーブルスペースサイズは、変更することができます。サイズに関するガイドラインについては、24 ページの「[Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

Use existing tablespaces をマークするのは、接続しようとしているデータベースサーバにすでにテーブルスペースがある場合のみです。新規のデータベースサーバの場合、このオプションはマークしないでください。

5 Specify Oracle Tablespace Locations ダイアログボックスで、Oracle テーブルスペース (データ、インデックス、LOB) のデフォルトロケーションを承諾するか、別の場所を指定します。



このステップで **Create** をクリックすると、**Methodology Managements** データベースの初期設定が始まります。この後は、**Previous** をクリックして以前の選択を変更することはできなくなります。ただし、次のステップで **Next** または **Cancel** のいずれかをクリックすることができます。

6 テーブルスペースの作成を完了すると、**Creating Oracle Tablespaces** ダイアログボックスで **Next** をクリックします。

7 Create Oracle Users ダイアログボックスで、Oracle 管理者ユーザ、特権ユーザ、パブリックユーザのデフォルト名を承諾します。既定で、ユーザは `admuser1`、`privuser1`、`pubuser1` になります。

デフォルトのテーブルスペースフィールドのドロップダウンリストから、異なったデフォルトテーブルスペースを選ぶことができます。一時テーブルスペースフィールドでは、本手順の開始以前に作成した一時テーブルスペースを使用します。



一時テーブルスペースは、一時型とします。そうしないとデータベースでエラーが発生します。

8 Configuration Options ダイアログボックスで、

- データベースにサンプルのプロジェクトデータを含めたい場合は、**Load Sample Data** のチェックボックスにマークします。



米ドル (\$) をデータベースの基本通貨として使用したくない場合は、以下のステップに従って基本通貨を選択してください。プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、367 ページの「**Project Management**」での**管理設定と分類の定義**を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。Primavera の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、Primavera のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります (例えば丸め誤差)。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

- データベースの基本通貨として米ドル以外の通貨を使用したい場合は、**Currency** フィールドで別の基本通貨を選択します。
 - **Load License** のチェックボックスをマークします。
 - **LICENSE.TXT** ファイルのロケーションをブラウズします。その時点で **LICENSE.TXT** ファイルが使用可能でない場合は、**Load License** チェックボックスからチェックを外し、のちにデータベース設定ウィザードでファイルをロードします。さらなる詳細については 271 ページの「**データベース構成設定の変更**」を参照してください。
- 9 アプリケーションデータを使ってデータベーステーブルをロードするプロセスを開始するには、**Configurations Options** ダイアログボックスで **Install** をクリックします。
- 10 プロセスを完了したら、**Creating Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースを作成できなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある **PrimaveraDatabaseSetup.log** を参照してください（「C:\¥Documents and Settings¥Administrator」など）。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

- 11 **Finish** ダイアログボックスで **Finish** をクリックしてウィザードを終了します。



データベースインストールスクリプトで作成した **MMDB** オブジェクトをドロップする必要がある場合は、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Client_Applications¥install¥database¥scripts¥install¥MM_06_02_00¥oneinstance フォルダ内のスクリプトを実行します。データベースには **admuser1** としてログオンしてください。46 ページの「**PMDB Oracle データベースオブジェクトのドロップ**」を参照してください。

クライアント環境の設定

クライアントモジュールのインストール

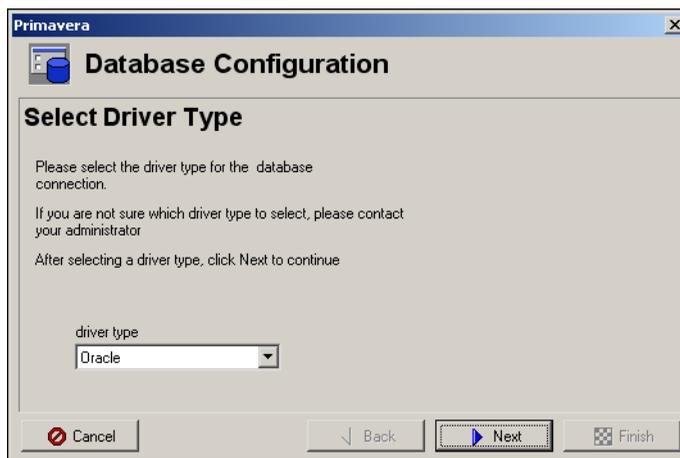
229 ページの「クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール」の説明に従い、各ワークステーションに Primavera クライアントモジュールをインストールします。

PMDB のデータベース接続名の設定

- 1 クライアントモジュールをインストールする間、データベース設定ウィザードが自動的に起動し、次の 5 つの図に示すように PMDB の接続設定とデータベース接続名の変更・確認を行います。



データベース設定ウィザードは、クライアントコンピュータで後日実行することができます。[スタート]、[プログラム]、[Primavera]、[Help and Utilities]、[Database Configuration] を選んでください。



Primavera Database Configuration

Configure ORACLE Connection

Enter the Oracle connection information below.

Oracle Connection String
Database Name

Cancel Back Next Finish

Primavera Database Configuration

Enter Public Login Information

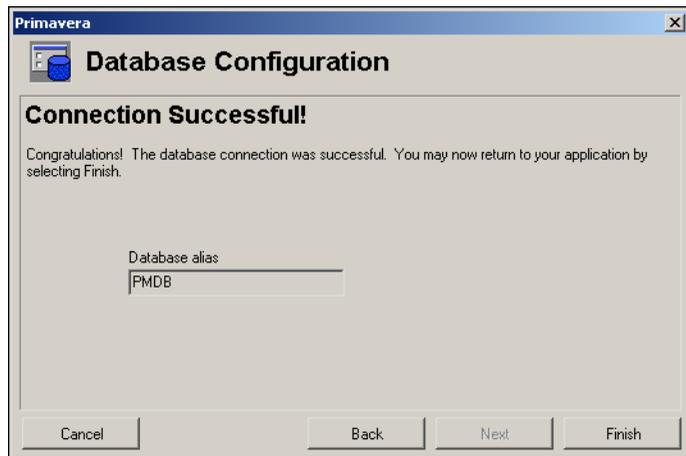
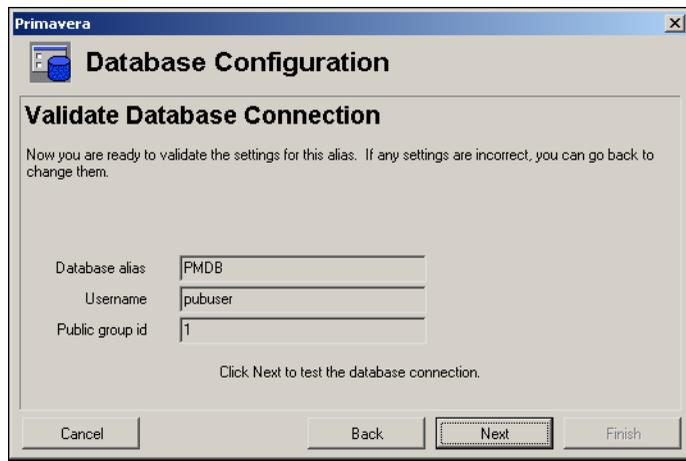
Enter the public username and password to use for connecting to this database. The public login is used to establish the initial connection to the application's database. It should be given to you by your administrator.

Also, specify which public group id you have been assigned. If you are not sure which public login or group id to use, please contact your administrator.

Database Alias
PMDB

Username Password Public group ID
pubuser ***** 1

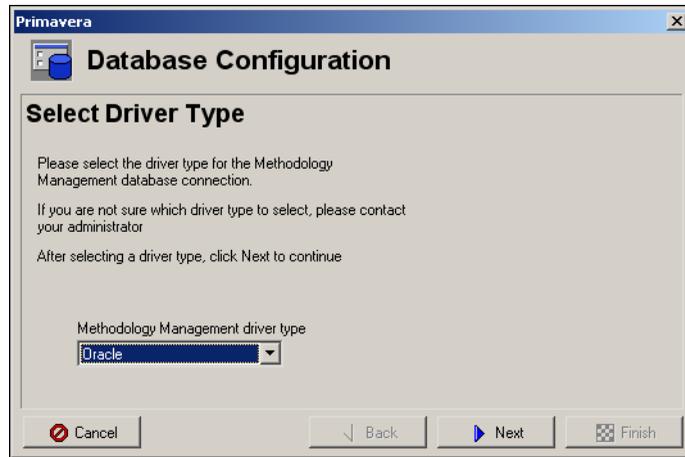
Cancel Back Next Finish



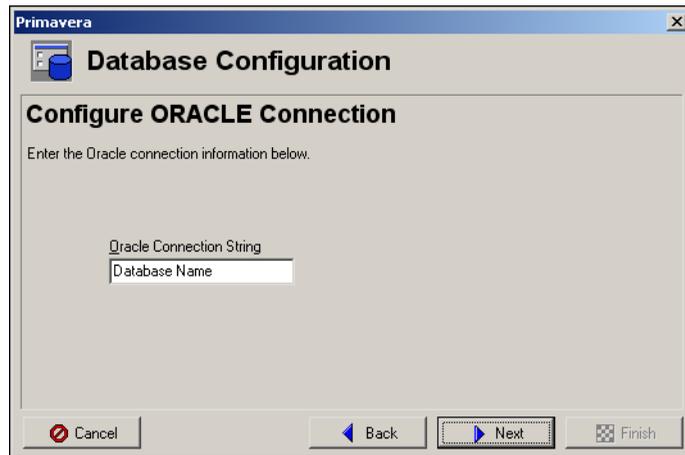
MMDB のデータベース接続名を設定

引き続きデータベース設定ウィザードを使って MMDB の接続名を作成します。

- 1 データベース接続名として MMDB を入力し、ドライバタイプとして Oracle を選択します。



2 Oracle データベース名か SID を入力します。

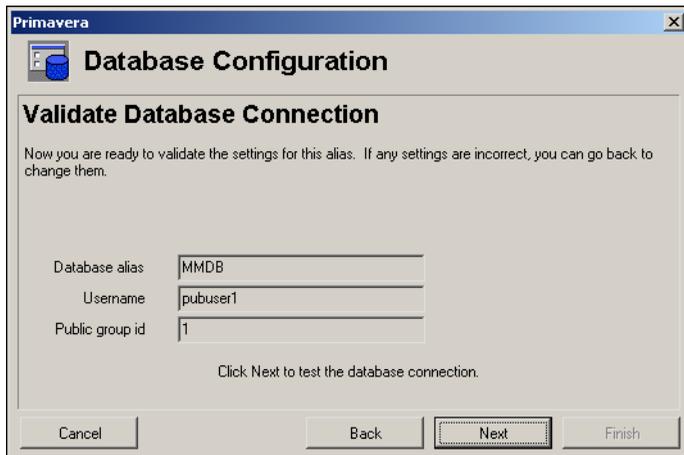


3 pubuser1 をユーザ名とパスワードとして入力します。



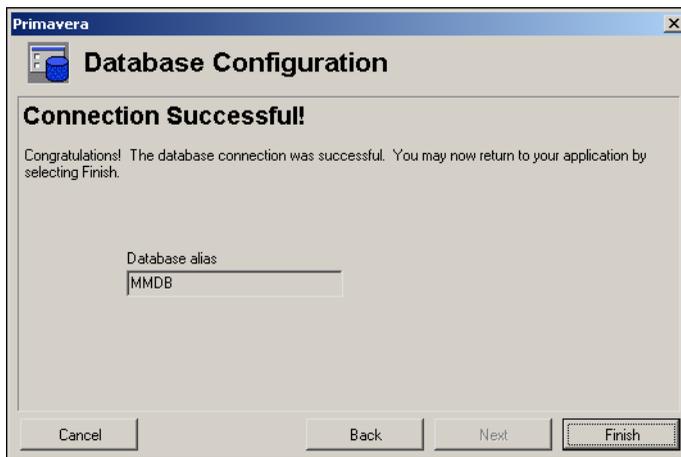
The screenshot shows the 'Database Configuration' dialog box with the title 'Enter Public Login Information'. The text inside reads: 'Enter the public username and password to use for connecting to this database. The public login is used to establish the initial connection to the application's database. It should be given to you by your administrator. Also, specify which public group id you have been assigned. If you are not sure which public login or group id to use, please contact your administrator.' Below the text are three input fields: 'Database Alias' with the value 'MMDB', 'Username' with the value 'pubuser1', and 'Password' with a masked password 'xxxxxxxx'. To the right of the password field is a 'Public group ID' dropdown menu with the value '1'. At the bottom are four buttons: 'Cancel', 'Back', 'Next' (which is highlighted with a dotted border), and 'Finish'.

4 [Next] をクリックし、データベース接続を検証します。



The screenshot shows the 'Database Configuration' dialog box with the title 'Validate Database Connection'. The text inside reads: 'Now you are ready to validate the settings for this alias. If any settings are incorrect, you can go back to change them.' Below the text are three input fields: 'Database alias' with the value 'MMDB', 'Username' with the value 'pubuser1', and 'Public group id' with the value '1'. Below the input fields is the text 'Click Next to test the database connection.' At the bottom are four buttons: 'Cancel', 'Back', 'Next' (which is highlighted with a dotted border), and 'Finish'.

次のダイアログに接続が成功したかが示されます。



これらのステップを完了すると、同じデータベースに接続しながら確立した接続名を使って Methodology Management と Project Management モジュールを実行することができます。

単一インスタンスデータベースの Primavera 5.0、6.0、または 6.1 から P6 バージョン 6.2 へのアップグレード

単一の Oracle インスタンスで PMDB および MMDB を実行するように設定され、バージョン 5.0、6.0、または 6.1 を使用している場合は、以下のステップに従いデータベースを P6 バージョン 6.2 で使用できるようにアップグレードします。



現在 Interwoven/iManage を使用しており P6 Web Access バージョン 6.2 にアップグレードする場合、プロジェクトワークフロー、プロジェクトプロセス、ニュース、ディスカッション、イベント、ドキュメントデータは利用できなくなります。このデータが必要な場合は、Primavera カスタマーサポートに連絡してデータの移行や移行ツールに関する情報を入手してください。Primavera では、バージョン 6.2 にアップグレードする前にデータを移行するようお勧めします。

既存データベースのバックアップ

データベースのオフラインバックアップ (cold backup) および完全エクスポートを実施します。

Oracle データベースのバックアップ方法が不確かな場合は、アップグレード作業を停止してください。データベース管理者、データベースのベンダ、または Primavera カスタマーサポートの協力を得て、データベースのアップグレードを実行する前にバックアップを行ってください。また、必要な場合に備えて、データベースのバックアップコピーからの復元プロセスについてよく理解しておいてください。



41 ページの「**手動データベース構成**」で説明されている手順でデータベースの設定とインストールをしてはいけません。この手順では、既存データは削除され既定のアプリケーションデータに上書きされます。

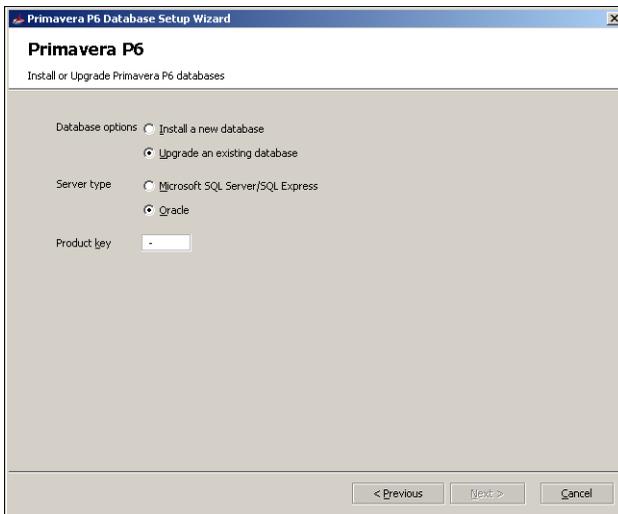
Project Management データベースのアップグレード

- 1 256 ページの「**Oracle データベースの P6 へのアップグレード**」で説明されている手順で、データベース構造をアップグレードし、アプリケーションデータをロードします。
- 2 **Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックし、Methodology Management モジュールで再度データベースウィザードを実行します。引き続き以下の指示に従います。

Methodology Management データベースのアップグレード

1 Primavera P6 ダイアログボックスで、

- **Upgrade an existing database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
- **Product Key** フィールドで、E メールまたはライセンス CD ラベルに記載されている製品コードを入力します。



2 Connection Information ダイアログボックスの

- **Administrative User Name** フィールドで、`admuser1` としてデータベースにログオンします。ユーザ名には DBA 権限が付与されていて、アプリケーションテーブルのオーナーである必要があります。また、データベースは 10.2 以上の Oracle 互換パラメータセットでなければなりません。
- **Administrative Password** フィールドで、入力したユーザ名に関連のあるパスワードを入力します。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Oracle がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、Oracle が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
- **Database Name (SID)** フィールドに Oracle SID を入力します。これは、ユーザまたはその DBA が Oracle クライアントを設定した際に作成された TNSNAMES.ORA ファイルにあります。

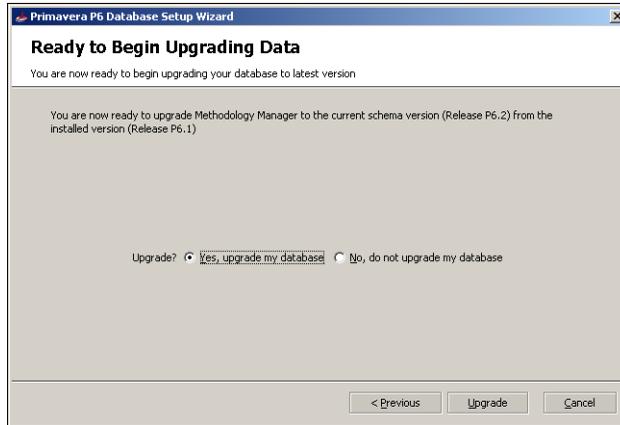
The screenshot shows the 'Primavera P6 Database Setup Wizard' window with the 'Connection Information' tab selected. The window title is 'Primavera P6 Database Setup Wizard'. Below the title bar, the text 'Connection Information' is displayed, followed by the instruction 'Enter the information required to connect to the database server'. The form contains five input fields: 'Administrative user name' with the value 'admuser1', 'Administrative password' with '*****', 'Database host name' with 'win2003', 'Database host port' with '1521', and 'Database name (SID)' with 'mmdb'. At the bottom of the dialog, there are three buttons: '< Previous', 'Next >', and 'Cancel'.

- 3 **Upgrade Options** ダイアログボックスで、権限ユーザ名として `privuser1`、データベースのパブリックユーザ名として `pubuser1` を選択します。

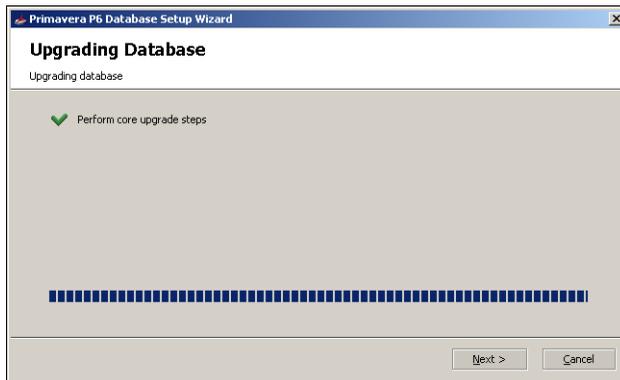
The screenshot shows the 'Primavera P6 Database Setup Wizard' window with the 'Upgrade Options' tab selected. The window title is 'Primavera P6 Database Setup Wizard'. Below the title bar, the text 'Upgrade Options' is displayed. The form contains two dropdown menus: 'Privileged user name' with the value 'PRIVUSER1' and 'Public user name' with the value 'PUBUSER1'. At the bottom of the dialog, there are three buttons: '< Previous', 'Next >', and 'Cancel'.

- 4 **Ready to Begin Upgrading Data** ダイアログボックスで、既存データベースの現在のバージョンが正しくリストされていることを確認します。**Yes, upgrade my database** を選択してから、**Upgrade** をクリックします。

アップグレードプロセスには、サイズによって数分かかることがあります。

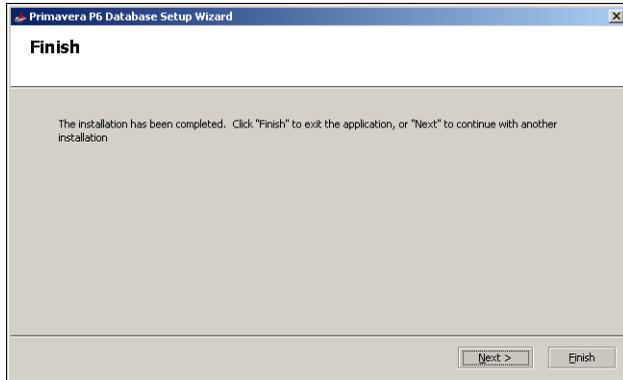


- 5 プロセスを完了したら、**Upgrading Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースをアップグレードできなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある `PrimaveraDatabaseSetup.log` を参照してください (「`C:\¥Documents and Settings¥Administrator`」など)。さらなる支援が必要な場合は、カスタマーサポートまでご連絡ください。

- 6 **Finish** ダイアログボックスで **Finish** をクリックしてウィザードを終了します。



- 7 必要に応じて、クライアントからデータベース設定ウィザードを実行し、データベースのライセンス更新を行います。

さらなる詳細については 271 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照してください。

以上の手順で P6 のバージョン 6.2 でデータベースを使用することができます。

付録 B : Project Management データベースの変更を元に戻す

本付録の内容 :

[やり直し]の理解

安全な削除の設定

「やり直し」機能を使うと、プロジェクトに加えた一定のアクションを変更することができます。例えば、リソースをアクティビティに追加したあと、そのリソース割当をしないことに決めた場合、このアクションを元に戻すことができます。

本章では、元に戻せないアクションとアクションを元に戻せなくするタスクを説明します。

[やり直し] の理解

[やり直し] を使用して、プロジェクトデータを変更前の状態に戻します。Project Management モジュールのアクティビティリソース割当画面における、編集、追加、削除は元に戻すことができます。[やり直し] では、プロジェクトデータベースに実施したアクションを保存します。しかし、以下のアクションを実行すると保存されているやり直し履歴をクリアします。

- プロジェクトの作成
- プロジェクトを開くと閉じる
- データの集計
- 進捗の更新
- 実績の適用
- データのリフレッシュ
- インポート
- 自動スケジュール
- 別ユーザでログイン
- ポートフォリオの変更
- プロジェクトポートフォリオを開く、ユーザ設定、管理設定、時間承認ダイアログボックス
- アプリケーションの終了

やり直し機能の使用に関するさらなる情報については、Project Management モジュールのヘルプを参照してください。

アクションを元に戻す [編集]、[やり直し] を選択します。元に戻すために保存された最後のアクションが、[やり直し] コマンドの横に表示されます。例えば、リソース割当をアクティビティに追加した後、アクティビティからその割当を削除することにした場合、[編集] メニューの [やり直し] コマンドには、[リソース割当追加のやり直し] が表示されます。

安全な削除の設定

Project Management データベースでは、通常安全な削除設定を使って削除したデータの復元を行います。削除したデータは、永久にクリアするまで Project Management データベースに残っています。[元に戻す] コマンド ([編集]、[元に戻す]) を使って削除したデータを復元します。

安全な削除の機能停止 データを削除したときに Project Management データベースから直ちに削除データをクリアするには、安全な削除機能を停止する必要があります。SQL Server を使用しているならば、その管理ツールを使って SQL コマンドを実行することができます。データベースで、ADMIN_CONFIG のテーブルで次の行があれば、CONFIG_VALUE の「N」は安全な削除の停止を意味します。

```
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' および CONFIG_TYPE = 'ACTIVE'
```

これは起動時のみロードされます。PM 実行中にこの値を変更しても、その設定は適用されません。以下のステートメントを実行することができます。

初めて安全な削除を停止するには、

```
INSERT INTO ADMIN_CONFIG (CONFIG_NAME,
CONFIG_TYPE, CONFIG_VALUE) VALUES ('SAFEDELETE',
'ACTIVE', 'N')
```

安全な削除を停止したあと、その機能を再開するには、以下の更新ステートメントを実行します。

```
UPDATE ADMIN_CONFIG SET CONFIG_VALUE = 'Y' WHERE
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' AND CONFIG_TYPE =
'ACTIVE'
```

安全な削除を再開したあと、その機能を停止するには、以下の更新ステートメントを実行します。

```
UPDATE ADMIN_CONFIG SET CONFIG_VALUE = 'N' WHERE
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' AND CONFIG_TYPE =
'ACTIVE'
```


インデックス

myPrimavera

アンインストール 135

Oracle

手動でアプリケーションデータをロード 43

データベース構造の作成 43

データベースの自動インストール 32

P6 Web Access

アプリケーションサーバのインストール 137

アプリケーションサーバの設定 144

アプリケーションサーバの展開 144

アプリケーションサーバプラグインの実装 200

アンインストール 135

インストール 133

インストールの概要 139

管理アプリケーション 166

旧バージョンからのアップグレード 134

クライアントブラウザからのアクセス 158

サーバの起動 155

サーバの停止 157

設定

カスタムポートレット 174

認証 174

Project Architect の実行 171

設定の確認と変更 168

設定の削除 171

設定方法 176

設定を追加 170

データベースインスタンスの削除 171

データベースインスタンスの追加 170

データベース構成設定の変更 165

複数のデータベースインスタンスへのアクセスを管理 173

Primavision

アンインストール 135

SQL Server

国際言語サポート 53

手動でアプリケーションデータをロード 52

データベース構造の作成 52

データベースの自動インストール 37

A

API xi, 7, 15, 18, 244

C

CONFIGASST.EXE

dbsetup.bat を参照

Contract Manager

接続先 379

ポートレット 342

リンク 379

Expedition。Contract Manager を参照

D

DBConfig。データベース設定ウィザードを参照。データベースについてという記事を参照してください。

DBExpress 4

dbsetup.bat 253

DCOM 通信 202

Windows Server 2003、Windows Server 2008

および XP で分散ジョブサービスを設定 206

E

EPS。エンタープライズプロジェクトストラクチャを参照してください。

E-メール、サポートシステム 22

G

Group Server

- administrator アプレット 116
- HTTP(S) 107
- LDAP 認証の設定 112
- Single Sign On authentication の設定 114
- Timesheets 用の調整 99
- アンインストール 100
- インストール 103
- インストールの概要 101
- オフラインにする 116
- 概要 5
- 計画の問題 15
- 国際言語サポート 102
- サポート構成 20
- 設定方法 116
- 複数インスタンスの作成 124
- プロパティの確認 118
- ユーザ接続 119
- レジストリの設定 127

H

HTTP(S)、タイムシートデータのセキュアな通信のために使用 107

I

ID

- 最大文字数の指定 373
 - 長さ 373
 - ID 文字数 395
- Integration API ライセンス、説明 336

J

Java Web Start 101

L

LDAP

- 認証 280
 - Group Server/Timesheets 用 112
 - プロビジョニング 292
 - ログイン手順 295
- LDAP から設定 292
- LDAP サーバ
 - 認証の設定 283

M

MDAC 232

Methodology Management データベース 42

- PMDB として同じ Oracle インスタンスで実行 437
- PMDB との組合せ 435
- アップグレード
 - Oracle 256
 - SQL Server 上 259
- クライアントドライバ 230
- 作成
 - Oracle 上 47
 - SQL Server 上 57
- サンプルデータ 34, 39, 439
- 除去
 - Oracle から 50
 - SQL Server から 60
- 接続設定の変更 272
- プライベートログインの管理 274

MMDB、Methodology Management データベースを参照。

Methodology Management モジュール

- インストール 232
- 概要 5
- 既定
 - 設定 394
- 計画の問題 14
- 最小構成要件 18
- セキュリティ 358–365
 - グローバル設定 359
 - メソドロジ設定 361
 - ユーザの追加 362

O

OBS

- 責任 321, 348
- 組織内 302
- 定義 302
- プロジェクト情報へのアクセスを拒否 347
- ルート 349
- 割当
 - EPS へ 349
 - ユーザへ 347

Oracle

- Methodology Management モジュールの規模ガイドの説明 24
- MMDB および PMDB を単一のインスタンスで実行 437

Project Management モジュールの規模ガイド
の説明 23
クライアントドライバのインストール 230
サポートするバージョン 20
データベース性能の向上 88
データベースのアップグレード 256

P

P6 Web Access

JSP サーバ要件 21
Web サーバ要件 22
アプリケーションサーバ要件 21
概要 6
クライアント要件 20
計画の問題 17
コンテンツリポジトリ 6
招待ユーザ 338
報告期間の特記事項 430
ユーザアクセスの定義 355
ライセンス 334, 335, 336
利用可能な Primavera Web Team Member 機能 337
ワークフローリポジトリ 6

P6 Web Services

ドキュメンテーション xii

7, 15, 244, 281

PMSDK 244

Primavera

アドミニストレータガイドの使用法 viii
インストールの概要 11
旧バージョンのアンインストール 231
クライアントモジュール 4
コンポーネントの選定 14
サーバコンポーネント 5
最低要件 18
セキュリティ 300
その他のコンポーネント 5
ソリューションの概要 4
ドキュメンテーション x
認証 280
ライセンスによるアクセス許諾 333

Primavera ProjectLink

ライセンス 336

Primavera クライアント、インストール 229

Primavera ソフトウェア開発キット

インストール 232, 244
概要 7
計画の問題 15

サポート構成 18
ドキュメンテーション 246

SDK。Primavera ソフトウェア開発キット Kit
を参照。

Primavera^o の Web アプリケーション
アンインストール 135

Project Architect 171

Project Management データベース 30, 42

MMBD との組合せ 435

MMDB として同じ Oracle インスタンスで実行 437

SQL Server パラメータ 52

アップグレード
Oracle 256

SQL Server 上 259

クライアントドライバ 230

作成

Oracle 上 43

SQL Server 上 53

サンプルプロジェクトデータ 34, 39, 439

除去

Oracle から 46

SQL Server から 56

接続設定の変更 272

プライベートログインの管理 274

変更を元に戻す 453

PMDB。Project Management データベースを参照。

Project Management ライセンス、説明 335

Project Management モジュール

インストール 232

概要 4

計画の問題 14

最小構成要件 18

報告期間の定義 429

ユーザの追加 329

ProjectLink

インストール 232, 247

概要 7

ユーザアクセス 248

R

RDBMS。

S

SQL Server

Methodology Management モジュールの規模
ガイドの説明 24

Project Management モジュールの規模ガイド
の説明 23
クライアントドライバのインストール 230
データベースのアップグレード 259
SQL Server Express データベース
クライアントドライバのインストール 230
インストール 249

T

Timesheet Approval
アクセス設定 426
スタンドアロン型アプリケーションの設
定 428

Timesheets

1日あたりの最大時間 411
既定設定オプション 369
承認レベル、設定 370, 412
バッチの作成 419
パラメータの設定 369

Timesheets モジュール

設定
Project Management モジュールで 407-422
Java Web Start 版
JRE インストール 424
概要 101
最低要件 19
実行 423
定義 16
LDAP 認証の設定 112
Single Sign On authentication の設定 114
Web ファイルのインストール 103
Web ブラウザ版
JRE インストール 424
最低要件 19
実行 423
定義 16
間接コード 422
概要 5
計画の問題 15
作成
Timesheets 419
ユーザログイン 415
実装の概要 408
設定 410
Project Management モジュールで ??-410
超過時間の入力 418
使うためのリソースの設定 417
バージョン 16

プロジェクト固有の設定 421
ユーザ権限 413
TNSPING.EXE 30, 42

W

WBS

カスタム分類の定義 399
レベル、集計用に指定 380
WBS、定義 302
Web Services. P6 Web Services を参照 xii
Web スケジューラ 14
Web ブラウザ
P6 Web Access サポート 20
Timesheets モジュールのサポート 19

あ

アードバリュー
既定の定義 377
アクティビティ
ノートトピック 387, 398
アップグレード
Oracle データベース 256
SQL Server データベース 259
自動 253
スタンドアロン版 249
プロセスの概要 254
ライセンス 274
アプリケーションデータ
Oracle へのロード 32
SQL Server へのロード 37
アンインストール
Group Server 100
ジョブサービス バージョン 5.x 231
安全な削除、設定 455

い

インストール
Primavera クライアント 229

え

エンタープライズプロジェクトストラクチャ
アクセスと権限 348
定義 302
モジュール全体のパラメータや値、設定 367

お

オペレーションエグゼクティブ xi

か

階層構造

- 最大レベル数を指定 372

過去期間実績 430

カスタマーサポート xiii

カスタムポートレット

- パスワード暗号化 174

為替レート 35, 39, 62, 389, 439

監査

- 概要 89

- 詳細な設定 91

- シンプル構成 90

間接コード 385, 422

管理 367-387

- 設定 368

- 分類 382

管理設定、定義 393

管理分類、定義 393

き

期間、既定時間の定義 397

既定

- 各期間の時間 374, 397

- 所要期間 368

既定設定 368

既定の設定 368

基本通貨、設定 35, 62, 439

- SQL データベース用 39

く

クライアントモジュール

- インストール 235

- 最低要件 18

- ユーザパスワードの変更 274

グローバル設定

- 新しい権限 255

- 概要 300

- 権限の定義 314

- Methodology Management モジュール

- 用 359

- 作成 313

- Methodology Management モジュール

- 用 359

- 定義 312

- ユーザに割当 332

け

経費

- 定義

- 標準的な分類 398

- 分類 383

計量単位

- 分類 402

権限、5.0 での新機能 255

言語サポート 53, 102

- ジョブサービスに 243

こ

コード

- 間接 385

- 区切文字 368, 394

- 最大文字数、指定 373

国際言語サポート 53, 102

- ジョブサービスに 243

コスト

- サマリ計算、スプレッドシート表示の間隔を指定 378

コラボレーション

- 概要

- コンテンツリポジトリを参照

- ワークフローリポジトリを参照

コンテンツリポジトリ

- インストール 143

- 概要 6

コントローラサーバ 202

- 設定 217

さ

サーバコンポーネント

- サポート構成 20

サーバデータベース、設定 41

作業成果物

- ステータス 385

- 分類 384

作業成果物とドキュメント

- 分類 400

サマライザジョブの設定 221

し

集計表

- コストおよび定量サマリの間隔を指定 378

手動データベースのインストール 41

招待ユーザ、プロジェクトデータへのアクセス 338

所要期間

既定 368

既定タイプ 394

シングルサインオン

認証 280

Group Server/Timesheets 用 114

ログイン手順 295

時間、各期間の既定時間数 397

時間、期間の既定を定義 374

ジョブサービス

P6 Web Access 用の Project Architect の設定 171

インストール 232, 237

概要 6

計画の問題 14

言語の選択 243

サポート構成 21

サマライザジョブ 241

レジストリの設定 221

直接プリンタにジョブを送出 242

バージョン 5.x のアンインストール 231

複数インスタンスの作成 238

複数のデータベースの実行 240

分散 202

Windows 2003、Windows 2008 および XP で DCOM を設定 206

Windows ファイアウォールの無効化 204

インストール 203

コントローラサーバ 202

サーバの設定 217

レジストリの設定 220

ジョブスケジューラ

設定、Oracle 67

設定、SQL Server 67

す

スタンドアロン版

インストール 232, 249

自動的にアップグレード 249

ステータス

作業成果物 385

ドキュメント 385

せ

制限

実際の 25

性能

最適化 88

製品限界 25

セキュリティ 299-365

OBS

ユーザとプロジェクト設定の割当 346

Methodology Management モジュール 358-365

OBS

EPS の割当 349

概要 300

グローバル設定 312

ユーザに割当 332

実施プロセスの概要 310

プロジェクト設定 321

ユーザ 329

Methodology Management モジュールで 362

OBS とプロジェクト設定の割当 347

ライセンス 333

リソースアクセス 351

リソースとユーザの関連付け 331

リソースへのアクセスの定義 353

設定ウィザード、実行 232

そ

組織ブレークダウンストラクチャについては OBS を参照

その他のコンポーネント、インストール 229

た

タイムシートアプリケーション

権限、設定 371

タイムシート監査、有効 369, 411

タイムシート承認

承認レベルの設定 370

Timesheets ライセンス、説明 335

単価タイプ

定義 380

ダッシュボード、チームメンバがアクセスする 338

ち

チームメンバ xi

Timesheets モジュール 5

利用可能な P6 Web Access 機能 337

チームメンバライセンス、説明 335

チームリーダー x

つ

追加ライセンス、保存 274

通貨

基本の設定 390

設定

基準 404

定義 389, 403

表示の追加 390

て

定量サマリ計算、スプレッドシート表示の間隔を指定 378

テクニカルサポート xiii

データ限度、最大レベル数の指定 396

データベース

MMDB 30, 42

PMDB 30, 42

Oracle 性能の向上 88

P6 Web Access の設定変更 165

アップグレード

SQL Server 259

Oracle 256

管理 65

クライアントドライバ、インストール 230

手動でインストール 41

自動アップグレード 253

自動的にインストール 29

データベース管理者 x, xii

ロールの定義 9

データベース構成

設定の変更 271

データベース設定ウィザード

アプリケーションライセンスの変更 274

初期化 (INI) ファイル 272

データベース設定の変更 272

プライベートデータベースログイン 274

ユーザパスワードの変更 274

データベース設定の管理 65

データベースの自動インストール 29

Oracle 用 32

SQL Server または SQL Server Express データベース用

自動インストール 37

と

ドキュメント

ステータス 385

分類 384

ドキュメント、分類 400

に

認証

設定 279-??

LDAP 112

P6 Web Access の設定 174

シングルサインオン 114

設定 ??-295

ネイティブ 280

ログイン手順 295

認証設定ウィザード 283

ね

ネイティブ認証 280

ログイン手順 295

ネットワーク管理者 x, xii

ロールの定義 9

ネットワークプロトコル、サポートソフトウェア 22

の

ノート

トピック 387

ノートトピック 398

は

バックグラウンド処理

Setting 値の読み書き 70

Settings テーブル 69

監視 72

パスワード

暗号化

カスタムポートレットの設定 174

変更 274

ひ

標準的な分類と値、定義 382

ふ

ファイアウォール

分散ジョブサービスのために無効化 204

分散ジョブサービス

Windows ファイアウォールの無効化 204

インストール 203, 232, 237

概要 6, 202

- 計画の問題 14
- サーバの準備 202
- サポート構成 21
- 設定 201
 - Windows Server 2003、Windows Server 2008 および XP 上の DCOM 206
 - サーバ 217
 - レジストリの設定 220
- 分類
 - WBS 399
 - 経費 383, 398
 - 計量単位 387, 402
 - 作業成果物 384
 - ドキュメント 384, 400
 - ノート 387
 - 見積ファクタ 401
 - リスク 386
- プログラムマネージャ x, xi
 - ロールの定義 10
- プロジェクト
 - チェックアウト 325
 - チェックイン 325
- プロジェクト Web サイト、サポート構成 21
- プロジェクト管理コーディネータ x, xii
 - ロールの定義 10
- プロジェクト設定
 - 新しい権限 255
 - 概要 300
 - 権限の定義 322
 - 作成 321
 - 定義 321
 - 割当
 - OBS ノードへ 346
 - ユーザへ 347
- プロジェクトデータ
 - Team Member によるアクセス 339
- プロジェクトのチェックアウト 325
- プロジェクトのチェックイン 325
- プロジェクトマネージャ x, xi
 - ロールの定義 10

- へ
- ベースライン
 - タイプ 382

- ほ
- 報告期間
 - 集計 378

定義 429

- み
- 見積ファクタ
 - 分類 401

- む
- 無人セットアップ
 - 計画の問題 14
 - 実行 268
 - ファイルセットの作成 264

- め
- メソドロジ設定
 - 権限の定義 362
 - 作成 361

- や
- やり直し、使い方 454

- ゆ
- ユーザ
 - Timesheets モジュール用 415
 - 追加 329
 - Methodology Management モジュール 362
 - 定義 302
 - パスワードの変更 274
 - リソースに関連付け 331
 - 割当
 - Methodology Management モジュールにおける設定 364
 - OBS ノードへ 346
 - グローバル設定 332
 - プロダクトライセンス 333
- ユーザインタフェース画面、割当 355

- ら
- ライセンス
 - 設定 274
 - 指名ユーザ 333
 - 追加 274
 - データベース設定時にロード 35, 40, 440
 - 同時アクセスユーザ 333
 - ユーザに割当 333
- ライセンスキーファイル 35, 40, 440

り

- リスク
 - タイプ [386, 402](#)
- リソース
 - アクセスの定義 [351](#)
 - スプレッドシートでの集計用割当レベル [380](#)
 - 定義 [302](#)
 - ユーザとの関連付け [331](#)
- リソース/コストマネージャ [x, xi](#)
- リソースセキュリティ [351](#)
- リレーショナルデータベース管理システム
 - 概要 [5](#)
 - 計画 [14](#)
 - サポート構成 [20](#)

る

- ルート OBS [349](#)

れ

- レポート
 - 既定の定義 [377](#)
 - グループ [399](#)

ろ

- ルール
 - スプレッドシートでの集計用割当レベル [380](#)
- ログイン名、プロジェクトリソースとユーザに単一のログインを維持 [331](#)

わ

- ワークフローリポジトリ
 - インストール [143](#)
 - 概要 [6](#)

